五十嵐力 著

軍記物語研究

天保生愛逢 識語

及び 創造批評

住吉慶恩筆　平治物語繪卷

主上また六波羅へ行幸なる。女房の姿をかりて、御かづらめし、重なりたる御衣を參る。郁芳門をかためたる武士共とゞめ申せば、惟方卿進み出でて、女房の出でらるゝなり、疑ひなく思ふべからずと宣ひけれども、弓のはずにて、御車の簾をかゝげて、火をふりあげて見參るに、女房どもにておはしましければ、出だし參る。

平　清　盛　像　　　　六波羅密寺藏

序

一。本書の成立に關する「ありのまゝ」を記して、序に換へる。

一。此の小著は前後の二講から成つて居る。前講『軍記物語研究』は、大正十三年の秋から稿を起こし、約一箇年半にわたつて、早稻田大學出版部發行の『文學講義』に載せたものである。後講『平家物語の新研究』は、大正九年の九月初旬、大急ぎに書き上げて、同じ月に出た『早稻田文學』の秋期特別號に寄せたものである。前者には可なりの大增補を加へ、後者にはほんの小增補を加へたが、根幹の大趣意は、二つながら殆んど前と變はるところがない。

一。『軍記物語研究』は、著者の頭の中に出來てゐる軍記の幻影(まぼろし)を追うて、格別な豫定の計畫もなしに、書きはじめ、書きつゞけ、而して書き終へ

たものであつた。一回分を大急ぎに書きなぐつて、書きなぐると、物の一と月も抛つておく。そして前後のつゞきも、すつかり忘れた時分に、矢の催促をされては、慌てゝ筆を執り／＼して居る中に、いつしか積もりたまつたのが是れである。言はゞ被催促の餘儀なさに出來た間歇的の隨筆軍記講話とでもいふべきもので、口幅たく吹聽するやうな事は、何もない。唯だ試みに、いさゝか、之れを草した時の心構を述べて見ると、

私は第一に、教養ある多數の男女の同胞に向つて、成るべく專門じみない、お話をしたいと考へた。たとへば、學問好きの少年青年壯年老年の同胞達が、それ／＼の家業にいそしむ間々に、鍬を取り、シャベルを取り、算盤を取り、帳簿を取り、或ひは編物の針を取りつゝ、十數人、數十人と、一團を成して休んで居られる。そこへ、心覺えを書き留めたホンの一冊の手帳位を持つて、ブラリと出かけて行つて、

「どうです、諸君。私は是れから、七百年前、五百年前といふ、遠い昔の吾々の先祖達、あの武士道といふ特殊の國民的大道德を成り立たし

た弓矢取の先祖達が、君の爲め國の爲めに命を捨てゝ戰つた悲壯な生活を寫した文學、謂はゆる軍記の物語について、暫らくお話をしたいと思ふのですが、未熟なお話ながら、不承して聽いて下さるでせうか。それとも、平和主義、非戰主義の諸君には、血なまぐさい戰爭話は眞平ですか。」

といふと、

「いや〳〵、吾〻の主義は、吾〻の今後に關する主義です。唯だ將來に於いてさうあらせたい、あらせねばならぬといふ理想的の希望です。吾〻の祖先達が身命を賭した意義のある生活は、其の血を承けた子孫としても、新理想樹立の爲めの參考としても、是非知つておかねばなりません。況んやその祖先達が自分〻〻の奉仕する君父、國家、道義の爲めに身命を抛つて戰つた物語は、吾〻の熱心に知りたいと思ふところです。どうぞ話して下さい。」

「然り〳〵！　一同のお願ひです！」

など云つて、そゝのかされる。とまあ、かういふ氣分で、かういふ人達を相手とし、聽衆に向つては、一回ホンの三四枚位の刷物を上げておいて、それを種にしてお話を進めるといふ心持でやりたいと考へた。語句の解釋は成るべく簡單に、前賢の所説なども、同じ事は繰返さずして、唯だ成るべく其の場その場にぴたりと當て嵌まる同義語で説明するやうにし、そして特別な味はひの語句については、それが何故に其處に落ちつくか、其の語句を用ゐた爲めに、何故に其の描寫が生きて來たか、文章が引立つて來たかといふ事を説明したいと考へた。原文のまゝで其の妙味の理解されにくい所は、現代語に飜譯して描寫説明の仕直しをしたいと考へた。長い一篇の作の中から、代表的の一章乃至數章を選み出だして、段々に讀み進み講じ了へる中に、「時」と「人」と「事」とが、いつとなくあり〱と浮かんで來るやうにしたいと考へた。「語釋」、「現代語譯」、「修辭的説明」などを加へたのは其の爲めで、これが爲めにおのづから啓蒙的色彩を帶びるやうにもなつたが、著者の本意は、あくまでも專門じみず

に藝術味得の第一義を贏ち得たいといふところにあつたのである。

一。『平家物語の新研究』は、本間久雄氏の依賴によつて、早急に稿を起こしたものであるが、之れを草するに當たつて、主として考へたのは、創造批評の一體を試みたいといふことであつた。「創造批評」は英の謂はゆる creative criticism で、獨のレッシング等に創められ、カアライル、ゲーテ等の名の著しく聯想されるものである。批評その物が、批評される創作と同じく一種の獨立した藝術的創造となるものの謂ひである。私はかやうな批評が、どうして實現されるものかを知らない。唯だひそかに希つた事は、此の物語の意義趣味の核心ともいふべき代表思想を捉へて、それに此の小論の含むあらゆる要素を統べさせる事、譬へば能舞臺に於ける鏡板の老松が、その前で演ぜられる能のあらゆる要素を支配するが如くならしめたいといふ事であつた。該の根本の大義を摑んで讀み進む中に、保元壽永の時代相、當時の武人の面魂、戰場駈引の模樣等が、鮮かに目に浮かぶやうにあらしめたいといふ事であつた。知識本位の分析、

判斷、評價をなしつゝも、其の言葉には常に情の生命の通ふやうにあらしめたいといふ事であつた。かくの如くにして『平家』の魂が、どうぞ此の小論の中に憑移つて來てくれるやうに！　作者が筆を執る間に、常に空想し、妄想し、希求願望した事はこれであつた。

一。無論これは唯だの空想で、實は前講後講のいづれに於いても、片端から意に滿たぬ事だらけである。意に滿たぬといへば、單語の解釋からがそれで、殊に有職故實の方面などについては、底を叩けば一〻不明未詳と云つてもよい。況んや、大摑みの批評論議などには、嘸かし片腹いたい見損ね考へ違ひがあるであらう。私はフランスの大批評家と共に、常にかう信じて居る。平凡作家の凡作に對する評價は、すぐに片づけられる。これに就いては永久に苦情の起こる氣遣がない。けれども大作家の大作になると、それが批評家の前に王立し君臨して、「お前達に自分の本體が解るか？」と言つて居るやうな趣があり、而して代々の批評家等は、手を變へ品を替へては、之れを研究し考查しつゝ、甲論乙駁をつゞけて

行くのである。それは譬へば、その大作を遶つて、不斷に批評家のトールナメントが行はれるやうなもので、輕重褒貶無數の批評が加へられる中に、いつの間にか、其の作の絕大價値が定まつて、確定不動のものとなるのであると。要するに、私は『平家』批評のトールナメントにあづかる小さい一員に過ぎないのであらう。

一。本書表紙模樣の獅子は、平家奉納嚴嶋神社國寶經の中の法華經、安樂行品の表紙繪の一部を取つたものである。世界を空しうする此の獸王の面魂が氣に入つた上に、「遊行無畏如師子」といふ散らし書きの贊の文句が、いかにも平家當時の新興武人の意氣を象徵してゐるやうに思はれたので、此の武人文學論、第一關の標識として選び取つたのであつた。尙ほ之れについては、本文の三四六頁、「やがて保元の亂が、此の恐ろしい獅子の眠りを覺ました」の邊りを參照していたゞきたい。

一。見返しは奥州前九年及び後三年役繪卷の一部影寫である。卷頭の方は前九年の一部で、將軍賴義と八幡太郎義家と、父子陣中喫飯の景である。

卷尾の方は後三年の一部で、八幡將軍が士卒を勵ます爲めに勇怯の座を分けたといふ、人口噲炙の景である。

一。口繪としては平治物語繪卷の一部と入道姿の淸盛の木像とを取つた。挿畫はすべて九葉。その中『保元』、『平治』、『平家』、『太平記』の八葉は元祿版から、『太平記』の一葉は萬治版から取つて影寫した。古拙な稚味の中に一種の生命の漲つてゐるのを愛したのである。

一。前述の如く、本書はもと餘儀なさの執筆であり、半ば啓蒙本位にと志したものであるが、其處此處に多少の創意は含んで居る。殊に軍記發生の經路に關する部分は、大體著者一個の管見に據つたものであるが、從つて誤りもさぞ多いことであらう。愛讀者諸君の御敎示を辱うすることが出來れば、難有い仕合せである。

大雪の紀元節に

昭和六年二月十一日、

著者

目次

『平家』の異本の整理統一についての意見。『平家』は元來偉い本體が、表現者の手腕の不足なる爲めに、光るだけ光り得なかつたもの。整理統一の法三章。

發端

音に聞こゆる爲朝

一

「軍記」といふのは、武人本位、戰爭本位の文學といふ意味で、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『源平盛衰記』及び『太平記』などが、その最もおもなる代表作と見られて居ります。その中で、『保元物語』は、此の種類の文學の魁をなしたものと云はれて居りますが、私は此の最初の軍記に於いて、最初に描かれた武家時代初期の巨人、鎭西八郎爲朝が舞臺入の一章を以て、此の講義の發端にしたいと思ひます。これは、物語では、「新院御所各門々固めの事　附　軍評定の事」といふ見出の下に收められて居るもので、全文は左の通りであります。

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西

に門二つあり。東の門をば、平馬助忠正承つて、父子五人並びに多田藏人大夫賴憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。其の勢百騎ばかりには過ぎざりけり。是れこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は內裏へ參りけり。爰に鎭西八郎爲朝は、我れは親にも連れまじ、兄にも具すまじ、高名不覺も紛れぬやうに、只だ一人、如何にも强からん方へ差向け給へ、たとひ千騎もあれ萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなりとぞ申しける。依つて西河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衞門ノ大夫家弘承つて、子供具して固めたり。其の勢百五十騎とぞ聞こえし。

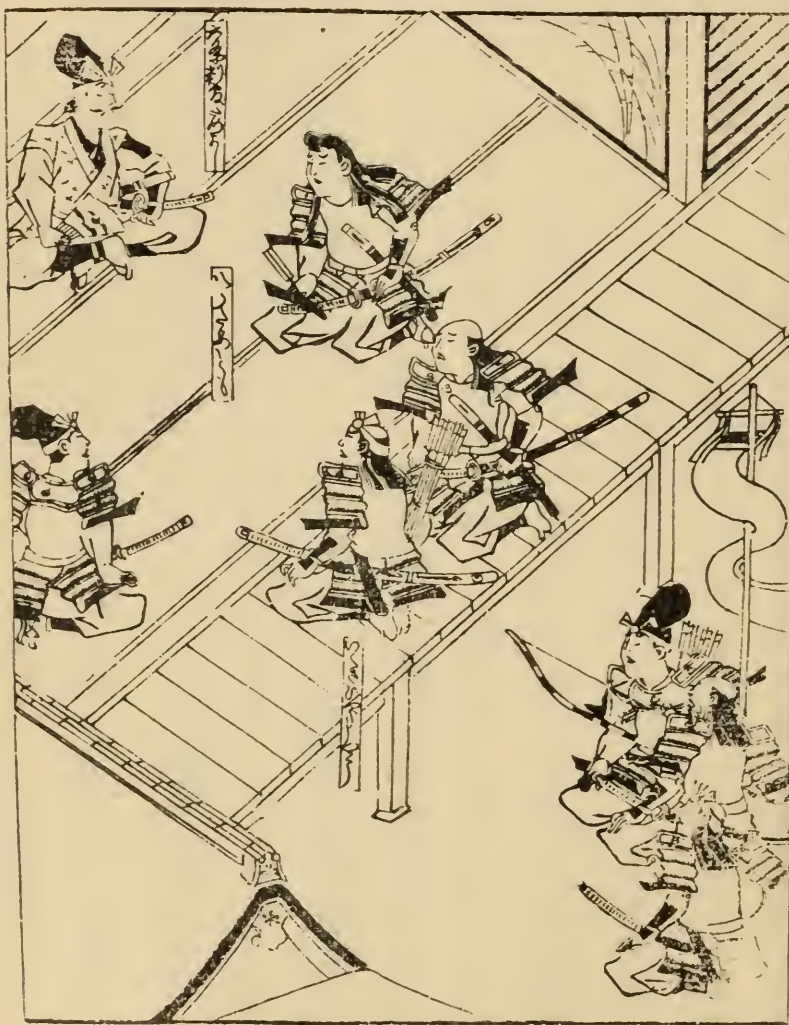
抑〻爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されしゆゑなり。件の男器量人に越え、心飽くまで剛にして、大力の强弓、矢次ぎ早の手利きなり。弓手の肘馬手に四寸延びて、矢束を引くと世に越えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、傍若無人なりしかば、身に副へて都に置きなば惡かりなんとて、父不孝して、十三の歲より鎭西の方へ追ひ下すに、豐後ノ國に居住して、尾張ノ權ノ守

家遠をめのととし、肥後ノ國阿曾ノ平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ、九國の總追捕使と號して、筑紫を隨へんとしければ、菊池原田を始めとして、所々に城を構へて楯籠れば、其の儀ならば、いで落して見せんとて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十個所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年が内に九國を皆攻め落して、自ら總追捕使に押し成つて、惡行多かりけるにや、香椎宮の神人等、都に上り訴へ申す間、往にし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚、早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

然れども、爲朝猶ほ參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、親の科に當たり給ふらんこそ

淺ましけれ、其の儀ならは、我れこそ如何なる罪科にも行はれんずとて、急ぎ上りければ、國人共も上洛すべきよし申しければ、大勢にて罷上らんこと、上聞穩便ならずとて、形の如く附き從ふ兵ばかり召具しけり。乳母子の箭前拂の須藤九郎家季、其の兄隙間數への惡七別當、手取の與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦ノ二郎、左中次、吉田ノ兵衞、打手の紀八、高間ノ三郎、同じき四郎を始めとして、二十八騎ぞ具したりける。依つて去年より在京したりしを、父不孝を赦して、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て、獅子の丸を縫つたる直衣に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張りの弓、長さ七尺五寸にて銑打つたるに、三十六差したる黑羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破ること、呉子孫子が難しとする所を得、弓は養由をも

元祿版　繪入保元物語

恥ぢざれば、天を翔くる鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に聞こゆる爲朝見んとて擧り給ふ。

左府即ち合戰の趣はからひ申せと宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者ども從へ候ふについて、大小の合戰數を知らず。中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或ひは敵に圍まれて强陣を破り、或ひは城を攻めて敵を亡ぼすにも、皆利を得ること、夜討に如くこと侍らず。然れば只今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず。矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方心憎くも候はず。但し兄にて候ふ義朝などこそ駈け出でんずらめ、それも眞中指して射通し候ひなん。まして淸盛などがへろ〳〵矢、何ほどの事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も、御輿を捨てて逃げ去り候はんずらん。其の時爲朝參り向ひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即けまゐらせん事、掌を返す如くに候ふべし。主上を迎へまゐらせん事、爲

朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑ひか候ふべきと、憚る所もなく申したりければ、左府爲朝が申す樣、以ての外の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上上皇の御國爭ひに、源平數を盡くして、兩方に在つて勝負を決せんに、無下に然るべからず。其の上南郡の衆徒を召さるゝ事あり。興福寺の信實玄實等、吉野十津川の、指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉是れへ參るべし。彼等を待ち調へて合戰をば致すべし。又明日院司の公卿殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ばゝ、殘りはなどか參らざるべきと仰せられければ、爲朝上には承伏申して、御前を罷り立ちて呟きけるは、和漢の先蹤朝廷の禮節には、似も似ぬ事なれば、合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御ぱからひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候ふらん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入

るべけれ、只今押寄せて風上(かざかみ)に火を懸けたらんには、戰ふともいかでか利あらんや。
敵勝つに乘る程ならば、誰れが一人(いちにん)安穩(あんのん)なるべき、口惜しき事かなとぞ申しける。

二

語釋 保元の亂に於ける新院方、卽ち崇德上皇方の陣立、及び鎭西八郎爲朝が夜襲の謀を進める條(くだり)を書いた一段である。保元の亂は、崇德上皇が、御父鳥羽法皇に讓位を强ひられた事を含ませられ、法皇の崩御を機會(しほ)に、復位を企てさせられた戰の事で、主上方卽ち後白河天皇方には平清盛、源義朝等が御味方し、新院方には、清盛の叔父平馬助忠正、六條判官爲義及び其の子供等が馳せ參じたのであつた。○齋院の御所より北殿へ。崇德上皇が、軍を起こす都合上、前に鳥羽の田中殿から白河の齋院の御所、卽ち加茂の社の神主の御殿に移らせられたが、今度は更に北殿に移らせられたといふ事。○是れこそ猛勢なるべきが。爲義は源氏の嫡流だから、此の人こそ源氏の兵共を數多率ゐるべき筈であるのに、わづか百騎ばかりといふ少數であつた理由は、多數が嫡子の義朝に附いて、已に主上に御味方をしたからだといふ事。○高名不覺も紛れぬ樣に。不覺は油斷して後れを取る事、不覺悟の略かといふ。手柄を立てゝも、後れを取つても、高名も不覺も、共に紛らはしからず、はつきりとわかるやうに。○射拂はんずる。敵を射て追ひ却けるといふ事を、威勢よく言つた詞。「拂はんず」は「拂はんとす」の轉じたのであるといひ、或ひは「ず」は「ぞ」の轉じたので、「射拂はんぞ」の意であるともいふ。○承りて。引受けて、仰せを承つて。

○一人として。「として」は異樣の使ひざまであるが、「一人して」即ち「一人で」の意であらう。本來「として」は「一人として應ずる者なく」といふが如く、打消しの件ふのを普通とするテニヲハで、こゝの意味は明らかでないが、恐らく、他の門々には、弱衆雜然として群を成して居るのに對し、爲朝が一人泰然孤立の大きさを見せて聳え立つて居るのを、いかにも一人然と構へて、と云つたのであらうかと想像する。○武勇。昔はブョウと讀んだ。『平家』や謠曲などにも、さう讀んで居る。○强弓矢次早。力の弱い者の容易に彎けぬ强い弓を引き、しかも一の矢、二の矢、三の矢と手早く引くといふ事。○弓手、馬手。弓を持つ左の手、馬を御する右の手。○矢束。ツカは一掴みの意で、矢の長さを計る寸法。フセは一本の指幅の寸法で、四ブセで一束になるとした。例へば「十三束三ぶせ」といへば、十三ツカミと指三本をふせた丈の長さといふ事になる。○不敵にして兄にも所を置かず。「不敵」は大膽で物に怖れず、當たり難い事。「所をおかず」は遠慮せぬ事。弟としては、兄の坐るべき上座を明けおくべきだが、それを明けおかずして、不遠慮に占領する事である。○不孝。勘當の事。大昔の王朝の刑律に八虐といふのがあり、謀反（至尊を弑害する事）、謀大逆、謀叛（國事叛の事）、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義と云つて、特赦、大赦などにも赦されぬ大罪が定められてあつた。「不孝」はフキョオと讀んで、父母を告訴し、呪咀し、罵詈し、或ひは父母の喪に居て嫁娶する類ひをいふのであるが、こゝの不孝は此の刑律の名稱の轉じたので、親に不當りした罰としての勘當に用ゐられる事になつたのである。不興の意ではない。○鎭西。次ぎなる宣旨に「宰府」とあるのと同じ意味で、九州の事である。宰府は太宰府の略。太宰府は筑前に置かれた都督の府で、昔は「オホミコトモチノツカサ」と

讀まれた。天皇の大御言を承け持ちて任に赴くといふ意で、其の役目は九州及び壹岐對馬二島を治めて、唐三韓等に備へるのであつた。此の太宰府を古くはまた鎭西府とも云つた。九州が此の太宰府、鎭西府に管理される所から、是等が略されて唯だ「宰府」とも、「鎭西」とも呼ばれたので、宰府、鎭西、九州、九國、皆同じ意味である。〇めのと。本は妻の弟卽ち妻の妹の事であつたが、一轉して乳母、お乳の人の事となり、再轉して乳母の夫にも用ゐられる事になり、更に轉じて目下なる保護者、御傅役といふ意にも用ゐられる事になつた。此處は目下の保護者の意味で、家來筋の後見の事。〇總追捕使。部内の奸徒を追捕鎭靜する役目。もとは追捕凶賊使ともいひ、又單に追捕使とも云つた。多く國司群司の武藝才幹あるものを任用したものである。〇いまだ勢もつかざるに。味方に勢のつかぬ中にの意。〇押し成つて。押し强く勝手に成ること。〇神人。カミビトともジンニンとも讀む。神職神主の事。〇上卿。除目、叙位、奪官等を評議する公卿達の議長の事で、大臣或ひは大納言、中納言の中より任ずる例であつた。〇宣旨の大意。「源爲朝、彼れは久しく太宰府管轄の九州に住み、朝家の憲法をゆるかせにし、事々に勅令に背き、殘忍狼藉の所行甚だしき旨、頻りに其の聞こえがある。速かに籠居謹愼を命ずべきものである。畏き勅命を取次ぐ事かくの通り。」といふ事。〇參洛。上洛。京都へ上る事。〇形の如く。始終、いつでも、きまつて。〇爲朝が都上りに引きつれた郎黨の渾名は、いづれも、各勇士の特別なる技倆に對して世間が捧げた名譽の稱號であつたのであらう。例へば、「箭前拂」の名は、合戰毎に第一線に立つて、雨と降る敵の矢を掻き拂ひ／＼進むといふところから得たのであらう。「透間數」は、接戰の際どい間に、乘ずべき敵の隙間を一目に數へる敏捷さから來たのであらう。

「手取」は、組打などの手際の巧い所から、「三町礫」は、礫を非常に遠くへ投げる離れわざから、「大矢」は、圖はぐれの大きい矢を射るところから、「越矢」は、遠くの或る目標物を射越した功名から與へられたのであらう。而して當時の人は、是等の渾名を聞くと、「ウムあの名物の武士か！」と、魂を躍らしたのであらう。〇目角二つ切れたる。よくは解らないが、思ふに、上眼瞼に二箇所の角があつたといふのであらう。〇獅子ノ丸。獅子の繪を丸く圖案式に意匠したもの。〇唐綾。綾の泛織になつたもの。〇大荒目の鎧。幅の廣い札を太い絲であらく綴ぢた鎧。目が荒ツぽく大まかなる故にいふ。〇着るまゝに。着ると同時に。〇五人張の弓。四人で弓をため、一人が弦をかけるのを五人張といふ。〇鈨。弓の握りの上に打つて、矢を脱せざらしめる爲めの折釘。耳木兎の形に似たれば「つく」といひ、丸き金物なる故に「鈨」と書く。〇樊噲。漢の高祖の臣、支那の名高い武勇の士。〇吳子、孫子。支那の名高い兵法家。〇養由。養由基。左傳に出てゐる楚の國の人で、弓の名人、百歩を隔てゝ柳の葉を射るのに、曾て過つたことがないと云はれる人。〇こぞり給ふ。全群悉く同一擧動に出でた事。〇折角の合戰。折角は骨折ること。激しい骨の折れた戰。〇主上の御方心憎くも候はず。「心憎し」は奥床しいといふこと。主上に御味方した武人等に、床しい、恐るゝに足ると思ふ者が一人もありません。〇眞中。胸部の眞中のことであらう。〇へろ〳〵矢。ひよろひよろ、へな〳〵として、力なく、直進せぬ事。當時の俗語で實によく利いて居る。〇鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。清盛等が射放つへロ〳〵矢位は、刀や手を掛けるまでもなく、鎧の袖でかき拂ひ、蹴ちらかして打ちすてゝやらうといふ意。清盛の身體を、爲朝が、鎧の袖で拂ひ蹴散らかす意味ではない。〇他所へ成らば。外へ御

幸になるならば。「なる」は天子の行かれる事、また居られる事。御なり座敷、御なり街道の類。〇駕輿丁。御乗物を舁く壯丁。〇まゐり向ひ。主上の御そばへ伺ひ。〇此の御所へ成し奉り。此の北殿へ御幸を願ひ。〇以ての外の荒儀也。常道はづれの亂暴沙汰である。途方もない、あら〳〵しい事をいふ。〇無下に。此の下なしで、「極めて」の意なりともいひ、無限の略ともいひ、無碍の意ともいふ。「最もよくない」といふこと。〇指矢、遠矢。指矢はさしかへ引きかへて射つゞける數矢。遠矢は特に遠方を志して射る矢。〇富家殿。頼長の父關白忠實。〇院ノ司の公卿殿上人。「ゐんのつかさ」とも「ゐんじ」とも讀む。院の御所に奉仕する役人の公卿殿上人といふこと。〇和漢の先蹤、朝廷の禮節。支那日本の平和的先例、朝廷のいろ〳〵な御儀式。〇口惜しき。くやしいといふ事。通例「朽惜し」の意と云はれてゐるが、荻生徂徠は「屈惜し」の轉じたので、へこたれるのが情ないといふ意だと云つて居る。いづれにしても、「口」の字に意味はない。

三

以上で難語、難句、出典の解釋があらまし濟んだので、私は次ぎに、文學としての概評を試みたいと思ひます。此の一章の中で、眼目ともいふべき部分は、「爲朝は七尺ばかりなる男の……」から「左府爲朝が申す樣、以ての外の荒儀なり」といふところまで、卽ち爲朝が武者振の描寫から夜襲獻策のすむ所までありますが、便利の爲め、此の一章の代表として、假りに此の部分だけを取つて見ると、

吾々の第一に氣のつく事は、其の文章の男々しく力があつて、いかにも武人を寫すに適して居る事でありませう、前代なる平安朝の優しい女性的な文章、例へば『源氏物語』や『枕の草子』や『榮華物語』や女流日記などに見るやうな、「侍るめり」、「すればなむ」、「口惜しからまし」といふ調子とは、すつかり變はつた、男性的の凜々しい、骨のある文章でありませう。抑、軍記に於ける斯樣な男性的の强い調子は、どうして出來たものでありませうか。思ふに、その內容なる第一の原因は、寫さるゝ題材の性質にあるので、新時代の役者なる武人の勇ましい生活や戰爭が、自然にかやうな文體を喚び起こしたのでありませうが、外的方面なる形の上からいふと、それは强い言葉が用ゐられた爲め、漢語や俗語が自由に用ゐられた爲めで、委しくいふと、調子の强い漢語や俗語が、基調となり、主人株の地位を占めて、前代の女々しい優美な言葉を使ひこなし、其處に男性的な立派な調子を出來した爲めでありませう。試みに此の中なる

左府卽ち合戰の趣計らひ申せと宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者共從へ候ふにつきて、大小の合戰數を知らず、中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或ひは敵に圍まれて强陣を破り、或ひは城を攻めて敵を亡ぼすにも、皆利を得ること夜討に如く事侍らず。

の一節を取つて、『源氏物語』の帚木の卷なる、事柄も調子も共に强味の勝つた次ぎの一節、

かゝれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒波のいかれる魚のすがた、唐國のはげしき獸のかたち、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろおどろしく作りたるものは、心に任せて、ひときは人の目を驚かして、實には似ざらめど、さてありぬべし。尋常の山のたゝずまひ、水の流れ、目に近き人の家居有樣、げにと見え、なつかしく柔らびたる形などを、靜かに書きませて、すくよかならぬ山のけしき、本深く世ばなれてたゝみなし、氣近き籬の內をば、その心しらひ掟などをなむ、上手はいと勢ひことに、わろものは及ばぬところ多かんめる。

と比べて見ると、軍記物語に於いて、言語選擇の標準がいかに異つて來たか、そして選まれたる言葉の違ふ事が、文章の上にどんな異つた味はひを現はすやうになつたかが解るでありませう。殊に、軍記物語に特別な活きた味はひを與へたのは俗語であります。例へば、「射拂はんずるなり」、「折角の合戰」、「よッ引いてひやうと射る」の類ひ、皆さうでありますが、試みに、

清盛などがへろ〱矢、何程の事か候ふべき。

の一句を御覽さい。この「へろ〱矢」の與へる味はひを、雅語漢語の何物がよく現はすことが出來ますか。こゝの

然れば只今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免る

べからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方心にくくも候はず。但し兄にて候ふ義朝などこそ駈け出でんずらめ。それも眞中差して射通し候ひなん。まして清盛などがへろ〳〵矢、何程の事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へならば、御免を蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も、御輿を捨て逃げ去り候はんずらん。

といふ一節をば、中井履軒の『通語』には、

臣請乘レ夜襲撃、放二火其三面一、要二之一路一。則避レ火者死二於箭一、逃レ矢者焚二於火一。禁軍雖レ衆、唯有二臣之兄義朝一而已矣。然臣一矢可レ殪。至レ如二清盛等一、則臣鐵袖一揮皆自倒。乘輿必出。臣則一矢加二於其夫一。奉而來、易如レ反レ掌。

と譯し、水戸の『大日本史』には、

臣請今夜襲二高松殿一、三面縱レ火、一方攻レ之。兵火相逼、敵必不レ能レ支。敵レ臣者唯臣兄義朝耳、臣一矢殪レ之。況尫弱清盛輩乎。主上若徙二他所一、臣請得レ射二雜從少許一。

と譯し、賴山陽の『日本外史』には、

臣請今夜襲二高松殿一、火二其三方一、而要二之一面一。其善戰者、猶有二臣兄義朝一。然臣一矢斃レ之。至レ如二平清盛輩一、臣鎧袖一觸皆自倒耳。則乘輿必不レ得レ不レ出。臣乃加二矢其從兵一、徙二輿於此一、而奉二

陛下於彼㆒。易如㆑反㆑掌。

と譯してあります。思ふに、此の三著の三作家は、いづれも『保元物語』の此の部分に特別の興味を持ち、懸命の努力で此の味はひを漢文に現はさうとしたのでありませう。そして三家の作は、いづれも可なりの立派な漢文になつて居りますが、但し、此の保元の風雲兒の意氣を、どの程度に寫し得たかといふと、私は此の點に於いて、此の三著の三作家の文章は、いづれも『保元物語』の足許にも寄りつけないと思ひます。そして、それはおもに當時の空氣の凝つて成つた新しい時代言葉、卽ち俗語を逸して居るからで、從つて『保元物語』の此の文の堪らない面白味は、一面、この時代言葉の俗語を巧みに用ゐた所にあるといふことが出來ると思ひます。

俗語には言語道斷の妙味があります。例へば『平家物語』の巻五、「入道逝去」の條に、淸盛が火の病で死ぬところを寫して、

悶絶躄地(もんぜつびやくち)して、つひにあツち死にぞせられける。

と書いてあります。「あツち死(じ)に」とは「熱(あツ)ちち〳〵」と叫びつゞけて死んだといふ事で、思ひ切つた俗語でありますが、此の一語の爲めに、此の文章がどれ程活きて居るか、此の場の光景がどれほど活き活きと寫し傳へられて居るかは、云ふまでもないとでせう。千住(せんじゆ)の青物市を「やツちや場」といひ、

日本橋の大根漬の市を「べッたら市」といひ、大塚の儒者の墓所を「儒者すて場」と云つて居りますが、是等の俗語が、其の場所その場所を、どれほど面白く言ひ現はして居るか知れません。「ヒョロ松」といひ、「ワイ〳〵連」といひ、「推すな〳〵の大入」といふ類ひの言葉も、皆同じ事で、雅語、普通語、外國語の幾百幾千を以てしても現はし得ない、微妙な趣致を見せて居るのでありますが、「清盛などがへロ〳〵矢」も全く同じ事であります。爲朝は大力の强弓、矢次早の手きゝで、射術に第一の誇りを感じて居る者である。彼れは敵の强弱をも、まづ弓矢本位に考へて、「清盛などがへロ〳〵矢」と云つたのでありませう。そしてそのやうな腰の弱いへロ〳〵矢は、太刀などを拔きかざして殊更に防ぐまでもなく、鎧の袖にてかき拂ひ、蹴散らかして捨てようと云つたのでありませう。卽ち「清盛などがへロ〳〵矢」といふ語は、射道の第一人者八郎爲朝の廣言として、特別の意義と趣味とを有つて居るので、其の大切なへロへロ矢を清盛から取り上げて、たゞ「至レ如ニ清盛等ニ」、「況尩弱清盛輩乎」、「至レ如ニ平清盛輩ニ」と云ふだけでは、魂の無い文句となるわけであります。思ふに三名著の三作家は、いづれも此の「へロ〳〵」矢の譯出に苦心したのでありませうが、その外國語に譯すべからざる特殊の味に、すッかり降參して、見て見ぬ振をしたのでありませう。或ひは外國かぶれした儒者頭に誤られ、折角の活きた語を馬鹿にして顧みなかつたのでありませう。かういふ事を考へ併せても、軍記に

用ゐられた俗語が、其の文章にいかほど力と味はひを添へたか、武士の生活を寫す上に、いかほど大いなる貢獻をなしたかが解るであらうと思ひます。

因みに、「鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん」は、決く清盛等が放つへろ〳〵矢を、拂ひ去り蹴散らかすといふので、清盛の身體を掻き拂ひ蹴散らす意ではあるまい。それは此の二句が「へろ〳〵矢何程の事か候べき」を受けて居るのでも明らかなることで、また「袖にて拂ひ」、「蹴ちらして捨てる」といふ詞が、人の處分よりは、寧ろ箭の始末を叙するに適當して居る事によつても察せられる。要するに、此の一節は、爲朝が最大得意の弓矢本位に觀察して、敵の矢を輕侮する不敵の心情を寫したのを、漢文家の漢文眼が、先づ清盛から、「へろ〳〵矢」をもぎ取つて清盛自身を置き換へ、餘勢は更に清盛自身をも拂ひ去り蹴ちらさしめ、而して此の壯快な換質譯の作つた僞が、次ぎ〳〵に襲用され、遂に山陽が大誤譯の大名文を產み出だして、後世の兒孫に誇揚の言草を與へたのであらう。

四

此の一章を見て吾々の第二に氣のつく事は、爲朝を描寫した段取の妙であります。亂の前夜、父に具せられて北殿なる軍評定の場に入つた十七歳の青年英雄を寫すに當たつて、作者は先づ彼れが體軀

の全體を見て、「七尺ばかりなる男」といひました。第二に其の爛々たる大眼光に留意して、「目角二つ切れたる」といひました。第三には、身に着いた鎧直垂（よろひびたゝれ）と鎧とに着眼して、

紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを着るまゝに、

といひました。第四には、身體（からだ）に半ば着き半ば離れた帶劍に留意して、

三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、

といひました。第五には、全く身を離れた武器の、弓と矢とに目をつけて、

五人張りの弓、長さ七尺五寸にて銑（つく）打ちたるに、黒羽の矢負ひ、

といひました。第六には供人の居る事、而して其の供人が、兜を持つてつゞいて居る事に目をつけて、

兜をば郎黨に持たせて、

と書き、而して最後に、七尺ゆたかの大男が、大きな眼を輝かし、立派な直垂と鎧とを着、大將軍らしい太刀を帶き、立派な弓矢を持ち、兜を持つた郎黨を從へて、泰山のゆるぐが如く、のッし／＼と現はれ出でた容體を、有機的に統一し、之れを漢土の大勇士樊噲に准へて、

歩み出でたる體（てい）、樊噲もかくやと覺えて由々しかりき。

といひました。尚ほ更に附け加へると、次ぎに彼れが軍略に長じ射術に長けた事に及んで、鳥も獸も恐れをなしたといひ、そしてあらゆる人々が爭つて視線を向け、恐れ多くも上皇樣までが、御まなじりを向けさせられたと書いて居ります。この人物描寫の順序立の一絲亂れぬ巧みさを見て下さい。そして、主要部を力寫し、枝葉部を之れに附屬させて、一個の英雄兒をまんまと浮き上がらせ、活かし出だした腕前を、よく見て下さい。

此の描寫の順序立のすぐれて居ることは、實際の場合を考へると、よく解ります。吾々が始めて人を見る時に、まづ目につくのは、其の人の身體全體でありませう。そして次ぎには顏を、顏の中では第一に眼を見るでありませう。それから着物、髮飾、携帶品、乘物、供揃といふ順序で、段々に注意して、最後に之れを一つに纒めて、其の全體を見るでありませう。彫刻、繪畫、文學も同じ事で、若し立派な立像ならば、觀衆をしてまづ身體全體に注意させ、次ぎに顏に眼に注意させ、それから着物髮飾から携帶品等に注意させて、最後に顏と目とを中心とし、殊に奥に宿つて居る精神を中心として、枝葉の全部を統一的に眺めさせるものでなければなりますまい。若し然らずして、まづ臺座に注意させ、下半身に注意させ、段々見上げて行く中に、顏が見つかつた、眼があるのに氣がついた、といふやうな事では、藝術として立派な立像とは云はれないわけであります。此の爲朝の描寫なども、若しまづ

鎧を寫し、或ひは弓矢を先きに寫して、後に眼や身體全體に及んだならば、中心のない、調和統一のないものになつたのでありませうが、根幹の主要部から漸次に枝葉部に及ぼして、しかもよく全體を統一させた腕前は、實にえらいと云はねばなりません。殊にそれが近代の作家に於けるやうに、理窟の上から意識して書いたのではなく、我れ知らずこの通り書き上げたらしい所には、つゆほども匠氣の厭味がなくして、一層の床しさがあるやうに思はれます。

五

此の一章を讀んで吾々の第三に氣のつく事は、時代思想の現はれた趣であります。當時は公卿の天下が武人の天下にならうとする過渡の時代でありました。文藝本位の世が武力本位の世に變はらうとする過渡期でありました。平安朝のなかば以來、武人は段々に實力を養つて來ましたが、彼等は實力がありながら、まだ公卿の侍者たり、臣僕たり、爪牙たる地位に甘んじて、おとなしく公卿の前にひれふして居りました。彼等が實力を備へながら、それを自覺せずして、藤原氏に仕へてゐた有様は、譬へば眠つた獅子が、背の上に雛人形を乘せてゐた様なものでありますが、保元平治の大亂は、すつかり獅子の眠りをさまして、背の上の人形を振り落させ、やがて武人の天下となつて、將軍政治が布

かれるやうになつたのであります。平安朝四百年の太平の夢が破れて、やがて保元の大亂が起こらうといふ其の當夜に、剛勇無双とはいひながら、地下の中でも無位無官の、しかも十七歳の小冠者鎮西八郎爲朝が、左大臣頼長の前に出で、剰へ上皇の御目通りに出るさへあるに、その上皇を始め奉つて、あらゆる公卿殿上人が、「八郎頼もしや！」と、拜まぬばかりに首を伸べて擧つて居るとは、世の中も變はつて來たものであります。無意識の中に當時の武人を代表してゐた爲朝は、垂れたる頭を揚げて、ぢッと此の様子を見ました。彼れはもう「天下は己れのものだ！」と思つたでありませう。

上皇を始めまゐらせ、あらゆる人々、音に聞こゆる爲朝見んとてこぞり給ふ。

簡單ではあるが、公卿の世が武人の世にならうとする大勢推移の消息を、力強く暗示して居るではありませんか。この一寸した數行數十字の中に、大日本六十餘州の形勢の一變する機微を味はへるのは、斯様な文章を讀む者の享くべき大きな喜びで、私はこれが軍記物語の讀者に與へる最大興味の一つであると考へて居ります。

六

以上は、源平時代に於ける武人の意氣裝束及び戰爭の前景氣についての記述でありますが、軍記の

興味の最高潮は、無論劍戟相交はる實戰の描寫にあります。左に、同じ『保元物語』の中から、八郎爲朝の眼前に演ぜられた、金子十郎家忠が勇戰の條を引いて見ませう。

金子ノ十郎は滋目結の直垂に、捃縄目の鎧着て、鹿毛なる馬に黑鞍置いて乘つたるが、矢種は皆射盡くして、太刀を拔いて眞向に當て、武藏の國の住人金子ノ十郎家忠十九歲、軍は今日ぞ始めなる。御曹司の御内に我れと思はん兵は、出であへやとぞ名乘つたる。八郎宣ひけるは、惡い剛の者かな。我が矢頃に寄せて控へたり、只だ一矢に射て落さんと思へども、餘りに優しければ、誰れかある、あれ提げて參れ、一目見んとありしかば、木蘭地の直垂に、紫革の腹卷着、栗毛なる馬に乘り、高間ノ四郎と名乘つて、押並べて組んで落つ。高間は兄弟共に聞こゆる大力なるを、家忠上に成つて、押へて首をかゝんとする處に、高間ノ三郎落ち重つて、弟を擊たせじと金子が兜を引き仰け、首をかゝんとしけるを、下なる敵の左右の手を膝にて敷め詰め、上なる敵の弓手の草摺引き擧げ寄り返して、柄も拳も徹れ〳〵と、三刀刺してひるむ處に、下なる敵の首を取り、太刀の先に差し擧げて、此頃鬼神と聞こえ給ふ、筑紫の御曹司の御前にて、高間ノ四郎兄弟をば、家忠討ち取つたりとぞ呼ばはりける。家末これを見て安からず思ひければ、射落さんとて追懸ける處を、八郎、いかに須藤、あたら兵を助けて置け、今度の軍に打勝ちなば、爲朝が郎黨にせ

んずるぞとこそ宣ひけれ。金子餘りに剛なれば、軍神(いくさがみ)にや守られけん、又なき高名(かうみやう)仕り、極めて不思議の命助かりて、大將までぞ譽められける。

武人の裝ひ、名乘り合ひ、戰場の駈け引きから、彼等の優しい心意氣までが、手に取るやうに委しく活き〳〵と書いてある。戰爭の描寫もこれまでになれば、「軍記」「戰記」「合戰記」「戰物語」等の名を與へられて、特殊の文學扱ひをされるのに、何の不足もないのであるが、『平家』を中心とした當時の軍記は、武人の裝束や、生活や、戰爭の記事を有する外に、公卿や女房や僧侶やに關する複雜微妙なる哀れをも含み、いろ〳〵の方面に於いて、限りなく深き味はひをも見せて居るので、此の點に於いて、單なる軍記以上の特別なる價値を生じ、又これあるが爲めに、上は『萬葉集』や『源氏物語』に對し、下は西鶴、近松、馬琴その他に對して、敢て讓らざる特別の地位を占めることが出來るのである。

第一　軍記の萌芽及び開展

一

文學は生活の影である。活きた生活のない所に活きた文學の現はれる筈がない。平安朝の小さい武

人は、鎌倉時代に入つて其の巨大なる姿を現はした。平安朝時代に公卿の臣僕爪牙として甘んじて居た彼等は、今や社會最高の地位を占めて、公卿を壓服し頤使するやうになつた。彼等の男々しい生活と戰爭とは、今や最大興味として一世の視聽を集めることとなつた。悲しむ者が泣き、勝ち誇る者が高唱する、これが自然である。そして之れを傍觀し傍聽した一代の人衆、のみならず泣く者、勝ち誇る者それ自身までが、勝者敗者の實演した活劇の藝術化されたのに視入り、聽き入つて、拍手し、喝采し、同歡し、同悲する、これが更に自然である。軍記物語は、概しては時代の寵兒たる武人の雄健(をたけ)びで、細かにいふと、勝つた者と敗れた者との悲喜哀歡の交響樂である。武人階級の成立つた鎌倉時代、將軍政治の布かれた鎌倉時代、武士道道德の成立つた鎌倉時代の初めに、武人生活の精華を集めた文學「軍記」の成立つたのは、まことに當然と云ふべきであらう。

文學史家は概ね『保元物語』を「軍記」の祖(おや)と說いて居る。「軍記」を「戰爭を中心とした武人の生活を、殊に一つの戰爭の顚末、或ひは一二の武家の盛衰の顚末を、假名交りの國文で組織的に書いた文學」といふ意味に取れば、いかにもさうであらう。けれども委しくいへば、『保元物語』の前にも、戰爭を書いた文章が無かつたのではない。思ふに「軍記」といふ立派な特殊文學の成立つ前に、或ひは戰爭を斷片的に寫した文章があり、或ひは戰爭を歌つた詩歌があり、或ひは漢文で書いた戰爭記があつ

たので、其等が或ひは一部の書物の中に挿入され、或ひは文學として取扱はれる價値のない一種の合戰顚末記として存在してゐたのであらう。而して其等の幼稚な、蕪雜な、不純な、斷片的な文章が、段々磨きをかけられ、組織を與へられて、爰に一時代を飾るべき一種の特殊文學「軍記」といふものが出來たのであらう。少なくとも前代の長い間のいろ〳〵な文書の中に散在した各種各樣の種子が、段々に育て上げられ、組み合はせられ、取り纒められて、遂に一代を飾るやうな、花も實もある文學の「軍記」を見る樣になつたのであらう。然らば我が「軍記」の種子は如何なるものであつたか。それが如何樣に培養されて如何樣に開展したのであるか。次ぎに聊か之れに關する愚見を述べて見たいと思ふ。

私の考へる所では、戰爭の記事の始めて國書に見えたのは、＝寧ろ「軍」といふ語の國書に見え始めは、といふ方がよいかも知れぬ＝伊邪那岐命が神崩した伊邪那美命を黃泉國に訪はれた時に、見ることを禁ぜられた殿の內を覗かれたので、女神が怒つて、魔軍を指揮して男神を追はしめられた條である。それは左の通りの莊嚴なる文章で現はされてゐる。

故、左の御髻に挿させる湯津爪櫛の男柱一つ取りかきて、一火燭して、入り見ます時に、蛆集れ盪ぎて、御頭には大雷居り、御胸には火の雷居り、御腹には黑雷居り、

御陰には拆雷居り、左の御手には若雷居り、右の御手には土雷居り、左の御足には鳴雷居り、右の御足には伏雷居り、あはせて八種の雷神成り居りき。こゝに伊邪那岐命見畏みて、逃げ還ります時に、其の妹伊邪那美命、吾に辱見せたまひつと申したまひて、卽て泉津醜女を遣はして追はしめき。かれ、伊邪那岐命黑御鬘を取りて、投げ棄て給ひしかば、乃ち蒲子生りき。こを摭ひ食む間に、逃げ出でますを、猶ほ追ひしかば、また其の右の御髻に刺させる湯津爪櫛を引きかきて、投げ棄てたまへば、乃ち笋生りき。こを拔き食む間に、逃げ出でましき。また後には、かの八くさの雷神に千五百の黃泉軍を副へて追はしめき。爾、御佩かせる十拳劍を拔きて、後手に振きつゝ逃げ來ませるを、猶ほ追ひて黃泉津平坂の坂本に到る時に、その坂本なる桃子を三つ取りて、待ち擊ちたまひしかば、悉に逃げ返りき。……最後に、其の妹伊邪那美命、身自ら追ひ來ましき。

大意は、男神は亡くなられた女神を慕つて、黃泉國に行かれ、「國土經營なかばにして、御身に別かれることは堪へられぬ。是非に還つて下さい。」と賴まれた。女神は「折角の御越しが恐れ多いから、還

りませうが、それについては、暫く冥官と談判をせねばなりませぬ。其の間私を御覗きなされてはなりませぬぞ。」と、嚴かに言つて、殿の内に入られたが、久しく出て來られぬので、男神は待ちかねて、髮にさゝれた爪櫛の男柱一本を折りかいて、火をとぼして、祕密の殿の内に入つて見られた。見られると、こは如何に！ 女神の五體はどろ〱に腐爛して、蛆蟲がウヨ〱と蠢きたかつて居る。そして其の頭には恐ろしく大きな雷神が居り、胸には炎々たる猛火の雷神が居り、腹には眞黑々の雷神が居り、陰部には物をつん裂く大力の雷神が居り、左の手には若雷、右の手には土雷、左の足には鳴雷、右の足には伏雷、合はせて八種の恐ろしい雷神が、女神の屍體の彼處此處に生り出でて、轟きはためき、光りかゞやき、躍り狂つてゐた。男神は驚き怖れて、逃げ歸られると、女神は、さては吾れに恥を與へられたかと、打腹立つて、一目見てもぞッとするやうな、恐ろしい黃泉醜女を遣はして、追ひ掛けさせられた。それから男神は、醜女の好む物を投げ與へ、投げ與へ、醜女が取り食ふ隙を見ては逃げられたが、やがて女神は、さきの八種の雷神に千五百の黃泉軍を副へて追はしめられた。男神は御佩の十掌劍を拔き、後手に打振り〱逃げられたが、丁度、平坂の麓に行かれた時、そこに生つてゐた桃の實を三個取つて、追ひ來る魔軍を待ちうけて、擊ちつけられると、魔軍は恐れて悉く引返した。最後に追ひかけて來られたのは、女神伊邪那美命である。

といふことである。此の神話に關する理窟の上の説明は、いろ〳〵に附けられるであらうが、文學として見れば、腐爛した身體の各部に、各種の雷神が發生したと見たのは、いかにもすばらしい想像で、又魔軍の追ひ來る樣、男神の之れを防がれる樣を、これほど迄に活き〳〵と面白く寫したのは、大和民族の想像力と創作力との卓越した事を證するものであらう。とにかく、これが國書に於いて最初に現はれた戰爭の記事であるが、しかしそれは、ほんの軍記の種子といふだけ、また原始的の單純さを以て、面白く雄大に書いてゐるといふだけであるのは、勿論のことである。

二

『古事記』、『日本紀』に現はれた、人間らしい戰爭の最初の記事は、神武天皇東征のそれであらう。之れに次いで倭建命の熊襲征伐、蝦夷征伐、神功皇后の三韓征伐など、可なり多くの軍物語がある。しかし、是等は概ね極めて簡單なる挿話であり、又多くは歌謠と相助けて、やうやく其の趣を髣髴させるやうなものであるが、其の中で特に際立つて面白く、可なりに纒まつて居るのは、『日本紀』なる武内宿禰が忍熊王を欺き破る一段であらう。

こゝに武内宿禰等、精兵を選びて、山背より出でて、菟道に至りて、以て河の北

に屯む。忍熊王營を出でて戰はむとし給ふ。時に熊之凝といふ人あり、忍熊王の先鋒たり。則ち己が衆を勸めんとおもふ。因りてもて高唱く歌ひけらく、

彼方の　あらゝ松原、　松原に　渡り行きて、　槻弓に　まり矢を副へ、　貴人は
貴人どち、　賤奴は　賤奴どち、　いざ會はな我れは。
たまきはる　內の朝臣が、　腹內は　砂石あれや、　いざ會はな我れは。

譯　あれあの彼方　まばらな松原、あの松原に　押し寄せ行きて、　槻の强弓　響矢を
つがへ、　尊い貴人は　貴人どし、　賤しい奴は　奴どし、　いざ會はう　吾等もののふ。
鬼神と呼ばるゝ　武內とて、　身腹はよもや　鐵石ならじ、　いざ會はう　熊之凝われ。

時に武內宿禰、三軍に令して、悉に椎結せしむ。因りてもて號令ちて曰へらく、各儲弦を髮の中に藏め、且つ木刀を佩けと。既にして皇后の命を擧げて、忍熊王を誘りて曰へらく、吾れ天下を貪らず、唯だ幼き王を懐きて君王に從ひなむ。豈距ぎ戰ふことあらむや。願はくは共に弦を絕ち兵を捨てゝ、連和からむ。然れば則ち君王天業しらして、以て席に安く、枕を高くして、專ら萬機を制さむと。則ち

顯に軍の中に令して、悉に弦を斷ち兵を解きて、河水に投げ入る。忍熊王その誘言を信けて、悉に軍衆に令して、兵を解きて河水に投げ入れて、弦を斷たしむ。爰に武内宿禰、三軍に令して、儲弦を出だし、更に張りて、以て眞刀を佩き、河を渡りて進む。忍熊王欺かれたることを知りて、倉見別、五十狹芽宿禰にかたりてのたまはく、吾れ既に欺かれぬ、今は儲の兵なし、豈戰ふことを得べきやとのたまひて、兵を曳きて稍に退く。武内宿禰精兵を出だして之れを追ふ。適に逢坂に遇ひて以て破る。故其の處を號けて逢坂と曰ふ。(後略)

大分漢文がかつては居るが、戰爭の消息が可なりに委しく寫されてある。

三

『古事記』、『日本紀』に現はれた戰爭記事の中で、最も委しく最も優れて居るのは、恐らく『紀』の二十八卷なる天武天皇對大友皇子の御國爭ひの戰爭、卽ち謂はゆる壬申の亂の記事であらう。これは惜しいかな、殆んど純粹の漢文になつて居るので、國文の戰記と云ひ得ぬ嫌ひはあるが、鎌倉の軍記も

一面、かういふ方面から發達して來たものであるから、試みに其の最後の一鎖を、假名交りの讀み下し式に書きかへて見ると、かうである。

秋七月庚寅朔辛卯、天皇(天武)紀臣阿閉麻呂、多臣品治、三輪君子首、置始連菟を遣はして數萬の衆を率ゐて、伊勢の大山より、越えて倭に向はしむ。また村國連男依、書首根麻呂、和珥部臣君手、膽香瓦臣安倍を遣はして、數萬の衆を率ゐて、不破より出でて、直ちに近江に入らしむ。其の衆と近江の師と別け難きことを恐れて、赤色を以て衣の上に着く。然して後に、別に多ノ臣品治に命せて、三千の衆を率ゐて、莿萩野に屯ましめ。田中ノ臣足麻呂を遣はして、倉歴の道を守らしむ。時に近江、山部王、蘇賀臣果安、巨勢臣比等に命せて、數萬の衆を率ゐて、將に不破を襲はんとして、犬上の川の濱に軍す。山部ノ王、蘇賀ノ臣果安、巨勢ノ臣比等の爲めに殺さる。是の亂に由つて以て軍進まず。乃ち蘇賀ノ臣果安、犬上より返つて頸を刺して死す。是時に近江の將軍羽田公矢國、其の子大人等、己が族を率ゐて來り降る。因りて斧鉞を授けて將軍に拜す。卽ち北の方越に入る。是れより先、近江精兵を放ちて忽ちに

玉倉部の邑を衝く。即ち出雲臣狛を遣はして撃ちて之れを追ふ。壬辰、將軍吹負、乃樂山の上に屯む。時に荒田尾直赤麻呂將軍に啓して曰さく、古京は是れ本營の處なり、宜しく固く守るべし。將軍之れに從ふ。則ち赤麻呂、忌部首子人を遣はして古京を戍らしむ。是に於いて赤麻呂等、古京に詣りて、道路の橋の板を解ち取りて、楯に作りて、京の邊の衢に竪て以て守る。癸巳、將軍吹負、近江の將大野ノ君果安と乃樂山に戰ふ。果安が爲めに敗らる。軍卒悉く走ぐ。將軍吹負僅かに身を脫るゝことを得たり。是に於いて、果安追ひて八口岳に至り、のぼりて京を視るに、街每に楯を竪つ。伏兵あらむことを疑ひて、乃ち稍に引いて還る。甲午、近江の別將田邊小隅、鹿深の山を越えて、幟を卷き鼓を抱きて倉歷に詣る。夜半を以て、梅を銜み城を穿ちて劇に營の中に入る。則ち己が卒と足麻呂が衆と別かち難きことを畏れて、以て人每に金と言はしむ。仍りて刀を拔きて毆ち、金と言ふにあらざれば乃ち斬る。是に於いて足麻呂が衆悉に亂る。事忽ちに起こつて所爲を知らず。唯だ足麻呂聰く知りて、獨り金と言ひて、以て僅に免るゝことを得たり。乙未小隅亦進みて莿

萩野の營を襲はむと欲して忽ちに到る。爰に將軍多ノ臣品治遮へて、精兵を以て追ひ擊つ。小隅獨り免れて走ぐ。これより後遂に復た來らず。丙申、男依等近江の軍と息長の横河に戰ひて、破りて其の將境部連藥を斬る。戊戌、男依等近江の將秦友足を鳥籠山に討ちて之れを斬る。是の日東道の將軍紀ノ臣阿閉麻呂等、倭の京の將軍大伴ノ連吹負、近江の爲めに敗られしといふことを聞きて、則ち軍を分りて、以て置始連菟を遣はして、千餘の騎を率ゐて、急に倭の京に馳せしむ。壬寅、男依等安河の濱に戰ひて大に破り、則ち社戸臣大口、土師連千島を獲つ。丙午、栗太の軍を討ちて之れを追ふ。辛亥、男依等瀨田に到る。時に大友皇子及び群臣等、共に橋の西に營して、大に陣を成し、其の後を見ず。旗幟野を蔽し、埃塵天に連り。鉦鼓の聲數十里に聞こゆ、連れる弩亂れ發ちて矢の下ること雨の如し。其の將智尊精兵を率ゐて、以て先鋒として距ぐ。仍つて橋の中を切り斷つこと三丈を容るばかりにして、一の長板を置く。設ひ板を蹋みて度る者あらば、乃ち板を引いて墮さんとなり。是を以て進み襲ふことを得ず。是に勇敢士あり。大分君稚臣といふ。則ち長矛を棄て、

甲を重ね擐て、刀を抜きて急に板を踏んで度る。便ち板に着けたる綱を斷りて、以て被矢つゝ陣に入る。衆悉く亂れて散り走げぬ。禁むべからず。時に將軍智尊刀を抜きて退る者を斬る。然れどもえ止まらず。因つて以て智尊を橋の邊りに斬る。則ち大友皇子、左右大臣等、僅に身免れてもて逃げぬ。男依等卽ち粟津の岡の下に軍す。是の日羽田公矢國、出雲臣狛、合うて共に三尾の城を攻めて降す。壬子、男依等、近江の將犬養連五十君及び谷直鹽手を粟津の市に斬る。是に於いて大友皇子走げて入り給はん所なし。乃ち還りて山前に隱れて、自ら縊れたまへり。時に左右大臣及び群臣皆散け亡せぬ。たゞし物部連麻呂、また一二の舍人從へり。

此の亂の顚末を記した全文は、此の數倍もあつて、可なり委しいものであり、また可なり秩序立つて纒まつたものであるが、惜しいかな、唯だ筋を辿つたといふだけで、實戰の細かな味はひが殆んど寫されて居らぬのみならず、漢文を眞似た餘所行きの調子が累をなして、此の國、此の時代に特有なる趣致の表現を妨げて居る嫌ひがある。

大昔の戰爭描寫として、右に擧げた『日本紀』の漢文式なる戰記と相對して面白いのは、『萬葉集』な

る柿本人麿の長歌の中の、同じ壬申の亂を歌つた一節であらう。それは人麿が武市皇子を悼み奉つた挽歌の中に見えたもので、戰爭に關する部分だけを抄出すると、左の通りである。

鳥が鳴く　あづまの國の、御軍士を　召し給ひて、千早振る　人を和せと、まつろはぬ　國を治めと、皇子ながら　任け給へば、大御身に　太刀取り帶ばし、大御手に　弓取り持たし、御軍士を　誘率ひ給ひ、とゝのふる　鼓の音は、雷の　聲と聞くまで、吹き鳴せる　小角の音も、敵見たる　虎が吼ゆると、諸人の　おびゆるまでに、捧げたる　旗の靡きは、冬籠り　春さり來れば、野ごとに　つきてある火の、風の共　靡くが如く、取持たる　弓弭の騷ぎ、御雪ふる　冬の林に、暴風かも　い巻き渡ると、思ふまで　聞きの恐く、引き放つ　箭の繁けく、大雪の　亂りて來たれ、まつろはず　立ち向ひしも、露霜の　消なば消ぬべく、行く鳥の　競ふ間に、度會の　齋宮ゆ、神風に　伊吹き惑はし、天雲を　日の目も見せず、常闇に　覆ひたまひて、定めてし　水穗の國を、神ながら　太しきいます。……

大意は、壬申の亂が起こると、天武天皇は武市皇子に皇軍統率の大任を御託しなされた、そして「東

國の兵士共を召させられ、之れを率ゐて、逸り立つ敵兵を鎭め懐けよ、從はぬ國々を治め平げよと、皇子の御身分をそのまゝに御任せなさると、承つて畏き御身に太刀を帶び、畏き御手には弓を取り、御軍を率ゐ連ねて、威勢よく進ませられた。その御軍の調ふる鼓の音は、雷の鳴るかと聞こえ、吹き鳴らす角笛の音は、敵を見て吼ゆる虎かと、諸人のおびゆるばかり、捧げた旗の靡くさまは、冬が過ぎて春が來ると、野といふ野毎に放つた火の、風に煽られ靡くが如く、また射る毎に響く弓弭は、雪降りしきる冬の林に、旋風の卷きわたるかと、思ふばかり耳を驚かして、大雪の亂るゝやうに、隙間もなく箭を飛ばすと、立ち向つた敵兵等も、はや是れまでぞ命惜むな、身を露霜にたぐへよと、群れ行く鳥の爭ふ如く、競ひ寄する折しもあれ、度會の伊勢の宮より、かしこき神風吹き起こつて、强き息吹に敵兵をたじろかせ、空を蔽ふ黑雲に彼等の眼をくらまして、大勝利のその結果は、大御代萬歳萬々歳と、水穗の國を神そのまゝに、堂々と統御遊ばされた。」といふのであらう。大詩人の作だけに、實戰の光景をば、さすがに面白く描き出だして居る。『日本紀』あたりの戰爭記事も、もし此の調子で、國風に委しく行つたならば、國文學として價値のある軍記が、いちはやく上代に成立つたことであらうが、漢文まがひの形式的記述に滿足してゐたのは、惜しんでも餘りある事であつた。

第二　軍記の先驅『將門記』と『今昔物語』

一

『古事記』『日本紀』及び『萬葉集』等に現はれた戰爭記事は、簡單な斷片的記錄の挿入か、歌謠と補ひ合つて辛うじて其の面影を髣髴させる切れ〴〵の文句の繫がりか、或ひは多少纏まつた記事にしても、漢文張りの油氣がなく、活き〴〵した國民精神の殆んど顯はれてゐないものか、要するに斷片的か、挿入的か、依他的か、外國文の摸倣かで、其の上にまた大きな著作のホンの一部分を成すに過ぎぬものであつたが、かやうに、平安朝初期までの文書に於いて附屬物扱ひされた戰爭記事の獨立待遇をされたのは、恐らく、平親皇將門が兵亂の顚末を記した『將門記』であらう。『將門記』は朱雀天皇の天慶三年六月、卽ち將門の滅亡後四ヶ月にして出來たもので、六國史の脈を承けた所があり、一見漢文體を成しては居るが、實は一種の國文、若しくは準國文と見るべきもので、『古事記』などに準じて取扱はるべきもの、少なくとも『吾妻鏡』あたりに準じて、漢文の影響を多分に蒙つた一種の國文と見るべきものであらう。私は奇怪な獨立性を有つた反逆兒將門の叛亂記が、獨立した長篇戰記の第一者とな

つた事を面白い現象と思ふ者であるが、それが啻に獨立戰記の嚆矢をなしたのみならず、我が軍記に特有なる一種の氣分を含蓄して居るやうに見えるのは、更に面白い事である。思ふに『將門記』は、内容文體等に於いて、『吾妻鏡』の先驅をなして居るのみならず、また『今昔物語』を媒として、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』等の先驅をもなして居るものであらう。

左に『將門記』の中から二三章を抄出して見る。『將門記』は全部分漢字から成立つてゐて、頗る讀みにくい文章であるが、これは『武家時代之研究』に於ける大森金五郎氏の讀み方に從つて、讀み下し式に書き改めたのである。

夫レ聞ク、彼ノ將門ハ天國（あめくに）押撥御宇（おしひらきあめのしたしろしめす）、柏原天皇五代ノ苗裔、三世高望王ノ孫ナリ。其ノ父ハ陸奥鎭府將平朝臣良持ナリ。舍弟下總介平良兼朝臣、將門ノ伯父ナリ。而ルニ良兼ハ去ル延長九年ヲ以テ、聊カ女論ニ依リ舅甥ノ中既ニ相違ス。

これは『將門記』の冒頭で、正本の方には亡びて、抄本に存して居るものであるが、大體が六國史張りの漢文であるのに、其の間に「舍弟」「聊か」「既に相違す」などいふ鎌倉式の時代用語が侵入して來て、『吾妻鏡』や『平家物語』の文體のやがて出來上がるべき萌芽を見せて居る。殊に「而ルニ」は、當時の文章に於ける一種の時樣の接續語であるが、それが『今昔物語』では「而ル間」となり、『保元』『平治』や

『平家』では、轉じて「さる程に」の常文句となり、降つて淨瑠璃や舞の本では、更に轉じて「さる程にさても其後」の常文句となつた。一寸(ちよつと)した事ながら、言葉の様式の變化は實に面白いものである。以下は本文である。

爰ニ將門罷メント欲スルニ能ハズ、進マント擬スルニ由ナシ。然リ而シテ身ヲ勵マシ勸ミ據リ、刃ヲ交ヘテ合戰ス。將門幸ニ順風ヲ得、矢ヲ射ルコト流ルヽガ如ク、中(あた)ルトコロ案ノ如シ。扶(たすくら)等勵ムト雖モ、終ニ以テ負ク。仍テ亡ブル者數多ク、存スル者已ニ少シ。其ノ四日ヲ以テ、野本、石田、大串、取本等ノ宅ヨリ始メテ、與力ノ人々ノ小宅ニ至ルマデ、皆悉ク燒巡ス。〇〇〇〇〇〇〇。火ヲ遁レテ出ヅル者、矢ニ驚イテ還リ、火中ニ入リテ叫喚ス。〇〇〇〇〇〇ノ中、千年ノ貯一時ノ炎ニ伴フ。

此處は本文の方では、「爰將門欲レ罷不レ能、擬レ進無レ由、然而勵レ身勸據、交レ刃合戰矣。將門幸得ニ順風一、射レ矢如レ流、所レ中如レ案。扶等雖レ勵終以負也。」といふ風の、多少『日本紀』あたりに似通つた漢文になつて居るのであるが、形のみの漢文で、用語、句作りの精神が、已に日本式になつて居る事

は、「欲スルニ從ハズ」、「中ル所案ノ如シ」、「與カノ人々ノ小宅ニ至ルマデ」等の、國語式なる詞遣を見ても解るであらう。また「射レ矢如レ流、所レ中如レ案」のやうな、野暮な落ちつかぬ不思議な日本流の對句の仕立方によつて、漢文の滿足に書けぬ下手文章家が、强ひて漢文まがひの文章を書いた所から、いかにして一種の和漢混淆體が發生したか、そしてそれが如何樣に磨き上げられ、また如何樣に適所に用ゐられて、『平家』其の他の文章の妙味を發揮するやうになつたかを知ることが出來るであらう。殊に、些細な文句の類似ではあるが、此處に引いた「火ヲ遁レテ出ヅル者矢ニ驚イテ還リ云々」の二三句と、前に引いた『保元物語』なる「火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず」とを比較して、『保元物語』の作者が、『將門記』を見て、意識して眞似たとは云はれぬまでも、少なくとも鎌倉の軍記に見える勇壯な調子が、已に二百年前に出來た『將門記』の中に孕まれてゐたことが解るであらう。如何なる事物も飛び離れた進み方をするものではない。わが軍記物語も、やはりさうであつた。忽然として「無」の中から或る物が飛び出したやうに思はれてゐたものの種子を、遙かの前代に見出だすのは面白い事、また愉快なる事である。

時ニ武藏權守興世王、竊カニ將門ニ議シテ云フ。今案內ヲ撿スルニ、一國ヲ討ツト雖モ公ノ責輕カラズ、同ジクハ坂東ヲ虜掠シ、暫ラク氣色ヲ聞カン者（てへり）。將門報ジ答ヘテ云フ、將門念フ所啻ニ

斯レノミ。

「者」は「といへり」の意で、王朝以來の古文書に普通に用ゐられた詞である。こゝは賴山陽が『日本外史』の「夫取二一州一誅、取二八州一亦誅、誅一耳。顧公安所レ決。」の原文であるが、吾々は此の一節に於いて、輿世王や將門の欝勃たる覇氣を現はすに適した、力のある新しい文體が、和漢雅俗混淆の一面に萌しつゝあることを見出だし得るであらう。また

　將門苟クモ兵名ヲ坂東ニ揚ゲ、合戰ヲ花夷ニ振ヘリ。今世ノ人必ズ撃チ勝ツヲ以テ君ト爲ル。縱ヒ我ガ朝ニアラザルモ、皆人ノ國ニアリ。

の如きは、文句の調子が何となく『平家物語』の、「義仲苟も弓馬の家に生れて、纔に箕裘の塵を繼ぐ。彼の暴惡を案ずるに、思慮を顧る能はず。」などいふ「木曾願書」の文句や、小松内府が父を諫める條などに似て居るではないか。

　私は次ぎに、將門最期の一節を掲げて見たいと思ふ。そして上下二段の對照式に排列して、上段には『將門記』の原文を掲げ、下段にはそれと同じ事を寫した『今昔物語』の巻二十五なる、「平將門發二謀反一被レ誅語」の一節を並べ掲げて、其の異同を一目の下に瞭然たらしめ、而して『今昔』の作者が、百餘年前に出來た『將門記』を取つて、如何に之れを變へ改めたか、其の變改は退歩であつたか、進歩

であつたか、或ひは退歩にして同時に進歩であつたか、斯ういふ點から見て、『今昔物語』の特殊の地位と價値とが何處にあつたか、またそれが鎌倉軍記の發生に如何なる關係を有するかを明らかにしたいと思ふ。

（前略）多日ヲ經ト雖モ件ノ敵ヲ聆クコトナシ。仍テ皆諸國ノ兵士ヲ返シ遣ハシ、僅ニ遺ル所ノ兵ハ千人ニ足ラズ。此ノ事ヲ傳ヘ聞キ、貞盛幷ニ押領使藤原秀鄕等ハ、四千餘人ノ兵ヲ驚（ィ整）ヘテ急ニ合戰セントス。新皇大ニ驚キ、二月一日ヲ以テ、隨兵ヲ率キ、超エテ敵地下野ノ方ニ向フ。時ニ新皇將門ノ前陣未ダ敵ノ所在ヲ知ラザルヲ以テ、副將軍玄茂、陣頭經明、遂高等、後陣ヲ以テ敵ノ所在ヲ訪ヒ得、實否ヲ見ンガタメ、高山ノ頂ニ登リ、遙ニ北方ヲ見ル。實ニ依リテ敵アリ、略。四千餘人許ナリ。爰ニ經明等既ニ一人當千ノ名ヲ得タリ。件ノ敵ヲ見過スベカラズ。

新皇其の所にして日來を經と云へども、敵の有所を不レ聞カ。然れば諸國の兵等皆返しつ。遺る所僅に千人に足らず。爰に貞盛幷に押領使藤原秀鄕等之れを傳へ聞いて、彼等公家の恥を助けむと思ふ、身命を棄てゝ合戰と思ふと相語つて、秀鄕等多くの兵を具して行き向ふに、新皇大に驚いて、兵引具して向ふ。既に秀鄕が陣に打合ふ。秀鄕計賢くて、新皇の兵を討ち靡かす。貞盛秀鄕等跡に追ふ

今新皇ニ奏セズシテ、迫リテ以テ押領使秀郷ノ陣ニ討チ合フ。秀郷素ヨリ古計アリ。案ノ如ク玄茂ノ陣ヲ討チテ、其ノ副將軍及ビ夫兵等三兵ノ手ニ迷ヒ、四方ノ野ニ散ズ。(中略) 時ニ貞盛秀郷等蹤ニ就イテ征ノ程、同日未申ノ剋許ニ襲ヒテ川口村ニ到ル。新皇聲ヲ揚ゲテ已ニ行キ、劍ヲ振ウテ自ラ戰フ。(中略) 大分貞盛等命ヲ公ニ奉リ、マサニ件ノ敵ヲ撃タントス。所以ニ群衆ヲ集メテ甘詞ヲ加ヘ、兵類ヲ調ヘテ其ノ數ヲ倍ニス。同年二月十三日ヲ以テ、强賊ノ地下總ノ堺ニ着ク、新皇弊敵等ヲ招カント擬シ、兵使ヲ引率シ、幸島ノ廣江ニ隱ル。爰ニ貞盛事ヲ左右ニ行ヒ、計ヲ東西ニ廻ラシ、且ラク新皇ノ妙屋ヨリ始メテ悉ク與力ノ邊ノ家ヲ燒キ掃フ。火煙昇リテ天ニ餘リアリ、人宅盡キテ地ニ主ナシ、僅ニ遺レル緇素

程に追着きぬ。新皇相向つて合戰ふと云へども、兵の員遙かに劣るに依つて、△

△迯げて敵等を謀り寄せんと思て幸島の北に隱れ居たる間に、貞盛新皇の屋より始めて其の從類共の家等一一に燒き掃ひつ。□

ハ舍宅ヲ弃テ、山ニ入リ、適〻留マレル士女ハ道ニ迷ウテ方ヲ失フ。常陸國ノ已ニ損ズルヲ恨ミズ、唯ダ將門等ノ治マラザルヲ歎ク。今貞盛件ノ仇ヲ追ヒ尋ヌ。其ノ日尋ヌルモ逢ハズ。其ノ朝將門身ニ甲冑ヲ擐キ飄序ニ遁ルル處ヲ案ズ。心ニ逆惡ヲ懷キ衞方ノ亂行ヲ存ス。而ルニ恒例ノ兵衆八千餘人、未ダ來リ集マラザル間、啻ニ率キル所ハ四百餘人ナリ。且ラク幸島郡ノ北山ヲ帶シ、陣ヲ張リテ相待ツ。貞盛秀鄕等子反ノ鋭衞ヲ翫ビ、梨老ノ劍功ヲ練ル。十四日未申ノ剋ヲ以テ彼此合戰ス。時ニ新皇順風ヲ得、貞盛秀鄕等不幸ニシテ吹下ニ立ツ。其ノ日暴風枝ヲ鳴ラシ地籟塊ヲ運ブ。新皇ノ南ノ楯、前ヲ拂ツテ自ラ倒レ、貞盛ノ北ノ楯面ヲ覆フ。之レニ因ツテ彼此楯ヲ離レテ各合戰フノ時、貞盛ノ中陣變ヲ討チ、新皇

□然て新皇常に具したる所の兵八千餘人未だ集まらざる間、僅に兵四百餘人有つて、幸島の北山にして陣を張つて相待つ。貞盛秀鄕等追行て合戰ふ間、初めは新皇順風を得て、貞盛秀鄕等が兵討ち返さるゝと云へども、×

ノ従兵馬ヲ羅ネテ討ッ。且ッ討取ルノ兵類八十餘人、皆追ヒ靡クル所ナリ。爰ニ新皇ノ陣ハ跡ニ就イテ追ヒ來ルノ時、貞盛秀郷爲憲等ノ伴類二千九百人皆遁去ル。只ダ遺ル所ノ精兵三百餘人ナリ。此等方ヲ失ウテ立チ巡ルノ間、還ッテ順風ヲ得。時ニ新皇本陣ニ歸ルノ間、吹下ニ立ッ。貞盛秀郷等、身命ヲ弃テテ、力ノ限リ合戰ス。爰ニ新皇甲冑ヲ着ケ、駿馬ヲ疾（はや）メテ躬自ラ相戰フ。時ニ現ニ天罰アリ、馬ハ風飛ノ歩ヲ忘レ、人ハ梨老ノ術ヲ失フ。新皇暗ニ神鏑ニ中リ、終ニ託鹿ノ野ニ戰ヒ、獨リ蚩尤ノ地ニ滅ブ。天下未ダ將軍自ラ戰ヒ自ラ死スルアラズ。誰レカ圖ラン、少過ヲ糺サズシテ大害ニ及ビ、私ニ勢ヲ施シテ而シテ公ノ徳ヲ奪ハントハ。仍テ朱雲ノ人ニ寄セテ長鯨ノ頸ヲ刎ネヌ。便チ下野國ヨリ解文ヲ副ヘリ、

×後には貞盛秀郷等還つて順風を得たり。身命を惜まず合戰ふ。新皇駿馬を疾て自ら合戰ふ。時に現に天罰有つて、馬も走らず、手も覺（おぼ）えずして、遂に箭に當たつて野の中にして死にぬ。貞盛秀郷等喜びながら猛き兵を以て其の頸を切りつ。卽ち下野國より解文を副へて其の頸を上ぐ。新皇名を失ひ命を滅す事、彼の輿世王等が謀の致す所也。……其の後將門或人の夢に告げて云はく、我れ生きたりし時、一善を修めずして、惡を造りて、此の業に依て獨り苦を受くる事難レ堪と告げけりとなむ、

同年四月二十五日ヲ以テ其ノ頸ヲ言上ス。(將門記)

語り傳へたるとや。(今昔物語)

二

『今昔物語』の文が『將門記』から出た事は、右の對照によつて明らかなる事であるが、さて『今昔』の作家が如何なる創作心理によつて『將門記』の文章を借りて來たか、摸倣したか、料理したか、變へ改めたか、といふに、彼れは恐らく、第一に「當時の讀者に耳近く」と考へたであらう。而して此の標準によつて、漢文を和化し俗化したのであらう、また俗耳に遠い虚飾の文句を除き去つたのであらう。「多日ヲ經ト雖モ、件ノ敵ヲ聆クコトナシ」(將門記)を「日來を經といへども敵の有る所を聞かず」(今昔)と改めたのは、鯱こばッた落着のない難語難句を、俗耳に近く落ちつかせたのであらう。燒討の光景をば、「新皇の屋より始めて、其の從類共の家等一々に燒き掃ひつ」(今昔)と簡單に寫しただけで、「火煙昇リテ天ニ餘リアリ、人宅盡キテ地ニ主ナシ、僅ニ遺レル緇素ハ舍宅ヲ弃テ、山ニ入リ、適〻留マレル士女ハ道ニ迷ウテ方ヲ失フ」(將門記)等の形容文句を悉く省いたのは、漢文を描く眞似た四六まがひの對句仕立が、當時の讀者をして實景を想像させる上に、何等の效果もない事を知つたからであら

う。「馬ハ風飛ノ步ヲ忘レ、人ハ梨老ノ術ヲ失フ」、(梨老は養由、武術の達者で、弓をも劍をも善くした人)「終ニ託鹿ノ野ニ戰ヒ、獨リ蚩尤ノ地ニ亡ブ」(託鹿は黃帝が蚩尤と戰つた所。蚩尤は支那太古の蠻族、其の額が銅鐵の如く堅く、又濛氣を起こして敵の眼を暗ましたといふ。)「朱雲ノ人ニ寄セテ長鯨ノ頸ヲ刎ネヌ」(朱雲、字は游、漢の成帝の世の人、俠氣あり、身丈八尺、勢力絕倫と稱せられた。長鯨は巨大なわる者の意。)等の、迎山な故事入りの文句を却けて、簡單に「馬も走らず、手も覺えず」、「野の中にして死にぬ」、「猛き兵を以て其の頸を切りつ」と改めたのは、梨老、涿鹿、蚩尤、朱雲、長鯨等のやゝこしい故事が、當時の讀者の大部分に理解される筈がなく、よし大骨折の結果理解されたにしても、趣味の感得の上に何等の效果もない事を知つたからであらう。かくして『今昔』の作者は、『將門記』から難語難句の耳遠い要素を去つて俗耳に親しみのあるものとし、學者同志が衒ひ合ふ材料となるだけの無駄な故事や駢麗の雅句を取り去つて、直截簡明なる時樣式にしたので、かくして彼の無學不文なる事が、却つて新樣式の活きた文章を作る機緣となり、而して古典的の眼から見て、花の少ない光らない卑俗劣等の文章が、やがて磨き上げられて堂々たる新時代の文章となるべき種子とはなつたのである。『今昔物語』は、話し上手、聞き上手、口まめ、筆まめの源大納言隆國が、宇治橋の畔に庵を結び、道行く人に茶菓を接待して、人々の話す物語を、聞くがまゝに書き留めたものだ

と云はれて居る。無論彼れの物語の中には、在來の文書から取つた種も無數にあるが、=例へば此の將門物語の如き、或ひは次ぎに載せる業平物語の如き=其の書物種の物語が、原文に附いてゐた難解な無駄な要素を棄てゝ、耳近い一種の通俗味を發揮したのも、一つは、作者が活きた人の活きた話を聞き馴れた習慣から來たのであらう。

序ながら、『將門記』の文の末に、「誰レカ圖ラン少過ヲ糺サズシテ大害ニ及ビ、私ニ勢ヲ施シテ而シテ公ノ德ヲ奪ハントハ。」といひ、『今昔』から引いた文の末に、「將門或人の夢に告げて云はく、我れ生きたりし時、一善を修めずして、惡を造りて、此の業に依て獨り苦を受くる事難レ堪と告げたりとなむ。」と云つた、是等の批評的、敎訓的、勸懲的の添言葉は、後の『保元』、『平治』、『平家』、『盛衰記』、『太平記』等に於ける、批評的、敎訓的、勸善懲惡的なる添詞の濫觴をなしたもので、此の二つの作は、かやうな點に於いても、鎌倉以後の軍記其の他に對して、淺からぬ關係を持つてゐるのである。

第三　橋掛、産婆役としての『今昔物語』

一

『今昔(こんじやく)物語』は天竺、震旦(しだん)、本朝、即ち印度と支那と日本、この三國の興味ある話を通俗に書いた斷片的結集で、趣向の單純な點から見ても、文章の拙くして品位の乏しい點から見ても、それ自身の文學的價値の甚だ卑(ひく)いものであるが、しかしながら平安朝眞盛りの文學と鎌倉文學との橋掛りをなして、新しい文學の産婆役を勤めた點から云へば、無類の地位を占め無類の價値を有するものと云はれるであらう。而して其の無類の地位と價値との認められる最も主なる點の一つは、文體の方面にあるが、此の點から見て、此の物語の大いなる功績の第一は、當時の巷談を其のまゝに書いた點、即ち時人の言葉調子をそッくり書き留めた點にある。第二は、漢文を和化した點、和臭を帶びかけて來た漢文を更に和化し俗化した點にある。第三は、王朝式の純粹な和文を、思ひ切つて漢文化し時樣化した點にある。取りすべて云ふと、時代の俗樣を基本として、漢文を和文化し、和文を漢文化した點にある。尤も、此の物語の文章の漢文化、和文化、俗樣化は、凡て半熟半化の雜糅混淆式で、圓熟完成の功績を後代の文學に讓つた趣はあるが、=而して鎌倉の軍記物語は其の圓熟完成の一部と見らるべきものであるが、=しかしながら、其の半熟半化なる所が此の物語の特殊の姿で、平安朝の優美な女性的の單調な文學が、此の半熟半化の橋梁を、坩堝(るつぼ)仕掛の施されてゐるトンネルのやうな、見ッともない狹苦しい間道を通り過ぎる中に、いつの間にか、すッかり姿を變へられて、あの男性、硬性、多樣性の鎌倉

軍記が出來たかと思ふと、私は立派なものから成り下つて、まだ立派な物に成り切らぬ此の物語の片輪姿に、何とも云はれぬ愛着を感ずるのであります。

二

『今昔物語』の文章が、一面時様の寫實である事は、此の物語の何處を見ても容易に看取される事であります。漢文脈が俗化、時様化された事は、前なる『將門記』との比較對照によつて、已に明らかにされました。殘る所は、平安朝の純粹な和文の時様化、漢文化された事で、そして其處にも軍記物語の文體の萌芽が含まれて居る事でありますが、之れを證據立てる爲めに、私は「業平東下り」の一節を取つて、『伊勢物語』と『今昔物語』の巻二十四なる「在原業平中將行ニ東方ニ讀ニ和歌ニ語」とを、前と同じく二段對照式に排列して、比較して見たいと思ひます。上段が御手本になつた本元の『伊勢物語』、下段がそれを時様化し漢文化した、一面からは墮落しつゝ、他の一面に於いて新生面開拓の第一着歩をなした『今昔物語』であります。

昔男ありけり。その男、身をやうなきものに

今昔、在原業平中將と云人有けり。世の好者

思ひなして、京にはをらじ、東の方にすむべきところ求めむとて行きけり。信濃の國淺間の岳に烟の立つを見て、

信濃なる淺間のだけにたつけぶり
　をちこち人の見やはとがめぬ。

もとより友とする人、一人二人して、もろともにいきけり。道知れる人もなくてまどひ行きけり。三河の國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋と云ふことは、水ゆく川の蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋とはいへる。その澤のほとりの木陰におり居て、餉くひけり。その澤にかきつばたいと面白く咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五文字を、句の上にす

にてなむ有ける。然るに身を要無き者に思ひ成して、京には不レ居じと思ひ取て、東の方に可レ住き所や有とて行きけり。本より得意と有りける人一兩人を伴ひて、道知れる人も無くて迷ひ行きけり。而る間參河の國八橋といふ所に至りぬ。其を八橋と云ひける樣は、河の水出て蛛手也ければ、橋を八つ渡しけるに依て、八橋とは云ける也。其澤の邊に木隱の有ける。業平下り居て餉食ひけるに、小河の邊に劇草讌く榮たりけるを見て、具したりける人々の云く、劇草と云ふ五文字を句の頭毎に居ゑて、旅の心の和歌を讀めと云ひければ、業平此く讀けり。

唐衣きつゝなれにし妻しあれば

ゐて、旅の心をよめといひければ、よめる。

　唐衣きつゝなれにしつましあれば

　　　はる〴〵きぬる旅をしぞおもふ。

とよめりければ、皆人餉の上に涙おとして
ほとびにけり。ゆき〳〵て駿河の國にいたり
ぬ。宇津の山にいたりて、我が入らむとする
道はいと暗う細きに、蔦かへでの葉しげりて
物心ぼそく、すゞろなる目を見ることと思ふ
に、修行者あひたり。かゝる道にはいかでか
おはするといふに、見れば見し人なりけり。
京に、その人のもとにとて、文書きてつく。

　駿河なるうつの山邊のうつゝにも

　　　夢にも人のあはぬなりけり。

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪い

　　　はる〴〵きぬる旅をしぞおもふ。

と。人此れを聞て哀れに思て泣にけり。餉の
上に涙落ちてほとびにけり。其を立て、渺々
と行々て駿河國に至りぬ。うづの山と云山に
入らむと爲るに、我が入らむと爲る道は糸暗
し。心細き事無レ限。絡石鷄冠木繁て物哀れ
也。此くすゞろなる事を見る事と思ふ程に、
一人の修行の僧會ひたり。此れを見れば、京
にて見知たる人也けり。僧、業平を見て、奇異
に思て云く、此る道をば何で御座ぞと。業平
其下居て、京に其人の許に文を書て付く。

　駿河なるうづの山邊のうつゝにも

　　　夢にも人にあはぬなりけり。

と。其より行々き富士の山を見れば、五月の

と白う降れり。

時知らぬ山はふじのねいつとてか

かのこまだらに雪のふるらむ。

（伊勢物語）

晦日に雪糸高く降たるに白く見ゆ。其れを見て、業平此く讀けり。

時知らぬ山は富士のねいつとてか

かのこまだらに雪の降るらむ。

（今昔物語）

『今昔』の文章が『伊勢』に比べて劣つて居る事は、一見して明らかな事である。『伊勢』の簡潔が冗漫にされ、上品が下品にされ、圓い、しなやかな、通りのよい、すくやかな姿が、曲りくねつた、滞りがちな、ぎくしやくした、病的な、關節の多い姿にされ、餘計な接續詞が加へられ、美しい句調の流れをぶッきら棒に堰き止められ、餘計な返り點づきの漢文まがひにされ、俗語に直され、宛字（あてじ）を添へられた有様は、多少なりとも見識のある作家の敢てし得ぬ事の様にも思はれるが、しかしながら『今昔』の作者の眞意を忖（はか）るに、彼れは『伊勢』『源氏』の作家に拮抗すべき手腕があると思つてゐたのでもなく、又『伊勢』其の他の古典を通俗化する事が、古典を汚辱する所以だと思つたのでもなく、唯だ淡泊に、むづかしい古典を耳近くして、多數の讀者に悦びを頒かたうと考へたのであらう。そして其の

様な、手腕に誇らず、匠氣に煩はされず、文學的功名心に束縛されぬ、子供らしい態度の結果が、偶然にも、新文學、新文體の種子を蒔くことになつたのであらう。例へば、『伊勢』や『源氏』には全くない「然るに」「而る間」などいふ、野暮な無駄な接續詞は、一見古典の妙文致を臺なしにしたやうにも見えるが、それがいつの間にか恰好よく矯め直され、適所に面白く用ゐられて、鎌倉軍記に特殊なる文致を成したのを見ても、此の間の消息が解るであらうと思はれる。

三

私は次ぎに、『今昔物語』の巻二十五の中から、鎌倉の軍記を想ひ起こさせるやうな數節を抄出して見ようと思ふ。第一は「平維茂罰(うつ)ニ藤原諸任一語」の冒頭である。

今昔實方中將と云人、陸奥守に成て其の國に下たりけるを、其の人は止事無(やんごとな)き公達(きんだち)なれば、國の内の可レ然き兵共、前々の守にも不レ似ず、此の守を饗應して、夜る晝る館の宮仕怠る事無かりけり。而る間其の國に平維茂と云者有けり。

「而る間」は、前に云つた通り、斯樣な場合の接續に用ゐられた當時の常文句で、『古事記』、『日本紀』あたりにある「故(かれ)」「爾(かれ)」にあたつて居るものである。これが後に、「さる程に」と形を變へて鎌倉以後の

軍記に用ゐられることになつたのであるが、多分當時通用の俗語を使つたのであらう。同じ物語の「源頼義朝臣罸（うつ）二安倍貞任一語」の初めに、

今昔、後冷泉院の御時に、六郡の内に安倍頼良と云者有けり。其の父をば忠良となむ云ひける。父祖世〻を相繼で酋の長也けり。威勢大にして此に不レ隨者無し。其の伴類廣くして漸く衣河の外に出づ。公事を不レ勤る代〻の國司、此を制する事不二能ハ一。而る間、永承の頃、國司藤原登任と云ふ人、多の兵を發して此れを責と云へども、頼良諸の酋を以て此を防ぎ合戰ふに、國司の兵討返されて死ぬる者の多し。公此の事を聞食て、速に頼良を可二討奉一き宣旨を下されぬ。源頼義朝臣に仰て此を遣す。頼義鎮守府の將軍に任じて、太郎義家、二郎義綱、竝に多の兵を相具して、頼良を討むが爲に、既に陸奥國に下りぬ。而る間俄に天下大赦有て、頼良被レ免ぬれば、頼良大きに喜で名を頼時と改む。亦且は守の同名なる禁忌の故也。

とあつて、妙な處に常文句として頻りに用ゐられて居り、そしてそれが『平家物語』などの「さる程に」と全く同じ處に繰返されて居るところを見ると、多分當時の俗語が『今昔』等に入り、それが變じて軍記に用ゐられるやうになつたのであらうと思はれる。

同じ平維茂の條に、餘五將軍維茂が敵の諸任に夜襲されるところを、かう寫して居る。

餘五然こそは有めと思て、軍も皆返し遣て緩みて居たるに、十月の朔頃の程に、丑時許に、前に大きなる池の有るに居たる水鳥の、俄に譟しく立つ音のしければ、餘五驚て郎等共を呼て、軍の來たるにこそ有ぬれ。鳥の痛く騒ぐは。男共起きて調度負へ。馬どもに鞍置け。櫓に人登れ。など倖て、郎等一人を馬に乘せて、馳向て見て來とて遣つ。即ち返り來て云く、此の南の野に□幾許とは否不ニ見給ハ一、軍眞黑に打散て四五町許に見え候ぞと。餘五此を聞て、此許被レ壓ぬれば、今は限りなめり。然ども一切れ支て可レ戰き也と云て、軍の寄り可レ來き道々に、各四五騎許、楯を突て待懸けさす。

前々のは『今昔』が漢文和文を俗様に矯め直した點から見て、鎌倉軍記の由來を説明したのであるが、こゝに引いた一節を讀むと、平安朝文學の戰爭記述が、もう鎌倉軍記の門口まで來て居ることが解る。殊に「軍の來たるにこそ有りぬれ。鳥の痛く騒ぐは。男共起きて調度負へ、馬共に鞍置け。櫓に人登れ。」の、ボッ切れの命令詞の連發の如きは、『平家物語』の

宗盛ノ卿、あつぱれ馬や、馬は誠に善い馬で有りけり。されども餘りに惜みつるが悋さに、主が名乘を鐵燒にせよとて、仲綱といふ鐵燒をして、厩にこそ立てられけれ。客人來て、聞こえ候ふ名馬を、見候はばやと申しければ、其の仲綱めに、鞍置け、引き出せ、乘れ、打て、はれ、なん

どぞ宣ひける（卷第四、競）

や、木曾義仲の大將振を寫した「鎧取つて着、矢掻き負ひ、弓押張り、兜の緒をしめ、馬に打乘つたるには、似も似ず惡かりけり。」（卷第八、猫間）等の名文を思ひ出させる妙味がある。同じ維茂が、やうやく難を免れて後、直ちに復讐に押寄せる所を寫しては、

維茂、命惜からむ尊達來たるべからず、我れ一人は行きなむと云つて、只だ出立ちに出立つ。然れば郎等共の、後の日戰はむと定めつるも、此を聞て、極めたる理に侍り。また申すべき様無し。只だ疾く出立たせ給へと云へば、餘五出立つとて云はく、我れよも言ひ錯らじ。此奴は終夜戰ひし極じて。其々の河邊に、乃至其の岳の彼方面に、櫪原などにこそ、死たる如くにて臥したらめ。馬なども轡解いて秣飼うてぞ息ふらむ。弓なども皆□□□て緩めたらむに、千人の軍なりとも何態をかせむ。今日だに不レ爲では何を期すべきぞ。命惜からむ者は速に留まるべしと云て、我れは紺の襖に款冬の衣を着て、夏毛の行縢を履き、綾藺笠を着て、征箭三十許、上指雁胯二並指したる胡錄を負て、手太き弓の革所々卷たるを以て、打出の太刀帶びて、腹葦毛なる馬の長七寸許りにて打はへ長きが、極めたる一物の進退なるに乘つて、軍の員を計ふれば、馬の兵七十餘人、歩兵三十餘人、合はせて百餘人ぞ集まれる。此れは家近き者共の疾く聞て馳せ集まれるなる

べし。家遠き者共は未だ聞かねば遲く來るなるべし。此くて跡を尋ねつゝ、打ちに打つて追ひ行くに、彼の大君の家の前を渡るとて云ひ入れしむる樣、平維茂今夜罸被□て迯げて罷る也と。

と書いて居るが、武人の心意氣立振舞から、詞遣ひ軍裝束に至るまで、その細やかな活き〲した描寫は、もう獨立した軍記文學の出現を豫想して居るかの樣に見える。私は之れを見て、『平家物語』の卷十一、八島合戰の「大坂越」の條なる、

判官さてはよき隙ござんなれ、是れより八島へは、いか程あるぞと宣へば、二日路で候と申す。いざさらば敵の聞かぬ先に寄せんとて、馳せつ、控へつ、駈けつ、歩ませつ、阿波と讃岐の境なる、大坂越といふ山を、終夜こそ越えられけれ。其の夜の夜半許りに、立文持つたる男一人、判官に行き連れたり。

の邊りを想ひ起こさずに居られぬ。やがて、諸任が餘五の不意討に逢つて、大慌てして首を揚げられるところを寫した文句の、

餘五之れを聞て喜んで、只だ疾く打てと催して、飛ぶが如くにして行きぬ。其の岳の北南に馬を打上げて、岳の上より南の添を下樣に趣けたり。下樣なれば馬場の樣なる野を、笠懸を射る樣に音を叫んで、鞭を打つて五六十人許り押懸けたり。其の時に澤胯の四郎より始めて、軍共俄に起

き上つて此れを見て、或は胡籙を取つて負ひ、或は鎧を取つて着、或は馬に轡を□、或は倒れ迷ひ、或は調度を棄てゝ迯ぐる者も有り、或は楯を取つて戰はむとする者も有り。馬共はとよみにとよまされて走り騷げば、恬かに取つて轡を□る者も無し。然れば舍人を蹴丸ばして走る馬もあり。時の間に三四十人許りの兵を箭庭に射臥せつ。或は馬に乘つて戰はむの心も無くして、鞍を打つて迯ぐる者も有り。然て澤胯をば射取つて頸を切りつ。

のあたりは、整はぬ所はあるが、其の活き〳〵した描寫は、平家の軍が富士川の水禽に驚き騷いだ光景を寫した『平家物語』の文章の、

平家の兵共、あはや源氏の大勢の向うたるは、昨日齋藤別當が申しつるやうに、甲斐信濃の源氏等、富士の、裾より、搦手へや廻り候らん。敵何十萬騎か有るらん。取り籠められて は叶 ふまじ。爰をば落ちて、尾張河洲俣をば防げやとて、取る物も取り敢へず、我先に〳〵とぞ落ち行きける。餘りに慌て騷ぎて、弓取る者は箭を知らず、箭取る者は弓を知らず、我が馬には人乘り、人の馬には我れ乘り、繫いだる馬に騎つて馳れば、株を廻る事限りなし。

の邊に似通つた味はひをも見せて居る。同じ『今昔』の廿五巻の、源頼義が奥州征伐を記した所に、

武則遙かに王城を拜して誓を立てゝ云はく、我れ既に子弟類件を發して將軍の命に隨ふ。死なむ

事を顧みず。願はくは八幡三所我が丹誠を照らし給へ。我れ更に命を惜まずと。若干の軍此の言を聞いて、皆一時に勵心を發す。其の時に鳩軍の上に翔る。守以下悉く此を禮す。卽ち松山の道に趣いて、磐井の郡中山の大風澤に宿る。次の日其の郡の萩の馬場に至る。宗任が叔父僧良照、小松の楯を去る事五町餘也。日次不レ宜、並びに日晩たるに依て責むる事なし。武則が子共、彼の方の勢を見むが爲めに近く至る間、歩兵等楯の外の宿屋を燒く。其の時に城の內騷ぎ呼んで、石を以て此れを打つ。爰に守武則に云はく、合戰明日と思ふと云へども、自然ら事亂れにたり、日を撰むべからずと。武則亦然也と云ふ。而るに深江の是則、大伴の員秀と云ふ者、猛き者二十餘人を具して、鉞を以て岸を掘り、鉾を突いて巖に登つて、楯の下を斬壞て、城の內に亂れ入て、釼を合はせて互に打合ひぬ。城の內亂れて人皆迷ふ。……爰に守馬より下て、遙かに王城を禮して、自ら火を取て誓て、此れ神火也と云て、此を投ぐ。其の時に鳩出で來つて陣の上に翔る。守此を見て泣く〳〵此を禮す。其の時に忽に暴き風起つて、城の內の屋共一時に燒けぬ。

といふやうな文があるが、何となく『平家物語』の「木曾願書」の終りなる、

憑しき哉八幡大菩薩、眞實の志二なきをや、遙かに照覽し給ひけん、雲の中より山鳩三つ飛び來たつて、源氏の白旗の上に翩翻す。……此の人々の先祖、賴義の朝臣、奧州の夷貞任宗任を攻

め給ひし時、御方の戰弱く、凶賊の軍強くして、旣に角と見えしかば、賴義の朝臣敵の陣に向つて、是れは全く私の火に非ず、神火なりとて火を放つ。風忽ちに夷賊の方へ吹き覆ひ、厨河の城燒け落ちぬ。其の時軍敗れて貞任宗任亡びにけり。木曾殿斯様の先蹤を思ひ出でて、急ぎ馬より下り、兜を脫ぎ、手水嗽をして、今此の靈鳩を拜し給ひける、心の中こそ憑しけれ。

や、同じ物語の「先帝御入水」の條なる、

されども平家の御方には、十善帝王三種の神器を帶して、渡らせ給へば、源氏如何あらんずらんと、危う思ふところに、暫しは白雲かと覺しくて、虛空に漂ひけるが、雲にては無かりけり、主もなき白旗一旒舞ひ下つて、源氏の船の舳に、棹附の緒の、さはる程にぞ見えたりける。判官是れは八幡大菩薩の、現じ給へるにこそと悅んで、兜を脫ぎ、手水嗽して、これを拜し奉り給ふ。

のあたりを思ひ起こさせる所がある。おもふに『平家』の作者は、內容、興味、趣向の點に於いてのみならず、文體に於いても、『今昔』の此のあたりに負ふ所があつたので、『今昔』のぎごちないのを柔らげ、單調なるに變化をつけ、乾燥なるに花を添へて、達意程度の無趣味なる文章を、立派な藝術品に磨き上げたのであらう。そして平安朝眞盛りの文學から＝和文としても、漢文としても＝墮落した成下り文章に、新らしい時代精神の「活」を入れて、新時代の代表文學に成上らせたのであらう。「判官兜

を脱ぎ、手水嗽してこれを拜し奉り給ふ」の如きは、まさしく「守以下悉く之れを禮す」を采げて、曲折を添へたもので、奧州征伐記の一章の如きは、『今昔』が前の『將門記』を承けて、後の鎌倉の軍記を産み出だした消息を、最も面白く具體的に物語つて居るものである。

第四　新文學の發生＝平治物語

一

文學は時代思想の現はれたもので、多くの場合に於いては、時代の中心思想を最もよく現はしたものが、其の時代の中心の文學と稱せられる。これを我が軍記文學の發達について見ると、上代に於いては、靫負ひ太刀帶く武人の階級が、多くの伴緒の唯だ一部を成してゐただけで、從つて戰爭や武人の生活も、唯だ國民の生活現象の或る一部を形づくるに過ぎなかつた。斯樣な時代に書かれた戰爭の記事が、當時の文獻の一部に介在するのみで、獨立した大きな存在を見せなかつたのは當然の事である。平安朝は公卿の世界、大宮人の世界、感情本位、文藝本位の世界で、平和の風の隅から隅まで吹きわたつた時代である。武人が極端に輕蔑されて、彼等が折角の勇氣と技術とが、公卿の護衛と山立

追剝の追捕とに用ゐられた時代である。『將門記』によると、將門を降伏するため、軍兵よりは祈禱に依賴して、一七日に七斛有餘の芥子を燒いたといふ世である。武人の生活が時流の文學に顧みられなかつたのは當然の事であらう。而して偶〻場末の東國西海に起こつた凶徒鎭撫の軍沙汰が、或ひは旬はづれの奇怪な文章で書かれ、或ひは奇聞珍話を蒐集した雜書の片隅に辛うじて拾ひ取られたのも、當然の事であらう。けれども保元平治以來の日本は全く其の趣を異にした。公卿の世は武家の世となつた。藤原氏の世は源平二氏の世となつた。甲胄物の具の武士が社會の表舞臺を濶步して、束帶牙笏の公卿殿上人を頤で使ふ世となつた。武藝戰爭の勇壯なる事實が世間の視聽を集めて、公家の平和な年中行事が忘れられる世となつた。言ひかへれば、保元平治の亂につゞいた源平鎌倉の時代は、天下の武人に歸したる世、戰爭や武人の生活が最高最大の意義を附與されたる世、公卿其の他の平和生活が、武人の生活に附隨して辛うじて存在を認められたる世である。かういふ世に武人本位、戰爭本位の文學の現はれるのは當然の事であるが、平安朝の文學が、唯だ公卿殿上人の平和な生活のみを寫して、單調な、倦怠を催させるものとなつたのとは違ひ、鎌倉の軍記文學が、源平の武人の生活や戰爭のみを寫さずして、同時に公卿殿上人の優美な生活をも寫し、しかも武人の生活を本位とし、公卿生活を之れに從屬させて、變化ある統一の美を見せたのは、一段の手柄と云ふべきであらう。

二

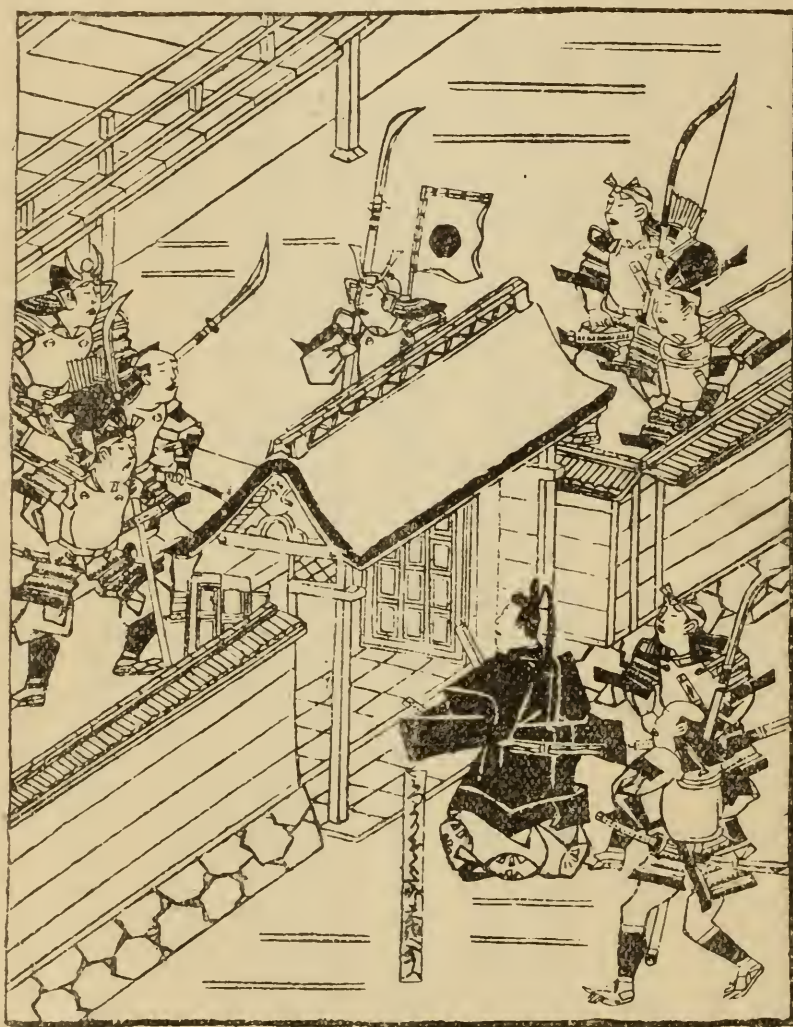
かくして武人の世が現はれた。同時に之れを現はすべき新しい文體が、新時代の選まれたる文人＝葉室大納言時長、信濃前司行長等＝の頭の中に芽を吹いて、寫すべき事あれかしと待ち受けた。王朝の最盛期に於いて時人に顧みられなかつた武人の生活が、保元平治の直後、六十餘州一ぱいに羽を伸して天下の視聽を集めた趣は、丁度眞盛りの王朝文學に顧みられずして、劣等な文書の片隅に潜み隱れた戰爭記事の非時代的文體が、鎌倉時代に入つて繚亂と花咲いたのに似てゐたであらう。かくして彼れの内容と是れの形式と、彼れの生活と是れの文章と、現はさるゝものと現はすものとの、此の相應はしいもの同志が相呼應して、爰に新時代の中心を成す三種の文學が現はれた。『保元物語』『平治物語』及び『平家物語』がそれである。その中で『平家』は、その筆致の曲折に富んでゐる點、情味の饒かなる點、時代を最もよく現はしたる點、武人を中心として、其の悲喜兩面を大きく美しく寫すと同時に、諸種の從屬美を兼ね備へて之れを統一したる點等に於いて、第一と稱せらるべきものである。

第五　光賴卿參內

一

鎌倉文學に於ける軍記出現の順序は、普通に、まづ『保元物語』が出で、次いで『平治物語』が出で、最後に『平家物語』が出來たと云はれる。その中『保元物語』に就いては、已に發端なる鎮西八郎爲朝獻策の條の說明によつて、凡その味はひを髣髴し得たと思ふので、私は次ぎに、『平治物語』の一二章を引いて、評釋を試みようと思ふ。『平治』に於いて最も見るべき所は、戰前なる「光賴卿參內」の條と「待賢門の軍」との二つであらう。まづ前者を揭げて見る。

さる程に內裏には、同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光賴ノ卿、此の程は信賴ノ卿の擧動過分なりとて、不參にておはしましけるが、參內して承らんとて、殊に鮮かに束帶引き繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに帶き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雜色の裝束に出で立たせ、自然の事もあら

元祿版　繪本平治物語

ば人手にかくな、汝が手にかけて、光頼が首をば急ぎ取れとて、御身近く置き、其の外清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張りて、所々門々を堅く守護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵共も大きに恐れ奉り、弓を平め矢をそばめて通し奉る。

紫震殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上臈達皆下にぞつかれたる。光頼卿、こは不思議の事かな、人はいかに振舞ふとも、彼れは右衛門督、我れは左衛門督なれば、下には着くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ、よにしどけなう見え候へと色代して、閑々と歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は、信頼卿の爲めには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻引き直し、衣紋つくろひ笏取り直し氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候ふ。召しに參ぜざらん者をば、死罪に行はるべ

しとやらん承つて、參內する所なり。抑〻何事の御諚ぞと問ひけれども、信頼卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。

程經て光頼卿つい立ちて、惡しう參つて候ひけりとて、閑々と歩み出でられけり。庭上に充ち滿ちたる兵共、これを見奉りて、あはれ此の殿は大剛の人かな。去る十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人、一人もおはしまさざりつるに、仕出だしたる事よ、門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれ此の人を大將として合戰せば、いかばかりか憑もしからんと申せば、傍らなる者の、昔頼光頼信とて、源氏の名將おはしましき。其の頼光を打ち返して、光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかしといへば、また傍らより、など其の頼信を打ち返して、信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞといへば、壁に耳天に口といふ事あり、怖ろし〳〵、聞かじと云ひながら、皆忍び笑ひに咲ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の

板、高らかに踏み鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん光頼も、死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、其の人皆當時の有職、然るべき人共なり。其の內に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衞門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實撿の爲めに、神樂岡へ向はれける事は如何。以ての外然るべからざる擧動かな。近衞大將、撿非違使別當は、他に異なる重職なり。其の職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふ事、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大きに恥辱なり。就中首實撿は甚だ穩便ならずと宣へば、別當それは天氣にて候ひしかばとて赤面せられけり。光頼卿重ねて、こは如何に、勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺內大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふ事は皆是れ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今

に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はん事口惜しかるべし。大貳淸盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉紀伊國、伊賀伊勢の家人等待ち受けて、大勢にてあなる。信賴卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押し寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若し又火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎きなるべし。如何に況んや君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事王道の滅亡、此の時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合はするとこそ聞こゆれ、相構へて相構へて、隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上はいづくにおはしますぞ。黑戸御所に。上皇は。一本御書所に。內侍所は。溫明殿に。劍璽は何處に。夜の御殿にと、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞと宣へば、それには右衛門督住み候へば、其の方樣の女房などぞ、かげろひ候ふらんと申されければ、光賴卿聞きもあへず、世の中は

今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷しまゐらせたり。末代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は、王法をいかゞ守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、我が朝には未だ斯くの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かなとて、のろのろしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よに冷まじげにて立たれたれども、且つは悲しくて、我れ如何なる宿業によつて、斯かる世に生れ合ひ、憂き事をのみ見聞くらん、昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れとて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着せられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。

二

語釋 さる程に。その中に、といふ程の意、前代の『今昔』などに見えた「しかる間」より轉じ、此の時代の軍記に用

ゐ始められて、かういふ種類の文學のつなぎに用ゐられる常文句となつたもの。○公卿僉議。公卿達の評議。僉は皆、衆の意で、僉議は多人數寄合ひ相談する事。○光賴卿。後にある如く、勸修寺內大臣高藤八代の孫にして、權中納言顯賴の長子、別當惟方の兄である。後權大納言に轉じ、正二位に進み、長寬二年致仕して剃髮し、名を光然と改めて桂の里に住んだ。承安三年五十歳にて薨去。○束帶。公卿の禮裝。今、世間では「衣冠（いくわん）」とごツちやにして、衣冠、束帶を同時に着せるといふ珍らしい藝當をさせる人があり、折々は然るべき人で、井伊大老が衣冠束帶を着たとか、福井市の或る寺にある柴田勝家の木像が、衣冠束帶を着てゐるとか云つて居るのもあるが、衣冠は束帶とは違つた略裝で、二つを同時に裝ひ得るものではない。後に出て來る「蒔繪の細太刀」、「下襲の尻」、「笏」などは皆束帶にのみ附いたもので衣冠の折には用ゐぬものである。二三の相違點を擧げると、束帶には「蒔繪の細太刀」を帶くが、衣冠には「野太刀」を帶く。束帶の時は「笏」を持つが、衣冠には「檜扇（ひあふぎ）」を持つ。束帶には「表袴（おもてはかま）」といふ、ヅボンのやうに裾の平らに切れた袴を着るが、衣冠には「指貫（さしぬき）」といふ、端を結はへて其の上のたるんだ袴を用ゐる。束帶には石帶、平緒をつけるが、衣冠には腰帶をつける。「下襲の尻」は束帶にあつて衣冠にはない。此の一章は光賴卿が束帶を着たものとして、首尾立派に調つて居るのである。○乳母子（めのとご）。「めのと」については、已に前の八頁『保元物語』の條に說明してある。「めのとご」はめのとの子、「傅子」とも書き、目下の育て親の子で、乳兄弟（ちきやうだい）のこと。○腹卷。背割具足（せわりぐそく）ともいふ。胴をば脊で合はせるやうに造つた一種の鎧で、輕便なところから、着物の下に着る隱し鎧として用ゐられる。○雜色。雜役に服する者。○自然の事もあらば。事の進む中には、自然どんな事があるかも

知れぬといふ意味から來たので、「萬一の事もあらば」といふ事。〇大軍、陣を張りて。「陣を張る」は物々しく竝んで威勢を見せてゐたといふこと。せい〴〵何百人程度の兵士が固めてゐたのであらうが、誇張して大軍と云つたのである。〇信頼卿一座して云々。官位の低い信頼が上席の第一座について、信頼以上の官位の人達が、皆その下座に竝んでゐたといふ事。〇あれは右衛門督云々。我が國の習はし、左を上とするからである。〇末座の宰相にておはしけるに。宰相は參議の事。八座七辨と云つて、參議は八人あることになつて居る。此の長方卿はその八人の中の末席で、一番末座の手近な所に居たので、それに話しかけたといふことであらう。〇しどけなく。だらしなく。〇色代。挨拶。お辭儀をする時に、一寸顏色をかへる所からいふ。挨拶の笑顏をしたといふこと。〇むずと。無造作に、ドカリと。〇右の袖の上に居懸けられて。よい加減の距離に竝んだ所を、上座の方に割り込んだので、袖の上に乘りかゝつたといふこと、そして非禮を詰られた上に、此の威壓を加へられたので、面を上げることも出來なくなつたといふこと。〇下襲の尻。前に云つた束帶の裝束に附きもので、下重ねの後（うしろ）の裾を長く垂らして曳いたもの。この尻、初めには一尺位曳くのが普通であつたが、段々長きを競つて、大臣などは一丈二尺位まで曳くやうになつた。別當公曉が大銀杏のかげで、鎌倉右大臣の將軍實朝を斬つた時は、實朝が下重ねの長い尻を曳いてゐたが、公曉はそれを踏まへて刀を揮つたので、大層よく斬れたといふことである。〇笏取り直し。笏の本當の音はコツだが、骨と通ふので緣起が惡いとてシャクと讀むやうになつたといふ。また此の時、信頼が光頼を害さうとしたが、此の笏が光を放つのに妨げられて害し得なかつたので、「光笏」と呼ばれ、葉室家の重寶になつたといふことである。〇氣色して。

顏色を正し、改まつて。○今日は衞府督が一座する。今日の御僉議には、不思議にも身分の高からぬ右衞門督信賴が、第一位の上座を占めて居ると見えまするな、といふ皮肉の挨拶。○つい立ちて。つッと、俄に立つ事、ガバと立つといふに同じ、『平家物語』の二の卷、流布本に「內府、つい立つて、中門に出で、侍共に宣ひけるは」とある所を、長門本には「がばと立ち給ふ」と書いてある。○惡しう參つて候ひけり。わるい所へ來た、出まじき幕へ出て御氣の毒したといふ皮肉。こゝを『大日本史』には、「光賴囘視曰、臆朝參謬。乃徐徐而起。」と書いてある。「參內したのは間違であつた」「こんな事なら、來るのではなかつた」といふ意味に取つたのであらうが、さういふ事ではあるまい。やはり「自分が來なければ、無事に僉議が運んだであらうに、出まじき席に出て、氣の毒な事をした。」といふ皮肉の味であらう。○仕出だしたる事よ。「うまくやッたわい!」、「出來したぢやないか!」といふ感投句。文路を斷ち切り、わざと挿入して味を見せたので、 interrupting interjection ともいふべき一種の修辭。○賴光賴信。共に多田滿仲の子、賴光は兄、賴信は弟。○壁に耳天に口といふ事あり……忍び笑ひに咲ひけり。「叱ッ! 壁に耳あり、天に口ありといふ諺があるではないか。その惡口を、若し誰れかが聞いてゐて、告口したら何とする。おゝ怖や怖や。私は聞かぬ、此の陰口の仲間には入らぬぞよ。」といひつゝ、人目を忍んで、くす〱笑ひに嘲り笑つたといふこと。皮肉の味のよく利いた名文である。○かやうに振舞ひ給へども急ぎても出でられず。皮肉を浴せ、勇氣を見せて颯爽と起たれたが、起つた後は急ぎもせず、悠々と落ちついて出られたといふこと。○殿上の小蔀。見參の板。荒海の障子。萩の戶。黑戶の御所。一本の御書所。溫明殿。夜の御殿。朝餉。櫛形。この一章の中に現はれた

内裏所屬の名どころ—おもに淸凉殿に屬するものであるが—を、便宜の爲め、一緒に束ねて解釋すると、「夜御殿」は淸凉殿の中央、晝御座の北なる北寄りの一室、主上の夜御寢みになるところで、同時に三種の神器の中、劍と勾玉とを安置する所である。「萩の戶」は同じく淸凉殿、夜御殿の北隣、弘徽殿上御局と藤壺上御局との間なる一室。庭前に小萩を植ゑたところから名づけたので、障子にも萩を畫いてある。巨勢金岡が畫いた馬形障子の馬が、夜な夜なぬけ出でて萩の戶の萩を食つたといふ傳說のあるのがこれである。但し大昔は弘徽殿上御局、藤壺上御局をも含めて「萩の戶」と云つたといふとで、此の章に、光賴卿が見參の板の所から見通しにして、「萩の戶のほとりに、弟の別當惟方のおはしましけるを」と書いてあるところを見ると、弘徽殿の上御局を含めたのであらう、「朝餉」は「朝餉の間」ともいひ、「夜御殿」の西の室、主上が女房に給仕させて略式の御膳を召上がるところ、本式の御食事は「大床子の御膳」といひ、晝の御座で、殿上人の御給仕で召食がる事になつてゐる。殿上の小蔀の「殿上」は、「殿上の間」ともいひ、淸凉殿の南の廂の間、晝御座の南の一室で、昇殿を許された公卿殿上人の伺候する所、此所に伺候することを許されたるを殿上人、雲の上人、或ひは雲客などいひ、許されざる者を地下人とは云つたのである。此の殿上の間の東の突當りを「上の戶」といふ。それから晝御座の東南の隅に「石灰壇」といふのがある。床を石灰でたたき上げた所で、これを大地になぞらへ、主上が每朝御身を淸め、爰に畏らせられて、伊勢大神宮を遙拜し玉ふ所である。此の石灰の壇の南、卽ち殿上の間の東の隅に小窓を明けて格子を懸けた所がある。これが「殿上の小蔀」と云つて、主上がこゝから殿上の間に居る侍臣等の樣子を御覽じた所だといふ。見參の板は、この小蔀の前の板敷

に、わざと釘を打たずして、踏めば鳴るやうにしたのがある、それをいふので、また「鳴板」とも云つた。今の謂はゆる「鶯張り」である。殿上人等が昇殿する時に、それを踏むと、ギイツ！　と音がする、其の鳴る音を聞いて、主上が心設けを遊ばす爲めの設けである。「荒海の障子」は清涼殿の東の廂の間の北端、萩の戸の前（廣い意味の萩の戸で、狹い意味では弘徽殿の上御局の前）なる布の障子で、荒海の巖の上に手長足長の怪物の居る所を畫いたもの。「櫛形」は委しくは「櫛形の窓」といひ、晝御座の南の壁と鬼の間の南の壁との間に、柱を挾み兩室にかけて、窓を明けたので、櫛の形をしてゐる所から、「櫛形の窓」とは云つた。女房などが殿上の間をのぞき見る所であつたといふ。「黑戸の御所」は、清涼殿より弘徽殿に通ふ北の廊で、又「黑戸の廊」ともいふ。光孝天皇が帝位に卽かせられて後、たゞ人として貧しい生活を營ませられた昔を忘れじとて、親ら御釜を燒かせられたが、其の煙に煤けた所から、黑戸とは名づけられたと、『徒然草』に書いてある。「一本御書所」は太政官廳の釜所の西の南、侍從所の南にある。普通世に行はるゝ書籍一本を別に寫して、天皇に奉つたのを納めておく所であるが故に名づけた。卽ちここは、今の詞でいふと、上皇を圖書館に幽閉し奉つたといふやうな意味である。「溫明殿」は紫宸殿の東北に位し、綾綺殿の東、宜陽門の內にあり、別殿ともいふ。神鏡卽ち內侍所を奉安する所である。〇承り定めたる事もなし。別に是れと定まつた議事のあるわけでもない。實否は知らぬが、光賴も死罪に行はるべき多人數の中の一人であると云ふといふこと。「あなる」は「あんなる」「あるなる」卽ち「あるといふ」の意。〇當時の有職。本來有識と書くべきで、物識りの意であるが、普通朝廷の禮式典故に通ずる人をいふ。こゝは「物識りの立派な人物」といふ程の意であ

らう。「當時」は、昔の或る時代を指して「其の頃」といふ意味に使ふのが普通であるが、此處では今日、現時といふ意味に使つてある。卽ち今日切つての人物といふ事。○少納言入道。藤原通憲卽ち信西法師の事。博識多能で、後白河上皇の殊寵を蒙つたが、信頼が大臣大將の望みを阻止したる爲め、信頼の怨みを買ひ、此の亂が起こる早々、首きられて極刑に處せられた。○近衞大將、撿非違使別當は他に異なる重職なり。近衞大將は天子を護衞し奉るを任とし、武官の棟梁で、三公の兼帶すべき職である。撿非違使別當は撿非違使廳の長官で、非違を糺し邪惡の跋扈を止むるを任とする者、唐名を大理卿といふ。こゝは惟方が撿非違使別當なるが故に云つたので、近衞大將は立言を重くする爲めの添へ詞。撿非違使別當が如何に重く視られたかは、北畠親房の『職原抄』に、此の別當について、「參議已上尤擇ニ其人一也。……世俗說、補ニ大理一之人、可レ備ニ七德一。所レ謂譜第、器量、才幹、有職、近習、容儀、富有。」など云つて居るのを見ても解る。○穩便。おだやか。○天氣。晴雨の天候の時はテケ或ひはテイケとも讀むが、こゝは陛下の思召の意で、テンキと讀む。○こはいかゞ勅諚なればとて。これはけしからぬこと、いかに陛下の仰せなればとて、若し御無理と思はゞ、信じて居る存寄は一通り申上ぐべきではないか。○曩祖、遠祖。勸修寺內大臣高藤は勸修寺家の祖、三條右大臣定方は高藤の子、共に醍醐天皇に仕へた賢相。○させる英雄には云々。家格のさまで尊い英雄家ではないがといふ事。昔は立身の極、攝政關白になり得る家柄を稱して攝家と云つた。それは近衞、九條、二條、一條、鷹司の、謂はゆる五攝家である。「英雄家」は淸華とも、花族ともいひ、立身の極、三公（太政大臣、左右大臣）に任ぜらるべき家筋で、源氏の久我、藤原氏の三條、西園寺、德大寺等の諸家がそれであつ

た。○さしもどかるゝ。「さし」は接頭の添言葉。「もどく」は抗言逆語することで、卽ち惡口を言はれること。○君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡此の時にあるべし。「君臣」の「臣」はホンの御附合に添へられたので、專ら「君」の事を指したのであらう。丁度「一旦緩急あれば」といふ場合に、「緩」の字が御附合に添へられるやうに。「自然云々」は人事の開展進捗する間に、どのやうな間違が起こらぬとも限らぬといふ所から來たので、萬一の間違といふ事。○王道の滅亡。君の御一身に間違でもあれば、それこそ萬世一系の國王上にいまして天下を統べさせられる、我が國特有の國體が滅茶々々になるではないかといふ意。○大小事を申し合はする。大事小事すべてについて相談する。○相構へて。カンマヘテ、愼重な態度を取つて、輕擧妄動するとなく、といふ意。○其方様(そのかたざま)の女房などぞかげろひ候ふらん。信頼について居る女房などの姿が、楕形の穴からちらついて見えるのでありませう。「かげろひ」は「かげり」の延びたので、陰、影を見せると。○世の中は今はかくこざんなれ。「世の中はかくこそあるなれ」で、もう世の中もこれ迄かといふ意。○王法。わうばふと讀む、我が國體のこと。王者の布く法令をもいひ、天下に王たるの道をもいふが、普通は「佛法」に對していふので、靈界の宗教道に對する國王の施す世間的政治の事。但しこゝでは前の「王道」と同じく、一系の帝王、天日の如く、上にいまして天下を統べさせらるる國體の意であらう。○のろ〳〵しげ。罵(のろ)はし氣(げ)に。○且つは悲しくて。文脈の續きが、惟方の事のやうに聞こえるけれども、此處からは光頼卿の事である。光頼卿は前には昂奮して憚る所なく罵詈されたが、同時に一方に於いては悲しさに堪へずして、といふ意。○宿業。前世から持越しの罪業。「宿」は一晩泊つたといふ意、昨日磨(す)つた墨

汁を「宿墨」といひ、昨日飲んだ酒の醉の殘つたのを「宿醉」といふ類である。〇昔の許由。許由は支那の太古、堯帝の時の人で、名高い隱者的聖人。堯帝が呼び寄せて、天下を讓る相談をされると、許由は穢らはしい事を聞いたと云つて、潁川といふ川へ行つて耳を洗つて居た。すると、其の川下に同じ樣な隱者聖人の巢父といふ人が、牛を牽いて來て水を飲ませようとしたが、許由が耳を洗つた謂はれを聞いて、汚れた水を可愛ゆい牛には飲まされぬと云つて、さツさと牽いて去つたといふ傳說がある。それを踏まへたのである。〇上の衣。袍とも書き、また音讀して「ハウ」ともいふ。束帶の時に用ゐる表衣。

三

『平治物語』に於ける二つの最も主なる見どころは、この「光頼卿參內」と「待賢門の軍」との二章である。その中、實戰の光景の巧みに力強く寫されたのは「待賢門の軍」であるが、意義趣味の深さに於いては、むしろ此の「光頼卿參內」を推すべきであらう。謂はゆる深き意味の第一は時代推移の轉機を、巧みに、自然に暗示して居る事である。實權が公卿より武人へ、藤原氏より源平兩氏へ、笏より劍へ、束帶衣冠より甲冑物の具へ移らうとする機勢を、暗々の裡に、面白く意味深く見せて居る事である。考へて御覧なさい。平安朝の藤原氏は、選まれたる階級の月卿雲客たる事を誇りとし、平和の社

會に翩翻する享樂見たる事を誇りとし、干戈武勇の事柄をば、其の爪牙たる源平の侍共に打ち任せて、自らは手を觸れぬ事を誇りとしてゐたではありませんか。『保元物語』で、左府頼長が流矢にあたり、末期に臨んで、父の入道忠實に見參を乞うた時に、忠實が、「思うても見よ、氏の長者たる程の者の兵仗の先にかゝることやある。」と云つて、藤原氏の嫡々が負傷したといふ事を理由として、父子の對面を拒んで居るではありませんか。信頼は其の藤原氏の家筋のおもなる一派で、彼れは平和社會の寵兒相應に、武術に疎くして權謀に巧みに、後白河上皇の殊寵にすがつて大臣大將の榮職を得ようとしたが、それが同族中の武人らしくして最も公卿らしからざる「大力の剛の人」、光頼卿の威力に挫かれて伏目になり、滿座の公卿も一言の返答さへ出來ぬといふのは、もう天下が實力本位の世界になりつゝある事を暗示して居るのでありませんか。藤原氏同族の間ですら、人物の位附、勝敗の目安が、この通り違つて來ました。藤原氏對源平兩氏の關係が更に變はつて來た事は、いふ迄もありません。信頼は上皇に對する平和運動の不成功を知ると、まづ平清盛に秋波を送り、次ぎに源義朝を抱き込んで其の志を成さうとしました。これは取りも直さず平和社會の權力者が、武人の武力に對して白旗を立て始めたのでありませう。彼れが實戰の始まると共に、義朝に無力を看破られて愛想をつかされ、八瀬の松原から鞭うち返されて、軈て首を刎ねらるべく、平家の軍門

に入つたのは、當然の歸結と云はねばなりません。私は、この「光賴卿參內」の一篇が、中心勢力の武門に移る機微を、極めて自然に面白く顯はして居ると思ふので、其處に此の文章の特別なる味はひを見出だして居るのであります。

第二に、私が此の一篇に深き味はひを感じて居るのは、人物描寫の活き〳〵して自然に出來てゐることであります。光賴卿について云へば、其の落ちついた決死の支度振から、傍若無人の信賴を睥睨して威壓的に堂々と詰責するところ、皮肉の一言を殘してしづ〳〵と歩み出で、賴もしげに仰ぎ見る兵共の間を鷹揚に過ぎ行くところ、弟の別當惟方を招いで懇ろに訓戒する所を通して、最後に上皇、主上の御不運を歎き、王法の沈淪を悲しんで、袍の袖をしとゞに濡らしつゝ退出する所まで、其の變り方、續き方、轉じ方が、いかにも自然に力強く寫されて、光賴其の人を、目の前に見る樣ではありませんか。又これを他の方面から見ると、信賴の色を失つた趣、兵どもが光賴を崇め信賴を嗤ふ話から、惟方の恐懼する有樣に至る迄、實に無理なく面白く書けて居るではありませんか。

第三に、私が興味を感ずるのは、同じく人物描寫に關した事ではあるが、「候」といふ助動詞の、いかにも面白く自然に使はれてゐる事である。此の事については、まだ先輩の說を見たことがないけれども、軍記物語などを讀み味はへるには、非常に大切な一事であると思ふので、間違つてゐるかも知

れないが、簡單に御話したいと思ふ。本來「候」（ソオロオ）は、「侍ふ」（サブラフ）から來たので、貴人の左右に侍るといふ意味の動詞が、轉じて「ナリ」「デアル」といふ意味の助動詞として使はれるやうになつたのである。その爲めであらう、「候」は、初めは目上に對する敬語としてのみ、後世ならば「御座りまする」といふ場合にのみ用ゐられたので、後世の手紙などに於けるが如く、目上目下に通じて使はれたものではなかつた。『保元』、『平治』、『平家』、『盛衰記』の如き、此の消息を知らずに讀んでは、談話の掛引、氣合の呼吸の一半を取逃がしてしまふであらう。此の章について見ると、光頼卿は乳母子の桂右馬允範能に向つて、

自然の事もあらば人手にかくな、汝が手に懸けて、光頼が首をば急ぎ取れ。

と命じて居る。目下の家來に命ずるのだから、敬語の「候」を附けないのである。もし「候」を附けたならば、其の頃の人には、「人手にかけて下さるな」、「急いで首を取つて下さい」といふ味はひに聞こえたであらう。次ぎに、光頼卿は左大辨宰相長方卿に向つて、

「今日の御座席こそ、よにしどけなう見え候へ。」

と云つたと書いてある。これは「しどけなく見えまするな」といふので、長方卿をほゞ同僚の貴族と見て敬語を用ゐたのである。「今日は衛府督が一座すると見えて候」、「惡しう參つて候ひけり」は、先輩

も同輩も、目下も居る一座を、一團體と見て敬語を用ゐたのであらう。

下つて弟の別當惟方との問答に於いて、兄の光頼卿については、

「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん光頼も、死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、其の人皆當時の有職、然るべき人共なり、其の中に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衛門ノ督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢のために、神樂岡へ向はれける事は如何。以ての外然るべからざる擧動(ふるまひ)かな。近衞大將、撿非違使ノ別當は、他に異なる重職なり。其の職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふ事、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大きに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならずと宣へば、」

と云つたと書き、而して弟の惟方については、

「それは天氣にて候ひしかばとて、赤面せられけり。」

と書いてある。卽ち、弟の別當惟方の返事は、「それは陛下の思召で御座いましたから」といふ味はひなので、それが若し兄の弟に對する詞ならば、「天氣なりしかば」と云つたのであらう。又初めの光頼卿の詞も、もし弟の兄に對するものであつたならば、「承り定めたる事も候はず……然るべき人共にて候……甚だ面目に候べし……」と書いた所であらう。

又しばらく光頼卿の詞がつゞいて、末に、

「また朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」

とあつて、次ぎに弟の惟方が答として、

「それには右衛門督住み候へば、其方様の女房などぞ、かげろひ候ふらん。」

と書いてある。そして又、これにつゞく光頼卿の詞としては、

「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸ノ御所に遷しまゐらせたり。」

と、すツかり「候」なしの「なり」、「たり」で行つて居る。鎌倉時代頃の時文に於ける「候」の使ひ分けが頗る嚴重で、――無論それは、當時の人には不用意の間に自然に出來たのであるが、――此の一語の使ひ分けによつて、或ひは尊仰し、或ひは愛撫し、或ひは敬重し、輕侮し、威壓し、恐懼する心の影の、微妙に現はされた事が、これでもわかるであらう。五月蠅い話のやうであるが、これを心の隅にひそめておいて、軍記翫味の一助にして戴きたいと思ひます。

四

第四には、部分的の事ながら、此の一章の中で、たまらなく面白い文章美は、

さて主上は何處(いづく)におはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は。一本ノ御書所に。内侍所は。溫明殿に。劍璽は何處(いづこ)に。夜の御殿に。と、左衛門ノ督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞと宣へば、それには右衛門ノ督住み候へば、其方樣の女房などぞ、かげろひ候ふらんと申されければ、光頼ノ卿聞きもあへず、今はかくござんなれ。

云々の一節である。もう胡亂(うろ)記憶(おぼえ)になつて居るが、蜀山人の『一話一言』の中に、此の一鎖の文章を激賞して、『左傳』『史記』あたりの名文にも劣らないと云つてあつたやうに思ふ。蜀山人の褒めちぎつた謂はれはよくわからぬが、私は、こゝをば、多くの軍記にもめつたにない名文だと思つてゐる。何の爲めであるか。

第一は主格ぬきなる芝居がかりの趣、言ひ換へれば、前には應答する二人の詞だけを竝べて、後にそれを二人の名で束ね括つた趣である。これが若し劇文學の出來た後の文章、例へば謠曲、狂言、乃至歌舞伎の臺帳などが出來た後の文章ならば、或ひは人物の名を、詞の上に小書(こがき)する事により、或ひ

は別行の法などによつて、

光頼「さて主上は何處におはしますぞ？

惟方「黒戸の御所に。

光「上皇は？

惟「一本の御書所に。

光「內侍所は？

惟「溫明殿に。

光「劍璽はいづくに？

惟「夜の御殿に。……

と書く事に、何等の不思議もないのであるが、さういふ技巧の更に無かつた時代に於いて、四對(しつゐ)の問答の、先づ詞だけを竝べ、そして後に之れを一束ねにして、主格をつけて寫したのは、實に破天荒の妙味であると云はねばならぬ。之れを圖式化すれば、かうなるので、

抑主上は何處におはしますぞ？……黒戸の御所に。
上皇は？……………………一本の御書所に。
内侍所は？…………………溫明殿に。
劒璽は何處に？……………夜の御殿に。
と、左衞門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

束ね方、切り方、離し方の妙味は、實に言語道斷といふべきであらう。又一つ面白いのは、問ふ事柄の順序立てで、初めに當代主上の御行方を問ひ、次ぎに先帝上皇の御身の上を尋ね、第三に三種の神器の中の内侍所について尋ね、最後に劒璽について尋ねたのも、うるさい說明は省くが、實に自然で無理のない順序と云はねばならぬ。もう一つ面白いのは、詞の詳略の交互した趣で、最初には、

「主上はいづくに御座しますぞ。」

と十分備はつた文章にして尋ね、第二、第三の

「上皇は？

「内侍所は？

は、テニヲハづきの主格だけにして、矢繼早に、かさに懸かつて連ね問ひ、最後にはまた落ちついて、第二、第三よりは精しく、但し第一よりは略して、

「劒璽はいづくに？

と問はせたあたり、秩序があり、統一があり、對偶があり、變化があつて、實に何とも云はれぬ妙味である。

もう一つは、「又朝餉」以下への連絡の味であるが、初めに、

主上はいづくに御座しますぞ？　黒戸の御所に、

上皇は？　一本御書所に。

內侍所は？　溫明殿に。

劒璽は何處に？　夜の御殿に。

と、ポツ〱と小刻(きざ)みに刻んだ後に、今度はすツかり調子を變へて、ゆツくりと引きつゞけ、

又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞと宣へば、それには右衛門督住み候へば、其の方樣の女房などぞかげろひ候ふらんと申されければ、

と、繫ぎ詞（「と宣へば」、「と申されければ」）をも入れて、伸び〱と寫した趣、譬へば谿流が岩石峨

峨たる峡谷の間を、右に左に突き當たり突き當たり下つて來て、後には田畑の廣々とつゞく平野を、靜かに落ちついて流れるのにも比すべきであらう。かやうな次第で、私は、昔を愛する僻目かも知れぬが、此の一章の中の、特に此の部分をば、軍記文學中の最も秀でたる文章の一節として、常に愛賞して居るのである。

此の一章のおもなる部分について、左に拙い現代語譯を試みる。

其の中に、宮中で公卿達の會議が催された。勸修寺左衞門ノ督光頼卿は、信頼卿が昨今の出過ぎた振舞を心外に思つて、わざと參内を差控へて居られたが、今日は一つ、參内して評議を承るであらうと云つて、特に鮮かに束帶の禮服を引きつくろはれ、蒔繪の細太刀を尋常に帶し、乳兄弟なる桂ノ右馬ノ允範能に、衣の下に隱し鎧を着せて、上は賤しい雜色の裝束をさせ、「萬一の事があらば他人手には掛けまいぞ。必ず汝の手にかけて、急いで光頼が首を取れ。」と固く命じて、身近におき、其の他にも、さツぱりと出立つた雜色四五人を召連れて、信頼一味の大軍が、いかめしく陣を構へて、所々の御門々々を固めて居るのに目もくれず、高らかに先を追はせて入られると、兵共も大きに恐れ入り、弓をひらめて、矢を伏せて、事なく通しまゐらせた。

扨光頼卿は紫宸殿の後を通り、殿上の間を廻つて見られると、信頼卿が第一座を占めて、上位の公卿達が、皆信頼卿の下座について居る。光頼卿、「これは怪しからぬ、他はどんな眞似をするとも、彼れは右衛門ノ督、自分は上位の左衛門ノ督である。下座についてなるものか。」と思はれたが、と見ると、左大辨の參議長方卿が、末席の參議で手近の處に居られるので「今日の御席順はいかにもだらしなく見えまするな。」と云つて、一寸挨拶し、閑々と歩み入つて、無雜作に信頼卿の上座に着かれた。光頼卿は信頼卿に取つては、母方の叔父である其の上に、大力の剛の人であるので、特に恐ろしく思はれた。（中略）さて光頼卿は見參の板を高らかに踏み鳴らして立たれたが、と見ると、荒海の障子の北、萩の戸のほとりに、弟の別當惟方が立つて居るので、招き寄せて言はれたには、「公卿の會議が催されるといふので、參内はしたが、別に是れといふ評議があるとも承らぬ。誠であらうか、光頼も死罪に行はるべき一人であると申す。しかし傳聞する所では、其の人々は皆今日切つての見識家で、然るべき人物達である。其の中に數へ入れらるゝ事、頗る名譽といふべきであらう。それについて尋ねたきは、先日御事が信頼の車に陪乘して、信西法師が首實驗の爲めに神樂岡に向はれたといふが、以ての外の儀ではないか。抑〻近衛大將、撿非違使別當は、他とは違つた重大の役目である。其の重い役に居りながら、人の車の尻に乘るといふ事、先例も聞いたことがな

し、今日とても大きに恥辱とする所であらう。殊に首實驗などは、甚だ以て穩かならぬ儀ではないか。」と言はれると、別當は「それは主上の思召で御座りましたので。」と云つて赤面された。光頼卿重ねて、「これは怪しからぬ。いかに勅諚なればとて、存ずる旨は一通り申し述べて、御意見を申すべきではないか。(中略)もし平家の軍が大勢で攻め寄せたならば、時の間に敗軍となるであらう。若し又火などを懸けるならば、主上もどうして御無事には渡らせられようぞ。そも〳〵御所が灰燃えさしの巷となるだけでも、朝家の御歎きではないか。いかに況んや、玉體に萬一の事でもあらせられたならば、それこそ天下の大珍事で、我が王道の滅亡、まさしく此の時にあるであらう。左衞門督は御邊に、大事小事何によらず談合すると聞いて居る。輕擧妄動を愼み、構へて〳〵玉體の御無事を謀るやうに思案をめぐらさるゝがよい。それはさうと、

「主上は何處にわたらせらるゝ?

「黑戶の御所に。

「上皇は?

「一本の御書所に。

「內侍所は?

「温明殿に。

「御劍に御璽は、何處に？

「夜の御殿に。

と、光賴卿が段々に尋ねられると、別當が斯う答へられた。「さてまた、朝餉の方に人音が聞こえ、櫛形の穴に人影の見える、あれは何者か。」と言はれると、「それには左衞門ノ督が住んで居ります から、其の方面の女官の影がちらついてゐるので御座いませう。」と言はれたので、光賴卿は、聞くか聞かぬに、「世の中は、もう是れまでか・・・

細かに擧ぐれば外にもいふべき事が澤山あらうが、私は、これらが此の一章の含んで居るおもなる意義趣味であるかと考へる。

第六　待賢門の軍

一

次ぎに待賢門の戰のおもなる部分を引いて見る。此の戰の記事は、兩軍を代表する源平の嫡々が雌雄を決する駈引なる點に於いて、激しい戰爭の光景を如實に描き出だした點に於いて、變化に富んだ點に於いて、情味の兼ね備はつた點に於いて、武士道の精髓の美しく現はれた點に於いて、叙事抒情の筆に隙間のない點に於いて、軍記物語の中稀に見る名文である。

さる程に六波羅の皇居には、公卿僉議あつて清盛を召されけり。紺の直垂に黑絲威の腹卷に、左右の籠手を差して、折烏帽子引き立てゝ大床に畏る。頭中將實國を以て仰せ下されけるは、王事盬いことなければ、逆臣滅びん事疑ひなし。但したまたま新造の內裏なり。若し囘祿あらば朝家の御大事たるべし。官軍僞りて引き退かば、凶徒定めて進み出でんか。然らば官軍を入れ替へて內裏を守護せさせ、火災なきやうに思慮あるべしと仰せ下されければ、淸盛畏つて、朝敵たる上は、逆徒の誅戮は掌の中に候間、時刻を廻らすべからず。然れば定めて狼藉出來せんか。火失なからん條こそ難儀の勅定にて候へさりながら、范蠡が吳國を覆し、張良が項羽を滅ぼせしも、皆是れ智謀の致す所なれば、涯分武略を廻らして、金闕無爲なる樣に成敗

仕るべしと奏して出でられけり。

主上御座あれば、皇居の御固めに清盛をば留めらる。大内へ向ふ人々には、大将軍は左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀬尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞泰、同じき十郎貞景を始めとして、都合其の勢三千餘騎、六波羅を打ち出でて、賀茂河を馳せ渡し、西の河原に控へたり。左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を帯き、切符の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黄鴾毛なる馬に、柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛な平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり、敵を平げん事何の疑ひかあるべき。誰れか爰に樊噲張良が勇をなさざらんとて、三千餘騎を三手に分けて、近衛中御門、大炊御門、大宮表へ打ち出でて、陽明、待賢、郁芳門へ押寄せたり。

大内には三方の門を鎖し固め、面をば開かれたり。昭明、建禮の脇の小門をも倶に開きて、大庭には馬ども多く引き立てたり。梅壺、桐壺、籬壺、紫震殿の前後、東光殿の脇の壺まで、兵ひしと竝み居たり。皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流打ち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流差し揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨を咄と作りければ、大内も響き渡りて夥し、鯢波に驚きて、只今まで由々しく見えられつる信頼卿、顔色變はりて草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝戰ひて下りかねたり。人なみ〳〵に馬に乘らんと引き寄せたれども、肥りせめたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心には似も似ず、はやり切つたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、斯くやと覺ゆるばかりにて、乘りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、疾く召し候へとて押し上げたり。餘りにや押したりけん。弓手の方へ乘り越して、伏樣にどうと落つ。急ぎ引き起こして見れば、顔に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝此の體を見て、

日頃は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したり
なとて、日華門を打ち出でて、郁芳門へ向はれければ、信賴も鼻血押拭ひ、兎角し
て馬に搔き乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも見えざりけり。
左衞門ノ佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばは
り給ひけるは、此の門の大將軍は信賴ノ卿と見るは僻目か。斯く申すは桓武天皇の苗
裔、太宰ノ大貳淸盛嫡子、左衞門ノ佐重盛、生年二十三と名乘り懸けければ、信賴返事
にも及ばず、それ防げ侍共とて引き退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人も無し。
我れ先きにと逃げければ、重盛いよいよ勇みて、大庭の椋の木の許まで攻め附けた
り。義朝これを見て　惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が、待賢門を早破られ
つるぞや。かの敵追ひ出だせと宣ひければ、承り候とて懸けられけり。續く兵には、
鎌田兵衞、後藤兵衞、佐々木ノ源三、波多野ノ次郎、三浦ノ荒次郎、須藤ノ刑部、長井ノ齋藤
別當、岡部ノ六彌太、猪俣ノ小平六、熊谷ノ次郎、平山ノ武者所、金子ノ十郎、足立右馬允
上總ノ介八郎、關ノ次郎、片桐ノ小八郎太夫、以上十七騎、轡を雙べて馳せ向ふ。大音聲

を揚げて、此の手の大將は誰人ぞ名乘れ聞かん、斯く申すは淸和天皇九代の後胤、左馬頭義朝嫡子、鎌倉の惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしより以來、度々の合戰に一度も不覺の名を取らず、年積つて十九歳、見參せんとて、五百騎の眞中へ破つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、縱樣橫樣十文字に、敵を颯と蹴散らして、葉武者共に目な掛けそ。大將軍を組んで擊て。櫨匂の鎧に、蝶の裾金物打つて、黃鴾毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕にせよと下知すれば、大將を組ませじと、防ぐ平家の侍ども、與三左衛門、新藤左衛門を始めとして、百騎ばかりが中にぞ隔たりける。惡源太を始めとして十七騎の兵者、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻右近の橘を、七八度まで追ひ廻して、組まん／＼とぞ揉うだりける。十七騎に駈け立てられて、五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。大將左衛門佐は、弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參りて、曩祖平將軍の二度生まれかはり給へる君かなと、向う樣に譽め奉れば、

今一度駈けて家貞に見せんとや思はれけん。前の五百餘騎をば留めおき、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻め寄せたり。

また惡源太駈け向ひ、見廻していひけるは、只今向ひたるは皆新手の兵なり、但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於いては餘すまじ、押雙べて組んで捕れ、兵共と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我れ先きにと進みければ、今度は難波次郎、同じき三郎、瀨尾太郎、伊藤武者を始めとして、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太弓をば小脇に掻い挾み、鐙蹈ん張り、突つ立ちあがり、左右の手を擧げ、幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり、敵には誰れか嫌はん。寄れや組まんといふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下を追ひ廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に妨げばこそ、敵度々駈け入るらめ、あれ速かに追ひ出だせと言ひ遣はされければ、俊綱馳せて此の由を云ふに、承り候

ふ進めや者共とて、色も替はらぬ十七騎、大宮表に駈け出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず破つて入る。引き立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、我が子ながらも義平は、よく駈けたるものかな。あ駈けたりとぞ譽められける。

大將重盛、與三左衛門景安、新藤左衛門家泰、主從三騎かけ離れ、二條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田へ屹と目合はせて、爰に落つるは大將とこそ見れ、返せやとて追懸けたり。既に堀河にて追つ詰めけるが、弓手の方に材木多く充ち滿ちたるに、惡源太の乘り給へる馬、かたなつけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へ蹴飛んで、小膝を折りてどうと伏す。鎌田兵衛延ばさじと、十三束取つて番ひ、よツ引いてひやうと射る。重盛の射向けの袖にはたと中りて飛び返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちやうど中りて、篦かつぎ碎けて跳り返れり。惡源太是れは聞こゆる唐皮といふ鎧ござんなれ、馬を射て落ちん所を撃てと下知せられければ、又よつ引いて追ひ様に、笞の隱るゝ程射込みたり。馬は屛風を返す如く倒るれ

ば、材木の上にはね落され、兜も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀川を馳せ越えて、重盛に組まんと落ち合ふ。重盛近づけては叶はじとや思はれけん、弓の弭にて鎌田が兜の鉢を丁ど突く。突かれてゆらゆる間に、兜を取つて打ち着つゝ、緒を強くこそ締められけれ。與三左衛門馳せ寄つて、中に隔たり申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代はりて、滎陽の圍を出だし、遂に天下を保たせき。主辱めらるゝ時は臣死すといふにあらずや。景安爰にあり、寄れや組まんといふまゝに、鎌田兵衛と引組んで取つて押へける處に、惡源太馬引き起こし、是れも堀河を馳せ越えて、重盛に組まんと飛んで懸かりけるが、鎌田をや助くる、大將をや撃たんと思案しけれども、大將には又も寄せ合ふべし、政家を撃たせては叶はじと思ひ、與三左衛門に落ち合つて、三刀刺して首を取る。重盛は憑み切つたる景安討たせて、命生きて何かせんとて、既に惡源太と組まんとせられけるを、新藤左衛門馳せ來り、家泰が候はざらん處でこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれとて、我が馬を引き向け、中に隔てゝ惡源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を討たせては叶はじと思

ひければ、新藤左衛門に落ち重つて首を掻く。此の間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。十二月二十七日巳刻ばかりの事なるに、一村雨さつとして、風は烈しく吹いたりけり。鎌田が鞍の前輪にも氷筋ゐたれば乗りかねけり。悪源太これを見給ひて、手形を附けて乗れやと宣ひければ、打物拔いてつぶ／＼と、手形を切りてぞ乗つたりける。鞍に手形を附くること、此の時よりぞ始まれる。

三河守頼盛は郁芳門へ押寄せて、此の陣の大将は誰人ぞ。名乗られ候へと宣へば、此の手の大将は淸和天皇九代の後胤、左馬頭源朝臣義朝と名乗つて、悪源太は二度まで敵を追ひ出だすぞかし。進めや若者と宣へば、中宮大夫進、右兵衛佐、新宮十郎、平賀四郎、佐渡式部大輔重成を始めとして、我れも／＼と駈けられけり。右兵衛佐頼朝は、生年十三と名乗つて、敵二騎射落し、一騎に手負はせて、殊に進んで駈けられけり。左馬頭宣ひけるは、何といへども若者共の軍するは、まばらに見ゆるぞ、義朝駈けて見せんとて、眞先に進まれければ、一人當千の兵共、打圍うでぞ

戰ひける。頼盛暫らく支へられけるが、門より外に追ひ出ださる。義朝續いて攻め戰へば、大宮表へ引きにけり。平家馬の息を繼がせて駈け入りければ、源氏大內へ引籠る。源氏また馬の足を休めて駈け出づれば、平家また大宮表へ引き退く。平家は赤旗赤符、日に映じて耀けり。源氏は大旗、腰小旗、皆押竝べて白かりけるが、風に吹き亂され、勇み進める有様は、誠にすさまじくこそ覺えけれ。源平の兵共互に命を惜しまねば、眼前に撃たるれども顧みず、主の先に進まんと、爰を前途と戰うたり。惡源太、左衛門佐をば討ち洩らし、鎌田に向つて宣ひけるは、郁芳門の軍は如何あらん。いざや頭殿の御先仕らんとて、打具して馳せ來り、又眞先にぞ進まれける。

　爰に鎌田が下人八町次郎とて、大力の剛の者、早走りの手利きあり。馬にてこそ具すべけれども、なか〱徒立よかるべし、高名せよといひければ、一年も腹巻に小具足差し固めて、眞先に進みたりけるが、敵の馬武者の遙かに先立ちて落ちけるを、八町が內にて追つ詰めて首を取つたければ、それよりして八町次郎とぞいひけ

る。されば又此の者、三河守の聞こゆる早馳せの名馬に、兩鐙を合はせて駈けられけるに、少しも劣らず追つ附きて、兜の天邊に熊手を打ち掛けんと、續いて走りければ、賴盛も兜を打ち傾け打ち傾け、あひしらはれければ、五六度は掛けはづしけるが、終に天邊に打ち掛けてえいやと引けば、三河守既に引き落されぬべう見えられけるが、帶いたる太刀を引き拔いてしとゝ切り、熊手の柄を手元二尺ばかり置いて、づんと切つて落されければ、八町次郎のけに倒れてころびけり。京童これを見て、あはれ太刀や、あ切れたり。三河殿もよく切つたり。八町次郎もよく掛けたりとぞ感じける。賴盛は兜に熊手を切り掛けながら、取りも捨てず見も返らず、三條を東へ、高倉を下りに、五條を東へ、六波羅まで、からめかして落ちられけるは、なか〳〵優にぞ見えたりける。名譽の拔丸なれば、能く切れけるは理りなり。此の太刀を拔丸といふ故は、故刑部卿忠盛、池殿に晝寢しておはしけるに、池より大蛇上りて、忠盛を呑まんとす。此の太刀枕の上に立てたりけるが、自らするりと拔けて蛇に懸かりければ、蛇恐れて池に沈む。太刀も鞘に返りしかば、蛇又出でて呑ま

んとす。太刀又抜けて大蛇を追ひて、池の汀に立ちてけり。忠盛これを見給ひてこそ、拔丸とは附けられけれ。當腹の愛子によつて、頼盛之れを相傳し給ふ故に、清盛と不快なりけるとぞ聞こえし。伯耆國大原眞守が作と云々。三河守を落さんと防ぎ戰ふ侍には、大監物、小監物、藤左衞門尉助綱、兵藤內が子藤內太郎家繼を始めとして、我れも／＼と戰ひける。

二

語釋 左右の籠手を差して。「籠手」は腕を被ふ武具の一つ。鎧には左だけに籠手をさすを例とするが、腹巻には左右共に差すこともあり、又左右ともに差さぬこともあるので、特にかう斷つたのであらう。○大床。王朝時代の廣廂の事で、身屋と簀子緣との間の間。上段と緣側との間の疊廊下、或ひは廣緣ともいふべき處。○王事盬いとなければ。「盬」はコと讀んで脆く弱い事。『詩經』に、王家君上の事は堅固萬全でなければならぬ故、御奉公に忙しくて、五穀を仕付ける事も出來ぬ、親を養ふ暇もない、など歌つてゐる。それを踏まへたので、こゝは天地神明の加護ある皇室の御事に間違のあるべき筈がなく、結局逆徒の滅びるのに疑ひはないが、たゞ折角丁度出來あがつたばかりの宮城の燒失するのが惜しいといふ事。○回祿。支那の神話に謂ふ火の神の事、こゝは火災に遭ふといふ意。○掌の

中に候ふ間…。兇徒退治は、もう大丈夫手に取つたやうなもので、手間ひまも入らず、時計の廻るのを待つ迄もありません。しかしさう時刻を廻らさぬやうに功を急げば、自然いろ／＼の間違も出來ませうといふ意。「然れば」のところ、少し詞足らずで曖昧であるが、大體さういふ意味で、「功を急げば」といふ作者の底意であらう。○范蠡張良。范蠡は越王勾踐を助けて呉王夫差を滅ぼした智謀の臣、張良は漢の高祖を助けて楚の項羽を滅ぼした謀臣。○涯分。分際相應、出來るだけの。○金闕無爲。「金闕」は漢の宮殿、未央宮の金馬門から出た詞で、廣く王宮の事に用ゐられる。「無爲」は變はりなきこゝろ、引きつゞけて、宮城御無事といふこと。○成敗。セイバイと讀む。もとは成功と失敗といふ意味であつたが、轉じて、處分、仕置、處刑、誅戮といふ意味に用ゐられるやうになつた。ここでは第二の轉義に用ゐられてゐる。○主上御座あれば。これより先き、別當惟方の手引により、主上が黑戸の御所を脱して、平家の六波羅の邸に行幸あらせられた故にいふ。○侍には。侍大將のこと。侍大將は門閥家の任ぜられる常役の將軍でなく、戰爭の折、臨時に、侍の中から選ばれて、一部、一團の士卒を統率する任にあたつた役のこと。○馳せ渡し。一端から他端へ押し進んだ連絡行動の味はひ。○生年。當時の流行語。生まれてから生きて來た年の數といふ事であらう。○櫨の匂ひの鎧。櫨は漆に似た木の名。はじ色は櫨の葉のもみぢした色をいふので、赤と黄との間の色。○蝶の裾金物。草摺の最下端の板を菱縫の板といふ。これは此の板に、×××　かういふ風に横に縫つた絲の模様が菱形に見える處から云つたのであるが、此の菱縫の板の左、右、中の三ケ所に金物を打つ。これを「裾金物」と云つて、人々の好みによつて、花、鳥、蟲などいろ／＼の物をつけた。こゝは蝶模様の金物をつけ

たといふのである。○龍頭の兜。兜の正面、鍬形の中間から眼庇の方へ龍の張り出でたのを附けた兜。大將の着る料である。○小烏。平家傳家の寶刀。○切文の矢。切斑の意、鷹の羽の斑の、白と黒と斑の切れ分かれたのを以て矧いだ矢の事。○滋籐の弓。弓の幹を籐でしげく卷いた弓、五分ばかりの間をおいては一寸位づつ卷くといふ。○黃鵃毛。黃桃花毛とも書く。全身白色に黃色味を帶びた毛色。○柳櫻摺りたる貝鞍、靑貝で柳と櫻との模樣を摺つた鞍。○年號は平治なり云々。年の名は平治、都の名は平安、自分等の姓は平家、三つ凡てに平の字がついてゐる、敵を平げるのに何の疑ひがあらうといふこと。詞についてのしやれで、勇氣をつけたのである。「相應せり」は、皆我等にさうおうしてふさはしく、緣起がよいといふ意。「あひおうぜり」ではない。○三方の門。異本に、此の上に「南、西、北」の三字があり、「面」の前に「東」の字のあるのがある。その方が尙ほよく解るであらう。○籬壺。東光殿。此の二つの名は內裏の名稱の中に見えぬが、或ひは梨壺、登花殿とあつたのを、一つは梨と籬との同音から書き誤られ、一つは「とうくわ」を「とうくわう」と誤つたのであらうといふ說がある。○南階。紫宸殿の南の階。○太りせめたる大の男。セメは「狹め」「迫め」の意で、はち切れさうに肥つたといふ意。○主の心にも似ず。主從は似た者の伴ふのが普通であるのに、此の馬が主人の臆病なるにも似ず、氣の勝つた、拔群非凡の駿馬であるから、といふ皮肉の文致。○穆王八匹の天馬。周の穆王が卽位三十二年に、八龍の駿馬に乘つて天下を巡行したといふ傳說を踏まへた文である。八駿の名は、一は「絕地」と云つて、足土を踐まず、二は「翻羽」と云つて飛鳥を追ひ越し、三は「奔宵」と云つて一夜の中に萬里を行き、四は「越影」と云つて太陽に負けずに飛ぶ、その他は踰輝、超光、

朧霧、挾翼などと云つて、いづれも超自然のすばらしい駿馬である。王は是等の天馬に乘つて、一日にして、十萬里を隔てた印度の靈鷲山に至つたなどいふ傳說のある馬。かういふ傳說が背景をなしてゐるので、それが當時の無學の讀者をも刺戟して、暗々裡に此の文章が恐ろしく引立つて來て居るのである。○伏し樣。「ざま」は體、式、方角、などいふ程の意。こゝは「のめり加減に」といふこと。○日頃は。此の間まではといふ義。○はたと睨みて、あの信頼といふ不覺人は臆したりな。「ハタ」は物の衝き當たつて相擊つ音から來たのであらう。武將の銳い目がピカリと光る。そしてそれが向うの睨まれた物に恐ろしく響く、その呼吸がいかにも活き〳〵と寫し出されてある。「不覺人」は不覺悟なる臆病者め。○大將の引き給ふ間。「間」は「故に」「ので」といふ意。『今昔』あたりからボツ〳〵使はれ始めたのが、もう普通の用語として、大手を振つて廣く行はれるやうになつたのである。○惡源太。叔父を殺したといふので呼ばれた綽名ではあるが、當時は「戀勇」、「豪傑」といふ程の味をも帶びた一種の稱號となつてゐた。或ひは惡七兵衞景淸といひ、或ひは武藏坊辨慶が、自ら「三塔名譽の惡僧」など云つて居るのを見ても、此の意味がわかる。○大音聲を揚げて。武勇にはやる當時の益荒男の雄叫を現はすに用ゐられた、此の「ダイオンジヤウ」の一語が、些細の事ながら、世が武人の世になり、軍記の世になつた事を證明してゐる。「割つて入り」「蹴ちらして」など、皆武人の擡頭を謳歌した生氣潑剌たる新日本語である。○葉武者。半武者、物の數にもあらぬ、コムマ以下の雜兵といふ意。○押並べて組んで落ち手捕にせよ。馬と馬と差向ひに一直線にならず、並行式にすり寄つて、組んで落ちて、つかまへよといふ事。○弓杖ついて。弓を杖にして立つた事だが、ユンヅヱツクといふと、

いかにも武人式の勇ましい調子が出て來る。○つと參りて。突然無雜作に面前に現はれた事。○曩祖平將軍の二度生れ替はり給へる君かな。「大昔の大御先祖様、貞盛公の御再誕の様ですぞ。」といふ義。○向う様に。「本氣に」と解した註釋書もあるが、さうではあるまい。これは「眞向から」、「正面から」、「何の斟酌もなく」、「直說法式に」といふので、或ひはそれに「出逢ひ頭に」といふ意をも含めたのであらう。卽ち「ひよツこりと前に出る、すぐに正面から剝き出しに譽め立てた」といふとであらう。○今度に於いては餘すまじ。「おいては」は「今度は」といふのに、勿體をつけて面白く云つたのである。「餘すまじ」は「一人も洩らさず全部を」といふ意味であるが、一つは此の時代の武人の間に於ける流行語で、唯だ一人の敵と戰ふ時でも「餘すまじ」と云つてゐる。○今度は難波次郎。前には與三左衞門等がかけ隔てたが、今度は新手が代はつたので、其の中の難波次郎等が隔てたといふこと。○弓をば小脇にかい挾み。脇に挾んだといふ事。「小」は威勢よくする爲めの味つけの接頭語で、「小面にくい」、「小癪にさはる」などいふのと同じ味。亡友島村抱月は、かういふのを「情化語」と名づけてゐる。○鐙踏ん張り、突つ立ちあがり、左右の手を擧げ。「つッ立ち」「ふんばり」、皆わざと當時の新時代語の武者詞を用ゐたのであるが、坂東育ちの荒武者の颯爽たる様子を、實に生き〳〵と現はして居る。○嫡々。本家正統の嫡男といふ事。今日よくいふ「チヤキ〳〵」は此の嫡々の訛つたのである。○いふまゝに。いふまに〳〵で、言ふと同時にの意。○色もかはらぬ十七騎。鎧などの色を本位として、平家は新手を入れかへたが、こちらは前と同じ騎馬の武士が、と云つたのであらう。○馬の足を立てかねて。「立て」は引き足を支へて立ち止まる事。當時の普通の武士詞。○屹と目合はせて。「きつと」は、

もと「一寸(ちよつと)」といふ意であつたが、後に「しかと」といふ意が加はり、遂には「必ず」といふ意になつた。此處は「一寸、力のこもつた目交(めくは)せをして」といふ意であらう。○かたなつけの駒にて。まだ少しばかり懐けた丈、一部分教練を施した丈で、本なつけにはならぬ荒馬なので、といふ事。二三の註釋書に「片寄る癖のある馬」の意とし、片よる癖のある馬ゆゑ、自然と弓手の方に片寄つて、其の方に積んでおいた材木に驚いたのである、と解いて居るのもあるが、さうではあるまい。唯だ材木に驚いた事を寫したので、右の方に材木があつたので左の方に飛んだと書いただけであらう。○延ばさじと。落さじとの意。逃げのばさせ、逃げ道をこの上延長させまい、こゝで仕とめてやらうとて、といふこと。○能つ引(よつぴ)いてひやうと射る。當時の代表的な武者詞の一つ。例の如くいかにも小氣味のよい武士詞(もののふことば)である。○射向けの袖。鎧の左の袖。弓を射る時に左を前に向ける所から來た名。○押付(おしつけ)。後(うしろ)の肩にあたる板、染革で包むのを例とする。當時、敵に押付を見するといふのは、敵に後(うしろ)を見せる、卽ち逃げるといふ意味であつた。○箆(の)かつぎ。箆被で、鏃が矢竹を受けかついで居る部分。箆(の)は矢竹の事で、其の上端を矢筈といひ、下端の鏃と接する所を、鏃の方から見て「箆(の)かつぎ」といふ。○唐皮といふ鎧ござんなれ。「唐皮」は平家重代の名高い鎧。「ござんなれ」は「こそあるなれ」「こそあんなれ」のつまつた訛り。後世は「さあ來い」といふ挑戰の語などに用ゐられるが、それは轉訛で、古意ではない。○追ひ様(ざま)に。追ひかけながら、後の方から。○大童(おほわらは)。散らし髪の事。大人ながら子供が髪を散らしてゐるのに似て居る故にいふ。○落ち合ふ。重盛が馬から落ちた處へ、鎌田も同じく馬から飛び落ちて組まうとしたといふ事。○ゆらゆる間に。よろめいた事。○主辱めらるゝ時は臣死す。『國語』に范蠡の語とし

て「人の臣たる者、君憂ふるときは臣勞し、君辱めらるゝときは臣死す」とあるのによつたのであらう。○鎌田をや助くる。鎌田を助けたものか、それとも重盛を擊つたものかと考へて躊躇した事。○十二月二十七日の巳の刻ばかりの事なるに、一村雨さつとして、風は烈しく吹きたりけり、鎌田が鞍の前輪にも、つらゝゐたれば乘りかねけり。十二月二十七日は凡そ今の新暦の一月末で、大寒の寒い盛りである。巳の刻は今の午前十時ごろ。「吹きたりけり」は、說明しにくい一種の句法であるが、今の言葉にすれば「吹いたんだよ！」、「吹いたぢやないか！」といふ程の意で、感投的の味はひを含んで居る。「極寒の折からなるに、俄に荒れ模樣になり、通り雨がさツと降つて、おまけに風が烈しく吹いたぢやないか！　何でふ堪らう、鎌田の鞍にも氷が張つて、手が滑つて乘ることが出來ぬ。」といふ程の意味。「前輪」は鞍の前の方なる山形。「つらゝゐる」は、氷のつる〳〵と張つたこと。「ゐる」は集まり止まる意で、流れ落つべき水が凝り固まつたといふこと。此の「つらゝ」を、諸註に氷柱、氷筋と書いて、垂氷卽ち垂れ下つた氷の柱の事に解して居るが、さうではない。此處は唯だ「氷がつる〳〵とはつて手の掛けやうがない」といふ事である。「つらゝ」の本義は氷の「ツル〳〵スベ〳〵と張る」といふので、氷柱の意に取るのは轉義である。○此處の「吹きたりけり」は、風變りな特別の筆致であるが、多分此の時代に於ける新流行の句法であらう。『平家物語』には、卷第一の「殿下乘合」に、

新三位中將資盛、其の時は未だ越前守とて、生年十三に成られけるが、雪は斑に降つたりけり、枯野の氣色、誠に面白かりければ、若き侍ども、三十騎許り召具して……終日に狩り暮らし、薄暮に及んで、六波羅へこそ

歸られけれ。

とあり、巻第十一の「那須與一」には、

　頃は二月十八日酉の刻ばかんの事なるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり、船はゆり上げゆりすゑたゞよへば、扇も串に定まらずひらめいたり。

と書いてあるが、いづれも意外の出來事なるをほのめかした感投詞的の味はひで、文路を輕く遮斷して想像の餘地を與へる風致を見せたものである。かう竝べて見ると、『平治』の作者と『平家』の作者とが、同じ時代の空氣を呼吸して同じ樣式を手に入れたとが明らかであるが、更に想像を馳せて、『平家』の方が『平治』に比べて筆馴れのしてる所を見ると、『平家』の作者は『平治』を摸して更に其の上に出たのであらう。或ひは『平治』の作者が、『平治』を書いた後に、一層馴れた筆を以て『平家』の是等の部分を書いたのでもあらう。とにかく二者の間には親しい關係があつて、それが、『平治』が前に出で、『平家』が後に出でた事を暗示して居るかのやうにも思はれる。〇手形。前の「手形」は「手の形」の意味で、鞍のツル〳〵した平面を窪く刳つて、指先の掛りをつけるといふ事。後の「手形」は、鞍の前後の輪に、手のかゝる位刳つたところで、鞍の名どころ。此の時、鎌田の刳つたのが種になつて、鞍の前輪に手の掛け處を刳るやうになり、それを「手形」と呼ぶやうになつたといふのである。但し伊勢貞丈の『平治物語武器談』によると、手形は鎌田以前の古代から有つたので、唯だ鞍に手形のあるのもあり、無いのもあつた。此の時鎌田のには、それが無かつたので、惡源太が「手形をつけよ」と注意したのであると云つて居る。事實はさうで

あつたのであらう。○つぶ〳〵と。氷つた鞍を刀で剥る音の形容、今ならば「ヅブリ〳〵」或ひは「ガリ〳〵」といふやうな意。○手負はせて。疵をつけて。○何といへども……まばらに見ゆるぞ。勇ましくもあり、巧みにも戰ふが、年の行かぬためか、若者どもの軍振には、隙があつて、しつかり充實せぬ嫌ひがあるといふ意。○打圍みてぞ。曖昧な句であるが、源家の兵共が主君義朝を敵に討たせじと、眞中に取圍んで戰つたといふのである。○平家は赤旗赤標、日に映じて耀けり、源氏は大旗腰小旗、皆押し並べて白かりけるが……。「赤標」は笠印、袖印などをいふ。「腰小旗」は布帛などを短册形に切つてつけた標。いづれも敵味方を辨別するためにつけたのであるが、平家に赤旗赤標といひ、源氏に大旗腰小旗と云つたのは、同語を繰返さずして變化をつける爲めに變へたので、「平家は赤旗赤標、源氏は白旗白標」と書いてもよく、又「平家は大旗腰小旗、皆押なべて赤く……」と書いてもよいのであるが、それを、あちこちにし、略し合ひ補ひ合つて、文章を面白くしたのである。○前途。最後といふ意で、これを限り、もう生きては居ないといふ覺悟でといふ事である。淸華家が太政大臣を立身の前途とし、攝家は攝政關白を前途とするなどいふ用例で、此の語の意味がわかるであらう。○惡源太、左衛門佐をば。後世ならば「義平、重盛をば」と書く所であるが、當時は斯樣に諱名や官名をいふのが習はしで、これが特に面白く思はれたのである。次ぎに義朝を「父君」など云はずして、頭殿（左馬頭なる故にいふ）と云つたのも同じ味はひである。○大力の剛の者、早走りの手利き。腕力はあり、足は早し、其の上に手が利いて、打物取つての功者であるといふ事。○馬にてこそ具すべけれども、中々徒立よかるべし、功名せよといひければ。此の三句所屬が曖昧で、今度の軍の時の事のやう

でもあり、又前年の軍の折の事のやうでもあるが、多分前年の事で、「一年も」にかゝるのであらう。卽ち一年も、鎌田が彼れに向ひ、「本來は馬で供すべきであるが、汝には徒歩の方が却つて都合がよからう程に、徒歩で走つて、人と變はつた大功名を立てるがよい。」と云つたといふのであらう。しかし中昔の文章によくある樣に、此の三句は、今度とも、前年の事とも、どちらつかずに兼帶に書き出し、「今度もだが」といふ意を含めて、「一年」に逸れたのかも知れぬ。どつちとも定めては云ひ難い。○馬にてこそ具すべけれども。よくある文法だが、「馬にてこそ具すべけれ。されども」といふべきを端折つて略した形である。○「なか〳〵」は「却つて」の意。「一年」は前年中の、ある一年の意。○腹巻に小具足。小具足は鎧に附いた小道具、籠手、脛當などの事。此處は本式の鎧を着けずに、腹巻に小道具を附けて輕裝したといふ事。○兩鐙を合はせて。左右兩方の鐙で馬の横腹を蹴り〳〵、一所懸命に驅けた事。○兜の天邊。兜の頂上、菊座、俗に八幡座といふところ。○しとと切り。「シト」は掛聲と切れ味との二つを兼ね現はしたのであらう。卽ち「シッ！」と云つて「スパリ！」と切つたといふ事。「曾我物語」に、河津が俣野と相撲を取つて俣野を投げた所に、「目より高くさし上げ、半時ばかりあつて、横ざまに片手を放ちてしとと打つ」と書いてあるが、當時は今日謂ふ「ドシンと」、「スパリと」といふ樣な味で、「しとと」を使つたのである。○づんど切つて。切られ一氣味よく放れた形容。○からめかして。カラ〳〵と熊手に音をさせつゝ。○中々優にぞ。却つて見ばえがしたといふ事。普通ならば敗走は恥辱だが、此の强敵に追はれ乍ら、其の熊手まで切つて逃げ了せたのは、一種の功名だといふので、愛嬌に褒めた皮肉の味はひである。○當腹の愛子によつて。本妻腹の鍾愛した子

なので、の意。「愛子たるによつて」とあるべきで、少し文字足らずの嫌ひがある。或ひは傳寫の際に落されたのでもあらう。

三

此の一段にも盡きぬ興味がある。先づ第一に吾等の心を惹くのは、個々の語が武人的に強くなり、男らしくなり、而して同時に落ちついて來たことである。まづ冒頭の「さる程に」が、軍記らしい落ちついた感じを與へて來た。「涯分武略をめぐらして、金闕無爲なる樣に成敗仕るべしと奏して出でられけり。」なども、武將らしい心持が現はれて面白い。「主上御座あれば」は、もし王朝の物語ならば、「上おはしませば」などと、やさしく女性的にいふところであらうが、軍記としては、「主上御座あれば」と四角に武張つて、却つて非常に落ちついて居る。

年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げん事何の疑ひかあるべき。誰れが爰に樊噲張良が勇をなさゞらん。

の如きは、武人式の强みに漢文式の品位までが加はつて、非常に落ちついた時樣の新味を見せて居る。其の他、「大音聲を揚げて」といひ、「度々の合戰に一度も不覺の名を取らず」といひ、「弓をば小脇に

搔い挾み、鐙踏ん張り、突立ちあがり」といひ、「弓杖ついて馬に息を繼がせ」といひ、「面も振らず破つて入り」といひ、「小膝を折りてどうと伏す」といひ、いづれも王朝の文學には見られなかつた武人的の強さ、氣味よさ、及び掛替のない落着を見せて居るものである。凡そ全體の完成は部分々々の協力なしに望み得ることではない。花やかな建物を造るには、まづ之れを組み立てる個々の材料を花やかにせねばならぬ。寂しい味はひの座敷は、くすんだ、さびた個々の材料を用ゐる事によつて、始めて完成し得べきであらう。鎌倉軍記の完成も一面此の消息に基礎を置いたので、彼等の組成要素たる一語一句が、全體の根本趣味に調子を合はせたればこそ、あの樣な強い、男性的の落ちついた文學が出來たのである。

第二に吾等の心を惹くのは、場面の轉々する妙味である。事件の變化し推移する間に、根本思想の前後に通じて貫流して居る事である。まづ公卿僉議があつて、淸盛が兇徒討伐の勅命を受ける。續いて、大將軍重盛が三千餘騎を率ゐて大内に馳せ向ふ。大將信賴が鯢波に驚いて、色靑ざめ、戰慄し、落馬して引き退く。義朝が信賴に愛想をつかして、惡源太に重盛を追ひ出させる。源平の嫡々二人、義平と重盛との間に、しばらく激戰が繰り返される。義平鎌田、對、重盛景安家泰との間に、健氣な悲壯な戰が戰はれる。つゞいて、賴盛對義朝の軍があり、やがて惡源太、鎌田が之れに參加して、賴

盛と鎌田が下人八町次郎との間に勇ましい愛嬌揷話の戰が演ぜられる。それから中休みに名劍拔丸の由來話がある。と、かういろ〳〵な興味のある事柄が、後から〳〵と湧き出でて、息もつき合へぬばかりに面白く推移するが、しかも其の間に、「武人階級の興隆」、「武士道の發揮」、「戰爭興味の横溢」といふやうな武人本位の思想が奥底を貫流して、立派に全體を統一して居る。かやうな話は、無統一にバラ〳〵に寫されても、猶ほ拔き亂された珠玉のやうに美しい面白いものであらうが、それが一つの中心興味に纒められる事によつて、更に趣味と價値とを加へたのは、いふ迄もない事である。

第三に吾等の心を惹くのは信頼と義朝との自覺である。委しく云へば、前代の思想を代表した信頼が、實戰の矢叫びに驚かされて、公卿階級の無力を自覺し、同時に新時代の武人を代表した義朝が、信頼が不覺の振舞によつて、公卿崇拜の夢を覺まされた事である。わづか十三歳の賴朝が、敵二騎を射て落し、一騎に手を負はせて駈け進んだ事も、或ひは之れに添へ加ふべきであらう。抑〻信頼は前代の公卿思想の繼承者で、聊かの實力もない癖に、上に媚び下に傲つて權力を振はうとした者であつたが、新時代の新らしい試驗に逢つて、すつかり己惚の夢を覺まされた。義朝は一方の武人の棟梁として源家の一門を統率して居りながら、其の實力を悟らずして、徒らに公卿の生活に憧れて居たが、此の大戰の始めに於いて、すつかり雲上憧憬の夢をさまされた。そして乃父の義朝が、唯だ前代の代

表者の無爲無力に呆れたばかりで、進んで自ら起たうといふ勇氣も見識も無い中に、他日鎌倉の武家政府を興すべき頼朝が、十三歳の幼若にして大人も及ばぬ拔群の働きをしてゐるのは、面白いではありませんか。作者が何心なく此の戰の經過を寫し去り寫し來る間に、滅ぶべくして滅びなかつた者が、之れを機會に、ばッたりと打ち倒れ、興るべくして興り得なかつたものが、之れを機會として、猛然と頭を擡げる消息の、鮮かに窺ひ知られるのは、面白いではありませんか。長袖者流が惰力(だりよく)の持ち耐(こた)へが、此の一轉機を境として忽ち利かなくなり、弓矢取が無意識の裡の長い久しい忍從が忽ちに酬いられる消息を、隱約の間に見せて居るのは、面白いではありませんか。私は時勢推移の機微に關する、かういふ無意識の描寫が、有心の論説に優つて遙かに面白いと思ふ者であります。

此の章が第四に吾等の心を惹くのは、武士道の精華が此の短い文章の間に豐かに、美しく、面白く描かれて居る事である。名乘上げの氣味よさ、實戰の勇ましさ、或ひは大將が眞先に進み、郎黨が後れじと駈け出す健氣(けなげ)さなどは、特にいふまでもないが、彼等が主從互に頼み頼まるゝ金鐵の契りの是れほど美しく、しかも矢繼早に現はれたのは少ないであらう。殊にそれが源平兩家の嫡々に關係して居るので、一層の力と味はひとを添へて居るやうに見える。

與三左衞門馳せ寄つて、中に隔たり申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代はりて滎陽の圍(かこみ)を出だ

し、終に天下を保たせき。主辱めらるゝ時は臣死すといふにあらずや。景安こゝにあり。寄れや組まんといふまゝに、鎌田兵衞と引組んで、取つて抑へける處に、惡源太馬引き起こし、これも堀河を馳せ越えて、重盛に組まんと飛んで懸かりけるが、鎌田をや助くる、大將をや擊たんと思案しけれども、大將には又も寄せ會ふべし、政家を擊たせては叶はじと思ひ、與三左衞門に落ち合つて、三刀刺して首を取る。重盛は賴み切つたる景安擊たせて、命生きて何かせんとて、既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衞門馳せ來り、家泰が候はざらん所でこそ、大將の御命をば捨てたまふべけれとて、我が馬を引き向け、中に隔てゝ源惡太とむずと組む。正家は重盛に組まんとしけるが、主を擊たせては叶はじと思ひければ、進藤左衞門に落ち重つて首を掻く。此の間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。

改めて引くのもくどいやうだが、涙せずには讀まれぬところ、武士道の美しさに感せずには讀まれぬところであらう。主は郎黨を救はうとし、郎黨は主の命に代はらうとし、互に救はう代はらうとして、味方を救ふ爲めには、すでに討ち取らうとした敵の大將をも見遁がさねばならなかつた。そして生きる者、死ぬる者、追ふ者、逃ぐる者、止まる者、悉く、情を盡くし義を盡くした武士道名譽の殉

道者である。私は此の一節を讀む每に、彼等五人が至誠の心根に泣くと共に、此の人物事件の複雜に絡み合つた、そして深き情義の籠もつた內容を、かうまで簡潔に、しかも活き〳〵と寫し得た作者の手腕に感ぜずには居られぬのである。最後の「二人の侍なからましかば助かり難き命なり。」の如き、何といふ無邪氣な、情のこもつた、同時に諷諧の味に富んだ、妥當な評語であらう。

四

第五に私の感ずるのは作者が同情の公平なる事である。評家の中には、『保元』『平治』の作者が、源氏方に贔負して、爲朝や義平を故らに善く書いて居るやうに說く人もあるが、私は必ずしもさうではないと思ふ。論より證據、此の一章が其の消息を、味はひ深く語つて居るではないか。まづ六波羅の皇居に於ける淸盛の面目が堂々と寫されて居る。「淸盛畏つて、朝敵たる上は、逆徒の誅戮は掌の中に候間、時刻を廻らすべからず。」の如きは、すつかり平家に味方して、源氏を眼中におかぬ書振りとも、云はゞ云ふべきであらう。次ぎに、重盛を寫して、

> 生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を帶き、切文の矢負ひ、重藤の弓持ちて、黃桃花毛なる馬

に、柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げん事何の疑ひかあるべき。」

と書いたあたりは、此の青年將軍に此の大戰の全局面を支配させて居るかの觀がある。信頼の卑怯な振舞に對しては、さすがに「只今まで由々しく見えられつる信頼卿」などと、先づ物々しい敬語をさゝげ、或ひは「主の心にも似ず逸り切つたる逸物なれば」と、動物までを對照の引合にして、皮肉の誹謗はして居るものの、これは信頼の人物擧動が當然に受くべき批評であり、又作者が舍人其の他の觀衆の心に同じて、かやうな皮肉を試みたとも見るべきであらう。それから續いて現はれ出でた源氏の大將、左馬頭義朝が颯爽たる英姿、其の子惡源太義平が、火花を散らした勇戰振の、同情的、景仰的に善寫されて居るのはいふまでもなく、源平兩家に屬する鎌田兵衞、與三左衞門景安、新藤左衞門家泰等の郎黨、及び鎌田が下人の八町次郎までが、それ〳〵、武士道の一方面を具體化した權化の如く寫されて、最後には、兜に熊手を掛けながら六波羅まで落ちのびた頼盛までが、見事な逃げ振に、美しい花を持たせられて、「なか〳〵優にぞ見えたりける」と褒められて居る。これを公平な同情の筆致といふに、何の差支があらう。思ふに『保元』『平治』の作者には、源氏平氏のいづれに同情を寄せ、いづれに反感を抱くなどいふ偏頗な心構が兎の毛ほども無かつたので、此の、理義の上から同情すべき者

には凡て同情するといふ公平な態度、非難すべき行爲に對しても、時々は止むに止まれぬ境遇性格の必然に同情を寄せるといふ思ひやりの心構が、文學上の見識のさまでに高くなかつた彼等の作に、あれ程の精彩と威力とを加へたのであらう。此の點は『平家物語』の作者も、同樣に分前すべきであるが、私は作者の此の長所が、特に著しく此の章に現はれて居るやうに思ふのである。

此の章が最後に私の心を惹くのは文章の妙味である。軍記の文章のおもなる味はひは、『保元』なる「爲朝獻策」のそも／＼から、度々言ひ及んで居る通り、武人の生活、意氣、及び戰爭といふ内容を、いかにも相應はしく現はして居る事であるが、玆に特に取り出して說明したいと思ふのは、實戰の駈引の急迫な呼吸を、いかにも簡潔に表現して居る趣で、その中には、特別の趣致を現はすために、常識文法の桎梏を破り棄て蹴飛ばして居るのもある。例へば、八町次郎と賴盛との熊手の掛引の條の如きがそれで、

此の者三河守の聞こゆる早馳せの名馬に、雨鐙を合はせて駈けられけるに、少しも劣らず追つ附きて、兜の頂邊に熊手を打掛けんと、續いて走りければ、賴盛も兜を打傾け打傾け、あしらはれければ、五六度は掛けはづしけるが、終に頂邊に打掛けてえいやと引けば、三河守既に引落されぬべう見えられけるが、帶いたる太刀を引き拔いてしととと切る。熊手の柄を手本二尺ばかり置い

て、づんと切つて落されければ、八町次郎のけに倒れて轉(ころ)びけり。

の如き、全體が引締つて五分の隙(すき)もないが、殊に「ければ」「ければ」の連發の如きは、何といふ規則離れの妙味であらう。此處は、本來ならば―文法に合せて書けば―「熊手を打掛けんと續いて走つたので、賴盛も兜を打傾け打傾けあひしらはれたが、左樣にあひしらはれたので、五六度は掛けはづしたが……」といふ風に書くべきところであるが、かう二桁(ふたけた)に書くべきを、一桁はづして、突發事件の續起する早急な呼吸を現はし、同時に簡潔の妙味を十分に發揮したのであらう。謠曲などにも、折しも斯樣な文致があり、例へば「八島」に、

これを御覽じて判官、御馬を汀に打寄せ給へば、佐藤次信能登殿の矢先にかゝつて馬より下(しも)に、どうど落つれば、舟には菊王も討たれければ、共に哀れとおぼしけるか舟は沖へ陸(くが)は陣に、相引きに引く汐のあとは鬨の聲(とき)たえて、磯の浪松風ばかりの音さびしくぞなりにける。

とあるが如きは、ほゞ同じ樣式であるが、とても『平治』の此處の面白さには比べられぬ。或ひは『曾我物語』などに、

さても河津が佛事過ぎしかば、その次ぎの曉がたに、女房例ならざれば、人々やがて心得しかば、九月半(こゝのつきはん)と申すには、產の紐をぞ解きたりける。

とあるやうなのも、似通つた文致ではあるが、是れは惡文の拙い單調さで、趣致に於いて、『平治』とは雲泥のものである。かう考へて見ると、一寸(ちよつと)したものながら、此の文が天來の妙句とも、破格の名文とも云ふべきものであることが解るであらう。近來科學研究の盛んなるにつれて、小さい動植物の毛筋一二本、花びらの一二枚、或ひは小さい茸(きのこ)のヒラ〳〵やぬらめきが、多いか少ないかといふやうな事を、取調べて發表するのが、大きな手柄のやうに見られて居るが、もしさういふ事が學問上價値のある手柄ならば、文章に於ける言表形式の小さい微妙な變化を見出だし說明するのも、同樣に一つの立派な仕事であらう。抑〻文學研究に取つて最も大切な仕事は、作家や作に關する細かい附屬事件を取調べる事ではなくして、自然や人事に對する作者の心持の微妙な影を、如何樣に表現して居るかを知ることである。卽ち文學文章の味はひ方のおもなる一面は、內容の命、味はひ、又その異(ちが)ひ目、變はりめが、どれ程細かに面白く活き〳〵と言葉の上に表はされてゐるかを識別し、理解し、味感する所にあるので、此の點から見れば、言表法に關する研究は、今日よりもまだ〳〵精細に深刻に試みらるべきであらう。私が一見五月蠅(うるさ)い一小事と思はれさうな事を、立ち入つて說明して見た本旨は、此處にあるのであります。

第七　祇園精舍

一

『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』及び『太平記』は、我が文學史上に於ける四大軍記ともいふべきものであるが、(『源平盛衰記』をば、かりに『平家物語』の異本の一種と見ることにして)私はやうやく『保元』『平治』の二つの物語を説き了へて、今や『平家物語』に進む段取となりました。『平家』は軍記中の第一と稱せられるもので、同時に鎌倉文學の隨一と稱せられ、日本文學の最もおもなる代表作の一と稱せられるものであります。

『平家物語』は、琵琶の家に大切な祕事扱ひされて居る「祇園精舍」の一章を以て、卷頭を飾られて居ります。

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。奢れる者久しからず、唯だ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝を問ふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等

は皆舊主先皇の政にも從はず、樂みを極め、諫めをも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、是等は奢れる事も猛き心も、皆取々なりしかども、間近くは、六波羅の入道前太政大臣平の朝臣淸盛公と申しゝ人の有樣、傳へ承るこそ、心も詞も及ばれね。其の先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛の朝臣の嫡男なり。彼の親王の御子高視王、無位無官にして失せ給ひぬ。其の御子高望王の時、始めて平の姓を賜はつて、上總ノ介になり給ひしより以來、忽ちに王氏を出でて人臣に連なる。其の子鎭守府の將軍義茂、後には國香と改む。國香より正盛に至るまで六代は、諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をば未だ許されず。

語釋　祇園精舍の鐘の聲……盛者必衰の理を顯はす。祇園は祇陀園と云つて、釋迦如來三十六歲の時、須達長者が如來の爲めに營んだ、中天竺舍衛國の公園、廣さ四十里四方、七十二所の講堂、千二百餘の僧房を有した大規模

の園であつたと傳へられてゐる。「祇園」「祇陀園」と云つたのは、舍衞國王波斯匿の太子祇陀の名に因んだので、もと此の園は、太子の祇陀と同じ國の大臣富豪の須達との共同寄進に成つた所から、二人の名を冠らしても呼んだが、後に略して祇陀園と呼ばれ、又更に略して祇園と呼ばれて、日本の世俗に迄お馴染の名とはなつたのである。「精舍」は寺のこと。精練なる行者、ピューリタンの修行する所なるが故にいふ。「諸行無常」は、時間の中に存在する、この世のあらゆる物は、常に移ろひ變はるもので、常住不變の物が一つも無いといふ事。この祇園精舍の鐘は頗梨の鐘（玻璃または玻瓈とも書く。梵語塞頗胝迦 Sphatika の訛、水精の類で、紫、白、黄、碧の四種がある。七寶の一。）であつたといふことで、仔細は、園の一部に無常堂といふのがあつて、病僧の安養にあてた屋であつたが、此の堂の屋根の四隅の軒先に、四つの玻璃の鐘が吊られてゐて、其の何とも云はれぬ微妙な音は、病僧をして常に病を忘れ淨土に住するの思ひあらしめたといふ。此の頗梨の鐘の事は、『榮花物語』にも出て居り、『往生要集』にも載つて居る。かの平安朝の末期に廣く知られ、普く讀まれた此の二名著に出て居り、殊に『往生要集』は、鴨長明が、方丈生活にも手を離さずして愛讀した、極めて少なき選まれた書物の一つで、また長明が『方丈記』を書いたといふ建曆二年を餘り隔たらぬ承久の前後に『平家物語』の出來た事を思ひ、更に、其の『平家』が比叡山に在つて、慈鎭和尚の庇護を受けてゐた信濃前司行長の筆に成つた事を考へると、『平家』の作者は、必ず此の祇園精舍の鐘が頗梨である事を知つて書いたのであらう。因みに、私は玻璃の鐘の音の微妙なる事について、更に知る所は無いが、いつぞや佛蘭西のボルドーに長く滯在した知人の話に、「この世界の葡萄酒の本場といはれるボルドーでは、最良の

葡萄酒を飲む最良の方法は、水晶の薄手のコップを用ゐる事だと言つて居る。自分も同地第一流の酒釀家に招かれ、その水晶の盃で百年古の銘酒を振舞はれたことがあつたが、瓶の口がコップに觸れて「リ、リン」と鳴る。もう俗世間を忘れるやうな氣がしましたよ。」と聞かされて、成程と思つたことがあつた。そして其の後は『平家』の「冒頭の一段」を讀む毎に、瓶の口との一觸れでさへさうならばと、いつも感歎を深くして居るのである。「沙羅」は梵語で「サーラ」といふ。樹質が堅く、そして百尺餘りも丈高く生長するので、高遠、堅固の二義によつて「サーラ」と呼ばれたといふ事である。「双樹」は釋尊涅槃の折、其處には沙羅の大木が二本づつ八本兩側に双び立つて、綠の枝をさしかはしてゐたが、釋尊の滅度られた翌朝には、すツかり萎れしなびて、鶴の羽毛のやうに白くなつてゐたといふ傳說がある。それによつて書いたので、大體の意味は、天竺祇陀の大公園の精舍の名鐘は、「諸行無常」と響いて、世間の物皆が、常に移ろひ變はる果敢ないものだといふ事を知らせた。又堅固第一と稱せられる沙羅の大並樹の花も如來涅槃の翌る朝は、すツかり枯れ萎れて、盛んなる者必ず衰へるといふ道理を見せてくれたといふ事である、といふ意。平安朝の末に行はれた歌謠を集めた『梁塵祕抄』といふ書物の中に、「迦葉尊者の石のむろ、祇園精舍の鐘の聲」といふ句がある所を見、また七五の句を四たび疊んだ口調から推すと、當時流行した歌謠の和讃、今樣、宴曲などが基となつて出來た句であらうと思ふ。○異朝。外國の事であるが、主として支那の事をいふ。○周伊。朱异の誤。朱异は梁の武帝に仕へた奸臣、音の類似してゐる所から誤られたのであらう。趙高、王莽、安祿山、平將門、藤原純友、源義親、藤原信頼等については、委しい說明は見合はせるが、要するに、いづれも君主を蔑ろにし威權

を擅まにした僭上者、或ひは謀叛人である。○心も詞も及ばれぬ。考も及ばず、言ひ表すとも出來ぬといふ意。此の時代の流行語であつたのであらう、時代の色が見えて面白い詞である。『平家』と同じ時代に出來た、慈鎭和尚の作と云はれる『愚管抄』の中にも、「心も詞も及ばれね」といふ同じ詞が用ゐてある。○王氏を出でて人臣に連なる。皇族から離れて、人臣の仲間入りをしたといふ事。○受領。ズリヤウともジュリヤウとも讀む。後世の國守、知事にあたる地方官の事。其の國を朝家より受けて領する故にいふ。○殿上の仙籍云々は、清涼殿に昇ることを許された、雲上人の名簿に仲間入りすること。仔細は、清涼殿の南廂に、昇殿を許された公卿達の詰所がある。之れを殿上の間（テンジャウのマ）といふので、その間の奥の疊の未の方角に「日給簡」と稱する、長さ五尺三寸、幅は上の方八寸、下の方七寸、厚さ五分の板が立てかけてあり、それに四位、五位、非藏人と、三段に分けて、昇殿を許された殿上人の名を短册形の紙片に書いたのを貼りつける。これが昇殿を許された人の名札なので、之れを名譽な「日給の簡」といひ、昇殿を差止められ、之れを取除かれる事を、「殿上の簡を削る」と云ふのである。

此處で一寸注意したいと思ふのは、『平家物語』が、（『保元』も『平治』も『太平記』も同じ事であるが）或る人々の想像するが如く、首尾一貫した名文ではないといふ事、委しくいへば、『平家』は概しては良い文章で、折々はふるひ附くやうな妙所もあるが、時々は情ないやうな惡文もあるといふ事である。例へば、此の章の中で、「遠く異朝を問ふに」から「心も詞も及ばれね」までは、附屬の文句を除

き去つて、主なる脈絡だけを現はすと、

支那では、趙高等は樂みを極め民の憂を知らなかつたので、亡びた者共である。日本では、將門等は、奢る事も猛しい事も取り〴〵であつたが、目の前では、清盛公の有様を聞くと、心も詞も及ばぬ。

といふ事になるが、これでは、照應を缺いた辻褄の合はぬ文章になるので、若し文脈を整へれば、

異朝では、趙高王莽等が、身の樂みを極め惡政を施したので、遂に亡びた。本朝では、將門純友等が、奢を極め權威を振つたが、皆亡びてはかない最期を遂げて居る。榮華を極めたためしは、和漢に多いけれども、清盛に及ぶ者はない。哀れな最後を遂げた例も古今に多いが、平家ほど急轉直下のめざましい衰滅の姿を見せたものはない。

といふべき所であらう。「上總介になり給ひしより以來、忽ちに王氏を出でて人臣に連なる」なども、落ちつかない文句で、「以來(このかた)」といへば、高望王以來六代にわたる事になるから、「忽ちに」とは云はれぬ筈である。又もし「忽ちに」といふならば、「高望王が上總介になられたのを轉機(きつかけ)として忽ちに」と續けねばならぬ所であらう。斯樣な疵は、全體として必ずしも『平家物語』の價値を輕くするものでもなく、又斯ういふ批評をするのは、好んで些末のあらを拾ひ、不要の憎まれ口を叩くやうにも見えるけ

れども、事實を明らかにする爲めに一言するのである。

二

かやうに部分々々については、右に述べた通り、いろ〱の難もあるが、全體としては、實に何とも云はれぬ味はひのある文である。まづ「祇園精舍」から「風の前に塵に同じ」までの歌がかつた八句、表面を花やかにして裏面に哀みを含めた此の八句が、奢る平家の忽ちに亡びた運命を寫した物語の序曲として、何といふ相應はしさであらう。之れに次いで、異朝本朝の、榮華に誇つて哀れな最期を遂げた代表的尤者を擧げ、之れを前驅の露拂として、空前絕後の榮華を極めた巨大漢、六波羅の入道前太政大臣平朝臣淸盛公=と、肩書を物々しく竝べたところが非常によく利いて居る=を間近く現出せしめ、つゞいて桓武以來の平氏の系圖を明らかにしたところが、何といふ面白い段取であらう。

『平家』の此の冒頭の一章に於いて、殊に面白いのは、この、內容に相應した、調子の好い、味はひの深い文句を初めに置いて、全篇を統一させたことである。更に委しくいへば、此の冒頭の八句に次ぎ、平家の榮華沒落の花やかさ哀れさを詳かに叙して後、最後に哀れなしめやかな結語を置いて、遙かに冒頭に呼應し、同時に全篇を引締めて統一の美を與へたことである。『平家』の卷第十二の末尾に

は、清盛の曾孫、六代御前の被斬によつて、平家の子孫の長く絶えた事を叙して、斯う云つて居る。

さる程に六代御前は、三位ノ禪師とて、高雄の奥に行ひ澄まして坐しけるを、鎌倉殿さる人の子なり、さる者の弟子なり、縦令頭をば剃り給ふとも、心をばよも剃り給はじとて、召捕つて失ふべき由、鎌倉殿より公家へ奏聞申されたりければ、やがて安判官資兼に仰せて召捕つて、終に關東へぞ下されける。駿河ノ國の住人、岡邊ノ權守泰綱に仰せて、相摸國田越河の端にて、終に斬られにけり。十二の年より、三十に餘るまで保ちけるは、偏に長谷の觀音の御利生とぞ聞こえし。三位ハ禪師斬られて後、平家の子孫は永く絶えにけり。

語釋　さる人の子也、さる者の弟子也。「さる人」は然るべき人の意。清盛の嫡子重盛、重盛の嫡子維盛、而して六代御前は維盛の嫡子で、平家の嫡々になつて居るゆゑにいふ。「さる人」は維盛の事。「さる者」は文覺上人のことで、文覺が謀叛氣に富んだ野心僧であつた所から、云つたのである。維盛に「さる人」といひ、文覺に「さる者」と云つた所など、言葉が嵌つて居て面白い。○頭をば剃り給ふとも、心をばよも剃り給はじ。解釋にも及ぶまいが、實に面白い。無形の心を具體にして見せた味である。○公家。朝廷の事。後世は公卿をクゲと讀んで月卿雲客を指す

ことになつたが、それは轉訛で、「公卿」はクギヤウと讀むべきである。○御利生。お蔭といふ事であるが、言葉そのまゝの意味では、信心の結果として生ずる利息といふ事である。

「三位ノ禪師斬られて後、平家の子孫は永く絶えにけり。」は、簡單なる中に一種の餘情があつて、『平家』としては不滿足ながら、とにかく、第一卷の冒頭に呼應して居るが、若し流布本に從つて、灌頂卷＝建禮門院の大原入御から御往生に至るまでの五章を、第十二卷から拔き出し、一纏めにして最後に添へたと云はれる灌頂卷＝を最後の卷と見るならば、其の最後なる

かくて女院は、空しう年月を送らせ給ふ程に、例ならぬ御心地出來させ給ひて、打臥させ給ひしが、日來より思召し設けたる御事なれば、佛の御手に懸けられたりける、五色の絲を控へつゝ、南無西方極樂世界の教主、彌陀如來、本願過ち給はずは、必ず引攝し給へとて、御念佛ありしかば、大納言佐局、阿波ノ內侍、左右に侍ひて、今を限りの御名殘の惜しさに、聲々に喚き叫び給ひけり。御念佛の御聲、やう／＼弱らせまし／＼ければ、西に紫雲たなびき、異香室に滿ちて、音樂空に聞こゆ。限りある御事なれば、建久二年二月中旬に、一期遂に終はらせ給ひけり。二人の女房

達は、后の宮の御位より、附き參らせて、片時も離れ參らせずして候はれしかば、別路の御時も、やる方なくぞ思はれける。此の女房達は、昔の草の縁も、皆枯れ果てて、寄る方もなき身なれども、折々の御佛事、營み給ふぞ哀れなる。此の人々も、終には龍女が正覺の跡を追ひ、韋提希夫人の如くに、皆往生の素懷を、遂げけるとぞ聞こえし。

は、巻頭の祇園精舍と、實に美しく照應して、限りなき哀情と寂光との中に、全篇を引き締めて居ると見るべきであらう。あの空前の榮華を極めた平家の一門が慌しく西海に亡びる。其の中に嫡流の六代が、佛者の命乞により、出家することによつて、辛うじて十數年生き延びる。清盛の女、高倉の后たる女院は、天上、人間、地獄、餓鬼、畜生、修羅、六道のあらゆる苦樂を、短き半生の中に嘗めつくし、壇の浦に身を沈めて後、佛に事へる大原の菴室生活に甦つて、數年の後、佛の御手に懸けた五彩の絲に引かれて、寂しく美しく救はれる。縁に繫がる二人の尼までが、罪深き女人でありながら、同じやうに往生の素懷を遂げる。祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。平家の一門は盛者の榮華を極めて後、しみ〴〵と無常の鐘を聞き盡くし、必衰の

理を味はひつくした。而して或る意味からは、さびしく美しく救はれた。悲しい美しい哀音に始まつて、同じく悲しく美しい哀音に終はる。此の二つの哀の音の間に、花やかな榮華の夢と、勇ましい修羅劍戟の戰の場との展開されて居る趣、これが『平家物語』の最も面白き味はひの一つであらう。

三

『平家』の首尾に於ける此の味はひ深き照應振、統一振を見て後に、前に擧げた『保元』『平治』の二つの物語を見ると、其の間に大分の距離があるやうに見える。『保元物語』の初めには、「後白河院御即位の事」といふ見出しをおいて、左の如く書いて居る。

爰に鳥羽禪定法皇と申し奉るは、天照太神四十六世の御末、神武天皇より七十四代の帝なり。堀河天皇第一の皇子、御母は贈皇太后宮藤茨子、閑院大納言實季卿の御娘なり。康和五年正月十六日に御誕生、同じき年の八月十七日、皇太子に立たせ給ふ。嘉承二年七月十九日堀河院崩れさせ給ひしかば、太子五歳にて踐祚あり。御在位十六箇年が間、海内靜かにして天下穩かなり。寒暑も節を過たず、民屋も誠に豐

かなり。

當の保元の亂の原因を叙する爲めに、卒然筆を起こして、史實を機械的に書き竝べたといふに過ぎないが、其の結尾には、八郎爲朝の大島に於ける最後を叙し、此の英雄兒の首が都に上せられた事を記した後に、

首をば同じき五月に都へ登せければ、院は二條京極に御車を立てゝ叡覽ある。京中の貴賤道俗群集す。此の爲朝は十三にて筑紫へ下り、九國を三年に伐ち從へ、六年始めて十八歲にて都へ上り、保元の合戰に名を顯はし、二十九歲にて鬼が島へ渡り、鬼神を奴とし、一國の者怖ぢ恐ると雖も、勅勘の身なれば、終に本意を遂げず、三十三にして名を一天に廣めけり。古より今に至るまで、此の爲朝程の血氣の勇者なしとぞ人申しける。

と、無雜作に書き捨てゝ居る。無邪氣な筆致が面白いといへば、それも面白いが、作者が、全體の統一、中心思想の遍布開展＝どういふ心持を主として書くか、如何に筆を起こし、如何に書き續けて、如何に收まりをつけるか＝などいふ事に對して、特別の用意のなかつた事、又文章の上だけについて

見ても、新興武人の面目や戰爭を寫した所だけはさすがに立派だが、外の部分はおしなべて幼稚なもので、とても『平家』と竝ぶべきものでない事が明らかである。

『平治物語』は『信頼信西不快の事』といふ見出の下に、左の文句を以て此の大亂の記述を始めて居る。

竊に惟れば、三皇五帝の國を治め、四岳八元の民を撫づる、皆是れ器を見て官に任じ、身を顧みて祿を受くる故なり。君臣を選びて官を授け、臣己れを計りて職を受くる時は、任を委しうし成を責むること、勞せずして化すと云へり、故に舟航海を渡るに、必ず橈楫の功を假り、鴻鶴のつる雲を凌ぐに、必ず羽翮の用に由る。帝王の國を治むること、必ず匡弼の助けに由ると云々。國の匡輔は必ず忠良を俟つ。任使其の人を得る時は、天下おのづから治まると見えたり。古より今に至つて、王者の人臣を賞する、和漢兩朝同じく文武二道を以て先とす。文を以ては萬機の政を助け、武を以ては四夷の亂を治む。天下を保ち國土を治むる謀は、文を左にし、武を右にすと見えたり。譬へば人の二つの手の如し。

語釋　舟航海を渡るに……鴻鶴のつる雲を凌ぐに。三皇五帝や、四岳八元や、官祿、橈楫、匡弼、四夷などいふ

漢語の解釋は長くなるから省くことにして、爰に一つ說明しておきたいとは思ふのは、「舟航海を渡る」「鴻鵠の鵠雲を凌ぐ」の二句である。かういふ同義語の繰返を、昔は「兩點讀」と云つた。兩點讀は、耳遠き語を耳近き語で繰返す修辭法、委しく云へば、古語を現用語で繰返し、或ひは外國語を邦語で繰返すもので、說明的反覆法とも稱すべきものである。例へば「あかの水」、「般若の智水」、「八朔のついたち」、「まして況んや」、「しゞまの無言」、「合掌手を合はせ」といふ類で、本來は別けて添ふべき難語の解釋を、本文の中に入れ込んだのであらう。古今の國文に可なり多くある一種の修飾法である。

是れは一種の政治道德論を以て一篇の序說としたので、中心思想の設定や、組織統一上の手腕からいへば、『保元物語』よりも一步を進めたものと云へるであらう。とにかく、古語を揭げて冒頭を莊嚴化し、中心思想を示して全體を引締めようとした事は明らかであるが、其の結尾もやはり同じやうな企圖に成つたものらしく、「賴朝義兵を擧げらるゝ事、併平家退治の事」と題し、左の一節を以て筆を收めて居る。

義朝は鳥羽ノ院の御宇、保安四年癸卯の年生まれ、三十四歲にして、保元元年に忠節を致し、勳功を蒙り朝恩に浴しける。今度の謀叛に與して身を滅ぼしき、然れども賴朝義經二人の子あつて、兵衛ノ佐三十四、判官二十二歲にして義兵を擧げ、會稽

の恥を雪ぎ、再び家を榮やかし給へり。頼朝は近衛院久安三年丁卯の年誕生す。義經は二條院平治元年己卯の年生まれたれば、三人共に單閼の年の人なり。中にも頼朝平家を滅ぼし天下を治めて、文治の初め諸國に守護を居ゑ、有らゆる所の莊園郷保に地頭を補して、武士の輩を勇め、廢れたる家を起こし、絶えたる跡を繼ぎて、武家の棟梁となり、征夷將軍の院宣を蒙れり。卯は是れ東方三支の中の正方として、仲春を司る。柳は卯の木なり。春の陽氣を得て、天道惠みの眉を開き、營み繁く榮ゆれば、柳營の職には、卯の年の人は實に便りありけるものかな。

語釋　勳功を蒙り。勳功は、こゝでは褒美、賞與の意で、原因と結果とを相換へた一種の文飾とも見るべきもの。但し是れは恐らく無學者の書き誤りであらう。○單閼の年。卯の年の異名。中昔の貴族階級の常識百科辭典ともいふべきものであつた『拾芥抄』に「太歳寅にあるを攝提格と曰ふ、歳旱。卯に在るを單閼と曰ふ、歳和。辰に在るを執徐と曰ふ」など書いてある。當時の人が支那崇拜と迷信とから、好んで使つた語で、別に氣取つて難語を用ゐたといふわけではない。○勇め。勇ませで、勇氣をつけ、勵ますこと。○東方三支の中の正方。子は北、それから丑、寅、卯、辰、巳と算へて、正南の午に至る、卽ち東方に屬する三方角、寅、卯、辰の中、卯は眞東にあたるといふこと。○柳營。細柳營の略で、將軍の陣屋の事。轉じて幕府の事をも、將軍の事をもいふ。漢の文帝の時、將軍周

亞夫が細柳に陣した折、文帝の御幸があつたのに對して、大に將軍振を發揮した所から、將軍の陣營の稱として用ゐられるやうになつたのである。

平治の軍の物語の結尾に、頼朝が平家退治の記述は、少しく過ぎて及ばざる嫌ひがある。また義朝頼朝等が卯の歳生れといふ事から、「卯の木」なる柳にこぢつけて、柳營の幕府に因緣を附けたのは、當時としては時代の迷信に投合した面白味があり、また古典的の位附けによつて、冒頭の政治道德論に呼應して居る趣はあるけれども、文武二道を論じた堂々たる冒頭が、單鬪柳營の迷信的こぢつけの結收に終はつたのは、龍頭蛇尾の嫌ひがあり、また全體としては、作者の企圖が道義に囚はれ、理窟に偏して、情味の潤ひに缺けてゐたことを證するやうに見える。

抑〻文章の首尾は、作者の特に留意して心血をそゝぐ所であるが、『平家物語』の首尾兩節を取つて、之れを『保元』及び『平治』の首尾に比較すると、その文章の美しく味はひのある點に於いて、その內容に卽した統一の力に於いて、その着想が情味本位に、文學的になつて居る點に於いて、遙かに〳〵進んで居ることを見出だすことが出來る。取りすべて云ふと、『保元物語』には、豫定の企圖もなく、思ひ出づるまゝ感ずるまゝに書いたといふ傾きがあつたが、『平治物語』には、それに對して一種の道義的企圖を以て事を敍したといふ傾きがあり、而して『平家物語』は、情的文學的の人生味に着眼して、榮

華に誇つた者の末路の哀愁を描く事に力點を置き、此の根本的企圖を成就する爲めに、一門他門の興隆、衰亡、戰爭、情事、其の他の一切を取扱つたかのやうに見える。要するに、軍記は『平家物語』に至つて、著しく複雜味と深刻味と人情味と有機的統一味とを加へることになつた、從つて『保元』『平治』に於いて戰爭本位、道義本位であつた軍記は、『平家』に於いて、人生本位の軍記となり、戰爭や道義をば、其の一部若しくは從部として取り入れた、一層高い意味の軍記となつたと云ふ事が出來る。私は此の點から見ても、『平家物語』が『保元』『平治』の二つの軍記の後に成つた事を信ずる者である。

第八　殿上の闇討（『保元』『平治』と『平家』との前後について）

一

『平家物語』は、廣くいへば、高望王が平姓を賜はり、忠盛が昇殿を許された抑から、淸盛の榮華を過ぎ、維盛の子の六代が斬られて、平家の子孫の長へに絕えるまでの事を書いたもの、狹くいへば、平治の亂以後に於ける淸盛の大我儘、平族の大榮華から、壇ノ浦の滅亡までを書いたもので、而して其の間に起こつたあらゆる事柄が、百川の海に注ぐが如く、中心基調たる盛者必衰の大哀音を助け成

すやうに書かれたものであるが、吾等のまづ第一に出會すのは、淸盛の父忠盛の出世物語、忠盛が破格の昇殿によつて、雲の上人から嫉まれ、而して彼等が嫉妬の奸計を武人の本領たる武力によつて取り拉いで、始めて社會的存在を認められた物語で、その本文は左の通りである。

然るに忠盛未だ備前ノ守たりし時、鳥羽ノ院の御願、得長壽院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一體の御佛を居ゑ奉らる。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には闕國を賜ふべき由仰せ下されける。折節但馬ノ國のあきたりけるをぞ下されける。上皇御感の餘りに、內の昇殿を許さる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。雲の上人これを猜み憤り、同じき年の十一月二十三日、五節豐明の節會の夜、忠盛を闇討にせんとぞ議せられける。忠盛此の由を傳へ聞いて、我れ右弼の身にあらず、武勇の家に生れて、今不慮の恥にあはん事、家の爲め身の爲め心憂かるべし。詮ずる所身を全うして、君に仕へ奉れといふ本文ありとて、かねて用意を致す。參內の初めより、大きなる鞘卷を用意し、束帶の下に、しどけなげに差ほらし、火のほの暗き方に向つて、やはら此の刀を拔き出だいて、鬢に引き當てられたりけるが、餘所よ

りは、氷などの樣にぞ見えける。諸人目をすましけり。又忠盛の郞等、本は一門たりし平の木工助貞光が孫、新の三郞大夫家房が子に、左兵衛尉家貞といふ者あり。薄靑の狩衣の下に、萠黄威の腹卷を着、絃袋つけたる太刀脇挾んで、殿上の小庭に畏つてぞ侍ひける。貫首以下怪みをなして、うつぼ柱より內、鈴の綱の邊に、布衣の者の候は、何者ぞ狼藉なり、疾う／＼罷出でよと、六位を以て言はせられたりければ、家貞畏つて申しけるは、相傳の主備前守殿の、今夜闇討にせられ給ふべき由承つて、其の成らん樣を見んとて、かくて候也、えこそ出づまじとて、又畏つてぞ候ひける。是等をよしなしとや思はれけん、其の夜の闇討なかりけり。

忠盛又御前の召に舞はれけるに、人々拍子を替へて、伊勢瓶子は酢瓶なりけりとぞはやされける。かけまくも忝く此の人々は、柏原天皇の御末とは申しながら、中頃は都の住居も疎々しく、地下にのみ振舞ひなつて、伊勢ノ國に住國深かりしかば、其の國の器物に事寄せて、伊勢平氏とぞ、はやされける。其の上忠盛の目の眇まれたりける故にこそ、加樣には拍されけるなれ。忠盛いかにすべき樣もなくして、御

遊も未だ終はらざる前に、御前を罷出でらるゝとて、紫震殿の御後にして、人々の見られける所にて、横たへさゝれたりける腰の刀をば、主殿司に預け置きてぞ出でられける。家貞待受け奉つて、扨いかゞ候ひつるやらんと申しければ、かうとも言はまほしうは思はれけれども、正しう言ひつる程ならば、やがて殿上までも、斬り上らんずる者の、面魂にてある間、別の事なしとぞ答へられける。

案の如く五節果てにしかば、院中の公卿殿上人、一同に訴へ申されけるは、夫れ雄劍を帶して、公宴に列し兵仗を賜はつて、宮中に出入するは、皆是れ格式の例を守る、綸命由ある先規なり。然るを忠盛の朝臣、或ひは年來の郎從と號して、布衣の兵を殿上の小庭に召し置き、或ひは腰の刀を横たへさいて、節會の座に列る。兩條希代未だ聞かざる狼藉なり。事既に重疊せり、罪科尤も逃れ難し。早く殿上の御簡を削つて、闕官停任行はるべきかと、諸卿一同に訴へ申されければ、上皇大きに驚かせ給ひて、忠盛を御前へ召して御尋ねあり。陳じ申されけるは、先づ郎從小庭に伺候のよし、全く覺悟仕らず。但し近日人々相巧まるゝ旨、仔細あるかの間、年

來の家人、事を傳へ聞くかに依つて、其の恥を扶けんが爲めに、忠盛には知らせずして、竊かに參候の條、力及ばざる次第なり。若し咎あるべくは、彼の身を召し進ずべきか。次ぎに刀の事は、主殿司に預け置き候ひ畢んぬ。是れを召し出だされ、刀の實否に依つて、咎の左右行はるべきかと申されたりければ、此の儀尤も然るべしとて、いそぎ彼の刀を召し出だいて叡覽あるに、上は鞘卷の黑う塗つたりけるが、中は木刀に、銀箔をぞ押いたりける。當座の恥辱を遁れんが爲めに刀を帶する由顯はすと雖も、後日の訴訟を存知して、木刀を帶しける、用意の程こそ神妙なれ。弓箭に携はらん程の者の謀には、最もかうこそあらまほしけれ。兼ねては又郎從小庭に伺候の事、且うは武士の郎等の習ひなり、忠盛が咎にはあらずとて、却つて叡感に預つし上は、敢て罪科の沙汰はなかりけり。

二

語釋 然るに。章の初めに不穩當なやうであるが、『平家』は、もと長く連綿と本文を書き續けて、出來た後に處

處を切つて、「見出し」を置いたものであるから、これはもと、前章の末なる「殿上の仙籍をば未だ許されず。」とあるのを受けて、「然るに」と云つたのであらう。○勸賞。「けんじやう」と讀む、後人を勸め勵ます爲めの賞與といふ意。○闕國。國守の闕けた國、即ちあいて居る國。○雲の上人。概して三位以上を公卿、上達部、月卿などいひ、四位以下昇殿を許されたるを、殿上人、雲客、雲の上人などいふのであるが、こゝは公卿殿上人全體をさしたのであらう。○五節豐明の節會の夜。陰暦十一月中の丑の日に行はるゝ女樂。天武天皇が吉野の瀧の宮に幸して琴を彈かせられた時に、天女が天降つて、羽衣の袖を五たび飜して舞つた、それが此の舞の起原なので、五節といふと云ひ、或ひは五人の舞姫が出る故に云ふともいふ。けれども大嘗會には五人、常の新嘗祭には四人の例であるから、さうではあるまい。遲、速、本、末、中聲を聲の五節といふ所から來たといふのが本當らしい。此の歌舞の儀があつて後に、宮中で宴を賜はる。之れを豐明といふ。酒に醉ふと、顏がボウツとあかるくなり、豐かに福々しくなるから云つたのである。深く醉ふ所から「淵醉」とも云つて、宴中には餘興の隱し藝などを自由にやる例であつた。「伊勢瓶子」の歌なども、其の餘興の一つである。○右弼の身。異本に右筆と書いたものもあるが、政治を右くる文官の身分といふ事であらう。○本文。もと註釋などの如き添加の部分に對する基本の文章といふ意であつたが、轉じて古典の中にある、修身處世の手引となるべき權威ある古聖賢の言句を言ふ樣になつた。こゝも其の意味であるが、何書にある誰れの言か、はツきりしない。○武勇の家に生れ云々。ブョウと讀んだ。武力のない長袖の文弱者流ならば、辱められて、へこたれても左迄苦しくはあるまいが、武人の家に生れながら、先見の明がなく、うツか

りして豫期せざる恥辱に逢ふといふ事は、家の爲めにも身の爲めにも忍ばれぬ、これは武士道の示す所により、身を全うして君に奉公するより外に仕方がないといふ意。○大きなる鞘卷。鍔の無い短刀で、「さうまき」とも云つた。鞘を細い革で卷いて、漆で塗り堅めて拔けぬ樣にしたものともいひ、或ひは下緒を鞘に卷き、帶に結びつけて、拔く時に鞘が刀について拔けぬやうにしたものともいひ、或ひは鞘に刻み目をつけて漆で塗つたものとも云ふ。案ずるに、鍔の無い隱し刀の、たとへば鎧の腹卷にも比すべき輕便本位のもので、刀について鞘の拔けぬ爲めに、或ひは鞘を革で卷き、或ひは刻み目をつけ、或ひは緒を卷きつけるなど、色々の工夫をしたのであらう。白鞘卷、黑鞘卷、朱鞘卷などの種類のあつた所を見ると、色ある緒を鞘に卷きつけるのが、代表的特色であつたやうに見える。長門本には「一尺三寸の黑鞘卷」としてあるが、これは流布本が抽象的に「大きなる鞘卷」と云つてあるのに飽き足らずして、具體的に寸法を明示したのであらう。「黑」と云つたのは、やはり目に立たぬ色彩を具體的に見せたのであらう。○束帶の下にしどけなげに差しほらし。本來は束帶の下に隱しざしにするのであるが、わざとだらしない樣子をして、見せびらかして、公卿達にそれと悟らしめたといふ事。○やはら此の刀を拔いて。じつ〱と落つき拂つて拔いて見せたといふ事。「さしほらし」、「やはら」などいふ、是等の特別な詞を見ると、忠盛の特別な心持を寫す爲めに、作者が苦心して言葉選みをしたことがわかる。「諸人目をすましけり」なども、忠盛の底氣味わるい態度が武事に慣れぬ公卿達の魂をヒヤリとさせた趣が見えて面白い。○絃袋。絃卷（つるまき）ともいふ。弓弦（ゆづる）が切れた時の用意に、換（か）への弓弦を小さく輪に作つて太刀に附けておくもので、後には弓を持たぬ時にも、飾りのあしらひとして、太刀

に附ける樣になつたのである。丁度お菓子の「ドウナッツ」のやうな形のもの。○貫主。藏人頭、卽ち宮殿整理係の長である。○うつぼ柱。淸凉殿の殿上間の階段の際にある太い角柱。樋から落ち下る雨水を受ける爲め、中をうつろにしてある故にいふ。○鈴の綱。藏人が小舍人を呼ぶ時に引く爲め、殿上間から校書殿に渡してある綱のこと。○布衣の者。六位以下の着用する無紋の狩衣。○相傳の主。父祖から代々主君と仰いで來た人。○ならん樣。闇討にされた結果の先途を見屆け、死生を共にせんとて、の意。○是等をよしなしとや思はれけん。「是等を」は、少し言葉が足らぬやうであるが、前に叙した是等の樣子により、自分等の計畫をだめだと思れたのであらう、」といふのであらう。○拍子を替へて。拍子に連れる文句を替へての意で、同じ語路の、別な文句を歌つたといふ事。○伊勢瓶子は酢瓶なりけり。流布本に從つて「瓶子」、「酢瓶」と書いたが、本當は「へいし」「すがめ」と書くべきで、「へいし」が瓶子、平氏に通じ、「すがめ」が酢瓶、眇をかけた事は、いふまでもない。又「すがめ」は「めッかち」「藪にらみ」兩方を意味して、いづれか不明であるが、こゝは多分やぶにらみの意であらう。○かけまくも忝く。口の端に掛けて申すも恐れ多い柏原天皇。「柏原」は御陵の所在地について申したので、桓武天皇の御事。○中頃は都の住居もうとうとしくて。皇胤ではあるが、臣下に降つてから忠盛に至るまでの中頃は、都にも緣遠くなり、昇殿も叶はぬ地下人として過ごし暮らすやうになつて、伊勢に長く住みついたといふ事。「うと〱しく」、「振舞ひなつて」、「住國深く」などは、多分當時の慣用語であらうが、よく場合相應に活かして使つてある。「住國深く」など、今日から見ると變な言葉だが、「田舍住みが長く深くなつたので」といふことで、當時に於いては、替へられぬ味の言葉であつ

たのであらう。○御遊。廣くは遊び事全體にわたつていふが、遊びの中、管絃歌舞が最も面白いので、大抵の場合は、管絃の或ひは歌舞の御遊の事をいふことになつてゐる。○播磨よねは、木賊か、むくの葉か、人のきらを磨くは。「播磨よね」は何を意味するか明らかでない。近松巣林子の淨瑠璃に「よねが情の底深き」、「よねの風俗揚屋のかゝり」などあつて、「よね」は遊女の事に用ゐられてゐるから、或ひは播州室の津の遊君卽ち「室君」のことでもあらうか。木賊、椋の葉は指物屋などが細工物を磨りみがいてつやを出す料である。卽ち大意は

　播州はりまの女郎殿樣は、木賊とのさま、椋の葉さまよ、調度磨かで琢みがく、琢みがく。

といふやうな味であらう。○雄劍。束帶に添ふべき飾りの、蒔繪の細太刀ではなく、雄々しい人斬庖刀を帶してゐたといふ事。○格式の例。律令格式と熟して、令は豫め國民に示しおく根本法令のこと、式は職に居る者の、それぞれ務め行ふべき次第を記したるもの、律はその令式を犯した者を刑する制度、格は令、式、律を改正した追加發布を集めたもの。○綸命由ある先規なり。勅命によるべき由緒のある、昔からの儀例だといふ事。○事既に重疊せり、罪科尤も逃れ難し。平安朝に行はれた六朝駢麗體のくづれで、當時尊ばれた文章の一體。「既に」「尤も」など と、對句を疊んだ所が愛でられたのであつた。○陳じ。辯解する事で、今の釋明にあたる。○先づ郎從小庭に伺候のよし、全く覺悟仕らず。但し近日人々相巧まるゝ旨、仔細あるかの間、年來の家人事を傳へ聞くかに依つて、其の恥を扶けんが爲めに、忠盛には知らせずして、竊かに參候の條、力及ばざる次第なり。若し咎あるべくは、彼の身を召し進ずべきか。次ぎに刀の事は、主殿司に預け置き候ひ畢んぬ云々。變な文章であるが、これは漢文と俗語

との馴れ合つた當時の公文書の文體で、例へば、當時の幕府の日記なる『吾妻鏡』などの文章は、そツくり此のままを行つてゐる。此のぎツくり、しやツくりした嵯峨落々たる所が、當時の武人の心意氣を現はすに最も適してゐたのであらう。本來、『平家物語』には、王朝の假名文體、漢文體、俗語體、公文書體など、いろ〳〵の文體が入り交つてゐて、それら種々の文體の調和が、必ずしも立派に出來てゐない嫌ひはあるが、不調和ながらに、各文體の面白く活きてゐる所は、また捨てられぬ味である。試みに之れに似通つた『吾妻鏡』の一節を引いて見ると、

（畠山重忠、由利八郎に向ひ）　貴客生虜の號を蒙らしむと雖も、始終沈淪の恨みを貽すべからざる歟。奥六郡の內に、貴客は武將の譽れを備ふるの由、兼ねて其の名を留むるの間、勇士等勳功を立てむが爲めに、客を搦め獲るの旨、互に相論に及ぶか。仍つて甲を云ひ、馬の毛付を云ひ畢んぬ。彼等が浮沈此の事に究まるべき者也。

（文治二年四月）八日　乙卯　二品（賴朝）并御臺所（政子）鶴岡宮に御參あり。次を以て靜女を廻廊に召出ださる。是れ舞曲を施さしむべきに依つて也。此の事去る頃、仰せらるゝの處、病痾の由を申して參らず。身不屑に於いては、左右に能はずと雖も、豫州（義經）の妾たり、忽ち掲焉の砌に出づるの條、頗る恥辱の由、日頃內々之れを

澁り申すと雖も、彼れ既に天下の名仁也。適〻參向して歸洛近きに在り、其の藝を見ざるは無念の由、御臺所頻りに以て勸め申さしめ給ふの間、之れを召され、偏に大菩薩の冥感に備ふるの旨仰せらる云云。近日、只別緒の愁あり、更に舞曲の業なき由、座に臨んで猶ほ固く辭す。然而貴命再三に及ぶの間、なまじひに白雪の袖を廻らし、黃竹の歌を發す。左衞門尉祐經鼓うつ。是れ數代勇士の家に生れて、楯戟の基を繼ぐと雖も、一﨟上日の職を經、おのづから歌吹の曲に携はるの故に、此の役に候する歟。畠山二郎重忠、銅拍子たり。靜先づ歌を吟じ出だして云はく、

　吉野山峯の白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ戀しき。

次ぎに別物の曲を歌ひて後、又和歌を吟じて云はく、

　しづやしづ賤のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな。

誠に是れ社壇の壯觀、梁塵殆んど動きつべし。上下皆興感を催す。二品仰せに云はく、八幡宮の寶前に於いて、藝を施すの時、尤も關東萬歲を祝すべきの處、聞召す所を憚らず、反逆の義經を慕ひ、別曲を歌ふ、奇怪なり云云。御臺所報へ申されて

云はく、君流人となつて、豆州に坐し給ふの頃、吾に於いて芳契ありと雖も、北條殿時宜を怖れ、潜かに之れを引き籠めらる。而れども猶ほ君に和順して、暗夜に迷ひ、深雨を凌いで君の所に到る。亦石橋山の合戰に出で給ふの時、獨り伊豆山に殘留して君の存亡を知らず、日夜魂を消す。其の愁を論ずれば、今の靜の心の如し。豫州の多年の好みを忘れ、戀慕せざるは貞女の姿に非ず。外に形るゝの風情を寄せて中に動くの露膽を謝す、尤も幽玄と謂つつべし。枉げて賞翫し給ふべしと云云。時に御憤りを休め給ふと云云。少時して御衣(卯華重)を簾中より押出して、之れを纏頭せらる云云。

語釋　生虜の名を蒙らしむと雖も。當時の特別な使ひざま、「捕虜の汚名を蒙り給ふと雖も」といふことで、一種の敬語。○身不屑、掲焉の砌云々。「身不屑」は「身不肖」であらう。「左右に能はず」の「に」は當時の特別な使ひざまで、「返答すること能はず」、「思案する能はず」といふ事を、當時は「返答に能はず」、「思案に能はず」と云つたのである。「掲焉の砌」は「衆人群集の晴れやかな折からに」といふ意。大意は、不肖の私自身としては、かれこれ申上ぐべきでありませぬが、苟も伊豫守義經公の妾であつた者が、突然かやうな晴れやかな座に出でて、衆人の前に面をさらすといふのは、甚だ恥辱に思ひまするといふ事。○名仁。歌舞の名人の意。○大菩薩の冥感に備ふ。當社八幡大菩薩を

御慰め申す爲めに歌舞を奏せよといふ事。冥感は人の耳目に觸れぬ暗々裡の神感といふ事。○近日只だ別緒の愁ひあり、更に舞曲の業無き由。つい此頃判官義經に別かれたばかりで、心が悲みに鎖されて、舞曲を奏するなどいふ心持にはなれぬといふ事。此の「只だ」「更に」などいふ對偶振が「殿上闇討」の「事既に重疊せり、罪科尤も逃れ難し」の對偶振と同じく、當時流行した六朝駢麗文の流れの姿である。○北條殿時宜を怖れ、潜かに之れを引き籠める。父の北條時政が、時世がら平家に憚り、政子を頼朝と遠ざからせて他に嫁せしめようとした事を、ぼんやりと述べたのであらう。○外に形るゝの風情を寄せ、中に動くの露膽を謝す、尤も幽玄と謂つつべし。文飾がやゝこしくてよく解らないが、大體は、我が胸の中に燃え盛つて居る判官戀しやの情を、そのまゝ露骨に表はすことを控へ、歌舞の風流に託して暗示的にほのめかしたのは、誠に奥床しい心根だから、枉げて賞めておやりなさい、といふことであらう。「幽玄」は當時特別の意味に使はれたので、言外に餘情のある奥床しさをいふ。神祕的の意味ではない。○鴨長明が『無名祕抄』に、「幽玄の體、まづ名を聞くよりまどひぬべし。……よく境に入れる人々の申されし趣は、詮はたゞ詞にあらはれぬ餘情、姿に見えぬけしきなるべし。心にもことわり深く、言葉にも艶きはまりぬれば、ただ德はおのづからそなはるにこそ。たとへば秋の夕暮の空のけしきは、色もなく聲もなし、いづくにいかなる故あるべしとも覺えねど、すゞろに涙のこぼるゝが如し。……又霧の絶え間より秋の山を眺むれば、見ゆる所はほのかなれど、奥ゆかしく、いかばかりもみぢわたりて、面白く侍らんと、限りなくおしはからるゝ面影、ほとほと定かに見むよりもすぐれたるべし。……一ことばに多くのことわりを籠め、現はさずして深き志をつくし、見ぬ世の事

を面影にうかべ、いやしきをかりて優なるをあらはし、おろかなるやうにたへなる道理を極むればこそ、心も及ばず、言葉も足らぬ時、これにて思ひをのべ、わづかに三十一字がうちに、天地を動かす德を具し、鬼神をなだむる術にては侍れ。」と書いてある。これは三十一文字の和歌について言つたことではあるが、和歌のみならず、王朝の物語の作者も、『平家』や謠曲の作者も、皆之れを理想としてゐたので、これがまた當時の嗜みある上流の生活の理想でもあつたので、また當時の人に考へられた「幽玄」の意味をこれほどはツきりと、面白く、同時に奧深く言ひ現はしたものはないと愚考するので、長きを厭はずに引いたのであります。○纒頭せらる。かづけもの、即ち御祝儀を賜はつたといふ事。

『吾妻鏡』の本文は漢字だけで、「偏可レ備二大菩薩冥感一之旨、被レ仰云云。近日只有二別緒之愁一、更無二舞曲之業一由、臨レ座猶固辭。」といふ風に書いてあるのを、こゝにはわざと、讀み下しに書いたのであるが、之れによつて『平家』の文章のおもなる一部分が、全く『吾妻鏡』と脈絡體樣を等しうして、同じ時代の烙印を捺されてゐることがわかるであらう。本來『吾妻鏡』は、當代第一等の史料であるのみならず、武士道成立時代ともいふべき此の時代の武人の心意氣を、最も妥當に、活き〳〵と、面白く傳へて居る一種の文學で、其の或る部分は一種の軍記とも見るべきものである故に、わざと聊か長い一鎖を引いて見たのである。○さて「平家」の方の「語釋」に立ち還つて、○刀の實否に依つて。ホントの刀かどうかといふことを確めた上で。○刀を帶する由顯はすと雖も。「顯はす」は「白狀した」、「明言した」、「恥辱を蒙らぬ爲めに、刀を帶した」といふ次第を尋常に申上げたが、といふ意。○訴訟を存知して。

訴訟の起こる事を豫期し、慮つて。○且（かつ）うは。「かつう」と延べるのは、此頃から行はれた俗語、「一つは」、「一面に於いては」といふ意。○却つて叡感に預つし上は敢て罪科の沙汰は無かりけり。「却つて」「敢て」は、例の漢文崩れの公文書式の對句。意外の成功を皮肉に寫したので、大意は、御叱りを蒙るかと思ひの外、却つて御感を蒙つたのであるから、その上は、無論おし切つて罪なふなどいふ事はなかつたといふこと。

三

此の一章は、『平家物語』の中の代表的名文といふべき程のものではないが、軍記式の文章として大體整つて居る上に、俗語や（例へば「束帶の下にしどけなげにさしほらし」、「やがて殿上迄も斬上らんずる者の面魂（つらだましひ）にてある間」、「叡威に領かつし上は」など）、時樣漢文や（例へば「雄劍を帶して公宴に列し、兵仗を賜はつて宮中を出入す」、「竊に參候の條、力及ばざる次第也」、「預け置き候ひ畢（をは）んぬ」等）が入り込んで複雜味を加へて居る趣、樣式が複雜になりながら、まだ立派な調和統一の出來て居らぬ趣、調和が出來ぬながらに、潑溂たる生氣の漲つて居る趣、それが丁度武人の世が出來かゝり乍ら、まだ完成されぬ時代の心持に吻合して居る趣などを現はして居る點に於いて、一種の名文と見ることが出來るであらう。其の外にも、前段に說いた樣な武家時代的の多くの特色をも含んで居るが、私の

特に面白いと思ふのは、公卿の世が武家の世にならうとする廻轉期の時代感を意味深く暗示して居る事である。すべて、時勢が推移して權力の中心が變はらうとする時には、惰力によつて持ち耐(こた)へて來た在來の强者が、新興の階級＝實力がありながらまだ地位を與へられぬ、もとの弱者＝をば、恐れつつ猜みつゝ、とかくして其の伸展を妨げようとするものである。自己の門地を誇りつゝ、同時に自己の無力を恥ぢつゝ、陰謀によつて其の地位を保たうとするものである。又かやうな場合に於ける新興階級は、自己については、實力ある事を誇りつゝ、同時に門地の卑しき事を恥ぢ、相手の權門舊家に對しては、其の無力を侮りつゝ、同時に門閥の歴史的積威を羨むものであるが、此の「殿上闇討」の一章は、舊門閥家對新興階級、公卿對武人、藤原氏對平氏の間に於ける此の時代感を、まざ〳〵と見せて居るではないか。公卿の一味は我が無能無力を棚に上げ、新興階級の代表者が功勞によつて許された昇殿を猜んで、闇討の陰謀を企てた。そして銀箔を塗つた刀の光と、郎黨が命がけの護衛振とに驚いて、折角の企を抛棄したが、猶ほ御手の物なる平和藝術の歌舞道によつて、其の代表者を辱めた。彼等は歌舞の上で恥辱を與へたのに滿足せずして、更に闕官停任の訴訟をなしたが、此の藪蛇の訴訟は、却つて自己を低くし相手の信望を高める所以とはなつたのである。一方、忠盛は苦肉の謀と郎黨の護衛とによつて、危く闇討を免れたが、門地の卑しい悲しさには、尙ほ深刻なる平和的嘲笑を甘受

せざるを得なかつた。かやうに複雜な關係がありながら、降り坂の舊門閥者は、もがきながら、事ある毎に其の力を奪はれ、新興階級は常に迫害を受けながら、事ある毎に其の地位を高められる。公卿はかくして衰へ、武人はかくして起こつた、藤原氏はかくして亡び、平家はかくして榮えたのであるが、此の一章は、明らかにそれとこそ云はね、いかにも力強く面白く此の消息を寫し出だして居るやうに見える。

此の章の批評に因んで序に言ひたいのは、『保元』『平治』と『平家』との成立に關する先後の問題である。從來は『保元』『平治』が先に出でて、『平家』が後に出來たものとされて居たが、故藤岡作太郎博士は、之れに對して『平家』が先づ出でて『保元』『平治』が後に出來たといふ新說を立てられた。氏の論據は可なり複雜であるが、第一の據りどころは次ぎの一事であらう。氏はいふ。

平安末期世の中亂れて擾亂久しく續きたるが、その最も著しきは二十年間の平家の盛衰なり、淸盛、賴朝の政權の爭奪なり、花の如き平家の沒落なり。保元、平治の二亂の如きはこれに先だつて起これる小波瀾のみ、暴風の前の雲行のみ。然るにこれらの爭亂の後に出でてこれを寫さむとするもの、二十年の盛衰をさしおいて、先づ筆を保元、平治の爭亂につくるの理あらんや。この二書は未だ二十年の盛衰を見ざる者の筆とはいひ難し。……而してこれらの爭亂をすてゝ、先づ保

元、平治の小亂を寫すの理あらむや。思ふに著者は源平の大亂を記せる書を見て、これに倣ひて未だ手をつけられざりし保元、平治の亂を寫せるものならむ。これによつて、余は斷然保元、平治物語を平家物語の前なりとの說を非とす。

新しい說で、いかにも面白い着眼である。けれども、私は矢張、在來の說に同じて、『保元』『平治』を先、『平家』を後と信じて居る。その理の一つは、『平家物語』を見ると、この「殿上闇討」の次ぎに、「鱸」といふ見出の一章があつて、初めに忠盛が歌と戀との挿話を記し、五十三歲で歿した事を記して居り、而して、其の次ぎに、

> 淸盛嫡男たるに依つて、其の跡を繼ぎ、保元元年七月に、宇治の左府、世を亂り給ひし時、御方にて先を懸けたりければ、勸賞行はれけり。本は安藝守たりしが、播磨守に遷つて、同じき三年に太宰大貳になる。又平治元年十二月信賴義朝が謀叛の時も、御方にて賊徒を討ち平げたりしかば、勳功一にあらず、恩賞是れ重かるべしとて、次ぎの年正三位に敍せられ、打ちつゞき宰相、衞府督、撿非違使別當、中納言、大納言に經上つて、剩へ丞相の位に至る。

と記して、直ちに淸盛及びその一門が空前の榮華に誇つた事の敍述に移つて居る。抑〻、平家の榮華の源を尋ねて、桓武以來六代の系圖に及び、忠盛が三十三間堂の造營、殿上の闇討から、歌や戀の挿話

迄を細かに書き記した『平家』の作者が、又、清盛が太政大臣となり、入道して後の横恭な生活の消息をば、あれ程細かに叙述した『平家』の作者が、平家興隆の大關門大轉機とも云ふべき、大切な保元、平治の大亂をば、どうして僅々數行百數十字の間に叙し去つたのであらうか。私はこれをば『保元』『平治』二つの物語が、既に存在してゐたからの省略であつたと考へる。藤岡博士は、平家二十年の盛衰を見た者が、まづ筆を保元、平治の小爭亂に着ける筈がないと云はれるけれども、それは見やう考へやう次第の事で、年代順にまづ「保元の亂」、次ぎに「平治の亂」、而して後に、一の谷、屋嶋、壇の浦と書き進むに於いて、何の不思議もない筈であらう。又『保元』『平治』の作者が、『平家』の少なくとも一部を書いたと假定するにしても、保元、平治の二亂は、『平家』の中に含め束ねて書くには餘りに、惜しい勿體ない題材であると考へて、此の二大亂を別々に書き、これで筆馴らしをして、更に平家盛衰の大作に取掛つたと見ても、更に差支のない事である。それに又卷頭の序章に「康和の義親、平治の信頼」と書いてあるのが、いかにも「平治の亂」をば、一代前の歴史的の事實、已に一篇の歴史物語に取り纒められてある事柄として取扱つて居るやうな趣を見せて居り、また意圖脚色の上から見ても、戰爭本位の『保元』、道義本位の『平治』から、『平家』の人生本位、藝術本位に進んで來た趣があり、少なくとも『平家』に至つて、著るしく複雜味、深刻味、有機的統一味の加はつて來た趣があり、かたがた、私

は『保元』『平治』と『平家』とが、同じ作者の手に成つたと否とにかゝはらず、『保元』『平治』が先づ出て、『平家』がこれに次いで現はれたと考へるのである。

第九　明月に鞭を揚げて

一

『平家物語』の趣味は複雜多岐で、簡單には盡くし難いが、その一つは硬性、軟性の、言ひ換へれば、男性的、女性的の題材が入り交つて、豐かな變化を見せて居る所にあるであらう。入道淨海が抑へ切れぬ活動性の誘唆に任せて、大膽不敵の横車を押す間に、祇王祇女や、佛御前や、葵前や、小督局やの優しい哀れな話が織りませられ、源平の勇士等が命を露にたぐへて戰場に勝を爭ふ間に、小宰相、千手、横笛等の涙を誘ふ物語がちりばめられるといふ類ひの事が、いかに此の物語に美しさと面白さとを添へて居るかは、特に說明を要せぬ事であらう。まことに、この優しい女性的部分は、『平家物語』の最も味はひ深き美の一面を構成するものであるが、此の小講話で、長い例を引くことは思ふに任せぬので、こゝにはたゞ卷第六なる、彈正大弼仲國が小督の局を嵯峨の山里にたづねる條の一節を引い

て見ることにする。

頃は八月十日餘りの事なれば、さしも隈なき空なれども、主上は御淚に曇らせ給ひて、月の光も朧にぞ御覽ぜられける。やゝ深更に及んで、人やある人やあると召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝあつて彈正大弼仲國、その夜しも御宿直に參つて、遙かに遠う候ひけるが、仲國と御いらへ申す。汝近う參れ、仰せ下さるべき旨ありと仰せければ、何事やらんと思ひ、御前近うぞ參じたる。汝もし小督が行方や知りたると仰せければ、いかでか知り參らせ候べきと申す。誠や小督は、嵯峨の邊片折戶とかやしたる內に、ありと申す者のあるぞとよ。主が名をば知らずとも、尋ねて參らせてんやと仰せければ、仲國主が名を知り候はでは、いかでか尋ね逢ひ參らせ候べきと申しければ、主上げにもとて、御淚せきあへさせ坐さず。仲國つく〴〵物を案ずるに、誠や小督の殿は、琴彈き給ひしぞかし。此の月の明さに、君の御事思ひ出で參らせて、琴彈き給はぬ事はよもあらじ。內裏にて彈琴き給ひし時、仲國笛の役に召され參らせしかば、其の琴の音は、いづくにても聞き知らんず

るものを、嵯峨の在家幾程かあらん、打廻つて尋ねんに、などか聞き出ださである
べきと思ひ、さ候はゞ、主が名は知らず候とも、尋ね参らせ候べし。たとひ尋ね逢
ひ参らせて候とも、御書など候はずは、浮の空とや思召され候はんずらん。御書を
賜はつて、參り候はんと申しければ、主上げにもとて、やがて御書遊ばいてぞ下さ
れける。寮の御馬に乗つて行けと仰せければ、仲國寮の御馬賜はつて、明月に鞭を
揚げ、西を指してぞ歩ませける。小鹿鳴く此の山里と詠じけん、嵯峨のあたりの秋
の頃、さこそは哀れにも覺えけめ。片折戸したる屋を見つけては、此の内にもや坐
すらんと、控へ〳〵聞きけれども、琴弾く所はなかりけり。御堂などへも參り給へ
る事もやと、釋迦堂を始めて、堂々見廻れども、小督の殿に、似たる女房だにもな
かりけり。空しう歸り參りたらんは、參らざらんより、なか〳〵惡しかるべし、こ
れより何地へも、迷ひ行かばやとは思へども、いづくか王地ならぬ、身を隱すべき
宿もなし、いかゞせんと案じ煩ふ。誠や法輪は程近ければ、月の光に誘はれて、參
り給へることもやと、其方へ向いてぞあくがれける。龜山の傍近く、松の一村ある方

に、幽かに琴ぞ聞こえける。峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺束なくは思へども、駒を早めて行く程に、片折戸したる內に、琴をぞ彈き澄まされたる。控へてこれを聞きければ、少しも紛ふべうもなく、小督の殿の爪音なり。樂は何ぞと聞きければ、夫を想うて戀ふと詠む、想夫戀といふ樂なりけり。仲國さればこそ、君の御事思ひ出で參らせて、樂こそ多けれ、この樂を彈き給ふ事の優しさよと思ひ、腰より橫笛拔き出だし、ちつと鳴らいて、門をほと〳〵と敲けば、琴をばやがて彈き止み給ひぬ。是れは內裏より仲國が御使に參りて候。開けさせ給へとて、敲けども〳〵、咎むる者もなかりけり。やゝ有りて、內より人の出づる音しけり。嬉しう思ひて待つ所に、錠をはづし門を細目に開け、幼氣したる小女房の、顏ばかりさし出だいて、是れは左樣に內裏より、御使など賜はるべき所でも候はず、もし門違へにてぞ、候らんと言ひければ、仲國返事せば、門たてられ錠さゝれなんずとや思ひけん、是非なく押開けてぞ入りにける。妻戸の際なる緣に居て、何とてかやうの所に、御渡り候やらん。君は御故に、思召し沈ませ給ひて、御命も旣に危くこそ見え

させましまし候へ。かやうに申さば、浮の空とや思召され候らん。御書を賜はつて參つて候とて、取出いて奉る。ありつる女房取次いで、小督の殿にぞ參らせける。これを開けて見給ふに、誠に君の御書にてぞありける。やがて御返事書いて引き結び、女房の裝束一重添へてぞ出だされたる。

語釋 高倉天皇は小督局を特別にいとしませられた。小督はもと、淸盛の女なる中宮から進められた女房であつたが、帝の御寵愛が目に餘るほどであつた爲め、又淸盛の聟なる冷泉少將が彼女に思ひを懸け、成らぬ戀に死ぬばかり歎いて居るので、淸盛は一人の女に二人の聟を取られてはと立腹して、小督を召出だして失はうとした。小督はこれを聞いて、密かに宮中を遁れ出でて行方を晦ました。主上はそれ以來、物思に沈んで歎きくらし泣き明かして居させられたが、八月十日過ぎの明月の夜に、御思ひ餘つて、仲國に小督を尋ねることを命ぜさせられた。心當たりはたゞ、嵯峨の邊の片折戸したる賤が屋に居るといふだけである。仲國は一たびは當惑したが、局は今夜の明月に必ず琴を彈くであらう、その琴の音色にはきツと覺えがあるといふので、宸翰を賜はつて、明月に鞭をあげて出かけたといふのである。○寮の御馬。寮は左右馬寮と云つて、其の道の役人をおいて、御料の馬を飼つて置かれる役所がある。その朝廷所屬の御厩の馬を拜領して行つたといふこと。「御馬」は「ミムマ」「オンウマ」など振假名した本もあるけれども、「オンマ」と讀んだのであらう。『平家』は語り物で、かういふ讀み方や口調には、なか〳〵や

かましかつたのである。「明月に鞭を揚げ、西を指してぞ！」何といふ美しい文句であらう。○小鹿鳴くこの山里。藤原基俊朝臣の「小鹿なくこの山里のさがなれば悲しかりける秋の夕暮」といふ歌を踏まへたので、この歌の「悲しかりける秋の夕暮」の意を含めて、「さこそは哀れにも」と云つたのである。「控へ〳〵」は、手綱を控へて、馬を駐め駐め耳を澄ましたといふこと。○御堂、釋迦堂、堂々。「釋迦堂」は清凉寺の伽藍の一。「御堂」は釋迦堂、文珠堂、大日堂など、「堂」といふ稱のつく伽藍を總稱したので、さういふ、女人の籠りさうな堂々を、一々廻つて見たが、本人の小督はもとより、似よつた女房さへ居なかつたといふこと。○なか〳〵惡かるべし。例の「却つて」の意で、折角勅命を奉じて來ながら、尋ねかねて空しく歸つては、却つて來ぬに劣るであらう、といふ事。この「なか〳〵」を、琵琶の方では「ナァ〳〵」と讀むのなさうである。○迷ひ行かばや。逃げて行つて身を隱さうか、といふ事であるが、逃げたところで、かやうな大任をおろそかにして隱れるのでは、三界に身の置きどころなき迷ひ子にならねばならぬといふ心持を、豫め取り入れた微妙な文致である。かういふ文字の使ひ方一つで、文章が簡潔になり、含蓄があり美しくなつて來るのである。○誠や。「ホントにさうであつたつけ」といふので、「おや！」と思ひ出した感投詞的の心持。○法輪。法輪寺といふ寺の名を略したのである。○其方へ向いてぞあくがれける。いろ〳〵の物思に心も空になつて、ぼんやりと其の方へ向いたといふこと。「行く」といふ事に特別の餘情をもたせた味。○松の一村。「一むら」は一群の意であるが、松の一村といふのは、此の時代の使ひさまでは、松林の事ではなく、唯だ數本、數十本松の叢れ立つて居る所といふ意である。○峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か。實にうまい美しい文句で

ある。謠曲などでは、此處が心持を現はすために、特に苦心を要する所になつて居るが、平家でもさうであらう。○ちつと鳴らいて、門をほと〳〵と敲けば。屋の内なる琴に合はせ、笛を一寸鳴らして、相手に一種の心設けをさせ、それから門を叩いたといふのであらう。風流者の嗜みを見せて、いかにも面白い。○咎むる者もなかりけり。聞き耳を立てゝ、「誰人?」と言ふ者もなかつたといふ事。やりこめる者がないといふのではない。

二

松の一村ある方に、かすかに琴ぞ聞こえける。峯のあらしか松風か、たづぬる人の琴の音か、覺束なくば思へども、駒を早めて行く程に、

改めて評にも及ばぬであらうが、實に美しく、と云つてわざとらしい所は少しもなく、いかにも自然に無駄がなく出來て居る。

などいふ句の運びは、すつかり七五調になつて居るが、それでゐて、後世の七五調文章に見るやうな、七五くさい厭味が少しもなく、隣接した違つた調子の文句に、よく馴染んで、すつかり落ちついて居る所、一種の妙味である。殊にたまらなく面白いのは、全體が自然になだらかに出來てゐる間々に、いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ、すばらしい名句が瞳のやうに光つて居る事である。それは例へば、「明月に鞭を揚げ」や、「峯の嵐か松

風か、尋ぬる人の琴の音か」の類ひであるが、かういふ文句の讀者に與へる感銘はえらいもので、人に譬へれば、丁度、美人の眼のやうな役廻りをして居ると云つてもよい。金春氏信の作と云はれる名高い謠曲の「小督」の此の部分は、左の通りで、

牡鹿なく、此の山里と、詠めける、嵯峨野の方の秋の空、さこそ心も澄みわたる片折戸をしるべにて、明月に鞭をあげて駒をはやめ急がん。賤が家居の假なれど、もしやと思ひ爰かしこに、駒をかけよせかけよせて控へ〳〵聞けども琴ひく人はなかりけり。月にやあくがれ出で給ふと、法輪に參れば琴こそ聞こえ來にけれ。峯の嵐か、松風かそれがあらぬか、尋ぬる人の琴の音か樂は、何ぞと聞きたれば、夫を思ひて、戀ふる名の想夫戀なるぞ嬉しき。シテ詞「疑ひもなき小督の局の御調にて候。いかに此の戸明けさせ給へ。(句讀は寶生流に從ふ)

と書いてあるが、「語り物」が「謠ひ物」になつて、より多く調子づいたといふだけで、要所々々は『平家』の本文そのまゝを取つて居るのを見れば、名句好みの謠曲作者も、すつかり此の文の名文振に叩頭したのであらう。此の文が、王朝文を鎌倉式に耳近くし、鎌倉調でありながら、しかも上品に磨き上げて、いかにも内容に相應はしく、悲壯で、艶麗で、同時に哀切な情味を現はしたのはえらいと云はねばならぬ。情景の轉じ〳〵進んで行く趣、地の文と詞との續き離れの工合なども、實にうまいも

のである。

祇王や、小宰相や、千手や、横笛や、大原御幸の女院やに關する叙述の文章の面白味なども、之れに準じて味はひて戴きたい。

第十　過分の太政大臣

一

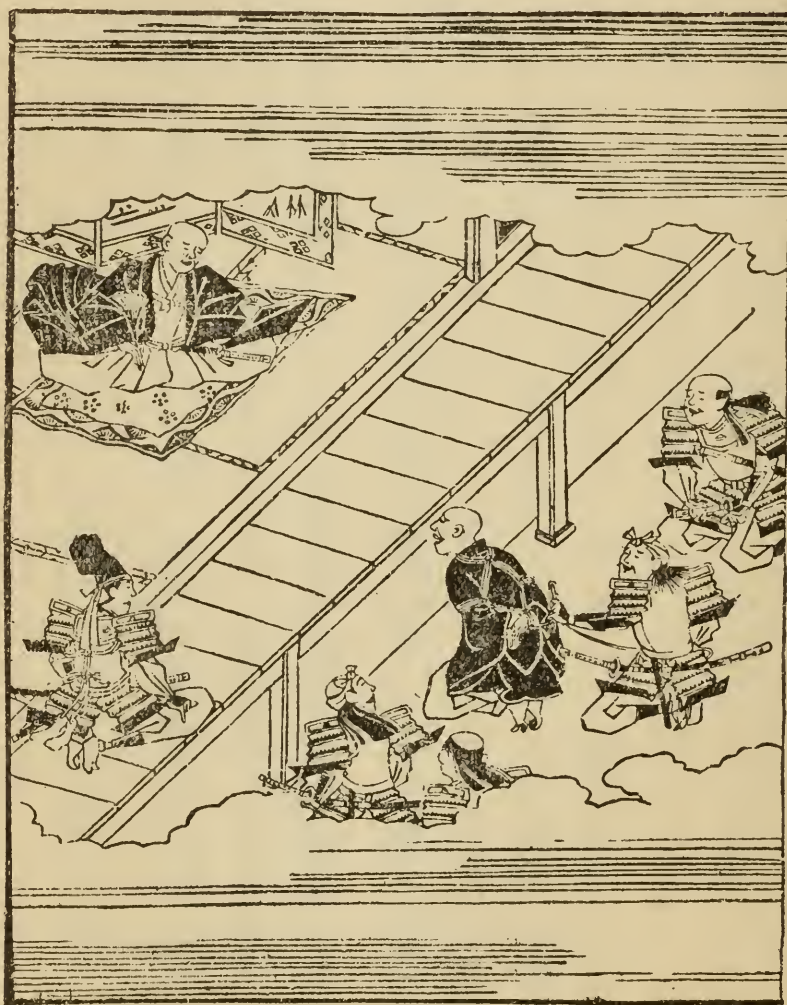
『平家物語』の趣味のもう一つは、『平家』全體の根本中心の味と同じ質の物語を積み重ねて、その根本中心の味を廣くし、深くし、厚くし、高くし、大きくした事である。事實でいへば、妓王、俊寛、成親、西光、攝政基房、叡山の座主、木曾義仲等の、大いに榮えて忽ちに衰へた、小さき榮枯盛衰の挿話を前置として、最後に六十餘州に蟠踞した奢る平家の倒壞を、高調子に寫した事である。私は此の榮枯急轉の準備挿話の一つとして、成親、俊寛等の謂はゆる謀叛に關する一二篇を引きたいと思ふ。

まづ「西光被斬」の一節を引いて見る。さる程に、清盛の横暴に對する不平や、新大納言成親の野心などが原因となつて、成親、俊寛、康頼、成經、西光、行綱等が、後白河法皇を奉じて、平家一門

を傾けようと企てた。そして其の謀が圖らずも、第一に力と頼んだ多田藏人行綱が返忠から漏れて、先づ張本人の成親が捕へられ、次ぎに俊寛、康頼等が捕へられ、つゞいて智辯膽力當代無双の西光法師が捕はれて、西八條なる平家の第に引き居ゑられた。此の時に於ける清盛と西光とが思ひ切つた暴言惡罵の應酬は、男性的なる兩雄の正面衝突の痛快なる光景を見せて居るが、さういふ方面の描寫としては、恐らく此の物語の前後に通じて類ひなきものであらう。

西光法師此の由を聞いて、我が身の上とや思ひけん、鞭を打つて急ぎ院の御所へ參る。六波羅の兵ども、道にて行き逢ひ、西八條殿より召さるゝぞ、急度參れと言ひければ、是れは奏すべき事あつて、院の御所へ參る。やがてこそ歸り參らめと言ひければ、惡い入道めが。何事をか奏聞すべかんなるぞとて、しや馬より取つて引き落し、中に縛つて西八條殿へ提げて參る。日の始めより根原與力の者なりければ、殊に强う縛めて、御坪の內にぞ引つ居ゑたる。入道相國大床に立つて暫し睨まへ、あな惡や當家傾けうとする謀叛の奴がなれる姿よ。しやつ爰へ引き寄せよとて、緣の際へ引き寄せさせ、物履きながら、しや面をむず／＼とぞ踏まれける。本より己

等が樣なる下﨟の果を、君の召使はせ給ひて、成さるまじき官職を成したび、父子ともに過分の振舞をすると見しに合はせて、過たぬ天台座主流罪に申し行ひ、剰へ當家傾けうとする謀叛の輩に與してげるなり。有りのまゝに申せとこそ宣ひけれ。西光本より勝れたる大剛の者なりければ、ちとも色も變ぜず、惡びれたる氣色もなく、居直りあざ笑つて申しけるは、院中に近う召使はるゝ身なれば、執事の別當成親卿の、軍兵催され候事にも、與せずとは申すべき樣なし。それは與したり。但し耳にあたる事をも宣ふものかな。他人の前は知らず、西光が聞かんずる所にては、左樣の事をばえこそ宣ふまじけれ。抑ゝ御邊は故刑部卿忠盛の嫡子にて坐せしが、十四五までは出仕もし給はず、故中御門の藤中納言家盛卿の邊に、立ち入り給ひしをば、京童は例の高平太とこそ言ひしか。然るを保延の頃、海賊の張本三十餘人、搦め進ぜられたりし勸賞に四品して、四位の兵衛佐と申しゝをだに、人皆過分とこそ申し合はれしか。殿上の交りをだに嫌はれし人の子孫にて、今太政大臣まで成上つたるや過分なるらん。本より侍ほどの者の、受領撿非違使に至る事、先例法例な

元祿版　繪本平家物語

きにしもあらず、なじかは過分なるべきと、憚る所もなう言ひ散らしたりければ、入道相國餘りに腹を居ゑかねて、暫しは物をも宣はず、良有つて入道宣ひけるは、しやつが首左右なう斬るな。よく糺問して事の仔細を尋ね問ひ、其の後河原へ引き出だいて、首を刎ねよとぞ宣ひける。松浦太郎重俊承つて、手足を挾み、樣々にして痛め問ふ。西光本より爭はざりける上、拷問は嚴しかりけり、白狀四五枚に記せられて、其の後口を裂けとて、口を裂かれ五條西の朱雀にして、終に斬られにけり。

語釋　院の御所。後白河法皇の御所の事。當時は「院政」と云ひ、政治の實權が上皇にあつた時代であるが、今上即ち天皇陛下の御所を「内裏」と申すのに對して、上皇、法皇の御住居を、「院」或ひは「院の御所」と申したのである。

○急度參れ。「きつと」は「きと」のつまつたので、前にも云つた通り、もとは「一寸」の意であつたが、それが「いそいで」「しつかり」「必ず」等の意に用ゐられるやうになつた。が、此處は「一寸、すぐ」といふほどの意であらう。此の少し前で、成親を西八條に呼び寄せる所にも、「きつと立ち寄り給へ」とあるが、それを「長門本」といふ異本に「急ぎ立ち寄り給へ」とある所を見ると、此の語には必ず「急いで」といふ意味があつたので、此の意味に用ゐられる所から、「急度」の字をあてられ、又「必ず」といふ如き嚴重な意味を含めては、「屹度」とも書かれたのであらう。

○惡い入道めが。何事を奏聞すべかんなるぞ。これは「惡い入道が―何事を奏せんとするぞ」と、文脈が續いたので

はない。「この入道めが…」と、すつかり文章を切り、又改めて「何事を奏聞しようとするのだ?」と云つたので、委しく書けば、「此奴め、怪しからん奴だ。今迄さんぐ〜悪巧みをして、君を惑はし奉つて居た癖に、又何事を奏聞しようといふのだ。」といふ事である。「奏聞すべからんなるぞ」は「奏聞すべくあるのであるぞ」の意。〇しや馬。惡しい心持を添へる爲めの接頭語。「しやッ面」、「いけづうぐ〜しい」、「くそ忌々しい」などいふのと同じ味。亡友島村抱月は、かういふのを「情化法」と名づけた。一種の氣分情味を添加する詞姿だといふのである。〇中にく、つて西八條殿へ提げて參る。地へ落さずに、馬と大地との間で縛つたといふ解釋もあるが、是れは恐らく、縛つてから、手取り足取りして宙に吊して、西八條まで持つて來たといふのであらう。鞭つた結果として汗を流す馬を、「汗馬に鞭つ」といふのと同じ筆法で、結果を先取りして文を活かしたのである。〇日の始めより根元與力の者なり。自然に出來た詞で、學者の拵つたのでないから、地から掘り出した様な味で、堪らなく面白い。「日の始め」は「日の出の始め」「早朝のあけぐ〜から」といふので、「開闢の抑から、眞先に加擔した元兇だから」といふ意。外の詞では、とても此の味が譯されぬ。〇御坪。四方取り圍んだ中庭。〇大床。廣廂、廣縁。〇しや面をむずぐ〜とぞ蹈まれける。「しや面」は例の憎々しさを見せた情化。「むずぐ〜」は「むずと坐す」「ムンズと組む」などいふのと同じで、「無造作に」といふ蠻的動作の意味に、物の相接する有様を活かして見せたのであらう。〇本より己等が様なる下﨟の果を。この「踏まれける」から、接續語なしに、すぐ詞に移つたつゞきが實によい。「己等」は、今の下司詞の「こうぬ等」「手前達」といふ事。我が事を他に移したので、一人稱の代名詞を二人稱に使つて、罵詈の心持を現はしたの

である。下﨟は身分の卑いこと。﨟は年の事で、下﨟は未だ年功を積まぬといふこと。○成さるまじき官職を成したび。君の特別な御思召で、不相應な高官に任じ給うたといふことであるが、「成す」は「御成り街道」、「御成り座敷」などいふと同じく、君主の行爲を示す特別の動詞である。○振舞をすると見しに合はせて、過たぬ云々。「合はせて」は「加之」「又」の意。意味の上からは、寧ろ下につくので、「親子して出過ぎた眞似をしくさると見て居ると、それのみならず、合はせて、罪もおはせぬ比叡の座主明雲僧正を讒した」といふこと。○當家傾けうとする謀叛の輩。謀叛の國法上の本義は既に第一章に說明してある。謀叛はもと皇室に叛くの意であつたが、平家專權の結果、此の詞が平家に叛くといふ意味に用ゐられ、剩へ上皇、天皇が平家を御謀りなさる事に迄用ゐられる樣になつた。それは次ぎの「敎訓」といふ章に、內府重盛の詞として、「當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に顯はれさせ給ひ候ひぬ」と書いてあるのを見ても解る。○與してげるなり。「げる」と濁るのは當時の訛りである。○惡びれたる氣色。見苦しい臆した樣子もなく、堂々と立ち向つたといふ事。○聞かんずる所。普通に「聞かんとする」の轉じたのであるといひ、田中大秀は「ず」は「ぞ」の轉であると云つて居る。もとは多分第一の方の義であつたらうが、此の時代には、唯だ「聞く所」といふのと同じ意味に用ゐられるやうになつた。○えこそ宣ふまじけれ。「宣ひ得じ」で、「仰しやる事は出來ますまいぞ」といふ意。○例の高平太とこそいひしか。「高足駄を穿いてうろついてゐる平家の太郎長男坊」といふ惡口のあだ名。但し、此處の文章は少し言葉足らずの氣味がある。何となれば、唯だ「家成卿の邊に立ち入り給ひしをば、高平太とこそいひしか」といふ丈では、「高」の字の說明がつかない譯で、こゝに「高平

太」とあるのを理解させる爲めには、是非ともその前に、高足駄を穿いて出入したといふ事を知らせねばならぬからである。「長門本」に、こゝをば、足駄の事を、忠盛と淸盛と父子兼帶の事として、

入道殿の父忠盛は、中御門の藤中納言家成ノ卿の邊に、朝夕平足駄はきて閑道より通り給ひしをば、人高平太と申して笑ひしが、わ入道殿も忠盛の嫡子といひしかども、十四五迄は叙爵をだにもし給はず、冠をだにも給はらせ給はで、繼母の池の尼上に、小目見せられてありし時は、あは六波羅の高平太が通るはとて、京童は指をさして申ししが……王孫とはいひながら、數代久しく成りくだりて、殿上人の交はりをだにも嫌はれて、闇討にせられんとし給ひし人の子にて、今忝く卽闕の官を奪ひ取つて、太政大臣まで成りあがりて、剩へ天下を我がまゝにせらるゝ、是れをこそ過分と申すべけれ。

としてあるのは、これに氣がついて改めたのであらう。但し、此の方が條理は多少立つてゐるが、文章の力は遙かに下つて居る。『源平盛衰記』には、こゝをば更に、

和入道は、いかに王孫とこそ名乘り給へども、昔の事は見ねば知らず、御邊の父忠盛は、まさしく殿上の交はりを嫌はれし人ぞかし。其の嫡子におはせしかば、十四五までは敍爵をだにも賜はらず、しかも繼母には値うたり、過ぎ難かりければこそ、中御門の藤中納言家成卿の播磨守にておはせし時、受領の鞭を取り、朝夕に柹の直垂に繩緒の足駄はきて通ひ給ひしかば、京童部は高平太といひて咲ひしぞかし。其を恥かしとや思ひけん、扇にて顏を隱し、骨の中より鼻を出だして、閑道を通ひ給ひしかば、また童部が先を切つて、高平太殿が扇に

て鼻を挾みたるぞやとて、後には鼻平太鼻平太とこそいはれ給ひしか。…其が今太政大臣に成りたるをこそ

下﨟の過分とは申すべき。

と改めて居るが、これは多分、流布本に右の手落を見出だしたのみならず、長門本の試みた父子兼帯の記述をも、不純で讀者の氣を散らす嫌ひがあるとし、興味集注の方便として、淸盛一人の事に書き改めたのであらう。尙ほ又屋上屋の複雜味を悅ぶ、作者の例の趣味からして、たゞの平足駄をば、繩撚のばら緒にして蠻的の仰山味を加へ、更に追加の餘興として、扇の骨の間から鼻頭を出すといふ猿樂ふ體の狂言味を加へたのであらう。かくして長門本、『盛衰記』と、段々條理が立ち、手が込んで、合理的に面白くなつて來ては居るが、文章の力と餘意とに於いて、いや降りに下つて來て居るやうに思ふのは、私一人の僻目であらうか。私はかやうな點から見ても、流布本が先づ出でて、長門本、『盛衰記』が後に出來た事が明らかであり、而してあらゆる加除差引の結果、流布本が藝術的に見て最も高い地位を占めて居ることが明らがであるやうに思ふのである。○勸賞に四品して。御褒美に四位を賜はつたといふ事。○侍ほどの者の。西光がもと朝廷直屬の侍、卽ち北面の武士であつたから云つたのである。○先例、法例。已に前にしかとした事實もあり、又法律として道理上立派に許される事でもあるといふ意。○栲問は嚴しかりけり。此の「けり」も、前に云つた「風は烈しく吹きたりけり」、「雪は斑に降つたりけり」と同じく、感投的挿入句の味はひで、「もう覺悟して居る上に、嚴しく栲問されるではないか！」といふ味である。

二

淨海入道と西光法師。亂暴で品位の乏しい嫌ひはあるが、積極的活動性に富み、滿身負けじ魂で張り切つて居る此の二人の壯漢が、睨み合ひ罵り合ふ壯烈な光景が、力のある筆に寫されて、手に汗を握らせる趣がある。入道が大床に立ちはだかつて、無言のまゝ暫らく睨へ、やうやく口を開いて、「あな惡や、當家を傾けようとする、謀叛人めが成れる果の氣味よさよ。其奴こゝへ引き寄せよ。」といふあたりの詞使ひ、句の運びの面白さ。「しや馬」、「しや面」、「しやつ」、「むず〱」などいふ、俗語の感投語を巧みに使つた面白さ。西光法師を叙しては、まづ「本より勝れたる大剛の者なりければ」と前置して、演說口調に疊みかけて、大雄辯を振はした面白さ。實に何とも云はれぬ妙味である。

　ちとも色も變ぜず、惡びれたる氣色もなく、居直り嘲笑つて申しけるは、

などは一寸した事ながら、五分の隙もない文章である。斯樣な場合である、顏色がさぞ眞蒼になつて居るであらう、と見れば、一寸も平生に變はらない。顏色が變はらないまでも、態度がおど〱しては居らぬかと見ると、何の磊々落々と傍若無人で、更に惡びれた樣子がない。そしてまづ、居ずまひを正し、屹となつて後に、「あッハッハ」と、さげすみ笑ひを一つして、「扨いふには」といふ段取であ

る。絶妙といふべきである。

與せずとは申すべき様なし、それは與したり。の繰返しなども實によい。「相談にあづからぬとは云はれませぬ。いかにもそれは與つて御座る。しかし少々耳障りの事を申されるが、餘人の前では知らず、此の西光の聞く所では、左様の事を仰せらるゝわけは行きますまいぞ。」といふ味であらう。實に堪らない面白さである。それから段々と調子を高めて來て、最後に、「殿上の交りをだに嫌はれし人の子孫にて、今太政大臣まで成上つたるや過分なるらん。」と言ひ放つた所、入道が餘りの腹立に暫らくは物をも言ひ得ぬ所、理の當然に行きつまつて、「しやつが首めッたに斬るではないぞ」といふ所から、最後に、拷問して後に、口を引裂いて、斬る所に至るまで、實に傳神の筆と云つてよい。

かやうな理由により、私は此の一節をば、力と力との衝突を痛快に描いた點に於いて、軍記中比類なき名文であると思つて居る。

第十一　小松教訓

次ぎには同じく巻第二、新大納言成親の處刑に就いて、重盛が父を諫むる一段を引いて見る。これは當代第一の賢人と見られた小松内府を、作者がいかに描いたかといふ點から見ても面白く、また遮二無二押し進まうとする動的人物の清盛が、愛子ながら若手の靜的なる君子人重盛の諄々と說く、謂はゆる「敎訓」によつて如何に惱まされたか。又同じやうに消極質の道德者たる重盛が、積極質の横暴家たる清盛によつて、如何に惱まされたか、造化が此の性質のかくも相反したる二人を親子にすることによつて、いかに殘忍なる、しかしながら非常に興味ある悲喜劇を見せて呉れたかといふ點から見ても、非常に面白いことであらう。

　新大納言は一間なる所に推籠められて、汗水になりつゝ、哀れ是れは日頃のあらましごとの、洩れ聞こえけるにこそ。誰れ洩らしぬらん。定めて北面の輩の中にぞ、あるらんなんど、思はじ事なう、案しつゞけて御座しける所に、後より足音の高らかにしければ、すは只今我が命失はんとて、武士共の參るにこそと思はれければ、さはなくして入道、板敷高らかに踏み鳴らし、大納言の御座しける後の障子を、さ

つと引きあけて出でられたり。素絹の衣の短らかなるに、白き大口踏みくゝみ、聖柄の刀押しくつろげてさすまゝに、以ての外に怒れる氣色にて、大納言を暫し睨へて、抑〻御邊は平治にも、已に誅せらるべかりしを、内府が身にかへて申請け首を繼ぎ奉つしは如何に。然るに其の恩を忘れて、何の遺恨あつてか、當家傾けうとは、し給ふなるぞ。恩を知るを以て人とはいふぞ。恩を知らざるをば畜生とこそいへ。されども當家の運命未だ盡きざるに依つて、是迄は迎へたんなり。日頃のあらましの次第、直に承らんと宣へば、大納言全くさる事候はず。如何樣にも人の讒言にてぞ候ふらん。よく〳〵御尋ね候べしと申されければ、入道言はせも果てず、人やある人やあると召されければ、貞能つと參りたり。西光めが白狀取つて參れと宣へば、持つて參りたり。入道これを取つて、推返し推返し二三返高らかに讀み聞かせ、あな惡や此の上をば、何とか陳ずべかなるぞとて、大納言の顏にさつと投げ懸け、障子を丁ど引き立てゝ出でられけるが、猶ほ腹を居ゑかねて、經遠兼康と召す。難波次郎、瀨尾太郎參りたり。あの男取つて、庭に引落せと宣へども、是等左右なうも

し奉らず、小松殿の御氣色いかゞ候はんずるやらんと申しければ、入道よし〳〵己等は、內府が命を重んじて、入道が仰せをば輕うしけるござんなれ。此の上は力及ばずと宣へば、是等惡しかりなんとや思ひけん、立ちあがり大納言の左右の手を取つて、庭へ引き落し奉る。其の時入道心地よげにて、取つて伏せて喚かせよとぞ宣ひける。二人の者ども、大納言の左右の耳に口をあてゝ、如何樣にも御聲の出づべう候と私語いて引き伏せ奉れば、二聲三聲ぞ喚かれける。其の體冥途にて娑婆世界の罪人を、或ひは業の秤にかけ、或ひは淨玻璃の鏡に引き向けて、罪の輕重に任せつゝ、阿房羅刹が呵責すらんも、是れには過ぎじとぞ見えし。新大納言は我が身のかくなるにつけても、子息丹波少將成經已下、稚き者どもの如何なる憂目にか逢ふらんと、思ひやるにも覺束なし。さばかり熱き六月に、裝束をだにもくつろげられず、熱さも堪へ難ければ、胸もせき上ぐる心地して、汗も淚も爭ひてぞ流れける。さりとも小松殿は、思召し放たじものをとは思はれけれども、誰れして申すべしとも覺え給はず。

小松大臣は、例の善悪に騒ぎ給はぬ人にて坐しければ、遙かに日たけて後、嫡子權亮少將維盛を、車の尻に乘せつゝ、衞府四五人隨身二三人召具して、軍兵共をば一人も具せられず、誠に大樣げにて坐したれば、入道を始め奉つて、一門の人々、皆思はずげにぞ見給ひける。大臣中門の口にて、御車より降り給ふ所へ、貞能つと參つて、など是れほどの御大事に、軍兵をば一人も召具せられ候はぬやらんと申しければ、大臣大事とは天下の事をこそいへ、かやうの私事を大事といふ樣やあると宣へば、兵仗を帶したりける兵共、皆そゞろいてぞ見えたりける。其の後大臣、大納言をばいづくに置き奉つたるやらんと、此彼を引き明け引きあけ見給ふに、ある障子の上に蛛手結うたる所あり。爰やらんとて開けられたれば、大納言坐しけり。涙に咽びうつぶして、目も見上げ給はず。如何にやと宣へば、その時見つけ奉つて、うれしげに思はれたる氣色、地獄にて罪人どもが、地藏菩薩を見奉るらんも、かくやと覺えて哀れなり。何事にて候やらん、今朝よりかゝる憂目に逢ひ候。さて渡らせ給へば、さりともとこそ深う賴み奉つて候へ。平治にも已に誅せらるべかりしを、

御恩を以て頸をつがれまゐらせ、剰へ正二位の大納言まで經上つて、歳已に四十に餘り候御恩こそ生々世々にも報じ盡くしがたう候へども、今度もまた甲斐なき命を助けさせおはしませ。さだにも候はゞ、出家入道仕り、如何ならん片山里にも籠り居て、一筋に後世菩提の勸めを、營み候はんとぞ申されける。大臣さ候へばとて、御命失ひ奉る迄の事はよも候はじ。たとひさ候とも、重盛かうて候へば、御命には代はり參らせ候べし。御心安く思召され候へとて、父の禪門の御前におはして、あの大納言失はれん事は、よく／＼御思惟候べし。其の故は先祖修理大夫顯季、白河院に召仕はれ參らせしより以來、家に其の例なき正二位の大納言に經上つて、剰へ當時君無雙の御いとほしみ、首を刎ねられんこと、然るべうも候はず、只だ都の外へ出だされたらんに、事足り候ひなんず。北野ノ天神は、時平の大臣の讒奏にて、憂名を西海の浪に流し、西宮の大臣は、多田滿仲の讒言によつて、恨みを山陽の雲に寄す。各〻無實なりしかども、流罪せられ給ひにき。是れ皆延喜の聖代、安和の御門の御僻事とぞ申し傳へたる。上古猶ほ斯くの如し、況んや末代に於いてをや。賢王猶

ほ御誤りあり、況んや凡人に於いてをや。既に召し置かれぬる上は、急ぎ失はれずとも、何の恐れか候べき。刑の疑はしきをば輕くせよ、功の疑はしきをば重くせよとこそ見えて候へ。事新しき申事にて候へども、重盛彼の大納言が妹に相具して候。維盛又聟也。かやうに親しう罷成つて候へば、申すとや思召され候らん。一向其の儀では候はず。只だ君の爲め、國の爲め、世の爲め、家の爲めの事を思つて申し候。一年故少納言入道信西が、執權の時に相當たつて、我が朝には嵯峨皇帝の御時、右兵衛督藤原仲成を、誅せられてより以來、保元迄は、君二十五代の間、行はれざりし死罪を、始めて執行ひ、宇治の惡左府の死骸を掘り起いて、實撿せられたりし事なんどまでは、餘りなる御政とこそ存じ候へ、されば古の人も、死罪を行へば、海内に謀叛の輩絶えずとこそ申し傳へて候へ。此の詞に附いて、中二年あつて、平治に又世亂れて、信西が埋まれたりしを掘り起こし、首を刎ねて大路を渡され候ひき。保元に申し行ひし事の、幾程もなくて、早身の上に報はれにきと思へば、怖ろしうこそ候へ。是れはさせる朝敵にても候はず、かた／＼恐れあるべし。御榮花殘る所

なければ、思召さるゝ事はあるまじけれども、子々孫々まで、繁昌こそあらまほしうは候へ。されば父祖の善惡は、必ず子孫に及ぶとこそ見えて候へ。積善の家には餘慶あり、積惡の門には餘殃留まるとこそ見えて候へ。如何様にも、今夜首を刎ねられん事は、然るべうも候はずと、申されたりければ、入道實にもとや思はれけん、死罪をば思ひ留まり給ひけり。

　其の後大臣中門に出でて、侍共に宣ひけるは、仰せなればとて、あの大納言失はん事、左右なうあるべからず。入道腹の立つまゝに、物騒がしき事し給ひて、後には必ず悔み給ふべし。僻事して我れ恨むなと宣へば、兵仗を帯したりける兵共、皆舌を振つて恐れ慄く。扨も今朝經遠兼康が、あの大納言に情なう當たり奉つたる事こそ、返す〲も奇怪なれ。など重盛が還り聞かんずる所をば、憚らざりけるぞ。片田舍の侍は、皆かゝるぞとよと宣へば、難波も瀬尾も、共に恐れ入りたりけり。大臣はかやうに宣ひて、小松殿へぞ歸られける。

二

語釋　小松教訓。「教訓」といふ語が當時、諫言の意味に用ゐられたのである。○一間なる所。柱間の一間のこと、卽ち、其の間口が柱二本の間だけしかない狹い室といふことで、或る一室といふことではない。卽ち柱間一間丈の一室といふこと。○汗水になりつゝ、頃は六月二日、卽ち今の七月初めで、梅雨あがりの蒸し暑い盛りである、それに不安と恐怖とが手傳つて、水をあびたやうに、びつしよりになつたといふこと。○日頃のあらまし事。先頃から企てゝゐた計畫。「あらまし事」は、昔の本には「有增事」など書いてあるが、意味はあらまほしく希望するといふので、「八坂本」といふ異本には、「日頃はかりし事のはや洩れ聞こえける」とある。○北面。朝廷直屬の武人。○思はじ事なう。變な詞であるが、「思ふまいと思ふ事もなく」といふので、あゝ成るか、かう成るか、かうしたら、あゝしたらと、あらゆる事を思ひつくして、思はない事はもうあるまいと思ふ程、案じつくしたといふ事であらう。「思はぬ事なう」よりも一段深い意味である。○素絹の衣。生絹にて製した法服。麁絹の衣とも書く。異本には「麁絹の袈代」とも書いてある。模樣のない白絹で製したもので、便利本位なる略式の俗裝。山坂の登り降りに便する點からは「坂衣」ともいふ。慈惠大師の用ゐ始めたものといふ。太刀を帶すに便利なので武人も用ゐた。○大口。大口袴。もと束帶の時、表袴の下に穿くものであつたが、後には表にも穿くやうになつた。袴口が大きく明いて居る所から出た稱である。「踏みくゝみ」は、くゝまして、卽ち裾長にたるまして着てゐた事。○聖柄の刀。「坊主柄」とい

ふ意味で、柄に飾のない刀のこと。○首を繼ぎ奉つし。斬らるべき首をついで、殺さるべき命を助けてあげたといふ意味。面白い表現である。○畜生とはいへ、されども當家の運命未だ盡きざるによつて。荒々しい不嗜みな言葉であるが、傍若無人なる血性漢の激した樣子が見えて面白い。但しこの「されども」は、前後の句を繋ぐ楔としては利いてゐない樣に思はれる。○是迄は迎へたんなり。本來は「幸に捕縛して此處まで引連れて來た」といふのであるが、それを「此處まで御迎へした」と、美しく云つた禮儀の詞である。○陳ずべかなるぞ。「陳ず」は辯解釋明することで、「辯解すべくあるのであるぞ」といふ意。○經遠兼康と召す。難波次郎、瀨尾太郎參りたり。難波次郎經遠、瀨尾太郎兼康といふ二人で、前には名乘で呼び、後には姓と諱とを呼んだのである。○是等左右なうもし奉らず。彼等二人は、右も左もなく無雜作に引落しもしなかつた。○如何樣にも御聲の出づべう候。どんなにしてでも、とにかく御聲を御出しなさい、といふ意。「喚け」といふのを、美しく云つたのである。○娑婆。梵語で此の世の事。○業の秤。淨玻璃の鏡。閻魔王廳の法廷に備へつけてあるといふ佛者の傳說に名高い二つの撿罪器。業の秤は此の世で犯した罪業を量る靈妙な器械で、罪ある者がその前に立てば、器は自然に動いて罪の輕重を分明に現はし、淨玻璃の鏡は、罪ある者がその前に立てば、過去の犯罪が悉くそのまゝに現はれると云はれる。○阿房羅刹。梵語のアボーラクシャス (avorakṣas) で獄卒の意、牛の頭、人の手、兩脚に牛の蹄のあるもの。○汗も涙も爭ひて。人化の味で、汗と涙とが、おれが先に出る、何の後れるものか、おれが多く出た、いやおれの方が多いと云つて爭ふといふ意。○善惡に騷ぎ給はぬ。善い事があつても惡い事があつても、取逆上せて騷ぐといふ事のない沈着大量の人。

○思はずにぞ。意外に。○兵仗。武器。○そゞろいてぞ。「そゞろ」「すゞろ」は何となく心の進むとで、即ち重盛の此の言葉を聞いて、「成程、恥かしい！」といふ氣持が、人々の心に電氣のやうに、さッと傳はつたといふ事。面白い詞をうまく使つたものである。○ある障子の上に。「とある障子の」とあつたのではないか。「ある障子」では落ちつかぬやうに思はれる。○蜘手。「くもで」は蜘蛛の手のやうにといふ意だといひ、蜘蛛の網のやうにといふ意だといひ、或ひは組手の意で、指を組んだやうにといふ事だといひ、いろ／＼の説はあるが、要するに木を縱横に結び固めたことである。○甲斐なき命を助けさせ。助けられても役に立たぬ命ながらといふ謙遜の語。○北野天神は：：。此の時代にめでられた六朝駢麗式、朗詠集式の美しい對句。山陽山陰を、此頃は「センヤウ道」「センノン道」と云つた。○輕くせよ：：重くせよ。流布本には「輕んぜよ：：重んぜよ」とあるが、「刑の疑はしきをば輕んぜよ」といふと、「馬鹿にせよ」「侮れ」といふやうな味に聞こえる氣味があり、幸ひ長門本には、「輕くせよ」「重くせよ」とあるので、暫らく入れかへて見たのである。○積善の家。易に「積善之家必有二餘慶一積不善之家必有二餘殃一」とあるのを踏まへた文句。積善はシヤクゼンと讀み、積惡はセキアクと讀む。當時の讀みくせである。○物騷がしき事し給ひて。無理非道なる事し給ひてといふ事を、和らげて丸く云つた美化の味である。丁度今いふ物騷にあたるであらう。○經遠兼康があの大納言：：：：難波も瀬尾も共に恐れ入りたりけり。後に説明する「經遠兼康と召す。難波次郎瀬尾太郎參りたり」と同じく、同じ二人の名を、前には名乘で現はし、後には苗字で現はして變化をつけた避板の筆。○還り聞かんずる所。此の頃の時代詞。廻りめぐつて我が耳に入る場合を考へて、なぜ遠慮はしなかつた

のだといふことである。

三

細かに見れば多少の申分はあらうが、概してよく出來てゐる。先づ清盛の入つて來た所が面白い。成親が境遇の激變に心を勞し盡くして、ぼんやりとしてゐる折から、跫音に驚いて、スハ！　武士が來て、命を失はれるのかと脅える。と思ふと、さうではなかつたが、心の休まる間もなく、障子を排して現はれ出でたのは、更に恐るべき入道清盛であつた。と、かう書きつゞけて、それから入道の裝ひを寫し、次ぎに烈火の如く憤つた入道の言動を、巨細に寫して居る。段取が實によく、文句の點綴も面白い。序ながら「スハ！」、「さつと」、「つと」、「丁ど」といふやうな擬聲、擬態の詞、或ひは感投的の詞を連發的に使つて居るが、それが皆實によく利いて居る。

入道言はせも果てず、人やある人やあると召されければ、貞能つと參りたり。西光めが白狀取つて參れと宣へば、持つて參りたり。入道これを取つて、二三返高らかに讀み聞かせ云々

なども、實にうまく書きつゞけて居る。後世ぶりに改むれば、「誰れかある。」と呼ぶと、「貞能がすぐに來て畏つた。」「西光の白狀を持つて來い。」といふと、「すぐに持つて來た」といふのであらうが、稚

い對偶ぶりを、小刻みに刻んで、「扨入道はそれを取つて押返し〱」と續けたところは、面白いではありませんか。それから

經遠兼康と召す。難波の次郎、瀨尾の太郎參りたり。

なども、一寸した文句だが、人知れぬえらい技巧を含んで居る。一體これは前なる「語釋」の所でも云つた通り、同じ二人の名を別の詞で繰返したのであるが、若し之れを同じ言葉で繰返して、「經遠兼康と召す。＝經遠、兼康參りたり。」といひ、或ひは「難波次郎、瀨尾太郎と召す。＝難波次郎、瀨尾太郎參りたり。」と云つては、全くつまらぬ文章となるであらう。井原西鶴の作の中に、「源氏物語借りに遣はしたるに、湖月抄送られて卽座に其の埒も明きし。」と書いたのがあつた。『源氏物語』を、源氏の版本の一種なる『湖月抄』で繰返して、變化を附けたのである。これは例へば、「ビール」を持つて來いと命ずると、すぐに麒麟を持つて來た。」「酒をと命じたら、直ぐに正宗が前に現はれた。」といふ樣なわけで、「經遠、兼康」を「難波次郎、瀨尾太郎」で繰返した味は、つまりかういふ修辭上の筆致の味に外ならぬ。古典の作家は、なか〱かういふ處に苦心したものである。此處を異本の「八坂本」には、

難波瀨尾と召されければ、經遠兼康參りたり。

としてあるが、これは流布本とは反對に、先づ姓を呼ばせて、地の文を名乘で繰返したのであらう。

「長門本」には

經遠兼康はなきかと宣ひければ、經遠兼康末貞盛國など參りたれば、

としてあるが、これは二人の名を四人の名で繰返して、數の上で變化を附けようとしたのであらう。つまり異本の作者名々が、自分の最善と信ずる所によつて、いろ〳〵の工風を施したのである。

經遠兼康が重盛の氣色を案じて立ち兼ねて居ると、淸盛がかさに掛かつて怒號するかと思ひの外、「己等は、內府が命を重んじて、入道が仰せをば輕うしけるござんなれ、此の上は力及ばず。」と、靜かに觀念したのは、强き風の柳の枝に弱る譬へで、愛子たり賢者たる內府の名に鋒を收めたのであらう。これもうまく面白く書けて居る。次ぎに、成親が自分の事、子等の事に七轉八倒の苦惱を續ける所を寫して、「胸もせき上ぐる心地して、汗も淚も爭ひてぞ流れける。」といひ、そして「さりとも小松殿は」と、呼出の句を設けて後、

小松大臣は、例の善惡に騷ぎ給はぬ人にて坐しければ、遙かに日たけて後……

云々と、軍裝束揃ひの張り切つた空氣の間に、平和な文官裝束の悠々たる內府の姿を出した所も、文體までが俄にゆつたりした調子を帶びて來て、實にうまい。例へば暴風雨の間に麗日のうらゝかに照り渡つた趣ともいふべきであらう。

最後によく出來て居るのは重盛の諫言である。これは無論、骨子を事實に取つただけで、文句や順序は大體、作者の考案に成つたものであらうが、情理を盡くしてゐる上に、言表はし方がいかにもよい。可なりの長ぜりふであるから、今ならば多少演說口調、講義口調になる所であらうが、其の言ひつゞけの間に於ける緩急、メリハリ、漸層の面白さはどうであるか。例へば、

かやうに親しう罷成つて候へば、申すとや思召され候ふらん。一向其儀では候はず。唯だ君の爲め、國の爲め、世の爲め、家の爲めの事を思つて申し候。

の如き、「更に其儀では御座りませぬ。たゞ君の御爲め、國のため、世のため、家の爲めと思つての事で御座りまする。」と疊みかけたところなど、いかにも近頃の大雄辯の演說を聞くやうではないか。そして又、此の四つの「爲め」「爲め」の順序が、第一に大君の爲め、第二に日本の國の爲め、第三に世間一統の爲め、第四に我等が平家の爲めと、いかにもよく順序づけられて、置き換へることの成らぬやうに出來てゐるのも、また稱すべき一つであらう。それから「餘りなる御政とこそ存じ候へ」、「謀叛の輩絕えずとこそ申し傳へて候へ」、「怖ろしうこそ候へ」、「繁昌こそあらまほしうは候へ」、「餘殃留まるとこそ見えて候へ」と、「こそ」の係結(かゝりむすび)の連續して竝べられた事であるが、これも一寸見(ちよつとみ)には、拙劣な單調さのやうに見えるけれども、事實は、父の意志を飜さしむべき擇拔き(えりぬき)の材料を、立てつけ

に列擧するところから、自然に同様の形を取つたのであり、一つは作者の感じた一所懸命の誠意熱情が、自然に最高調のこそ格」を取つたのであらう。とにかく謂はゆる「小松教訓」の、此の重盛の諫言は、次ぎなる第二の諫言と共に、『平家』の中の出色の文字として許すべきものである。

序に「候」といふ語の使ひざまについて、私は先きに、當時は後世と違ひ、敬語としてのみ用ゐられたもので、特別の注意を要すると云つたが、此の章に於いても、成親、重盛、經遠、兼康等の詞に於いてのみ、「候」が用ゐられて、清盛の詞には更に用ゐられず、同じ重盛に於いても、成親及び清盛に對する時にのみ用ゐられて、臣下に對する時には、すぐに取除かれるのを見ても、其の消息が知られるであらう。

第十二　足摺

一

さる程に新大納言成親卿は、備前の兒島に流され、やがて備前備中の國境なる有木(ありき)の別所(べつしよ)に移された。そして俊寛僧都と平判官(へいはんくわん)康頼、丹波少將成經の三人は、薩摩潟鬼界が島に流されたが、翌年中宮

御產の御祈りの爲めに、非常の大赦があつて、康賴成經の二人が赦されて都に召し還されることになつた。俊寬一人は淸盛の憎しみが深くして、只だ一人硫黃の孤島に淋しく取殘されたが、こゝに引く一章は、此の大悲境に於ける俊寬の容子の、又其の心情の描寫である。

御使は丹左衛門ノ尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、是れに都より流され給ひたりし、平判官康賴入道、丹波少將殿やおはすと、聲々にぞ尋ねける。二人の人々は、例の熊野詣して無かりけり。俊寬一人有りけるが、これを聞いて、餘りに思へば夢やらん、又天魔波旬の、我が心を誑さんとていふやらん、現とも更に覺えぬもの哉とて、慌てふためき、走るともなく、倒るゝともなく、急ぎ御使の前に行き向つて、これこそ流されたる俊寬よと名乘り給へば、雜色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文取り出でて奉る。これを開けて見給ふに、重科は遠流に免ず、早く歸洛の思ひをなすべし。今度中宮御產の御祈りによつて、非常の赦行はる。然る間鬼界が島の流人、少將成經、康賴法師赦免とばかり書かれて、俊寬といふ文字はなし。禮紙にぞあるらんとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ讀み、端より奥へ讀み

けれども、二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。さる程に、少將や康頼法師も出で來たり、少將の取つて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝる事はあれ、夢かと思ひ成さんとすれば現なり、現かと思へば又夢の如し。其の上二人の人々の許へは、都より言傳てたる文ども、幾らもありけれども、俊寛僧都の許へは、言問ふ文一つもなし。されば我が所縁の者どもは、皆都の內に跡を留めずなりにけるよと、思ひ遣るにも覺束なし。抑〻我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり。如何なれば赦免の時、二人は召し還されて、一人爰に殘すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆の謬りか。こは如何にしつる事共ぞやと、天に仰ぎ地に俯して、泣き悲しめども甲斐ぞなき。僧都少將の袂にすがり、俊寛が斯樣になるといふも、御邊の父、故大納言の、由なき謀叛の故なり。されば餘所の事と思ひ給ふべからず。赦されなければ、都迄こそ叶はずとも、せめては此の船に乘せて、九國の地まで着けてたべ。各〻のこれに御座しつる程こそ、春は燕、秋は田面の雁の音づるゝやうに、おのづから故鄕の事をも傳へ聞きつ

れ、今より後は、何としてか聞くべきとて、悶え焦がれ給ひけり。少將誠に、さこそは思召され候らめ、我等が召還さるゝ嬉しさも、さる事にては候へども、御有樣を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。此の舟に打乘せ奉つて、上りたうは候へども、都の御使如何にも叶ふまじき由を頻りに申す其の上、赦されもなきに、三人ながら、島の內を出でたりなど聞こえ候はゞ、中々惡しう候ひなんず。成經先づ罷上つて、人々にもよく／＼申し合はせ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎へに人を奉らん。其の程は日來御座しつるやうに思ひ成して待ち給へ。命は如何にも大切の事なれば、縱ひ此の瀨にこそ漏れさせ給ふとも、終にはなどか赦免なくて候べきと、樣々に慰めのたまへども、僧都堪へ忍ぶべうも見え給はず。

さる程に舟出ださんとしければ、僧都船に乘つては降りつ、下りては乘ツつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には夜の衾、康賴入道が形見には、一部の法華經をぞ留めける。既に纜解いて、舟押し出だせば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇に成り、長の立つ迄は引かれて出づ。長も及ばず成りければ、僧都船に取り附き、

是れ乗せて行け具して行け

さて如何に各、俊寛をば、終に捨て果て給ふか。日來の情も今は何ならず。赦され無ければ、都迄こそ叶はずとも、せめては此の船に乘せて、九國の地迄と口說かれけれども、都の御使如何にも叶ひ候ふまじとて、取りつき給ひつる手を引きのけて、船をば終に漕ぎ出す。僧都せん方なさに、渚に上り倒れ伏し、稚き者の、乳母や母などを慕ふやうに、足摺をして、是れ乘せて行け、具して行けと宣ひて、喚き叫び給へども、漕ぎ行く船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙にくれて見えざりければ、僧都高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。彼の松浦小夜姬が、唐舟を慕ひつゝ、領巾振りけんも、これには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕ぎ隱れ、日も暮るれども、僧都怪しの臥處へも歸らず、波に足打洗はせ、露に萎れて、其の夜はそこにぞ明かしける。さりとも少將は情深き人なれば、よき樣に申す事もやと賴みを懸けて、其の瀨に身をも投げざりし、心の中こそはかなけれ。昔早離速離が、海巖山に放たれたりけん悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。

二

語釋　例の熊野詣。康頼、成經の二人が紀州の熊野に似た島の一部に假宮を建てゝ、權現を勸請し、毎日其處へ歩みを運んで參詣してゐたが、俊寛は生得不信心で、神佛を物ともせずに、たゞ悲しんでばかりゐたといふ事が、前章に書いてある。それを承けた文句。〇天魔波旬。人の善を爲す事を妨げる惡魔。魔は梵語魔羅の略で邪魔障礙の意。波旬は梵語播裨(papiyas)の訛つたので、障礙善といふ意。此の魔王、欲界第六天の頂に宮居し、其の數多き子女を人間界に降して、惡人を煽動し、善人を惱亂する故に、天界なる作善障礙の王といふ意味で、天魔波旬とは云つたのである。〇俊寛よと名乘り給へば、雜色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文取出でて奉る。此の一段は大體、俊寛に花を持たせて、重々しく寫して居るやうに見える。多分作者が俊寛を以て、三人中第一位の人物とし、又その至極の悲境に同情した所から、斯樣に重く寫したのであらう。俊寛自身の詞に、「候」といふ挨拶語を一度も使はせずして、「俊寛よ」と言ひッ放しにさせたのも、地の文に於いて「名乘り給へば」、「奉る」と敬語を使つたのも、皆さういふ作者の創作心理の結果として現はれた現象である。〇布袋。布の袋、湯桶よみにしたのである。〇重科は遠流に免ず。變な文句で判然しない。いろ〳〵の意味に取られるが、或ひは「汝等が謀叛の大罪をば、今迄の遠流生活で償はれたものとして免してやる。」といふ事か、或ひは重科は重き刑罰の意、遠流は遠流人の意で、「汝等遠流人に對し、重き刑罰をゆるして都に召還してやる。」といふ事か、多分この

二つの中であらう。私は多分第二の方かと思ふが、當時の此の種類の公文書などの用例をよく調べた上でなければはつきり言ふことが出來ぬ。○早く歸洛の思ひをなすべし。もう都に歸れるんだと思つて、早速悦べといふのであらう。面白いが、不思議な文句である。○非常の赦。赦書に赦を分けて常赦、大赦、非常赦の三つとして居る。常赦は普通の大罪までを赦すだけで、八虐(前に云つた謀反、謀叛、謀大逆、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義)や故殺人は赦さぬが、大赦は大辟以下八虐、故殺人をも赦し、非常赦は大辟以下八虐、故殺人、私鑄錢までをも悉く赦す。此處に謂ふ「非常の赦」が即ち是れで、一種の法家の用語である。謠曲「俊寛」に「非常の大赦行はる、により」と「大」の字をつけてあるのは、俗に砕けて句調をよくしたのであらう。○禮紙。畾紙とも書く。書狀の上を巻く白い紙で、其の上に更に包紙を用ゐるのであるが、禮紙までが儀式上常具の品目になつてゐるのである。○三人とは書かれず。さる程に。「さる程に」は「其の中に」といふ意。軍記などの常文句で本來變な詞であるが、使ひ馴らして此の邊では、もうすつかり落ちついてゐる。そして、「三人とは書かれず」から「さる程に」へのつゞきも、非常に調子がよい。○少將の取つて見るにも、康頼法師が讀みけるにも「取つて見る」、「讀みける」は、同じ事を別な語で言ひ表はして變化をつけたのであるが、若い方の少將が、「ドレ私が。」と云つて取つて見る、年とつた入道の康頼が「私も讀んで見ませう。」と云つて讀んであつたにもといふ風に書くのが面白い、といふので、かうしたのであらう。また成經と康頼とには、「取つて見るにも」、「讀みけるにも」と、敬語なしの書き捨てにし、俊寛には「これを開けて見給ふに」と、敬語をつけ、間近の處で斯様に區別してあるのは、前に云つた趣意で、悲境の俊寛に花を持たせ、

同情をそゝいだのであらう。○我が所縁の者ども云々。緣者知己の親しい人達は、平家の迫害に怖ぢ、連坐を恐れて、京都を退散したのであらうといふこと。○二人は召し還されて、一人こゝに殘すべき。文法的にいへば自他の組み合はせが違つてゐる。正しくは「二人を召し還して一人を殘す」と、兩方を能動的にするか、或ひは「二人は召し還されて一人は殘る」と兩方を自動的にするか、すべきであるが、恐らく、「我れ一人をこゝに殘すとは怪しからぬ」といふ、俊寛が無念の情を現はして、わざと、後を他動にしたのであらう。○天に仰ぎ地に俯して泣き悲しめども。『平家』の常文句だが、絕望の心持をいかにもよく現はして居る。○「甲斐ぞなき」から「僧都少將の袂にすがり」へ、接續詞なしに續けた處が、簡潔でよい。○春は燕、秋は田面の雁云々。成經の舅、平宰相敎盛の領地が肥前國鹿瀨の庄にあり、そこから衣食を送つて居たので、御事達の居らるゝ中は、故鄕の便りも多少は聞かれたがと云ふ意。○少將誠にさこそは思召され候ふらめ　俊寛の詞には「候」がなく、少將の俊寛に對する詞には、「候」のあるのを注意すべきである。かういふ微妙な影を見逃がすと、現代語譯などが、すッかり死んでしまふであらう。○更に行くべき空。「歸り力」、歸る勇氣もない」といふ事であるが、「空」の意味はわからない。田中大秀は『竹取物語解』の中で「氣を喪ひたるやうの意」と云つてゐるが、どうであらうか。私は遙かなる希望の地にあこがれる意をあらはした詞かと思ふ。○日頃おはしつる樣に。是れまで通りに。○此の瀨。「瀨」はめつたにない機會の意。淵に對する瀨で、取附どころの意であらう。○あらまし事。諸註釋書には、荒々しい擧動の意に解釋して居るが、私はあらまほしく思ふ事の意で、空想的希望を述べたといふ事と思ふ。つまり「連れて行つて下さるとよいがなあ」、「せ

めて九州迄でも」など、いろ〳〵と、希望を述べたといふのであらう。爰で荒々しい粗暴の振舞を演じては、人々の同情を失ふことになるから、そんな事をする筈がない。又「長門本」には、俊寛が他の二人と違ひ不信心であつた事を寫して、「神明佛陀の御名をも唱へず、あらましの熊野詣もせず」(さうありたい結構な熊野詣もせずの意)と云つて居り、また康頼入道の作と云はれる「寶物集」に、道行く二人の空想的希望を描いて、餅でも落ちて居ればよいがといふ所を、「二人道を行くとてあらまし事に」と書いてある處を見ると、かた〴〵これは空想的希望を意味する當時の慣用語であつたのであらう。さうすると「いひ給ひける」と云はずして「し給ひける」と云つたのがをかしいやうだが、「言ふ」は「する事」の一種で、言ふ事を「する」と言つた例は、他の立派な古典に幾らもあるから差支あるまい。〇夜の衾。寢る時にかける夜着、搔卷の類。〇腰に成り、脇に成り、長の立つ迄は。綱に引きずられて行く中に、腰まで水に浸る、やがて脇まで浸る、浸り浸つて脊の立つ中は引かれて行つたが、といふ意。簡淨によく書いて居る。〇さて如何に各々。「取附き」を承けて「俊寛をば」につゞく、續き工合、轉じ工合が實によい。〇稚き者の乳母や母などを慕ふやうに。普通の人情や禮儀からいふと、第一に尊い生みの親の母を擧げ、次ぎに卑しい雇女の乳母を擧げて、「母や乳母などを慕ふ樣に」といふべきであるが、源平當時の貴族階級に取つて、實母の御臺所は、生みッ放しで、養育はすぐに臣下の妻の乳ある者に託するので、母とは名のみで、子に親しみがなく、乳母の方が寧ろ深く子に親まれたので、その時代常識の人情が、此の文句の順序立に現はれて、此の不思議な逆まな言ひ表しをさせたのであらう。斯樣な些細な詞使ひの中にも、時代思想が呼吸をついて居るから面白いのである。但しこゝ

を「八坂本」には「母やめのとを」としてあるが、これは多分此の點に心づいて普通の常識的に改めたのであらう。○漕ぎ行く船の習ひにて跡は白波ばかりなり。多分「白波」に「知らぬ」意を掛け持たしたのであらう。斯ういふ場合の心持を、いかにもよく書いて居る。○松浦小夜姫。欽明天皇の朝に、大伴佐提彦が新羅に行く時、松浦の豪族の女小夜姫が、男との別れを悲み、船影を追うて、高い處へ高い處へ馳け登り、領巾を振りつゝ、一念凝つて遂に石と化つた。それから、その山を領振山、石を望夫石と云つたといふ傳說。○あやしの臥處。「あやし」は多く「怪」「賤」の二義を兼ねて居る。極めて粗末な卑しいところで、人の臥處が、獸の臥處か、こんな處に住めるか、住めぬかと疑はれるやうなひどい臥處といふこと。○其の瀨に身をも投げざりし心の中こそはかなけれ。此の千歲一遇の機會、一度取りはづせば又逢ふ事の出來ぬ機會を取りはづしながら、思ひ切つて身を投げなかつたのは、實に氣の毒な情ない事であつたといふ意。かういふのが『平家』特有の調子であるが、諸行無常、盛者必衰、どうせ頼まれぬ憂世の末に望みをかけるとは、笑止な事！　かういふ中にはかない、物悲しげな、世の中を見切つた調子が、面白く出て居るではありませんか。○早離速離が海巖山へ放たれたりけん。壯里息里とも書いてある。もとは『淨土本緣經』といふ經文にある天竺の故事で、又鬼界の島の流人の一人、康頼入道の書いたといふ『寶物集』にも載せてある。南天竺、摩涅婆吒國の梵士長那の二子、七歲と五歲になる早離、速離といふのが、飢饉の年父が食を求めに遠く出かけた留守中、繼母に海中に連れ出され、岩石峨々たる孤島に置去にされて、飢死に、泣死にに死んだといふ哀話。俊寛の境遇にいかにもよく似通つた哀話である。

三

これが謠曲の「俊寛」、曲亭馬琴の『俊寛僧都島物語』を始めとして、明治大正に至るまで數多く現はれた、あらゆる「俊寛文學」の材料になつた大本の種子である。いふ迄もなく、同情のある叙事の筆を面白く運んだといふだけで、戯曲でも小說でもないから、場面の轉換や、科白の變化や、脚色の面白味等に於いて、物足らぬ所があるであらう。また作者の特別な哲學や人生觀を現はす爲めに書いたものでもないから、近代の人の要めるやうな、或る種類の深刻味は求められぬであらう。けれども事實を事實として書いたものと見、作者が想像の眼に描いた幻影を、其の儘に寫したものとしては、實によく出來てゐると云つてよい。第一に筋の運び方が、いかにも自然でそして巧みである。まづ、御使が上陸して聲々に流人を尋ねる。＝留守を守つてゐた俊寛が、唯だ一人、之れを迎へたが、赦免狀に自分の名が無いのを見て驚く。＝所へ、他の二人が歸つて來て讀んで見たが、結果は同じく、自分一人だけが恩赦から除かれてゐる。＝彼れは先づ天に仰ぎ地に俯して獨り愁歎する。＝次ぎには、二人に對して哀願し愚痴をいふ。＝二人に慰められる。＝舟が出ようとすると、狼狽して又哀願する。＝やがて、二人の形見が提出される。＝やがて、舟が纜を解いて出る。＝慌てゝ綱に取りついたが、

引却けられる。＝舟が段々遠くなる、跡に見えるのは白浪ばかり、＝高きに登つて遙かに舟を招く。＝松浦小夜姫にも劣らぬ心持であつたであらう。其の夜は海邊に明かし、頼まれぬ人の情をあてにして、死ぬべかりし命を存へたのは果敢ないことであつた。＝といふのであるが、いかにも順序がよく立つて、うまく始め、よく續け、よく轉じ、よく收めて居るではありませんか。

第二には、俊寛に花を持たせて、同情して書いた所がよい。第三には、三人の流人と御使と四人の性格を、明らかに描いたといふ程ではないが、とにかく、殘る者と、召し還さるゝ者と、二人を伴ひ一人を殘して行く使者と、三方面の餘儀なき事情を、それ〴〵に汲み取つて、簡單ながら、素直に自然に書いて居る所がよい。第四には、同じ事を繰返すにも、相應に變化をつけて、更に重複單調の感じを起こさせぬ所がよい。例へば、「二人とあつて、三人とは書かれず」といふ同じ事を書くにも、初めには俊寛一人の事とし、「奥より端へ讀み、端より奥へ讀み」と丁寧に書いて、（序ながら初めに「端より奥へ」と云はずして「奥より端へ」と書いたのなども、かういふ場合の人情を如實に見せて、注意が行き屆いてゐる。）

二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。

と言ひ、やがて二人の所作になつては、「取つて見るにも」、「讀みけるにも」と、あつさりと書いて、

二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。

「書かれてはゐないであつた」と、決定的、絶望的、咏嘆的に言つて居るのも、巧みな描寫といふべきであらう。或ひは「舟に乘せよ」の哀願も、三度まで繰返されて居るが、初めには、

赦され無ければ、都までこそ叶はずとも、せめては此の船に乘せて、九國の地まで着けてたべ。

と、丁寧に敬語まで附け、次ぎには、「日來の情も今は何らならず」と、皮肉の恨みを添へ、

「せめては此の船に乘せて、九國の地迄」と口說かれけれども、

と云つて、後を略し、最後には、前の依賴が、もう捨鉢的の命令と變はつて、

是れ乘せて行け、具して行けと宣ひて、喚き叫び給へども、……

といひ、而も「乘せて」「具して」と、詞を變へて、二度繰返して居るなど、同中に異あり、異中に同ある呼吸を、うまくも手に入れたものではありませんか。其の上に『平家』式の物がなしい哀調があらはれて、奢る平家の淋しく滅び行くべき運命を豫示して居る趣のある事などを思ひ合せると、此の一篇をば、短いながらに、よく人を寫し、事を寫し、時代を寫し、人間の運命を寫して居ると云つても、必ずしも過言ではあるまいと思ふのであります。

第十三　兩馬の鐵燒

一

諸行無常盛者必衰が『平家物語』の大切な基調だからとて、かう濕つぽい事柄ばかりがつゞいては、お話が滅入つて仕樣がありません。ちと氣を換へて、勇ましい武人の心意氣の現はれた題材に轉じませう。まづ、卷第四、源三位賴政が高倉宮に平家討伐の、謂はゆる「謀叛」を御勸めして、旗上げをする、その初めの揷話として、彼れが郎黨渡邊競が、機轉の勇ましい物語を擧げて見ます。

明くる十六日、高倉宮の御謀叛起こさせ給ひて、三井寺へ落ちさせ給ふぞやと、申す程こそありけれ、京中の騷動斜めならず。抑〻此の源三位入道賴政は、年頃日頃も有ればこそ有りけめ、今年如何なる心にて、謀叛をば起こされけるぞといふに、平家の次男宗盛卿の、不思議の事をのみし給ひけるによつてなり。されば人の世に有ればとて、坐ろに言ふまじき事をいひ、すさまじき事をするは、能く〳〵思慮あ

るべき事なり。喩へば其の頃三位入道の嫡子、伊豆守仲綱の許に、九重に聞こえたる名馬あり。鹿毛なる馬の雙びなき逸物、乘り、走り、心向け、世に有るべしとも覺えず。名をば木の下とぞ云はれける。宗盛卿使者を立て、聞こえ候名馬を賜はつて、見候はゞやと宣ひ遣はされたりければ、伊豆守の返事には、さる馬を持つて候ひしを、此の程餘りに乘り疲らかして候程に、暫らく勞はらせんが爲めに、田舍へ遣はして候と申されければ、さらんには力及ばずとて、其の後は沙汰無かりけるが、多く竝み居たりける平家の侍共、あつぱれ其の馬は一昨日も候ひし、昨日も見えて候、今朝も庭乘し候ひつるなど、口々に申しければ、さては惜むござんなれ惡し乞へとて、侍して馳せさせ、文などして、一時が中に五六度七八度など乞はれければ、三位入道これを聞き、伊豆守に向つて宣ひけるは、たとひ黃金を以て丸めたる馬なりとも、それ程人の乞はうずるに、惜むべき樣やある、其の馬速かに六波羅へ遣はせとこそ宣ひけれ。伊豆ノ守力及ばず、一首の歌を書き副へて、六波羅へ遣はさる。

　戀しくは來ても見よかし身に添ふる

かげをばいかゞ放ちやるべき。

宗盛卿、先づ歌の返事をば、し給はで、あつぱれ馬や、馬は誠に好い馬で有りけり。されども餘りに惜みつるが憎きに、主が名乘を鐵燒にせよとて、仲綱といふ鐵燒をして、厩にこそ立てられけれ。客人來て、聞こえ候名馬を、見候はばやと申しければ、其の仲綱めに鞍置け、引き出せ、乘れ、打て、はれ、なんどぞ宣ひける。伊豆ノ守此の由を傳へ聞き給ひて、身に代へて思ふ馬なれども、權威に附いて取らるゝさへあるに、剩へ天下の笑はれ草と成らんずる事こそ、安からねと、大きに憤られければ、三位入道宣ひけるは、何條事のあるべきと思ひ侮つて、平家の人共が、かやうのしれ事をするにこそあんなれ。其の儀ならば、命生きても何にかはせん。便宜を窺ふにこそあらめと宣へども、私には思ひも立たれず、高倉ノ宮を勸め申されけるとぞ、後には聞こえし。

これにつけても、天下の人、小松大臣の事をぞ、忍び申しける。或る時大臣參内の次に、中宮の御方へ參らさせ給ふに、八尺ばかりありける蛇の、大臣の指貫の左の

輪を這廻りけるを、重盛騒がば女房達も騒ぎ、中宮も驚かせ給ひなんずと思召し、左の手にて尾を押へ、右の手にて頭を取つて、直衣の袖の中へ引き入れ、些も騒がず、つい立つて、六位や候ふ、六位や候ふと召されければ、伊豆守仲綱、其の時は未だ衛府の藏人にて候はれけるが、仲綱と名乘つて參られたるに、此の蛇をたぶ。賜はつて弓場殿を經て、殿上の小庭に出でつゝ、御倉の小舍人を招いて、是れ賜はれと言はれければ、大きに頭を掉つて逃げ去りぬ。伊豆守力及ばず、我が郎黨の競を召して、これを賜ぶ。賜はつて捨てゝげり。其の朝小松殿より、好い馬に鞍置いて、伊豆守の許へ遣はすとて、さても昨日の振舞こそ、優にやさしう候ひつれ。是れは乘一の馬で候ぞ。夕に及んで陣外より、傾城の許へ通はれん時、用ゐらるべしとて遣はさる。伊豆守大臣の御返事なれば。御馬畏つて賜はり候ひぬ。さても昨日の御振舞は、還城樂にこそ、似て候ひしかとぞ申されける。如何なれば小松殿は、かやうに優なるためしも御座せしぞかし。此の宗盛卿は、さこそなからめ、人の惜む馬乞ひ取つて、剰へ天下の大事に及びぬるこそうたてけれ。去程に同じき十六日の夜

馬は誠に好い馬でありけり

に入つて、源三位入道頼政、嫡子伊豆守仲綱、次男源大夫判官兼綱、六條藏人仲家、其の子藏人大夫仲光已下、混兜三百餘騎、館に火かけ燒き上げて、三井寺へこそ參られけれ。

爰に三位入道の年頃の侍に、渡邊源三競瀧口といふ者あり。馳せ後れて留まりけるを、六波羅へ召して、など汝は相傳の主、三位入道が供をばせで、留まつたるぞと宣へば、競畏つて申しけるは、日來は自然の事も候はゞ、眞先かけて命を奉らうとこそ存ぜしか、今度はいかゞ候ひつるやらん、かうとも知らせられざりつる間、留まつて候と申す。宗盛卿これにも又兼參の者ぞかし。先途後榮を存知して、當家に附いて奉公せうとや思ふ、又朝敵頼政法師に同心せんとや思ふ。有りの儘に申せとこそ宣ひけれ。競涙を、はら〳〵と流いて、たとひ相傳の好み候とも、如何か朝敵となれる人に、同心をば仕り候べき。只だ殿中に奉公致さうずる候と申しければ、大將さらば奉公せよ、頼政法師がしけん恩には、些も劣るまじきぞとて、入り給ひぬ。朝より夕に及ぶまで、競は在るか、候ふ、在るか、候ふとて伺候す。日もやう

やう暮れければ、大将出でられたり。競畏つて申しけるは、誠や三位入道は、三井寺にと聞こえ候。定めて夜討なんどもや向けられ候はんずらん。三位入道の一類、渡邊黨、さては三井寺法師にてぞ候はんずらん。心憎うも候はず。罷向つて擇討なども仕るべき。さる馬を持つて候ひしを、此のほど親しい奴めに盗まれて候。御馬一匹下し預り候はゞやと申しければ、大将尤もさるべしとて、白葦毛なる馬の、南鐐とて祕藏せられたりけるに、好い鞍置いて競に賜ぶ。賜はつて宿所に歸り、早日の暮れよかし。三井寺へ馳せ參り、入道殿の眞先かけて、討死せんとぞ申しける。
日もやう〳〵暮れければ、妻子共をば彼處此處に立ち忍ばせて、三井寺へと出立ちける、心の中こそ無慚なれ。狂紋の狩衣、菊綴大きらかにしたるに、重代の着背長、緋縅の鎧着て、星白兜の緒をしめ、いか物作の太刀を帶き、二十四指いたる大中黑の矢負ひ、瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽で矧いだりける的矢一手ぞ差し添へたる。滋籐の弓持つて、南鐐に打乘り、乘替一騎打具し、舍人男に持楯脇挾ませ、屋形に火かけ燒き上げて、三井寺へこそ馳せたりけれ。六波羅には競が屋形より、

火出來たりとて囂きけり。宗盛卿急ぎ出でて、競は在るか、候はずと申す。すは彼奴めを手延びにして、たばかられぬるは。あれ追懸けて討てと宣へども、競は勝れたる大力の剛の者、矢續早の手きゝにてありければ、二十四指いたる矢では、先づ二十四人は射殺されなんず。音なせそとて、進む者こそなかりけれ。

只今しも三井寺には、渡邊黨寄合つて、競が沙汰ありけり。如何にもして此の競瀧口をば、召し具せられ候はんずるものをと、口々に申されければ、三位入道競が心を能く知つて宣ひけるは、無下に其の者捕へ搦められはせじ。入道に志深き者なれば、見よ只今參らうずるぞと宣ひも果てぬに、競つと參りたり。さればこそとぞ宣ひける。競畏つて申しけるは、伊豆守殿の木の下が代はりに、六波羅の南鐐をこそ取つて參つて候へ、參らせ候はんとて奉る。伊豆守斜ならず悅び給ひて、やがて尾髪を切り、鐵燒をして、その夜六波羅へ遣はさる。夜半ばかりに門の內へ追ひ入れたりければ、厩に入つて、馬共と嚙ひ合ひければ、其の時舍人驚き合ひ、南鐐が參つて候と申す。宗盛卿急ぎ出でて見給ふに、昔は南鐐、今は平宗盛入道といふ、

鐵燒をこそしたりけれ、大將惡い競めを、斬つて捨つべかりける者を、手延びにしてたばかられぬることこそ安からね。今度三井寺へ寄せたらんずる人々は、如何にもして、競めを生捕にせよ。鋸で首斬らんと、躍り上り躍りあがり怒られけれども、南鐐が尾髮も生ひず、鐵燒もまた失せざりけり。

二

語釋　申す程こそありけれ。申す直ぐに、言ふか云はぬに。○斜ならず。好い加減一通りでなく、大層に。○年頃日頃も有ればこそありけめ。妙な言ひ廻しの語法でよく解らぬ。是れまでも、無事におとなしくして居られるからこそ居つたであらうに、といふ事か。或ひは、是れ迄も謀叛を起こすならば起こす機會もあつたであらうに、どうして擇りに擇つて、今年謀叛を起こしたぞ、といふ事か、多分此の二つの中であらう。後の方でもあらうか。○不思議の事。當時の特別な用例で、亂暴な事、怪しからぬ事といふ意。道理を超越した不可思議といふことではない。○世に有ればとて。成功して世に有り甲斐のある立派な境涯になると。有り甲斐なしに落魄れた事を「世になし」と云つて、「世になし源氏」などいふのがその反對の意である。○すゞろに。思ふまゝ、心の進むまゝに。○喩へば。此の時分の詞癖で、「申さば」「といふのは」といふ位の意。別に譬喩を引くといふのではない。若し字をあ

てるなら、寧ろ「例」の字であらう。○九重。琵琶の方では、クヂウと讀むといふことである。民間のみならず、雲深き宮中まで聞こえたといふこと。○乘り、走り、心向け。乘り心地はよし、早走りではあり、性質は素直で可愛ゆし、三拍子揃つて申分がないといふ事。○勞らせん。骨休めさせる事。○田舍。當時の讀みくせで、デンジヤと云つたのである。○あつぱれ其の馬は一昨日も候ひし、昨日も見えて候、今朝も庭乘し候ひつるなど…。侍共が口々に、「へイ、圖々しくそんな事を申しましたか？」

甲「其の馬は、一昨日も居りましたがね。」

乙「なァに、昨日も見まして御座います。」

丙「今日の今朝も、現に、あの屋敷で庭乘をして居りましたよ。」

といふのである。漸層的に段々調子を高めて、「一昨日」が「昨日」になり、而して「今日」になり、「候ひし」（唯だ居たといふ丈）が「見えて候」（眼前に見た）になり、最後に「庭乘し候ひつる」（現に其の家の庭で乘廻しつゝあつた）になつた所が、面白いではないか。かうせり上げられて、暗愚の宗盛、かツと激して圖に乘つたのであらう。實にうまく書いてある。○扨は惜しむござんなれ。惜しむにこそあるなれで、「では、惜しさにだましたのだな。憎い奴だ。無心してやれ。」といふのである。「惡し。乞へ。」なども、一々終止段どめで、小刻みに切つた所が面白い。○たとひ黄金を以て丸めたる馬なりとも。簡潔で面白い。長門本には「當世あの人々の言葉をかけんをば、たとひ白がねこがねをまろめたる馬なりとも、惜しみおきては、家の中にて乘らんずるか。使の又來ぬさきに、急ぎ其の馬

つかはすべし。」など、念を入れて書いてあるが、これでは少し冗漫過ぎて面白くない。悉くとは云へぬが、大體流布本が、文章的藝術的に見て、一番よく出來て居る樣である。○戀しくは來ても見よかし。影に馬の毛付の鹿毛を添へたので、「それほど欲しく戀しくは、こちらへ來て見られるがよい。形に影は離れぬもの、私と愛馬の鹿毛とは、形と影との樣に離れぬ仲ぢや。どうしてこれが手ばなされませうか。」といふ意。○鐵燒。燒金をあてゝ文字や繪などを現はすと、謂はゆる烙印。○其の仲綱めに、鞍置け、引き出せ、乘れ、打て、はれ、なんとぞ宣ひける。馬をすッかり人間扱ひにして、馬への詞を通して仲綱を嘲つたので、一つ〳〵をコロ〳〵と獨立に列叙して、「鞍置け」、「引き出せ」、「乘れ」、「打て」、「はれ」と、終止どめに書いた所が面白いのである。かういふのを「鞍おき、引き出し、乘り、打ち、はれ。」と、束ねると、前の數句が悉く最後の一句の附屬句となつて了ふが、「鞍おけ」、「引き出せ」と、一つ〳〵に極めると、其の一つ〳〵が粒立つて、獨立して見えて來るから面白いのである。近松巣林子の『心中天の網島』に、馴染の遊女が一人の士と睦言して、拜んだり、囁いたりして居る所を、其の女の馴染客が、障子の外から覗いてゐる心持を寫して、「拜む、囁く、哮えるざま、胸をおさへさすつても堪忍ならぬ。」と書いて居る所がある。「拜む」、「さゝやく」、「哮える」と、一々終止言式に獨立させたから、一々の擧動が粒立つてありありと現はれ、同時に其等の擧動を一纏めに概括する餘裕のない男の、逆上せた心持を立派に寫し得たのであるが、若しこれを「拜み、さゝやき、且つ哮えるざま」といふ風に、束ねて寫したならば、叙事がすつかり死んで、知識的の概括記事となるであらう。

その仲綱めに、鞍おけ、引き出せ、乘れ、打て、はれ。の趣致は、つまりかういふ面白味で、擬人と列叙との妙趣を、一擧にして表現したのである。〇笑はれ草。笑はれる材料。嘲笑の目的物。〇何條事のあるべきと思ひ侮つて。どれ程嘲弄したとて、何程の事があらうと、吾々を馬鹿にして、平家の人々が斯樣な惡戲をするのであるといふ事。「しれ事」は愚かな事、馬鹿な眞似といふ意。「何條」は「何んでふ」で「何といふ」といふ事。卽ち「これといふ程の事をし得ぬ」といふ意。本來「條」の假名は「でう」であるが、誤つて「でふ」に用ゐたのである。〇便宜を窺ふにこそあらめ。機會をねらつて謀叛を起こさうといふ事。〇忍び申しける。「しのぶ」は心中ひそかに感服する事。床しく思ひ出づるといふ事である。〇指貫の左の輪。指貫は衣冠の時に穿く袴の一種。裾の輪に紐を指し通して締め括る所から出た稱。裏を表より少し長くするのが式で、其の赤い裏のきれが表より餘つて下つた所を輪といふ。つまり輪形をなした袴の裾といふ事である。〇驚かせ給ひなんず。驚かせ給ふべしといふこと。こんな處の「なんず」は「なんとす」と解くよりも「なんぞ」と解く方があたるやうである。〇つい立つて。無造作にすッと立つたといふ事。〇六位や候ふ。「候ふ」は「居るか」といふ事。六位は六位の藏人のこと。藏人所の西の廂に六位の藏人の詰所があり、南の廂に五位の藏人の詰所があつた。こゝは「六位の藏人が居るか〳〵。」といふ意味で、重ねて呼ばれたのである。そして内府は無論「六位の藏人や候ふ。」とは呼ばずして、「六位や候ふ。」と呼ばれたのであらう、又さう呼ぶのが自然であらうが、一つは其の次ぎに「……と召されければ、伊豆守仲綱・其の時は未だ衛府の藏人にて候はれけるが」と受けさせるので、重複せぬやう、變化をつけ

る爲めに、前後で補ひ合ひ、助け合はせたのである。これを若し「六位の藏人や候ふと召されければ……六位の藏人にて候はれけるが」と、同じ事を丁寧に繰返しては、すつかり下手な繰返しの野暮な文章となるであらう。昔の文章家の注意が可なり細かい所に及んで居ることが、之れによつて知られる。〇賜ぶ、賜はつて。前の句の尻をすぐに受けて、尻取文句の連鎖式にしたところが面白い。〇弓場殿　校書殿のこと。淸涼殿の南に校書殿と云つて、書册を納めておく建物がある。其の東北に弓場がある。賭弓を行ふ所であるが、此の愛嬌の遊戯で記憶される弓場の隣接して居るのに因んで、校書殿が弓場殿とも稱へられた。〇是れ賜はれ。これを戴いて行つて然るべく處分せい、といふ命令の味。〇伊豆守力及ばず、我が郎黨の競を召して。蛇を捨てさせる位には、小舍人や小使位が相應で、歴とした我が郎黨を煩はすのは勿體ないが、始末する物が「蛇」といふ厄介物なので、據ろなくといふのが、力及ばずの意味である。〇優にやさしう。當時の武人には、かういふ事が優にやさしいと思はれたと見える。悠然と落ちついて、心の裏の勇敢を心憎く包むといふのであらう。〇乘一の馬で候ぞ。うまい文句である。乘り心地よさ日本一といふ意。〇陣外より傾城の許へ。傾城は傾國傾城など云つて、容色を以て君主を迷はし國をも城をも傾けしむる魅力のある美人の事、專ら遊女の事に用ゐられる。夕方其の日の勤務が濟んで、衞府の官人の詰所から馴染の女へ通ふ時にといふ事。重盛なか〳〵味な事を云つたと見える。〇大臣の御返事なれば。詞不足で曖昧だが、大臣への御返事だから、畏つて恭しく述べたといふ事であらう。諸本にこの通りある。〇還城樂。舞樂の曲の名で、懸蛇樂とも見蛇樂とも言ひ、作り物の蛇を弄んで舞ふ曲といふことである。此の曲はもと、唐の玄宗皇帝が韋后

を誅して城に還つた時に作つたもので、但しその舞には蛇つかひの振がないといふ事である。長門本にはこれを重盛が仲綱を褒めた詞として、「其の朝に、内府自筆に狀を書きて、仲綱がもとへ遣はされける。よべの御振舞、還城樂とこそ見奉つて候ひしか。是れへ申してこそ參らすべく候へども、鴘馬一疋、秋霜一佩まゐらせ候。」と書いてある。長門本の作者が、變はつた見識の趣向を見せたのであらう。重盛も蛇をつかんで來たのだから、蛇つかひに見立てられてもよからうが、蛇つかひの藝としては、仲綱の方に見立てるのが自然らしい。「鴘馬一疋秋霜一佩」なども、ひどく面白い。○いかなれば小松殿は優なるためしもおはせしぞかし…。「いかなれば」は、小松殿以下宗盛卿云々迄を一團と見て、それにかゝるのであるが、分けて見れば、「この宗盛卿は」にかゝるとも云はれる。全體の意味は、「小松殿は一寸した事に對しても、かういふ優美風流な取扱をされたではないか。兄君の此の御手本があるのに、何とて、此の宗盛卿は、それ程の事が出來ぬ迄も、せめては、人の馬を無心するなどいふ亂暴をせぬ丈の嗜みなりともないのだ？　この卿が平家の棟梁であり乍ら、人の惜しむ馬を奪ひ取つて、それのみならず、天下の大事を惹き起こしたといふのは、情ないことであるといふ意。これは文脈が中途から逸れたので、本來は「いかなれば宗盛卿は…人の惜しむ馬乞ひ取つて天下の大事に及びぬるぞ。…及びぬるこそうたてけれ。」といふべきを略したのであらう。「この宗盛」の「この」は、一つはかの重盛に對して、「この宗盛」といふため、一つは憎々しい味を出す爲めの添詞。「うたて」は物のいやが上に重なる事で、おもに惡い事の重疊することに用ゐられるやうになつたのである。○混兜三百餘騎。「ひたかぶと」は、本裝束の甲冑武者ばかりが、ひた〳〵と續いたといふことで、三百餘騎

が全部兜をつけて居たといふ事。○年頃の侍。幾年來久しく目をかけて來た侍といふこと。○渡邊源三競の瀧口。源三は俗の名。瀧口は官名、禁中警固の武士。御溝水の落ち合ふ處に陣してゐるので瀧口といふ。○六波羅へ召して。六波羅は平家の邸宅のある所。卽ち宗盛が平家の屋敷へ呼んだといふこと。○相傳の主。父祖代々相傳へて仕へてゐる主君。○これにもまた兼參のものぞかし。「これにも」は我が屋敷にもといふこと。汝はかねて當邸(やしき)にも出入して居る者ではないかといふ意。○先途後榮を存じて。これから先々の事を考へ、平家に仕へれば、後には大いに立身するといふことを合點して。○朝敵賴政法師に同心せむ。琵琶の方では「ライセイハフシ」と、音で讀むことになつてゐる。「法師」といふ語があるから、僧侶のやうによむのである。朝敵である賴政法師の味方をしようと思ふか。○相傳のよしみ候とも。父祖代々仕へたといふ宿縁はあつても。○殿中に。此の六波羅の御殿の中にの意。當人の宗盛に向つていふから、汎語を以て「御やしきに」といふ方が禮なのである。○恩。待遇。○競はあるか。候ふ。あるか。候ふ。これも地の文を省き、對話丈で文を運んだので、宗盛が「競は居るか。」といふと、競が「居りまする。」といふ。又宗盛が「居るか。」と云ふと、「居りまする。」と問ひつ答へつしてゐたといふこと。後の「あるか」は「競はあるか」を略して變化をつけたのである。○大將出でられたり。前の「入り給ひぬ」に對したので、「入る」は奥に入つたこと。「出でられ」は侍所に出て來た事。○心憎うも候はず。「心にくう」は奥ゆかしいといふこと。卽ち彼れは尊ぶべき武人だと畏敬されて、恐るゝに足る程の者もなし、出で向つて、雜兵には目をかけず、よい武者を選み討ちにしたいと思ひまするが、それについて殘念なは、然るべき馬を持つて居りましたのを、つい此頃親しい者

に盗み取られました事で、といふこと。「さる馬」は然るべき立派な馬。○尤もさるべし。いかさまさうもあらう。尤、最、ともにもとは最大級の副詞であつたが、近ごろは「最」が專ら最大級の副詞に用ゐられ、「尤」は專ら「いかにも」とか「但し」とかいふ意味に用ゐられる様になつた。○南鐐。純白の馬といふ意味の美名。煖廷、南廷とも書く。南鐐は、もと上等の銀の事で、白金卽ちプラチナの事であるともいふ。此の馬、白蘆毛とて雪白なる故に、しか名づけたのである。○心の中こそ無慙なれ。「無慙」は佛語、もと恥づるなきの意で、破戒無慚、放逸無慚などつづけて用ゐたが、こゝは轉じて「むごい」「氣の毒」「同情に堪へた」といふやうな意。無レ慘レ焉の意で無慘と書くべきだといふ說もある。かうして迄相傳の主君に盡くす心根を考へると、實にむごい氣の毒の至りだといふこと。○狂紋の狩衣の菊綴おほらかにしたる。「狂紋」は豹文又は平紋とも書いて、種々の色模樣をまぜて色どつたもの、「菊綴」は、直垂狩衣などの縫留に、組緒を綴ぢつけ、其の餘りをわがねて押しひらめたる總のこと。その様が菊の花に似たので菊綴といふ。「おほらか」は大きくで、普通のものより大形にしたこと。○重代の着背長。祖先傳來の家寶の鎧。着脊長、唯だ着脊とも書く。大將分の着用するもので、普通のより少し脊を長くする所から云ふ。また着長の義にて腹卷、胴丸より草摺の長ければ、ともいふ。○星白兜の緒をしめ。兜の鉢の上なる小凸起を星といひ、その星に銀を被せたのを「星白」といふ。「緒をしめ」は、兜をしつかりと冠つて、しのびの緒を結んだといふ事。○いかものづくりの太刀を佩き。「いかもの」は「嗔物」或ひは「怒物」と書く。すべて作りの大きく嚴めしき事。○二十四さいたる大中黑の矢負ひ。「二十四さいたる」は箙にさしたる矢の數。「大中黑」とは矢の羽の模樣。鷹の羽の中程が

黑く上下の白きを中黒といひ、黑き所の長く續いたのを大中黑といふ。二十四本、廿五本は大人の武人に普通の數で、鎭西八郎は三十六本を負ひ・十三歲の賴朝は十二本を負うたとある。〇瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽ではいだりける的矢一手ぞさし添へたる。　瀧口の武士の特得無二の作法を忘れずして、此の際にも紀念しようといふ心から、征矢の外に鷹の羽ではいだ的矢二筋をもさし添へたといふ意。瀧口の武士の幼い者は、御免を蒙り、禁庭で的矢を射て、御覽に供する故實がある。それから瀧口の武士は箙に征矢をさす外に的矢一手を添へるので、これを瀧口獨特の面目としてゐたのであつた。「骨法」は瀧口が誇りの骨とも眞髓ともいふべき特別作法といふこと。「鷹の羽」は熊鷹の羽。「一手とは内向き外向きの二本の事。「的矢」は人を射るのでなく、的にあてる儀式の矢のこと。〇滋籐の弓。重籐とも書く。籐蔓をしげく卷いてある故の稱。弓の幹を黑くし、白き籐を長さ一寸位づつ、間を五分位づつ隔てて繁く卷いた弓。大將分の持弓である。〇乘替一騎うち具し。「乘替」は自然の事のあつた場合に乘りかへる副馬のこと。馬其ものにもいひ、その副馬に乘る武士をもいふ。こゝは騎馬の家來一人召連れたといふので、競自身の乘る馬は宗盛から貰つたが、並の馬は別に持つてゐたのであらう。『盛衰記』には宗盛から二頭の名馬を貰つたとあり、長門本には三頭を貰つたとある。〇舍人男に持楯脇挾ませ。「舍人男」は馬の口取のこと。「持楯」は歩楯に同じく、地上に並べる掻楯に對し、手に持つて矢を防ぐので・細長い形のもの。歩武者の用。〇屋形に火かけ燒きあげて。競自身の家に火をかけ燒きすてゝ。〇すは奴めを手延びにしてたばかられぬるは。「すは」は「ソレ!」といふ程の意の感投詞。最後の「は」も同じく感投詞。「手延び」は處置の手遲れになつたこと。手飼の動物などをしつ

けるには、繋いだ繩を手許にしかと引きよせておくべきに、伸びをくれ過ぎて、つい逃げられたといふ隱喩の味であらう。「扨は、奴めの見張を怠り、油斷してだまされたか。」といふ程の意。○音なせそ。默つて居ろ〳〵。返事をすると、追討を命ぜられるぞといふこと。○唯今しも……沙汰ありけり。「唯今しも」は、折も折とて六波羅では、「競が逃げた。」、「それ追ひ討て。」、「オ、怖(こは)や、追つては命があるまい。」など云つて騷いで居る丁度其の折に、といふ味。「沙汰」は噂。○無下にその者捕へ搦められはせじ。「無下に」は、「めつたに」位の意。「さればこそとぞ宣ひける。」それ見たとか！　と仰せられた。「すぐに來るであらうぞ。」といふか言はぬに、競がもうやつて來た。それ見よと云はれた。……君臣相許す武士道の現はれも床しいが、文章も實によく出來てゐる。○舍人驚きあひ。大勢の別當共が彼れも是れもびツくりして。○三井寺へ寄せたらんずる人々。賴政の楯籠つてゐる三井寺へ押寄すべき討手の面々。○南鐐が尾髮も生ひず、金燒もまた失せざりけり。生捕にせよの、鋸で首を斬るのと云つて、躍り上り跳ね上つて怒つたが、詮なき腹立や、無駄な豫定の計畫や。いかに怒つた所で、大事な南鐐の毛も伸びまい、恥辱の鐵燒も消えまいぢやないか。外方(そつぽう)向いて、平凡な事を云つてゐて、しかもその皮肉が實によく利いてゐる。

三

『平家物語』は平家が榮華の絕頂から歿落に至る迄を、盛者必衰といふ佛敎思想の背景をつけて書いたものである。戰と戀と無常との三者を巧みに交錯させ、同時に調和させて書いた、我が國唯一とも

いふべき大叙事詩である。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」といふ、しめやかな調子の句で序說を起こして、無數の挿話の十一巻を疊んだ後に、「先帝御入水」のクライマックスを現じ、それから靜かに哀絕の悲劇の名殘の尾を曳いて、建禮門院が小原の閑居の記事に、その寂しい流通の筆をとどめてゐる、その一篇の結構の壯麗なること、而して何とも云はれぬ美しい悲哀を見せてゐること! この點が同じ軍記物語とはいひ乍ら、他の『保元物語』や、『平治物語』や、『源平盛衰記』や、『太平記』などのかけても及ばぬ點である。そしてこれが此の作が單なる軍物語ではなくして、詩味の豐かな叙事詩だといはれる所以である。

『平家物語』の最も偉大なる價値と趣味とは、無論、その十三巻に通じた全體觀の上にあるが、其の一章々々を獨立させて見た斷片觀の上にも亦、云ふに云はれぬ面白さがある。本課の「競」も亦其の一つで、立派な獨立性を持つた一つの物語と見らるべきものであるが、其の味の一つは、先づ興味ある場面の、賑かに而も自然に、意表に出でつゝ而も不思議に統一されて、次ぎから次ぎへとつゞく事である。先づ、賴政が謀叛の動機は? と云つて、好奇心をそゝるべき問題を提出する。そして其處に名馬木の下に關する仲綱の愛惜と、宗盛の强無心と、皮肉の辱めと、賴政の憤慨とを叙する。次ぎには宗盛と比較して、内府重盛が寛容風流の蛇話、劇中劇ともいふべき、エピソードの中のエピソー

ドが挿まれる。扨いよ〳〵高倉ノ宮を擁しての三井寺行きとなる。同時に置去りにされた瀧口競が、故主の薄遇を種に一狂言を書き、故主に棄てられ、二君に見えるといふ二重の灰色な恥辱の間から、意外にも崇高なる武士道の花を咲かせる。而して自ら面目の花を咲かせるのみならず、同時に老主人の頼政には、武將らしい先見の明の名を成させ、若主人の仲綱には、木の下烙印の恥を雪がせる。而して最後に暴慢不思議の言行によつて、大事件「宮軍」の種を蒔いた宗盛が、報復の苦き盃を滿喫させられ、雲上の内大臣が、哀れや尾髮もない畜生となつて、地だんだ踏んで悔しがる。といふ、この通り出意表的な、堪らない興味の場面々々の連續であるが、それが實に仲よく自然に連つて、一種の統一された全一の印象を與へるといふのは、面白いではないか。

興味の第二は、それとなく與へる物訓へである。隱約風化の敎訓である。元來鎌倉室町の文學には知識的敎訓的なる傾きがあつて、文學史家の中には、此の傾向に最大特色を見出だす人（例へば芳賀矢一博士の如き）もあるが、『平家』にも、やはりさういふ所があつて、此の物語のおもなる興味の一つをなして居る。此の章の「競」なども、此の特色を最も豐かに分前したものであらう。さて本文を見ると、先づ初めに、「人の世にあればとて、すゞろに言ふまじき事を言ひ、すまじき事をするは、よくよく思慮あるべき事也。」と、抽象的總括的の注意を與へて、あとはすッかり、藝術の分野に自由の

筆を驅使して居るが、その間にも、それとなく人に道を考へさせ、身を顧みさせるところがある。先づ、仲綱が名馬を愛するのはよいが、物惜しみして、虚言(そらごと)までして長上を詐り、而して人目につく處で、毎日其の馬を弄んで居るのは、貪慾、不信、不謹愼の譏を免れぬであらう。宗盛が言行の言語道斷なることは言ふまでもない。天下を料理する執柄第一の身でありながら、他人の、目下(めした)の、而も敵(かたき)筋(すぢ)なる源家の若者の玩愛に目を着けて、權柄づくに無心をするさへあるに、强(こは)もてに奪ひ取つて、取つた後に、贈主を皮肉に弄ぶなどは、見下げ果てた根性と云はねばならぬ。之れに對して見上げたのは小松内府重盛で、些細の事をも見のがさずして、我が玩愛を贈り、而も其の間に寛厚風流の味を見せるなどは、誠に敵を懷け、仇をも感ぜしめる用意と云ふべきである。かくして源三位賴政は、私怨を報いんがために、十二分の用意をも整へずして王族を煩はしたが、これは一面不忠でもあり、また不謹愼でもあらう。瀧口ノ競に至つては、此の章の花形主人公として、忠義と機智と武勇とに於いて、武人の典型ともいふべき光りを見せて居る。かれは大事に伴はれずして主を恨まぬのみならず、それを利用して更に君恩に報いんとした。その報恩の狂言を首尾よく演じ了へんが爲めに、先づ主家を辱めた宗盛に一喜一憂の煮湯(にえゆ)を飲ませた。堂々と都を立ちのいて、瀧口好みの裝ひに職(しよく)の誇りを見せ、その知れ渡つた手竝は追手の追擊を不可能ならしめた。「寺」に着いては、老いたる入道をして、先見

の誇りに微笑ましめ、若き仲綱をしては、久しく胸に痞へた木の下事件の留飲を下げさせた。世界第一の阿呆は、此の宗盛である。彼れはその心根の卑しさが因となり、他の馬欲しさに蒔いた種を刈らねばならなくなつて、仇を扶持する。名馬の愛馬はまんまと欺き取られる。剰へ畜生扱ひまでされて、悔しまぎれに當てにもならぬ鋸引きの駄々を揑ねた。竝べれば斯うであるが、それが少しも表立たずして、讀者が「うまく書いて居る。」、「優れた藝術品だ。」と、感に入つて居る中に、いつしか一種の人生觀的敎訓を吹き込まれるやうになつて居るのである。面白いではありませんか。

興味の第三は、＝第二の興味を他の方面から見たので、多少重複の嫌ひはあるが＝人情の面白く出て居る事、殊に君臣相許す武士道の根本義の面白く出て居る事である。身に副ふ影のやうに愛して居る名馬を手放しかねるのは、人情であらう。そして惜しむ餘りに虛言を構へるのも、一種の深い人情であらう。瞞されたのに腹を立てゝ、追ッかけ無心の、矢の催促をするのも、高家の驕慢兒としては自然の人情であらう。殊に巧みな日和見と梶取とによつて、同族皆滅の間に只一人成功して來た老巧の入道が、「今の時勢に、あの人達が目をつけた物を、白金黃金で丸めた馬だとて、惜しむべきではない。惜しんだところで、家の内で馬乘りが出來るか。」など云つて、因果を含める所は、實に尤も過ぎて涙もこぼれぬべき人情である。又これを大きな時代進轉の上から見ると、賴政一家が保元以來慘

憺たる苦心によつて、辛うじて築き上げ、持ちこたへて來た榮華が、一朝に夢と消えて、それが大きな平家一族のやがて逢ふべき運命を豫示して居るのも面白く、此の慾と意地との不純なる動機から出た犧牲の合戰が、一種の捨石となつて、源氏興隆の端を開くのも、造化の配劑の微妙な自然さを見せて、何とも云はれぬ味である。それから、競が源三位入道に一身を捧げて、あらゆる辛苦を物ともせぬ忠節、入道が年頃の郎黨に打ち込んで、危急存亡の場合に露ほども疑はぬ信頼、そして此の二つがぴッたりと相合した卽刻の光景を寫して、

　見よ只今參らうずるぞと宣ひも果てぬに、競つと參りたり。さればこそとぞ宣ひける。

と云つた味はひ、面白いではありませんか。

　興味の第四は、同類糾合の面白さである。此の一篇は馬に始まり、馬に央し、而して馬に終はるやうに出來て居る。而も三匹の馬が悉く名馬で、その馬の取扱方がまた悉く變はつて居るから面白い。第一は仲綱の「木の下」で、宗盛がくれろといふ。否だと答へる。是非くれろとせがむ。仕方なく〳〵未練の歌を添へてやる。貰つた上で皮肉をいふと云ふのである。第二の馬は、重盛が「乘一の馬」である。これはやるにも及ばぬ名馬を、期待もせぬ所へやつて、しかも八方に快感を與へ、日本一の男を上げるといふのである。第三は宗盛が雪白、プラチナ色の「南鐐」である。これは我が慾の爲めにマン

マと欺き取られ、向うの敵に二重三重の手柄をされて、而して自分は馬を通ほして、すつかり畜生道に墮獄する、といふのである。汝に出づるもの汝に返るといふが、これは馬で出た話が馬に戻るので、而も初めの馬は、無理に乞ひ取つて、返さずして人物を下げ、後の馬は悅んで與へて、而して早速返されて、同時にあッたら顏へ散々に泥を塗られる。あつた事實を大體そのまゝ寫したのではあらうが、同じ樣な事を繰返しながら、すつかり變化をつけて、同中に異あり、異中に同ある妙味を十二分に發揮して居る所が面白いではないか。無論かういふ事は、必ずしも作者が特別に趣向したのではなからうけれども、出來た上について見れば、此の點にも兎に角捨てられぬ妙味があると思ふ。

第五の興味は、＝これは聊かこじつけの樣ではあるが＝主人公の「競」の名を中心として、一篇全體が「競爭」の場面連續に成つて居るといふ事である。一編の首尾が「競イデオロギイ」で出來てゐるといふ事である＝少々愚デオロギイの氣味はあるが＝　先づ仲綱と宗盛とが「くれろ」「やらぬ」で、曳々聲の競爭をする。此の競爭は幸に老賴政が水を入れたので收まつたが、宗盛が事後の處置振に激して、今度は老功の賴政が昻奮して、平家と競爭を始めた。つゞいて挿話として、重盛對宗盛の馬を挾んでの腕較べ競爭がある。やがて宗盛と競との智慧競べ、競と平家の侍との膽力比べがあり、また賴政と渡邊黨との先見競べがあつて、到頭瀧口競の大勝利になるといふのである。かう見ると、此の一編が

根柢に於いて、主人公瀧口競の名と精神とによつて繋がれてゐるので、これも、暗々の中に此の文の一大興味を成して居るのであらう。

第六の興味は文章の面白味である。此の文章のうまさについては、已に語釋の處にもぽつ〱言ひ及んで居るが、尚ほ二三を拾ふと、前にも云つた、

「あつぱれ其の馬は一昨日も候ひし。」、「昨日も見えて候。」、「今朝も庭乘し候ひつる。」など、口口に申しければ‥‥」

は、三人三様の告口を、切れ〲に、しかも漸層的に書いてゐて實に面白い。支那には市に三虎といふ諺もある。論理學には漸層の似而非推論（fallacy of climax）といふものが、人を誑かす主なる謬論として說かれて居る。例へば、裏切の事實の更に無い人物についてでも、段々噂、陰口の調子を高めて、「彼奴は裏切する氣かも知れぬ。」といひ、「裏切しさうだ。」といひ、「裏切したらしい。」といひ、「裏切したといふことだ。」、「裏切した。」、「確かにした。」、「怪しからん。」と、調子を進めて行けば、成程さうかと人が信ずるやうにもなるであらう。『平家』のこゝの文句のあしらひには、言ひ表はし方に、さういふ妙味があり、又敎訓があつて非常に面白い。

それから三位入道の敎訓に「たとひ黃金を以て丸めたる馬なりとも、それ程人の乞はうずるに‥‥」

など、比喩が實に面白い。それから「其の仲綱めに鞍置け、引き出せ、乘れ、打て、はれ。」と、一つ一つの命令を獨立させて、言ひ切つたところなど、宗盛が激して取りのぼせて居る趣や、憎々しさを如實に見せて、實に列叙式詞姿の妙を極めて居る。それから、

　いかなれば小松殿は、斯様に優なるためしもおはせしぞかし。此の宗盛卿は、さこそなからめ、

の「此の」であるが、この二字の爲めに、宗盛が目に見える様になり、作者が、握りかためた拳固（こぶし）に息を吹きかけて、宗盛の頭を叩（は）らうとしてゐる所が見える様で、實に面白い。『平家』にはかういふ一寸した語ながら、特殊の氣分を如實に寫し出だす呼吸に於いて、なか〳〵優れた所がある。それから最後に、「競は在るか。」「候ふ。」「在るか。」「候ふ。」とて伺候す。」も、面白いが、殊に面白いのは後の、

　宗盛卿急ぎ出でて、「競は在るか。」「候はず。」と申す。

の皮肉の味である。これは前なる「あるか」「候ふ」〳〵を踏まへて利用した皮肉で、宗盛は「競は在るか。」と云つて、「候ふ」(控へ居りまする)と言ふ競自身の返答の續く事を豫期してゐたのであるが、それが他人の聲で、「候はず。」(居りません！)と答へたので、だしぬけの意外にびッくりして、「すは奴（きやつ）めを手延びにして」と慌てたのである。即ち前例を踏まへて意外の味を見せたので、何とも云はれぬ妙味である。昔話にかういふ事があるではありませんか。昔歴々の大名達が或る處に會合された。

話の進む中に、大名達が銘々自分々々の屋敷の自慢話を始めた。或る大名は、「邸の庭に酒瓶を置いて、酒を湛へたところが、猩々がまゐる。」などいふ。或る大名は、「牡丹を植ゑたところが、唐獅子が來ては狂ひ居る。」などいふ。すると先刻から笑つて聞いてゐたさる大名が、「手前の庭に桐の木を植ゑ申したところが……」といふと、傍らの大名が、口を挿んで、「ハハア鳳凰が來ましたかな。」と云つて笑つた。一同もそれに連れてどッと笑つたが、前の大名すましたもので、「イイヤ左様ではござらん。下駄屋が參り申す。」と云はれたので、一同すつかり參つて頭をかいたといふ話がある。云はゞ斯ういふ味で、向うの豫期があるのに乘じて、其の裏をかき、期待をはづした皮肉の面白味である。宗盛は期待がはづれたので意外に驚く、讀者は好い氣味好い氣味と、手を拍つて宗盛を笑ひつゝ、同時に此の文章の冴えに感ずるといふ味であるが、かういふ機轉の文章も、『平家』には處々にしばしばある。

四

無論これは局部々々の短い文句を拾つて見たのに過ぎぬ。『平家』の文章の最大妙味は、その全體を一團として見たところにある。同時にこれを諒解していたゞきたい。

第七の興味は『平家』の作者がもつ拔目のない藝術的敏感である。親切な、克明な、而して大膽な寫實の間に於ける油斷のない想像力の運用である。具體的にいふと、本筋の事件を立派に寫す間に、適切な補助挿話を見出だして全體を引立たせて行く手腕である。私はその最も好い例の一つを、此の章に於ける小松内府の蛇挿話に見出だす。此の挿話は本筋のヒーロー仲綱に關係し、同時に宗盛の兄なる寛厚風流の賢宰相重盛に關係して居る點から見、緣の近さと對照の鮮かさとから見て、此處に取り入れらるゝに頗る適當なるものであらう。其の中に名馬の出て來る事は、木の下、南鐐の間に挿まれる話として、また頗る適當なるものであらう。けれども其等よりも更に適切で、此の一篇の記事全體の效果の上に偉大なる貢獻をなして居るものは、瀧口競の點出である。何故であるか。讀者は此の挿話に於いて、先づ瀧口競と近づきになるであらう。而して仲綱に信頼された此の快男兒の面影に心を惹かれつゝ、段々に讀み進むと、やがて賴政が三井寺引揚げの幕となつて、そこに謎のやうな一種特異の姿を現はしたのが、前の挿話に於ける古馴染の瀧口競ではないか。而も前に端役を勤めてゐた競が、今度は檜舞臺の上に堂々とシテ役を勤めて、我が武士道をも揚げ、同時に老若二人の主君の面目をも起こして居るではないか。讀者は之れを見て、「イヤア、彼奴が出て來たぞ！」「やり居るわ！やり居るわい！」と、會心の微笑に頷きつゝ、舊知の仲間の成功を祝する氣分で、心の内に拍手し、

喝采し、歡呼し、踴躍するであらう。此の異常な、人を打つ面白味は、全く前の挿話に於ける襯染的準備の贏ち得たるものではないか。此の場合に於いて、前の蛇挿話に競を點出した襯染の準備が、いかに後なる本筋の興味の發揚に與つて力があるかは、此の瀧口の挿話なしに突然三井寺引揚の記事に進んだ場合の物淋しさを想像すれば、容易に理解し得る事である。また此の蛇始末の役目を競以外の他の郎黨が勤めた場合に、後の本筋の記事が、いかに唐突孤立の物足らぬものとなるかも、容易に想像し得ることであらう。私は競の點出が作者の周到なる考慮の結果であるか、偶然の思附であるか、或ひは又事實そのまゝの敷き寫しであるかを知らぬが、とにかく此の挿話に於ける競の存在が、此の一篇の文學的價値と興味との上に偉大なる寄與をなして居る事は、疑ふべからざる事である。長門本と『源平盛衰記』とは、此の蛇處分の役目を競の同族の渡邊省に勤めさせて居る。これは恐らく、此の異本作者が例の複雜主義の現はれで、人物を多くして、變化を附け場面を賑はさんが爲めであらうが、其の藝術的企圖としての失敗は、右の説明によつて明らかなる事である。

そもそも添景挿話は、本筋の完成引立に對して微妙甚大の關係を有するもので、其の選擇に關する作家の苦心は一通りのものではない。ジョン・ラスキンが、物を畫く畫家の心得について云つてゐることに、畫家はまづ物の姿を忠實に現はさうとつとめねばならぬが、同時に、直接なる、物質的の現象よ

りも、更に眞實に、更に高尙なる空想的現象を摑んで之れを活用せねばならぬ。此の事の實現はあらゆる美術に大切なる仕事で、而してそれは絶對に想像の領域に屬する事である。(Having learned to represent actual appearances faithfully, visionary appearance will take place to you which will be nobler and more true than any actual or material appearance; and the realisation of this is the function of every fine art, which...consist absolutely in imagination. の前後を見配つての自由譯)といふやうな事を言つて居るが、ラスキン協會員のマアシャル、メーサー氏 (Marshall Mather) が、之れを例說して居る言の概略に、讀者は英國近代の名高い風景畫家ターナー (Turner) の傑作「戰艦テメレール號」("The Fighting Téméraire") を知つてゐるであらう。「テメレール」はトラファルガーの海戰にネルソンの率ゐた艦隊の中、旗艦に次いだ大艦であるが、ターナーの作は、此の名譽の大軍艦が一生涯の役目を果たして後、老廢艦として、再び出づまじく港に引き入れらるゝ最後の光景を描いたもので、其の構圖は一方にテメレールの巨艦があり、他の一方にはそれを引いて行く、形は小さいが曳く力の非常に强い蒸氣船がある。これが此の畫の主體で、外に添景として、空の一方には夕陽が物悲しげに最後の光を投げて居り、一方には東の空に今上つたばかりの新月の影が見えてゐる。さて問題は此の夕陽と新月とであるが、作者は此の通りの光景を一度實際に見て、それを畫布の上に再

現したものであらうかといふに、決してさうではあるまい。作者は恐らく一度も斯様な光景を見なかつたのであらう。而して斯ういふ組み合はせとしては、一度も見なかつた夕陽と新月とを、どうして此の場合に配合したかといふと、前者を取り入れたのは、此の一日におさらばを告げんとして、物悲しい最後の光を投げて居る夕日、久しく海波の上で相伴つた此の老廢軍艦の末期をば、別かれを惜むかの如くどんよりと照らしてゐる夕日をあしらふ事が、此の場合に於けるテメレールの氣分を現はすに、最も適當だと考へたからであらう。また後者を取り入れたのは、東の空に出たばかりで、まだ光は弱いが、やがて中天に輝くべき新月が、小さい形をして樂々と巨艦を牽いて居る新しい汽船の、急速に發展すべき隆々たる運命を象徴せしめるに、此の上もなく相應はしいと考へたからであらう。要するにターナーは、戰艦テメレールを主題とする此の畫の中心生命を發揮するに適した材料を、廣く八方に求めた結果、唯一最適の添景として、此の夕陽と新月とを得たので、而して此の二つは、共に此の畫家が想像力によつて求め得たところである。

といふやうな事を云つて居る。話が岐路に入つてくどくなつたが、小松内府の蛇捕話に於ける瀧口競は、まさしく「テメレール」に於ける「夕陽」「新月」ではないか。話は更に横路に入るが、私は常に古文學に引用される古事、古歌、古文などについて、此の種の妥當性の研究の必要なる事を感じてゐる。

例へば『源氏物語』などには、屢々催馬樂風俗歌の類が引き出されるが、多くの註釋研究には、唯だその歌詞の意義についての解釋が與へられて居るのみで、其の特別の歌謠が、何故に其處に引かれたか、又引かれねばならぬかの說明が殆んどない。私の見る所では、『源氏』に於ける成句引用の藝術的價値は、第一に其の妥當性にあるので、假りに催馬樂、風俗歌の類だけについていふと、數十篇を存する此の種の歌謠の中で、其の場合々々に最も適當で、それ以上に相應はしいものがないといふ妥當者が、あらゆる場合に引かれてゐる樣に思はれる。一例を擧げると、「若紫」の卷の中に、源氏が久方振りに葵の上を訪ねられると、女君が例のしぶつて早速出て來られないので、源氏はわびしさに和琴を彈きながら、「常陸には田をこそ作れ」といふ風俗歌を口ずさまれたといふ事を、かう書いてゐる。

例の女君、とみにも對面し給はず。物むつかしう覺え給ひて、あづまをすが搔きて、常陸には田をこそ作れといふ歌を、聲はいとなまめきて、すさび居給へり。

これは常陸の風俗歌と云はれてゐる、

常陸にも田をこそ作れ、あだ心かぬとや君が、山を越え、野を越え、雨夜行きませる。

の一部を擧げたのであるが、此の歌の初めの句の意味は、愚考には、國の常陸に何等の關係があるのではなく、直路に、側目もふらず、一心不亂に田を作つてゐるのにといふ事であらう。全體の意は、

私は此の通り、一所懸命に田を作り、家事にいそしんで居るのに、君は吾れを疑つてか、雨夜といふに、野山を越えて、あだし女を呼ばひに行かるゝ。と云つて、女が男を怨んだので、たとへば、

一心不亂に田つくる我れを、君は疑うてあちら行く、野越え山越えあちら行く。

といふやうな味であらう。而して源氏が此の場合に此の風俗を口ずさんだのは、私は妻戀しさにたまさか來たのに、その妻が例の澁つて、早速は顏も見せず、うち解ける氣色もないのが、ぢれッたい、忌々しい、といふ意を寓せて、「一心不亂にかうして來るに、妹は疑うてあちら向く」といふ下心の不平を漏らされたのであらう。かう考へると、此の歌は源氏の心をそつくり代辯して居るので、此の場合に於ける源氏の心をこれ以上に象徵し、其の心持の表現をこれ以上に引立てるものは、あらゆる郢曲の中に唯だの一つもあらうとは思はれぬ。その唯一無二ともいふべき、掛替の無いのを選擇し引用して、當面中心の記事を引立て、作の藝術價値を高めたのが紫式部の偉いところであらうと思はれるが、此の『平家』の一章に於いて、蛇(くちなは)挿話に於ける瀧口競の點出は、まさしく「若紫」の源氏の此の場合に於ける「常陸の風俗歌」ではないか。

かくいへばとて、無論私は此の「兩馬の鐵燒」の一章を、批難すべき點の全くない完全無缺の作と思ふのではない。一二の難を拾へば、先づ仲綱が「木の下」を宗盛に送る時に、

戀しくは來ても見よかし身に添ふるかげをばいかゞ放ちやるべき。
の歌を添へたといふのは、少し理の聞こえぬ話で、穩かには、此の歌をば、まだ拒絶して送らぬ中の作と見るべきであらう。『盛衰記』の作者は、此の不自然不合理に目を着けたのか、之れを中間に於ける拒絶の歌として、

伊豆守は我れだに猶ほ見飽かず、不得心なりと思ひて、猶ほも無しと答へければ、大將は負けじと、一日に二度三度使を遣はし、六七度遣はす日もありけれども、惡しく惜しみて終にやらず、一首かくこそ讀みたりけれ。

　戀敷は來ても見よかし身に副ふるかげをばいかゞ放ちやるべき。

と改めて居る。文章はやゝこしく、あくどくて、とても流布本に比ぶへくもないが、筋、趣向の自然といふ點に於いては、『盛衰記』を以て優れりとすべきであらう。

後の方で、もう一つ、競が所持の馬を親しい奴めに盜まれたからと云つて、宗盛から南鐐を乞ひ受け、やがて、三井寺に引きあげる所に、「滋籐の弓持ちて、南鐐に打乘り、乘替一騎打具し、」と書いてあるが、敏感なる讀者は必ず、此の「乘替一騎」の出所に不審を立てるであらう。而して名馬ならぬ凡馬は、盜まれた馬以外にまだ一頭持つてゐたのか、宗盛に對して盜まれたと云つたのは瞞しの手

段であつたのか、或ひは其の一頭は他から盜んが來たのかと想像するであらう。而して此の不安に氣がついたのか、『盛衰記』は宗盛が、初見參の引出物として、競に二頭の名馬を與へた事として、

隨分祕藏し給ひたりける、小糟毛といふ馬に貝鞍置き、遠山といふ馬引き具し、黑毛威の鎧兜皆具し賜ひてけり。

と改め、而していよ〳〵三井寺に馳せ參ずる折には、

大將より賜ひぬる鎧着て、小糟毛に乘り、遠山に乘替の童乘つて、郎等三騎家の子二騎、都合七騎にて、三井寺へとて打出でけり。

と書いてある。長門本は更に念を入れ、二頭の中の一頭に、仲綱が舊愛の木の下を入れて、先づ初參したる引出物にとて、芦毛なる馬の太く逞しきと、黑鹿毛なる馬の逸物なるとに、鞍置いて賜ひたり。

と書き、而して「御用の時は必ず返上すべく候」といふ約束のもとに、黑鹿毛に代へて

木下丸を競に賜はつてけり。

と改めて居る。また三井寺行には、

木下丸には競乘つて、芦毛には乘替の童を乘せ・・・

と書き、而して、寺に着いて仲綱に見せると、その芦毛が宗盛の祕藏する京中第一の名馬南鐐であつたので、仲綱は大いに悦んで、左右の股に「宗盛」といふ鐵燒をして放つたと書いて居る。或ひは長門本が初めの改作で、『盛衰記』は長門本の餘りなるやゝこしさに眉を顰めて、折衷式に簡單化したのであるかも知れぬ。とにかく長門本も『盛衰記』も、文章として見、藝術品として見れば、共に遙かに流布本に劣つてゐるけれども、流布本の無理不自然を救つた點は大分ある。而して此の點が長門本、『盛衰記』等、主なる異本作者の最も著しい功績と認むべきものであらう。

流布本の此の一章に於ける缺點は、拾へばまだ〳〵あるであらう、又他の部分についても大體同じ事が云へるであらうが、私はそれにも拘はらず、之れを一種の名篇とするに躊躇せぬ。また長門本や『盛衰記』や、その他の異本が流布本に優つて居る點も澤山あるであらうけれども、私はそれにも拘はらず、流布本の優越を信じて疑はぬと同時に、流布本の先出をも信じて疑はぬ者である。『盛衰記』の陰口を叩きながら、『盛衰記』に輪をかけたやうな冗漫に陷りました。ちと氣を變へて、別の場面に移りませう。

第十四　日本一の剛の者

一

源三位頼政は武運拙くして、やがて宇治河畔の叢の露と消えたが、彼れが傳へた以仁王の令旨は、諸國の源氏を飛礫された蜂のやうに起たしめた。第一に起つたのは木曾の冠者、後の旭將軍源義仲である。彼れは木曾の山間より起こつて越後に出で、北國路を都へ〳〵と押し上つたが、燧ケ城、倶利迦羅が谷、篠原と、捷戰のしつゞけに、疾風枯葉を捲くが如くに邁進し、行かぬ先に奢る平家を都から追ひ落して、第一に源氏の白旗を王城に押し立てた。こゝに引かうと思ふのは、此の折の捷軍の一つ、卷第七、越前ノ國篠原の合戰に於いて、幼い折の義仲に緣のあつた平家方の老勇將、齋藤別當實盛の討死する所、及び、木曾がその首を實撿する所の悲壯な物語である。

落ち行く勢の中に、武藏ノ國の住人、長井の齋藤別當實盛は、存ずる旨ありければ、赤地の錦の直垂に、萠黃威の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、黃金作りの太刀を帶き、二十四差いたる截生の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢葦毛なる馬に、金覆

輪の鞍を置いて、乘つたりけるが、御方の勢は落ち行けども、唯だ一騎返し合はせ返しあはせ防ぎ戰ふ。木曾殿の方より、手塚太郎進み出でて、あなやさし如何なる人にて渡らせ給へば、御方の御勢は、皆落ち行き候に、唯だ一騎殘らせ給ひたるこそ優に覺え候へ。名乘らせ給へと詞を、懸ければ、まづかういふ和殿は誰ぞ。信濃國の住人、手塚太郎金刺光盛とこそ名乘つたれ。齋藤別當、扨は互によき敵、但し和殿を下ぐるにはあらず、存ずる旨があれば、名乘る事はあるまじいぞ。寄れ、組まう、手塚とて、馳せ雙ぶる所に、手塚が郎等主を討たせじと、中に隔たり、齋藤別當に押し雙べて無手と組む。齋藤別當、あつぱれ己れは、日本一の剛の者と、くんでうずよ、なうれとて、我が乘つたりける鞍の前輪に押附けて、些も動かさず、頸搔き切つて捨ててげる。手塚太郎、郎等が討たるゝを見て、弓手に廻り合ひ、鎧の草摺引き上げて、二刀刺し、弱る所を組んで伏す。齋藤別當心は猛う思へども、軍には、し疲れぬ、手は負うつ、其の上老武者ではあり、手塚が下にぞなりにける。手塚太郎馳せ來たる郎等に首取らせ、木曾殿の御前に參り畏つて、光盛こそ奇異の

曲者と組んで、討つて參つて候へ。侍かと見候へば、錦の直垂を着て候。又大將軍かと見候へば、續く勢も候はず。名乘れ〳〵と責め候ひつれども、遂に名乘り候はず。聲は坂東聲にて候ひつると申しければ、木曾殿あつぱれ是れは、齋藤別當にて有るござんなれ。それならんには義仲が上野へ越したりし時、稚目に見しかば、白髮の糟尾なつしぞかし。今は早七十にも餘り、白髮にこそなりぬらんに、鬢鬚の黑いこそ奇しけれ。樋口ノ次郎兼光は、年來馴れ遊んで、見知つたるらん、樋口召せとて召されけり。樋口次郎只だ一目見て、あな無慚齋藤別當にて候ひけりとて、涙を流す。木曾殿それならんには、早七十にも餘り、白髮にこそ成りぬらんに、鬢鬚の黑いは、如何にと宣へば、良有つて樋口次郎、涙を抑へて申しけるは、さ候へば其の樣を申上げんと仕り候が、餘りに哀れに覺え候うて、先づ不覺の涙のこぼれ候ひけるぞや。されば弓矢取は、いさゝかの所にても、思出の言をば、兼ねて使ひ置くべき事にて候ひけるぞや。齋藤別當常は兼光に逢うて、物語し候ひしは、六十に餘つて、軍の陣へ向はん時は、鬢鬚を黑う染めて、若やがうと思ふ也。其の故は若殿

原に爭うて、先を懸けんもおとなげなし、又老武者とて、人の侮らんも口惜しかるべしと申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へと申しければ、木曾殿さも有るらんとて、洗はせて御覽ずれば、白髪にこそなりにけれ。

又齋藤別當、錦の直垂を着ける事も、最後の暇申しに、大臣殿へ參つて、かう申せば實盛が身一つには候はねども、先年坂東へ罷下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上つて候ひし事、老の後の恥辱、唯だ此の事に候。今度北國へ罷下り候はゞ、定めて討死仕り候べし。實盛元は越前國の者にて候ひしが、近年御領に附けられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事の譬の候ぞかし。故郷へは錦を着て歸ると申す事の候へば、何か苦しう候べき、錦の直垂を御免候へかしと申しければ、大臣殿優しうも申したりけるもの哉とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞こえし。昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻し、今の齋藤別當實盛は、其の名を北國の巷に揚ぐとかや。朽ちもせぬ空しき名のみ留め置きて、骸は越路の末の塵と、なるこそ哀れなれ。去んぬる四月十七日、平家十餘萬騎にて都

を出でし事柄は、何面を向ふべしとも見えざりしに、今五月下旬に、都へ歸り上るには、其の勢僅かに二萬餘騎、流れを盡くして漁る時は、多くの魚を得ると雖も、明年に魚なし、林を焚いて獵る時は、多くの獸を得るといへども、明年に獸なし。後を存じて、少々は殘さるべかりけるものをと、申す人々も有りけるとかや。

二

語釋　存ずる旨。思ふ理由の意で、「深い考があつて」といふこと。本來「存ずる」は、一人稱的に自分にのみ使ふべき詞で、三人稱的に他人に使ふべき詞ではないが、―例へば「私は存じまする」とはいふが、「彼れは存ずる」とはいはぬ、―これは當時の慣用語として許さるべきである。○鍬形打つたる。兜の目庇の上に附ける前立物の一種、鍬の形したる故にいふ。或ひは慈姑形の轉で、慈姑の葉に似た所から名づけたともいふが、俗說であらう。「打つ」は、附けたといふ事の通り詞。○連錢葦毛。葦毛に灰色の丸き斑のある馬。その斑の散らばつたのが錢を連ねた樣に見えるからの美稱。○金覆輪。黄金で緣を取つた鞍。○あな優し‥‥優に覺え候へ。これは文法的に見ると、照應を缺いた喰違ひで、橫逸れした文である。「如何なる人にて渡らせ給へば」と疑問の形で書き出すならば、「唯だ一騎殘らせ給ふぞ。」と、やはり問ひ掛かりの形式で止めねばならぬので、「如何なる御方なれば、唯だ一人踏み留

まりなさるのは、立派ですねい。」では、文法的には物にならぬ筈である。しかし是れは、興奮して勢込んで言ひ續けた結果、中途から逸れたので、一種の修辭上の味として許さるべきである。つまり初めには、「どういふ御方なれば、味方の御勢が悉く落ち行く中に、唯だ一騎踏み留まつて御戰ひあるぞ。」と云はうとしたが、前句の從部たる客語を、中途で主語に換質して、「唯だ一騎御踏み止まりとは、御見上げ申しますよ。」といふ風に極めて了つたので、即ち(一)「如何なる人なれば一騎殘れるぞ。」(二)「一騎殘れるこそ優なれ。」といふ二つの文章を、中間の句を掛持にする事によつて、一つに統べ括つた曲味の文章と見るべきであらう。かういふ文章は、文法的には不法であるが、修辭上からは、時としては許され、時としては難ぜらるべきもので、つまり用ゐられる場合と、文章家の使ひこなす力次第で、價値の定まるべきものである。○和殿は誰そ。我が殿の意で、我君、我上臈、我入道、我妹など、皆同じ使ひざま。○互によき敵。互に不足のない相手である。○下ぐる。輕蔑する。○寄れ、組まう、手塚。「さア寄れ、組まう、手塚よ。」と、切れ〱に、例の列叙的、斷叙的になつて居る所が面白い。○あつぱれ己れは、日本一の剛の者と、くんでうずよ、なうれとて。「やあ汝は一雜兵の身を以て、此の齋藤實盛といふ日本一の大剛の士と組んで討死するといふのか。」といふ意。こゝを、謠曲の「實盛」には、「日本一の剛の者と軍諍ずよとて」と書いてあり、古來いろ〱の說があつて、或ひは「軍上手」の意といひ、或ひは「組み上手」の意といひ、或ひは「組んで打つよ」、「組んで落つよ」の意といひ、或ひは「組んで失すよ」(組んで討死するよ)の意といひ、「なうれ」については、「なあ己れ」で「これ貴樣が」の意であらうなど云つて來たが、小野高尙の『夏山雜談』に、「此の意は、我が如

き日本一の兵と組むといふかとて組みたりし事なり。「でふず」といふ詞は、今も越路にいふとなり。又「のうれ」とは、實盛が生國越前國の詞なり。今も越前にては詞の後に「のれ」といふ詞ありとなり。俗歌に「加賀のかに越前のれに都のゑ東男ののさのをかしき」といふ事もあるなり云々」とあるので、大體が解決された樣に思はれる。卽ち「なうれ」は、越前詞で「のか?」といふ意味の疑問の感投詞である。「組んでうず」は今も秋田邊に用ゐられて、雅言にすると「組みてんず」にあたるといふ事で、つまり「組まうとする」といふ意であらう。卽ち取りすべていふと、「汝は生意氣にも、此の日本一の豪傑と組まうといふのかホレ!?」といふ事。「日本一」は、活版本にニホンイチと振假名したのもあるが、これは無論「ニツポンイチ」と讀まねばならぬ。「剛の者」は謠曲には澄んで「カウノモノ」と讀ませてある。『平家』でも多分澄んで讀んだらうと思ふ。「くんでうすよ」を謠曲では「グンデフズヨ」と讀ませてあるが、『平家』の古版に「組デウズヨ」とある所を見ると、『平家』でも「ク」を澄まして讀んだのであらう。○齋藤別當心は猛う思へども、軍にはし疲れぬ、手は負うつ、其の上老武者ではあり、手塚が下にぞ成りにける。は、文句の選み方から順序立まで、なか〲うまく出來てゐる。○侍かと見候へば錦の直垂。錦の直垂は大將軍の着るもので、督以上でなければ許されぬ例なので云つたのである。○坂東聲。坂東は足柄山、碓氷峠以東の相模、武藏、上總、下總、(後に安房分立)常陸、上野、下野、陸奥(後に出羽分立)の八ケ國。但しこゝでは、「關東邊」、「東國聲」と云ふ位のつもりで云つたのであらう。○齋藤別當にて有るござんなれ。「あるにこそあるなれ」で、「あるのであるな」といふ事。○白髮の糟尾なつしぞかし。白髮まじりの胡麻糟頭であつたといふ事であらう。糟は不純な分子の交れる意。「な

つし」は「なりし」のつまつた音便。此の處近頃の版本には、多く「糟尾」と書いて「かすを」と振假名してあるが、古版本に「糟尾」と書いて「かすう」を假名をつけたのがあり、異本に「白髪のかすうなりしが」とあるのがあり、又謠曲の「實盛」にも「鬢ぴげのかすうなりし程に」と讀ませて居る所を見ると、「かすう」と讀むのが本當で、察するに、古本に片假名で「ウ」と書いたのが「ヲ」と誤られ、その誤つた「ヲ」に尾の本字をあてる樣になつて、段々と誤を重ねたのであらう。「かすう」の意は曖昧だが、案ずるに、馬の毛色に、灰色に白き差毛のまじつたのを糟毛といふ、其の意味と、「かすか」(微、薄)の意味との二義をかねて、「白まじりの手薄な胡麻鹽になつてゐた」といふことであらう。
○鬢鬚。ビンやヒゲのといふのを束ねて云つた當時の俗語であらう。ビンピゲと讀む。○弓矢取。武人の事、弓取ともいふ。○聊かの處にても思出の詞云々。「一寸した場合にも、後に人から思ひ出され床しまれるやうな言葉を、前以て述べて置くべきことで御座りましたぞ。」といふ意。「候ひけるぞや」の「ける」は、「現在實盛の例で解りましたが、今思へば、かねて言ひおくべき事で御座りました。」といふ味はひである。○不覺の淚。不覺悟の淚の意で、こんな場合にめゝしく泣くのは不覺悟でお恥しいがといふ意、といふが、多分覺えずそゞろに流れるといふことであらう。○常は兼光に逢うて。今ならば「常に」といふ所で、これは當時普通の使ひざまである。○大臣殿(おほいとの)。內大臣平宗盛の事。內大臣を和名でウチノオホイマウチキミといふ、其の中の「オホイ」だけを取つて云つたので、大殿樣といふ程の意である。○かう申せば實盛が身一つにては候はねども。異本に「かう申せば」の一句を除いたのもある。此の一句・一寸落ちつかぬやうに見えるが、これは多分「改まつてかう申すと、いかにも實盛一人だけの事のやう

に聞こえまする、無論さうでは御座りませんが」といふべきを括つて略したのであらう。略し過ぎた嫌ひはあるが、理窟もつくし、又却つて一段面白くもある。○近年御領に附けられて。御領地附きの役人になつて。○朱買臣。呉の國會稽の人、家貧しく、薪炭などを賣つては書を讀んでゐたが、後漢の武帝に用ゐられて、生れ故鄕の會稽の大守に任ぜられた。其の時に錦の衣をきて歸つたといふ故事である。○朽ちもせぬ空しき名のみ留め置きて、骸(かばね)は越路の末の塵と、なるこそ悲しけれ。一寸見ると、不朽の美名を留めて、北國の果で死んだのが可哀相だといふことに聞こえるが、さういふ意味ではない。是れは『平家物語』の作者の悲觀的な皮肉な人生觀が面白く現はれたところで、眞意は「このはかない空(あだ)な世に、名も朽ちてしまへば結句さツぱりしてよいが、なまなか朽ちもせぬ空名だけを留めて、大事な身體(からだ)が＝これがあつてこそ、花や月も樂しまれ、榮華の味も味はゝれる其の身體が＝越路の場末の塵あくたになるといふのは、何と氣の毒な事ではないか。」といふ事でらう。實にたまらない奥深い哀音が、文字の間から響いて來るやうに思はれる。西行法師が、陸奥に下り、實方中將の舊跡を弔うて詠んだといふ歌に、

朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて、
　枯野のすゝきかたみとぞ見る。

といふのがある。『平家』の作者は、或ひは之れを踏まへたのかも知れぬ。或ひは時代思潮の影響で、西行も『平家』の作者も、同じ様にこんな事を考へてゐたのかも知れぬ。○流れを盡くして云々。『呂氏春秋』に竭レ澤而漁、豈不ニ獲得一、而明年無レ魚。燒レ藪而田、豈不ニ獲得一、而明年無レ獸。」とある、大本はこれであらうが、併しながら近き緣

は『貞觀政要』に、魏徴が唐太宗を諫めた詞として、「流れをつくして漁る時は、多く魚を得ると雖も、魚盡きて明年に魚なし、林を燒いて獵する時は、多く獸を得ると雖も、獸つきて明年に獸なし。」と書いてあるのであらう。『貞觀政要』は平安朝以來、鎌倉時代にも、爲政者其の他上流に讀まれた本で、『假名貞觀政要』も出來た位であるから、多分これから出たのであらう。其の他にも、『平家』が此の書物に負うて居る例がぽつ〳〵ある。〇「候」の用例。前にも度々述べたが、鎌倉時分に於ける「候」の用例について、此處でも一寸注意して戴きたい。手塚ノ太郎は實盛を自分より一枚上の先輩と見たので、「御方の御勢は皆落ち行き候に、唯だ一騎殘らせ給ひたるこそ優に覺え候へ。」と云つてゐるが、實盛は光盛を眼下に見て居るので、「候」は一つもつけずに「和殿を下ぐるにはあらず、存ずる旨があれば、名乘る事はあるまじいぞ。」と云つて居る。そして、其の實盛が主君の宗盛に對する時には畏つて、「實盛が身一つにては候はねども、……逃げ上つて候ひし事、老の後の恥辱唯だ此の事に候。今度北國へ罷下り候はゞ、定めて討死仕り候べし。事の譬の候ぞかし、錦の直垂を御免候へかし。」と云つて居るが、主人の宗盛は「優しうも申したりける物かな。」と云つた丈で、「候」とは云はぬ。「又光盛は名乘れ〳〵と責め候ひつれども、遂に名乘り候はず、聲は坂東聲にて候ひつる。」といひ、樋口次郎は「さ候へば、其の樣を申上げんと仕候が、餘りに哀れに覺え候て、先づ不覺の涙のこぼれ候ひけるぞや。」と云つて居るが、二人の主君たる義仲は、「齋藤別當にて有るござんなれ」、「白髮の糟尾なつしぞかし」、「鬢鬚の黑いこそあやしけれ」、「樋口召せ」といひ、「木曾殿さも有るらんとて」といふだけで、假初にも「候」とは云はぬ。是等の例によつて、當時「候」が敬語として特別の場合にのみ用ゐられた事、作

者が此の語によつて、人物の貴賤、尊卑、傲慢、謙遜、意氣の軒昂消沈等に關する微妙な心の影を顯はすに、可なりの苦心をしたことがわかるであらう。

三

今迄に述べたやうな事は成るべく繰返さぬ事にして、私が特に此の一章について感ずるのは、自然に筆を運んで居る中に、人知れぬ技巧を含蓄させて居る事である。此の章の中心題目は言ふ迄もなく、實盛が「白髮染」と「錦の直垂着用」との二件であるが、その段取の進み方を見ると、「篠原の合戰に平家方が總崩れして落ちて行く中に、齋藤別當實盛が唯だ一人返し合はせて戰ふ。手塚太郎が名乘り出でて、組打して遂に實盛の首を揚げる。幾ら問うても名乘らぬので、其の首を木曾殿の前に持つて行く。木曾殿は一見して實盛のかと思つたが、鬢や鬚の黑いのが怪しいので、樋口次郎を呼んで見せ、洗ひ上げた結果明らかにそれと知れる。又錦の直垂の着用は、敗戰の討死を覺悟し、故郷に錦を飾る爲めに、豫め宗盛の許しを得たのであつた。かくして實盛は壯者を裝ひ錦衣を纏うて、英雄的の最後を遂げたが、しかしなまなかの名などを殘して、北國場末の塵芥となつたのは氣の毒な事である。」と、かういふので、いかにも自然に、そして無造作に書き進んで居るやうに見える。又さう見た丈でも可

なりに面白く出來てゐるのであるが、尚ほよく注意して味はへると、初めにまづ「存ずる旨ありければ、赤地の錦の直垂云々」と書いて、讀者の好奇心を刺戟し、後段を叙する爲めの一種の素地を作つて居る。思ふに注意深き讀者は、之れを見て、必ず、「存ずる旨」とは如何なる仔細か？と怪しむであらう。而して最後の錦衣歸郷の物語を見るに及んで、「いかにも」と理解して、留飲の下るやうな愉快を感ずるであらう。それから手塚との戰に移つて、眼前なる合戰の模樣を懸命に叙して居るが、其の間にも、後段を活かす工夫は一寸の間も忘れずして、名乘らぬ仔細を意味ありげに書き、老武者とは思はれぬ壯烈な態度を花やかに寫して居る。手塚太郎はまんまと瞞されて、壯齡の勇士を討つたつもりになつた。但し、大將軍らしい服裝をしながら續く勢のないのを訝つて、其の首を木曾殿の御前に持參した。實盛は多分、其の假裝の首が木曾殿の前に齎らされ、而して木曾殿及び舊友樋口次郎の鑑識を得る事を豫期したのであらう。而して作者は、其の心持をお誂に寫し出だし、實盛が返し合はする健氣な態度から、「武勇」「錦衣」「從者なし」「名乘らず」「坂東聲」と、數々の條件を具して、木曾殿の前に提出せしめた。木曾殿は一見して實盛と感じたが、今度は手塚が心にも留めなかつた「鬢鬚の黑い事」に怪みをなして樋口を呼んだ。樋口は一見、「齋藤別當にて候なり。」と答へて落涙したが、木曾殿の問を待ち、やゝあつて涙を抑へて、しめやかに其の仔細を述べた。かくて實盛の期待はまん

まと實現され、此の事實推移の消息は十二分に作の上に現はされ、そして讀者は輕き怪しみと深き感激とを感じながら、段々讀み進む中に、すつかり實盛が心の奥に味到するのである。結語は

洗はせて御覽ずれば、白髮にこそなりにけれ。

と、有つた通りの書きッ放しで、何等の評語をも着けて居らぬが、此の書き放しな無言沈默の描寫の中に、實盛の洗はれた白髮首を中心にして、若年の名將軍と、樋口、手塚の二勇士等とが、首を垂れ、聲を呑み、寂然として老雄の美しい心掛に感じて居る樣子が、有り〳〵と示されて居る。面白いではありませんか。

これで「白髮染」の一事は完了したが、殘る一事の「錦の直垂」は、木曾殿の一味には無關係の事であるから、すつかり切り離して「又、齋藤別當が錦の直垂を着た事についても、一條の哀れな物語がある。」といふ調子で、別に話を起こしたのも面白い。そして朱買臣の似よつた故事を添へ、空しき美名に涙する特異な人生觀を添へて、一段の結尾としたのも面白い。「去んぬる四月」以下は、唯だ筋のつなぎに添へた一節と見るべきであらう。

部分々々の文句を運ぶ手段の面白さについては、凡そ「語釋」の處に述べたが、「人」を寫す上の技倆としては、總崩れの間に踏みとゞまる勇士の優しさに感じ、禮を厚くし辭を卑くして勝負を求める手

塚太郎、身後百年の名を惜しんで、淸く身を處し、高く自ら持する老雄實盛、それから涙を以て舊友の思出を語る樋口次郎、老雄の眠つた首を厚く遇する木曾將軍まで、それ〴〵の面目が、自然に面白く寫されて居り、暗愚の大臣殿宗盛までが、「優しうも申したりけるものかな」と、老雄の悲壯な意中に同情して、立派な人間らしい美しさを與へられて居る。かやうな一二の逸話を掻いつまんで寫した斷篇に對して、深い意味の性格論を持ち出すでもなからうが、とにかく總じては、當代の武人の面目を、細かには、人々それ〴〵の面目を、可なりによく寫して居るといふことが出來るであらう。

四

こゝで序に述べたいと思ふのは、謠曲に於ける軍物語＝謠曲に於ける軍記ともいふべきもの＝の事である。謠曲內外二百番の中に、軍物語を歌つたのが凡そ二十餘篇あり、其の大部分は材を『平家物語』に得たものであるが、それは事柄も文章も殆んど『平家』そのまゝと云つてもよい。唯だ一つ趣の違つて居るのは、『平家』の現を夢にし、或ひは『平家』の現寫式を回顧式に變へた事で、これが軍記に對する謠曲作者の主要なる加工ともいふべきものであらう。「現を夢に」といふのは、例へば、宮軍の宇治川合戰が、『平家』では、其の合戰を事實の合戰として書いて居るが、謠曲の「賴政」では、賴政の

幽靈が行脚僧の讀經供養に對する謝禮として、夢中に顯はし出だす幻影として寫されてゐる類ひである。「現寫式を回顧式に」といふのは、安徳天皇の御入水が、『平家』では現在の事實として書いてあるが、謠曲の「大原御幸」では、後白河法皇が建禮門院を大原の寂光院に御たづねあつた折に於ける、女院が昔偲ぶの御物語として寫されて居る類である。謠曲を大成した世阿彌元淸は、能を老體、女體、軍體の三つに大別して、軍の能を最もおもなる能の一つとして居る。彼れはまた「失せて又出る幽靈能」と云つて、幽靈の能をば能の中の最も誇るに足るべき一種と見て居る。彼れは又、

源平の名將の人體の本說ならば、ことに／＼平家の物語のまゝに書くべし。

と云つて居る。かういふ事々を併せ考へると、あの謠曲を大成した大文豪が、『平家物語』を立派な名文として、其の上に出づる事の容易ならぬもの、其の時代を書く以上は、そのまゝに用ゐて然るべきもの、之れを種類の違つた文藝たる謠曲に用ゐる場合にも、さまで變改する必要のないものと思つたのであらう。そして又『平家』の文をそのまゝ用ゐるにしても、其の用ゐ所と用ゐ方とを變へて、或ひは幽靈能の一部に幻影として出だし、或ひは後ジテが回顧の物語として出だすといふ所に、獨創の手腕と、人眞似ならぬ加工振とを見せようと思つたのであらう。その一例として、私はこゝに謠曲「實盛」の一節を引いて、前に掲げた『平家』の本文に對照して見ることにする。文は行脚僧の讀經に對す

る實盛の幽靈の感謝から始まる。

サシ、シテ「時至つて今宵逢ひ難き御法を受け、慚愧懺悔の物語、猶ほも昔を忘れかねて、しのぶに似たる篠原の、草の陰野の露と消えし有樣語り申すべし。シテ語り「扨も、篠原の合戰破れしかば、源氏の方に手塚の太郎光盛、木曾殿の御前に馳せ參じて申す樣、光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大將かと見ればつゞく勢もなし。又端武者かと思へば錦の直垂を着たり。名のれ名のれと責むれども終に名乘らず。聲は坂東聲にて候ひしと申す。木曾殿聞召され、天晴れ長井の齋藤別當實盛にてやあるらん。それならば義仲が上野にて見し時、鬢鬚のかすう成りし程に、今は定めて白髮たるべきが、黑きこそ不審なれ。樋口の次郎や見知りたるらんとて召されしかば、樋口參り、唯だ一目見て、涙をはら〱と流いて、あな無慚やな、齋藤別當にて候ひけるぞや。實盛常に申しゝは、六十に餘つて軍せば、若殿原と爭ひて、先をかけんもおとなげなし。又老武者とて人々に、侮られんも口惜しかるべし。鬢鬚を墨に染め、若やぎ討死せんずるよし、常に申し候ひしが誠に染めて候。洗はせて

御覧候へと、申しもあへず首を持ち、下同「御前を立つてあたりなる、此の池浪の岸に臨みて、水の緑も陰うつる柳の絲の枝垂れて、上「氣はれては風新柳の髪を梳り、氷消えては、波舊苔の、鬚を洗ひて見れば、墨は流れおちて本の、白髪と成りにけり。實に名を惜む弓取は、誰れもかくこそ有るべけれや。あら優しやとて皆感涙をぞ流しける。クセ「又實盛が、錦の直垂を着ること私ならぬ望み也。實盛都を出でし時宗盛公に申す様、故郷へは錦をきて、歸るといへる本文あり。實盛生國は、越前の者にて候ひしが、近年、御領につけられて、武藏の長井に居住仕り候ひき。此度北國に、罷下りて候はゞ、定めて、討死仕るべし。老後の思ひ出これに過ぎじ御免あれと望みしかば、赤地の錦の直垂を下し給はりぬ。シテ「然れば古歌にももみぢ葉を、同「分けつゝ行けば錦着て、家に歸ると、人や見るらんと詠みしも此の本文の心なり。されば古の、朱買臣は錦の袂を會稽山に、ひるがへし、今の實盛は名を北國の街にあげ、かくれなかりし弓取の、名は末代に有明の、月の夜すがら懺悔物語申さん。

「語り物」を劇の能にする爲め、切れ目繼ぎ目の角々で、掛詞や古句引用などの加工はしてあるもの

の、大體『平家』のまゝであることが、これで知られるであらう。而して用ゐ所、使ひ方の加工を除けば、あとは殆んど『平家』そのまゝで、文章として見れば、謠曲に於ける軍記は、特に言ふに足るほどのものでない事がわかるであらう。

謠曲に取り入れられた軍記の御話をした序に、第二の現寫式を同顧式にした方の例として、謠曲「大原御幸」の最後の一節を引いて見る。是れは次ぎの第十六に掲げる『平家』の「先帝御入水」や『源平盛衰記』の文章に據つたもので、本來は『平家』の本文を引いて、その次ぎに出すべきものであるが、緣の近いものを束ねて、說明に便するのである。次ぎなる『平家』の本文を一讀されて後に、再び之れを御讀み下さるやうに願ひたい。

法皇詞「誠に有難き事どもかな。先帝の御最期の有樣、何とか渡り候ひつる御物語り候へ。女院「其の時の有樣申すにつけてうらめしや。長門國早鞆とやらんにて、筑紫へ一先づ落ち行くべきと一門申し合ひしに、緒方の三郎が心替りせし程に、薩摩がたへや落さんと申しゝ折節、上り潮にさへられ、今はかうよと見えしに、能登守敎經は、安藝の太郎兄弟を左右の脇に挾み、最期の供せよとて海中に飛んで入る。新中納言

知盛は、沖なる船の碇を引き上げ、兜とやらんに戴き、乳母子の家長が、弓と弓とを取りかはし、其のまゝ海に入りにけり。其の時二位殿鈍色の二衣に、練袴のそば高く挾んで、我が身は女人なりとても、敵の手には渡るまじ、主上の御供申さんと、安徳天皇の御手を取り船ばたに臨む。何處へ行くぞと勅諚ありしに、此の國と申すに逆臣多く、かくあさましき所也。極樂世界と申して、目出度き所のあの波の下にさむらふなれば、御幸なし奉らんと、泣く〳〵奏し給へば、扨は心得たりとて、東に向はせ給ひ、天照太神に御暇申させ給ひてまた、下同「十念の御爲めに西に向はせおはしまし、女院「今ぞ知る御裳裾川の流れには、浪の底にも都ありとはと、これを最期の御製にて、千尋の底に入り給ふみづからも、續いて沈みしを、源氏の武士取り上げて、甲斐なき命ながらへ、再び龍顏にあひ奉り、不覺の涙に袖をしほるぞ恥かしき。

これは『平家』や『盛衰記』のあちこちを綴り合はせたものではあるが、謠曲が『平家』の文を凡そ其のままに取つて、用ゐ處と用ゐ方とを變へたもの、一種の換質換位を施したものである事は、これで知ら

れるであらう。

第十五　悶絶躄地のあツち死

一

私は次ぎに此の物語の主人公、心も詞も及ばれぬ榮華を極めた入道相國淸盛逝去の一章を引いて、此の物語の特色の一部を説明して見たいと思ふ。

同じき二十三日院の殿上にて、俄に公卿僉議あり。前右大將宗盛卿進み出で申されけるは、先年坂東へ、討手は向うたりと申せども、させる高名したる事もなし。今度は宗盛大將軍を承つて、東國北國の凶徒等を、追討すべき由申されければ、諸卿色代して、宗盛卿の申狀、ゆゝしう候ひなんずとぞ申されける。法皇大きに御感ありけり。公卿殿上人も、武官に備はり、少しも弓箭に携はらん程の人々は、宗盛を大將軍として、東國北國の凶徒等を、追討すべき由仰せ下さる。同じき二十七日

門出して、既に打立たんとし給ひける夜半ばかりより、入道相國違例の心地とて、留まり給ひぬ。明くる二十八日重病を受け給へりと聞こえしかば、京中六波羅䆆きあへり。すは仕つるは、左見つる事よどぞ囁きける。

入道相國病ひ附き給へる日よりして、湯水も咽へ入れられず、身の内の熱き事は、火を焼くが如し。臥し給へる所、四五間が内へ入る者は、熱さ堪へ難し。只だ宣ふ事とては、あたあたとばかり也。誠に只事とも見え給はず。餘りの堪へ難さにや、比叡山より、千手井の水を汲み下し、石の船に湛へ、それに下りて寒え給へば、水夥しう湧き上つて、程なく湯にぞなりにける。若しやと筧の水を任すれば、石や鐵などの焼けたる樣に、水迸つて寄りつかず、おのづから中たる水は、焔となつて燃えければ、黑烟殿中に充ち滿ちて、炎渦巻いてぞ上りける。

閏二月二日の日、二位殿熱さ堪へ難けれども、入道相國の御枕に寄つて、御有樣見奉るに、日に添へて頼み少なうこそ見えさせおはしませ。物の少しも覺えさせ給ふ時、思召す事あらば、仰せおかれよとぞ宣ひける。入道相國、日來はさしも勇々

しう坐せしかども、今はの時にもなりしかば、よにも苦しげにて、息の下にて宣ひけるは、當家は保元平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも一天の君の御外戚として、丞相の位に至り、榮花既に子孫に殘す。今生の望みは、一事も思ひ置く事なし。唯だ思ひ置く事とては。兵衛佐賴朝が、首を見ざりつる事こそ、何よりもまた本意なけれ。吾れ如何にもなりなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つべからず、急ぎ討手を下し、賴朝が首を刎ねて、我が墓の前に懸くべし。それぞ今生後生の孝養にて、有らんずるぞと、宣ひけるこそ、いとゞ罪深うは聞こえし。若しや助かると、板に水を置きて、臥し轉び給へども、助かる心地もし給はず。同じき四日の日、悶絶躄地して、遂にあつち死ぞし給ひける。馬車の馳せ違ふ音は、天も響き大地も搖ぐばかりなり。一天の君萬乘の主の、如何なる御事ましますとも、是れにはいかでか勝るべき。今年は六十四にぞなられける。老死といふべきにはあらねども、宿運忽ちに盡きぬれば、大法祕法の效驗もなく、神明佛陀の威光も消え、諸天も擁護し給はず。況んや凡慮に於いてをや。身に代はり命に代はらんと、忠を

水夥しう湧き上つて程なく湯にぞ

存ぜし、數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれども、是れは目にも見えず、力にも拘らぬ、無常の刹鬼をば、暫時も戰ひ返さず、又歸り來ぬ死出の山、三瀨川黃泉中有の旅の空に、只だ一所こそ赴かれけれ。されども日頃作り置かれし罪業ばかりこそ、獄卒と成つて、迎へにも來りけめ。哀れなりし事どもなり。さてしも有るべきことならねば、同じき七日の日、愛宕にて煙になし奉り、骨をは圓實法眼頸にかけ、攝津國へ下り、經の島へぞ納めける。さしも日本一州に、名を揚げ威を振ひし人なれども、身は一時の煙と成つて、都の空へ立ち上り、骸は暫し徘徊ひて、濱の眞砂に戲れつゝ、空しき土とぞ成り給ふ。

二

語釋　二十三日は治承五年二月の其の日。○先年坂東へ討手。治承四年九月、維盛を大將軍とし、忠度を副將軍として、大軍東國に向ひ、十月二十三日の夜半、富士川の水禽の羽音に驚いて逃げ歸つた軍の事で、言を角立たせぬ爲め、恥辱の大敗走を、「させる功名したる云々」とは云つたのである。○勇々しう候ひなんず。「それはえらい思立で」と云つて、敬意を表したといふ事。「候ひなんず」は、「候ひなんとす」の意味に取つては譯がわからなくなる。

「候ひなんぞ」の意とすれば、多少尤もらしくなるが、思ふに此の頃は、武人が武張つた詞を好む所から、わけもなく、かういふ詞を濫用したので、畢竟「御勇ましい事で御座りまする」といふ事であらう。○東國北國の凶徒。東國の凶徒は頼朝の軍、北國のは義仲の軍。○違例。氣分が不斷とはちがふといふので、病氣の事。○すは仕つるは、左見つる事よ。一人が「サァやつたぞ」といふと、他の一人が「それ見た事か」、「好い氣味、よい氣味」と云つたといふので、平家を怨む民共が、あの罰あたりの入道め、其の中に病氣をするだらうと思つて居たが、「ソレ、果たして仕たぢやないか、それ見た事か、かう來なくツちや嘘だ。」なぞと、コソ〱、ヒソ〱噂し合つたといふ事。うまい處に俗語を挿んだので、實に面白く活きて居る。○病ひ附き給へる。「病ひ」は動詞として働かしたので、今の「病み附いた日から」といふ意。病氣がついたといふのではない。○四五間。間は柱間の事で、今の六尺一間の事ではあるまい、間は多分凡そ一丈内外の寸法であらう。○「あた〱」。あつい〱といふ叫び聲。「あツつ、、、あツたゝ、」といふのである。これも俗語で、とても利いて居る。此の病は、『百錬抄』に、「身熱如レ火、世以爲下燒二東大興福一之現報上」などあつて、大佛を燒いた祟りとして、火の病など云はれたのである。○それに下りて寒え給へば……筧の水を任すれば。普通ならば、「其の石船の中へ入つて、熱い體を冷やさうとすると、」「筧の水をそゝぎかけると」といふ所だが、さういふと、俗に卑しくなるので、「病室から下りて來て冷えようとする」（能動的に「ひやす」と云はずして、自然的に「冷えよう」といふと、上品に床しくなる。例へば「物を嗅ぐ」といへば下品だが、自然的に「香ふ」と云つて、「梅が香をにほふ」などいへば、上品になる樣な類ひである）といひ、「水に筧を傳つて

來て、思ふまゝに落ちさせる」とは云つたのである。かういふ詞は廻りくどいやうであるが、一種の嗜み詞で、平安朝の文の美を成す主なる要素の一つであつた。『平家物語』の文章の面白味の一面は、かういふ優雅な詞と俗語とが、不思議によく馴染んで、當時の時代相をよく現はして居る所にある。○よにも苦しげにて。いかにも苦しさうにての意。○唯だ思ひ置く事とては、兵衛佐頼朝が、首を見ざりつる事こそ、何よりも又本意なけれ。これも前に屡云つた横逸れの文章で、文法に合はせて普通に書けば、「唯だ思ひ置く事は頼朝の首を見なかつた事で、それが何よりも本意なく思ふ所である。」と云ふべき所であるが、「頼朝が首を見ざりつる事」の一句に、前後兩方への掛持をさせて、早手廻しの、無理な、しかし面白い省略式の變態文章を成さしめたのである。○佛事孝養。孝養はキョオヨオと讀む。此處は死後の親によく事へる意で、追善供養の事である。○板に水を置きて。流れ水の仕掛にして新陳代謝させた事。○悶絶躄地して遂にあツち死ぞし給ひける。悶絶は病苦に悶えて絶え入つた事。「躄」は腰抜け、足痿えの意で、「躄地」と熟すれば、ヂタバタして苦しがつた事になる。「あツち死」については、私はまだはつきりした解釋を見た事がなく、中には「わからぬ」とか、「好い加減に書き直したのであらう」とか云つて居る註釋家もあるが、これは熱に苦しんで「アツチヽヽ、アツチヽヽ」と叫び死に死んだといふ事に相違ない。例の俗語を大膽に、そして非常によく活かして使つたもので、「悶絶躄地」といふ漢語と、「し給ひける」といふ雅言と「あつち死」といふ俗語とが相隣接して、いかにもよく調和して居る所、實に何とも云はれぬ妙味である。そしてかういふのが又大體から見て、『平家』全體の妙味でもある。『盛衰記』に「あわて死に」としてあるのは、此の意味を理解しなかつた爲め

か、或ひは之れを卑俗として換へたのであらう。

三

右は文句の部分々々を分けて見ての話であるが、全體を通覽して、私は人の病狀や死樣(しにざま)を是れほど痛快に、莊嚴に、偉大に書いた文章は、まづあるまいと思ふ。尤も『古事記』の昔には、伊邪那美命(いざなみのみこと)の死屍(しかばね)から、恐ろしい雷神のいくつも發生した事を書いた物凄い記事もあるが、人の世となつて後に、「病死」を書いたものとしては、恐らく是れが吾が古今の文學の中の隨一であらう。一代の熱性漢が、燒くやうな高熱に悶えて七顚八倒し、比叡の靈水を汲み下(おろ)させては、石船に湛(たゝ)へ、筧(かけひ)に任せ、板に流して、冷えようとする。水船の冷水は忽ちに熱湯と變じ、そゝぎ掛ける水は、寄りかねてはね飛ばされ、觸るれば焰となつて、黑煙が廣い殿中に充滿する。其の間に熱(あつ)! 暑(あつ)! あた〳〵! あツち〳〵と大聲に叫びながら、我が一代の勳功と榮華とを述べ、神をも、佛をも、今生をも後生をも一排し去つて、追善の孝養としては、唯だ日本に於ける唯一の競爭者、敵將兵衞佐賴朝が生首を墓前に掛ける事を命ずる。そして絕え入り絕え入り、地だんだを踏んで、あツちゝゝ、あツちゝゝと叫び死(じに)に死ぬる。そして死んだ後の天下の騷ぎは、天も響き大地も搖ぐばかりであつた。

悶絶躄地して、遂にあッち死ぞし給ひける。馬車の馳せ違ふ音は、天も響き大地も搖ぐばかりなり。一天の君萬乘の主の、如何なる御事ましますとも、是れにはいかでか勝るべき。

こんな壯烈な、大きい、病み方、死に方が、又と世にあるであらうか。

私はまた、此の巨人の巨大なる病惱記、悶死記が、文字ばかり外觀ばかりの巨大に終はらずして、其の間に一脈の情味を湛へて居る事を、限りなく嬉しく思ふ。殊に死に望んで頼朝の首を要める所の如き、作者は「いとゞ罪深うは聞こえし」と云つては居るが、これは清盛が人間心の發露として、此の描寫の中に瞳の如く光つて居ると云つてよい。『吾妻鏡』の敎へる所によると、頼朝は石橋山に敗れて討死を覺悟した時、髻の中に戴いて居た正觀音の像を取り出して、傍らなる巖窟に安置した。側にゐた土肥實平が怪しんで其の由を尋ねると、彼れは「我が首が平家に傳へられた時、髻の中に此の本尊のあるのを見れば、源氏の大將軍の所爲に非ずと云つて、誹を遺すであらうから。」と答へたといふことである。討死を覺悟して、頭髮の中の守本尊を身外に排し去る頼朝と、死に臨み、佛事堂塔の供養を謝絶して敵の首を要める清盛との對照を考へると、私は誠に、此の敵にして此の敵ありといふべきであると考へる。史家は此の期を以て、佛法の深く民心に喰ひ入つた時代として居るが、私はまた、此の時代に於いて、源平の兩主將が、申し合はせた樣に、佛にたよらずして自己の意志に活きようと

した事を、限りなく面白く思ふものである。

語釋　宿運忽ちに盡きぬれば。宿運は前世から持越した運命の意で、生まれぬ前から定まつた運命が盡きて了へば、一代の高僧貴僧が、えらい祕密の祈禱を行つた所で、甲斐がないといふ事。○諸天。密教に謂ふ天部の神々。凡慮云々に續けての意味は、神も佛も助けることが出來ぬ。況んや凡夫の人間が幾ら騷いだところで、命數の盡きた人の命を助けられようか、といふこと。○軍旅。旅はもと五百人一隊の事であるが、こゝでは唯だ數多の軍兵が居るといふ事。○刹鬼。刹は天竺語の鬼の事で、「閼伽の水」といふと同じく、例の異つた國語を二つ重ねた兩點讀である。○死出の山、三瀬川、黄泉中有の旅の空。淨土に迎へられぬ者は、死後地獄へ行つて恐ろしい責苦を受けねばならぬ。其の責苦を山路の險しきに譬へて、死出の山といふ。亡者が葬頭河の流れを渡るのに、山水瀨、江深淵、有橋渡といふ三つの瀨がある故に、此の川を三瀨川といふ。黄泉は人の死後に行くべく想像され、信ぜられた地下の國。中有は中陰と同じく、現在生きてゐた境涯から地獄、餓鬼、畜生といふやうな到着點に到るまでの途中の中ぶらの境涯のこと。要するに、淸盛入道は生前惡業を積んだから、死後は必ず地獄へ行くものと豫定して、地獄へ行く道中の、恐ろしい山を越え、川を渡りつゝ、冥途の旅に出かけられたと云つたのである。○力にもかゝはらぬ。腕力で拒ぐことの出來ぬ「死」といふ鬼。

作者は、前には、淸盛が賴朝の首を要める悶絶躄地のあッち死を、壯烈悲絶に描いたが、此の巨人がいよ〳〵最後の息を引き、「宿運忽ちに盡き」てからは、すッかり物悲しい調子に變へて、哀の樂

を奏で始めた。

身に替はり命に代はらんと、忠を存せし、數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれども、これは目にも見えず、力にも拘はらぬ、無常の刹鬼をば、暫時も戰ひ返さず、又歸り來ぬ死出の山、三瀨川黄泉中有の旅の空に、只だ一所こそ赴かれけれ。

二十年の榮華を後にし、絕大の權力に別かれ、數萬の軍旅を置去にし、懸命の努力で築き上げた事業と、守り立てた一族とが、今しも首を擡げ始めた源氏の爲めに蝕まれ、掻き崩されて行くのを、もう手の達かぬ幽明の境の彼方に眺めつゝ、黄泉中有の旅の空に、唯だの一所赴かれた。とは、何といふ悲しさ、哀れさ、果敢なさ、物さびしさであらう。殊に最後の

さしも日本一州に、名を揚げ威を振ひし人なれども、身は一時の烟となつて、都の空へ立ち登り、骸はしばし徘徊ひて、濱の眞砂に戲れつゝ、空しき土とぞ成り給ふ。

の一節の如き、誠に諸行無常盛者必衰の世の樣を諷示して、骨を刻み腸に喰ひ入る皮肉ともいふべきで、其の消極的に沈みながら、人の魂を深く搖り動かす味はひは、實に言語に絕するものがある。これが『平家』の作者の開卷第一に道破したところ、而して祇王、成親、俊寛、小督、實盛の最後、先帝の御入水、大原の御往生、あらゆる要所々々で繰り返すことを忘れなかつた『平家』特得の哀音であ

る。

四

源平時代の巨人、清盛入道が最期の條を講じたのに因んで、私はこゝに、『太平記』に於ける足利尊氏の最期を寫した文章を引いて見たいと思ふ。第三十三卷の「將軍御逝去の事」と題した一章である。

同じき（延文三年）四月二十日、尊氏卿背に癰瘡出でて、心地例ならず御座しければ、本道外科の醫師數を盡くして參り集まり、倉公華陀が術を盡くし、君臣佐使の藥を施し奉れども、更に驗なし。陰陽頭有驗の高僧集まつて、鬼見、太山府君、星供、冥道供、藥師の十二神將の法、愛染明王、一字文珠、不動慈救延命の法、種々の懇祈を致せども、病日に隨つて重くなり、時を添へて憑み少なく見え給ひしかば、御所中の男女氣を呑み、近習の從者涙を抑へて、日夜寢食を忘れたり。斯かりし程に、身體次第に衰へて、同じき二十九日寅の刻、春秋五十四歳にて、遂に逝去し給ひけり。さらぬ別かれの悲しさはさる事ながら、國家の柱石摧けぬれば、天下今も如何とて、

歎き悲しむ事限りなし。さてあるべきに非ずとて、中一日有つて、衣笠山の麓、等持院に葬し奉る。鎖龕は天龍寺の龍山和尚、起龕は南禪寺の平田和尚、奠茶は建仁寺の無德和尚、奠湯は東福寺の鑑翁和尚。下火は等持院の東陵和尚にてぞおはしける。哀れなる哉武將に備はつて二十五年、向ふ處は必ず從ふといへども、無常の敵の來たるをば防ぐに其の兵なし。悲しい哉天下を治めて六十餘州、命に隨ふ者多しといへども、有爲の境を辭するには、伴ひて行く人もなし。身は忽ちに化して、暮天數片の煙と立ち上り、骨は空しく留まつて、卵塔一掬の塵となりにけり。別かれの涙に搔き暮れて、これさへとまらぬ月日哉。五旬程なく過ぎければ、日野左中辨忠光朝臣を勅使にて、從一位左大臣の官を贈らる。宰相中將義詮朝臣、宣旨を啓いて三度拜せられけるが、涙を抑へて、

　歸るべき道しなければ位山
　　のぼるにつけてぬるゝ袖かな。

と詠ぜられけるを、勅使も哀れなる事に聞きて、有りのまゝに奏聞しければ、君限

りなく寂感あつて、新千載集を撰ばれけるに、委細の事書を載せられて、哀傷の部にぞ入れられける。勅賞の至り、誠に忝かりし事どもなり。

語釋　癰疽。癰は背或ひは頸窩に發する惡性の瘡で、古來命取りと云はれたもの。○本道外科。神田本には「本道外經」とある。本道は内科の事、内科を醫療の根幹と見、外科に對して本道と呼んだのである。○倉公華佗。倉公、本名は淳于意、漢の文帝に仕へ太倉長となつたので、世に太倉公と呼ばれた名醫。華佗は三國時代の名醫、曹操に殺された人。○君臣佐使。調合された藥劑について、その主要なる藥を君と見、添へられた藥をその佐と見、使となる臣と見たので、おも藥、副へ藥と、いろ〳〵に調合して進めたといふ意。○鬼見、泰山府君。以下は、いづれも陰陽師山伏などの行ふ、特別に重き祈禱の類。○氣を呑み。よくは解らぬが、心配の餘り息を呑み殺して安らかに呼吸もせぬといふ事であらう。○さらぬ別かれの悲しさ。在原業平の母が業平に送つたといふ歌の「世の中にさらぬ別かれのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな」によつたので、遁れ去る事の出來ぬ別かれ、卽ち死別の事。○鎖龕、起龕、奠茶、奠湯、下火。龕は柩の事で、鎖龕は亡骸を柩に納めて蓋ふ事。起龕は鎖龕の後、靈柩を起こして誦經する儀式。奠茶は茶をすゝめる事、奠湯は湯をすゝめる事。下火はアゴと讀んで、荼毘卽ち火葬の火を點ずるヿ。皆禪家葬儀の式で、當代一流の名僧が、尊氏の葬儀に與つて其の最後を飾つたといふヿである。○有爲の境。有爲は諸種の因緣が和合して出來上がる現象、卽ち吾々の生活する現世界の諸現象の事で、「有爲の境」とは不生不滅、不增不減なる絕對常住の世界を「無爲の境」といふのに對して、生滅榮枯盛衰窮まりなき轉變の

境をいふのである。〇卯塔。卯形の墓。〇哀なる哉以下、「無常の敵の來たるをば、防ぐに其の兵なし」、「有爲の境を辭するには、伴ひ行く人もなし」、「幕天數片の煙と立ち上り」、「卯塔一掬の塵と成りにけり」のあたり、佛家慣用の常文句を書いたのではあらうけれども、何となく『平家』の「入道逝去」の條を想ひ起こさしめるものがある。〇五旬。七七日が過ぎて中陰が滿ちたといふ事。〇歸るべき道しなければ。今度折角官位を上げては戴いたが、若し父が歸つて來て、此の恩詔を拜することが出來れば、さぞ喜びませうに、もう歸らぬ旅路についたのでありますから、父の官位が上つたにつけても、唯々私共の涙が流れるので御座りまする、といふ意。

『平家』の「入道逝去」を讀んだ目で、『太平記』の「將軍御逝去」を寫した此の一章を見ると、同じ巨人の同じ最期を書いたものながら、すッかり別な世界に來た樣な心地がする。まづ筋は立派に辿つて、事を盡くして書いてはあるが、情味の潤ひといふものがない。文章は漢文式の對句仕立にやゝこしく飾つてはあるが、躍るやうな生命の人に迫るものがない。無論、病み方、死に方にもいろ〳〵あつて、背に癰を出して醫療叶はずに死んだといふだけの尊氏の逝去は、燃えるやうな火の病に七顚八倒した淸盛の最期のやうには、賑やかに寫されぬであらうが、それにしても、數十年間六十餘州をあれ程に騷がした巨人の最期に對しては、作者の心に水々しい情があり、作者の筆に傳神の力がある限り、もう少ししんみりした命のある描寫が出來たであらうにと、あたらしく思はれる。要するに『太平記』は

知識的になり道義的になつたが、同時に非文學的に非情味的になつた。外面的文飾的になつて、內面的なる感情の味はひを失つた。其の文は、報告や敎訓としては、或ひは『平家』に優るかも知れぬけれども、その報告も敎訓も、形を整へ詞を飾つて押賣する底の物となつたといふ氣味がある。無論細かに見れば『太平記』にもよい所がある。けれども文學的に內生命を傳へる點に於いては、『平家』を距ること遠いものになつたと云はねばならぬ。

前にも擧げた小野高尙は、その『夏山雜談』の中に、

平家物語は古き詞ありて耳遠き樣なれども、幾かへり見てもあかず。太平記は文勢もはなやかに聞こゆれども數反見にくし。況んやそれより後の軍物語は二反とは見られず。何にても古き文面白き。

と云つて居るが、一面至言である。

第十六　分段の荒き波

一

『平家物語』の最後に、私は壽永四年三月廿四日に於ける、奢る平家斷末摩の一章、淸盛の妻二位ノ尼が安德天皇を抱いて海に赴いた哀絕の一章、「先帝の御入水」といふ標題を與へられて、此の物語が、安德天皇の先帝と稱へられ給ふべき次ぎの帝の御代に成つた事を暗示してゐる一章を引いて見る。

文は九郎判官義經が、平家を八島から西へ西へと追つて、到頭長門の壇の浦で、袋の鼠と追ひつめた所に始まる。彼れは捷軍を續けながらも、敵の御座船に萬乘の大君のまします事と、三種の神器の鎭まらせられる事とに恐れをなして、さすがに不安を感じてゐたが、いよ〳〵決戰の當の朝、大空に見えた白雲が段々下りて來て、我が船の舳先に留まつたのを見ると、それは源氏の白旗であつた。

判官是れは八幡大菩薩の、現じ給へるにこそと悅んで、兜を脫ぎ、手水嗽して、これを拜し奉り給ふ。兵共も皆かくの如し。やゝあつて沖より鯆といふ魚、一二千這うて、平家の船の方へぞ向ひける。大臣殿小博士晴信を召して、鯆は常に多けれども、未だ斯樣の事なし。急度勘へ申せと宣へば、此の鯆はみ歸り候はゞ、源氏亡び候ひなんず、はみ通り候はゞ、御方の御軍危う覺え候と、申して果てぬに、平家の船の下を、直ぐに這うてぞ通りける。世の中は今はかうとぞ見えし。

阿波ノ民部重能は、この三個年が間、平家に附いて忠を致したりしかども、嫡子田内左衛門教能を生捕にせられて、今は叶はじとや思ひけん、忽ちに心變はりして、源氏と一つになりにけり。新中納言知盛ノ卿、あつぱれ重能めを、斬つて捨つべかりつるものをと、後悔せられけれども甲斐ぞなき。平家の方の謀には、好き武者をば兵船に乘せ、雜人原をば唐船に乘せて、源氏心憎さに、唐船を攻めば、中に取り籠めて討たんと、支度せられたりしかども、重能が返忠の上は、唐船には目も懸けず、大將軍の窶し乘り給へる、兵船をぞ攻めたりける。其の後は四國鎭西の兵共、皆平家を背いて、源氏に附く。今迄隨ひ附きたりしかども、君に向つて弓を引き、主に對して太刀を拔く。彼處の岸に着かんとすれば、波高うして叶ひ難し、此處の汀に寄らんとすれば、敵箭鋒を揃へて待ち懸けたり。源平の國爭ひ、今日を限りとぞ見えたりける。

去程に源氏の兵共、平家の船に乘り移りければ、水主楫取共、或ひは射殺され、或ひは斬り殺されて、船を直すに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり。新中納言知盛ノ

卿、小船に乘つて、急ぎ御所の御船へ參らせ給ひて、世の中は今はかうと覺え候。見苦しき物をば、皆海へ入れて、船の掃除召され候へとて、掃き拭ひ塵拾はせ、艫舳に走り廻つて、手づから掃除し給ひけり。女房達、やゝ中納言殿、軍の樣は如何にや如何にと問ひ給へば、只今珍らしき吾妻男をこそ、御覽ぜられ候はんずらめとて、から〳〵と笑はれければ、何條只今の戲れぞやとて、聲々に喚き叫び給ひけり。

二位殿は日頃より、思ひ設け給へる事なれば、鈍色の二衣打被き、練袴の傍高く取り、神璽を脇に挾み寶劍を腰にさし、主上を抱き參らせて、我れは女なりとも、敵の手には掛かるまじ、主上の御供に參るなり。御志思ひ給はん人々は、急ぎ續き給へやとて、靜々と舷へぞ、歩み出でられける。

主上今年は八歳にぞ成らせ御座す。御年の程より遙かに、ねびさせ給ひて、御貌嚴しう、傍も照り耀くばかりなり。御髪黒うゆら〳〵と、御背中過ぎさせ給ひけり。主上あきれたる御有樣にて、抑、尼前我れをば何地へ具して行かんとはするぞと仰せければ、二位殿幼き君に向ひ參らせ、涙をはら〳〵と流いて、君は未だ知ろし召さ

主上の御供に參るなり

れ侍はずや。先世の十善戒行の、御力によつて、今萬乘の主とは生まれさせ給へども、惡緣に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ侍ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ御座し、其の後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎に預らんと誓はせ御座して、御念佛侍ふべし。此の國は粟散邊土と申して、物憂き境にて侍ふあの波の下にこそ、極樂淨土とて、目出度き都の侍ふそれへ具し參らせ侍ふぞと、樣々に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣に、鬢づら結はせ給ひて、御涙に溺れ、小さう美しき御手を合はせ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮正八幡宮に、御暇申させ御座し、其の後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き參らせて、波の底にも都の侍ふぞと、慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ悲しきかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし、痛ましき哉分段の荒き波、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、長き栖を定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれども、未だ十歳の內にして、底の水屑とならせおはします。十善帝位の御果報、申すも中々愚かなり。雲上の龍降つて、海底の魚となり給ふ。大梵高臺

の閣の上、釋提喜見の宮の內、古は槐門棘路の間に九族を靡かし、今は舟の中波の下にて、御身を一時に亡ぼし給ふこそ悲しけれ。

二

語釋　「判官」は九郎義經、大臣殿は平宗盛。○急度勘へ申せ。急度は「ちよつと」、「急いで」、「しつかり」の三義を兼ねた詞。「きつと」に「急いで」の意味のある事は、流布本に「きつと立ち寄り給へ」とある所を、長門本に「急ぎ立ち寄り給へ」とあるのでも察せられる。案ずるに、急ぐ意味からは「急度」と書き、嚴重に必ずといふ意味からは「屹度」と書くやうになつたのであらう。「勘へ」は『易』なり、其の他の卜筮書の本文に合はせて勘考せよといふ事。○はみ歸り、はみ通り。八坂本には、此の吉凶の關係を逆まにして、

此の海鹿はみ通り候はゞ、源氏悉く亡び候ひなんず、又はみ歸らば、味方の御軍危く見えさせ給ひて候。

と書いてある。どういふ理由で、かう書いたのか解らないが、察するに、海豚が若し泳ぎもどれば、平家にはまだ惡魚を恐れ退かしめる威力があるので、勝利の兆であると見るか、或ひは、海豚が船底を潜つて源氏に向つて行くのは、無心の動物もまだ平家を見捨てぬ瑞相で、勝軍の前表だと見るかの相違であらう。○世の中は今はかうとぞ見えし。海豚の前兆でもわかる如く、もう此の通り、平家の運命もこれまでだといふ事。○重能めを斬つて捨つべ

かりつるものをと。前章で、知盛が重能を斬らうとしたが、宗盛に支へられて控へた故に、云つたのである。〇心憎さに。立派な唐船をば、あれこそ大將軍の乘船よと、重んじ床しみて攻めるといふ事。〇彼處の岸に、此處の汀に云々。私は初め此處の意味をば、これは作者の好い加減な文飾で、同じ中國側の海岸で、あつちの岸、こつちの汀と、かう云つたのであらうと思つてゐたが、二三度壇の浦に遊んで、實境を見て、其の誤りなる事を知つた。此の時の形勢は、義經は瀬戸內海を、東の方から西へ〳〵と平家を追ひつめて來る、範頼の軍は陸路を先廻りして下の關長府の海岸に待つてゐる、かくして平家は山陽道方面では海陸兩方の逃げ路を斷たれたが、それならば、海峽を突切つて、九州へ遁れるかといふと、そこには名高い早潮、一時間八浬を流れるといふ日本第二の急潮が押し隔てゝゐて、それも叶はぬ、といふ絕體絕命の場合で、卽ち「此處の汀」とは中國下の關側の岸の事、「彼處の岸」とは九州門司側の濱の事に相違ない。前にも引いた謠曲の「大原御幸」に、

薩摩がたへや落さんと申し、折節、上り潮に支へられ、今はかうよと見えしに、

と書いてあるのは、此の消息を寫し出だしたのである。〇船を直すに及ばず。船の操縱の意に任せぬ事。「及ばず」は今の俗語の意味とは違ひ、「力及ばぬ事」卽ち「能はず」といふ事である。〇只今珍らしき吾妻男をこそ。「東男に京女」と云つて、東國が男の本場になつて居るその男といふ事。「今迄は遠く噂にのみ聞いてゐた東男を、もう間近に見られまするぞ、いや、御樂み樣な事で。」といふ皮肉の洒落で、眞意は「もうすぐ無骨な田舍侍がやつて來ますぞ。」といふのを反對に云つたのである。〇二位殿。清盛の妻時子。此の御入水の事が、『吾妻鏡』には、「及二午剋一

平氏終敗傾。二品禪尼持二寶劍一、按察局奉レ抱二先帝一、共以沒二海底一。」とあつて、幼帝を抱き奉つたのが、按察の局となつて居る。察するに、大雜沓の間に於ける此の大悲慘事が、見る目、語る人によつて、まち／＼に傳へられたのであらう。而して『平家』の作者は、事實と信ずる其の中の一つに據つたか、或ひは多くの所傳の中最も興味ありと考へたのを取つたのであらう。或ひは神器拜帶、幼帝奉擁の二事を、淸盛の妻、幼帝の祖母君たる二位尼に兼ねさせる事を、最も意義深く、最も劇的であると考へて、想像の筆を揮つたのでもあらう。『平家』全體が此の樣な心理で書かれたので、必ずしも事實の正確を期したのではないのである。○鈍色の二衣。鈍色は青花に墨を加へたので、「にび色」ともいふ。薄黑い色の喪服。二衣は二枚がさねのこと。五枚重ねを五衣といふと同じ事。○打被き。頭からかぶるやうにしたこと。○練袴。練絹の袴。○御志思ひ給はん。ぼんやりした詞であるが、自ら重んじて侮辱を受けない志のある人といふ事で、殉死の覺悟ある人々といふ意を現はしたのであらう。○ねびさせ給ひ。年よりませてふけて居られる事。「長門本」には「くまませ給ひ」と書いてある。○いつくしう。美しさと莊嚴な立派さとを兼ねた心。○尼前。アマセと澄んで讀んで居る。尼御前の轉訛。○十善戒行云々。前世に不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十善をよく行つた結果、今生で帝王に生まれたといふ事。○來迎に預らんと誓はせ。「佛樣に向つて、どうぞ西方淨土に御迎へ下さい、と御願ひなさい。」といふ事であるが、救つて貰ふのに、此方で誓ふといふのは一寸をかしい。察するに是れは多分阿彌陀樣が、どんな事をしても必ず衆生を救つてやると云つて、謂はゆる四十八種の誓願まで立てゝ居られるのだから、その佛樣の御誓に

附け込んで、どうぞ私をも御救ひ下されと御願ひなさい、といふ意味であらう。○粟散邊土。日本は大世界の端ッぺたに粟粒の散らばつてゐるやうな小國だといふ事。楞嚴經の文句を取つたのである。○山鳩色の御衣。青い色の御衣で、麹塵（きくぢん）の御袍ともいふもの。○御涙に溺れ、小さう美しき御手を合はせ。御顔が涙一ぱいになつたことを、顔が涙に溺れたやうだと形容したのである。涙一ぱいの御顔をして、小さい紅葉のやうな御手を、殊勝氣に合はせられ・泣きじやくりをしつゝ、東に西に向かはせられては、天照大神様！ 南無阿彌陀佛！ と祈らせらるゝ御姿、手に取るやうで、實によく書いてある。○千尋はチイロと讀み、殿はテン、號はカウと澄んで讀む。○分段の荒き波。衆生が前世に行爲した業の善惡如何によつて、今生に受ける果報に分別段階のある事。卽ち因果應報の理の支配は、王者と雖も免れぬといふ意で、それを海波が誰れ彼れの差別なく人を溺らすのに譬へたのである。○底の水屑。海底の水屑、水底の藻屑といふのを略したのである。○「大梵高臺」は大梵王の住む宮殿、「釋提喜見」は帝釋天（たいしやくてん）の住む所で、共に觸目悉く人を喜ばすといふ美しい宮殿。○槐門棘路。支那の昔、周の代に、朝廷正殿の眞中なる三公の坐所の前には三本の槐を植ゑ、左右なる卿、大夫、公侯伯子男などの座の前には、九株の棘を植ゑたといふ所から來たので、大臣家、公卿殿上人達といふ事。○九族を靡かし。九族は高祖父、曾祖父、祖父、父、己、子、孫、曾孫、玄孫のこと。「靡かし」は權力によつて風靡したといふ意味ではなく、我が一族を宮廷にぞろりと棚引かせ竝列させたといふ、得意榮華の光景をいふのであらう。

三

『太平記』から立ち還つて『平家』に來ると、またすッかり活き返つて、胸の高鳴りするのを覺える。文章がうまいからばかりではない、作者の筆に心が這入り、作者の同情がすッかり文字の間にしみ込んで、寫された光景が、一々命を持つて吾々の心に迫つて來るからである。此處も大體は事實の起こつた通り、順序を追うて書いたので、詳略も宜しきに叶つて、いかにもよく出來てゐるが、殊に二位の尼が神器を帶び幼帝を擁して船上に立つた所から、幼き帝を慰め參らせつゝ海中に投ずる所、投じて後に、「悲しきかなや無常の春の風」の、無韻の哀歌の起こる所などは、實に息づまるばかりの感興＝悲しさと、恐ろしさと、淋しい諦めと、造化の攝理の前に俯伏する低頭感と、其の間に通じて凡てを包む、何とも云はれぬ奥床しい淨光明との融和した言語道斷の感興＝を覺えさせる。此の先帝の御入水は、八歳の幼帝の崩御であり、神器の冒瀆であり、平家の滅亡であり、同時に平安朝四百年に榮えた公卿文明の「おさらば」であるが、折も折に、此の我が國未曾有の大悲劇に對する、國民が斷腸の哀歌として、王者も天命に敵しかねる事を歌つた、「無常春風」「分段荒波」の二十數句が、海底から、天上から、世界を蔽うて起こつて來たのかと思ふと、我々は唯だもう、大きい時代の魂其の物が、平

家の作者の心を動かし、彼れの筆に宿つて、此の作を成さしめたのではないかと思ふのである。『平家物語』に對する解釋批評はこゝにとゞめて、私は次ぎに『太平記』に移りたいと思ふ。尚ほ序ながら、右の一章の中、「二位殿は日頃より」から「申すもなか〱愚かなり」までの十數行は、琵琶の名家、故館山漸之進氏の家に傳はる譜本によつて、そのまゝ句讀を打つたのである。

第十七　太平記の基味と時代

『太平記』は、後醍醐天皇の御卽位に筆を起こして、北條氏の滅亡、建武の中興、及び南北朝爭亂の顚末を寫したもので、『平家』と同じく半歷史、半小說の文學である。四十卷の長篇で、小島法印の作と稱せられ、而してまた兒島高德が遁世後の筆ではなかつたかとも疑はれて居る。

私は前に『夏山雜談』などを引いて、『太平記』に對して氣の毒な批評をしたが、しかし『太平記』にはまた『太平記』特得の趣味と價値とがある。唯だそれが『平家』に比べて、遺憾ながら非文學的、非情味的のものであるが、しかしながらそれは時代の影響と作者の性格とから來た自然の結果で、據ろない事であつたのであらう。

試みに、吾等の家に於ける父子繼承の消息を考へて見るに、子は父のおもなる遺産を受け繼いで、それに我が勞作の結果を加へるであらう。其の子はまた父祖のおもなる遺産を受け繼いで、それに我が勞作の結果を加へるであらう。かくして祖父より父に、父より子に、子より孫に、傳へるのであるが、其の間に於いて、遠き者より受ける影響が次第に少なくなつて、例へば孫の祖父から受ける影響が、父が父から受けた影響に比して、遙かに少なくなるのは、自然の數である。『平家物語』は王朝文學の子である。『太平記』は『平家』の子で、王朝文學の孫である。『平家』は四百年の洗錬を經た平安朝の文學から、風雅幽玄の要素を直接に多量に受け入れて、之れに加ふるに新時代の新たに培ひ得た剛健勇壯の要素を以てした。かくして其の中には、公卿道と武士道、優柔性と武骨性、女性味と男性味、雅言格と俗言格等、いろ〳〵の要素が自然に混入して、こゝに複雜にして調和のある、何とも云はれぬ渾然たる趣味の成立を見たのである。加ふるに『平家』には、王朝四百年の平和に馴れた國民が、保元平治以來の打ち續く戰亂と、驚心駭魄の悲劇とに目覺まされた無常必衰の哀感が沁み入つて、其の文章に、甚深微妙の締り(しま)と、落着きと、讀者を誘ひ入れる同情素とを與へて居る。『平家』は斯樣な時代に出で、かやうな時代の子の筆に成つたので、自然にあのやうな作が出來たのであるが、『太平記』の事情は全く之れと違つてゐた。『太平記』は、其の祖父にあたる遠い時代の平安朝から、風雅

な文學の影響を受けることが少なかつた。而して專ら『平家』、『盛衰記』等の軍記に據つて、戰爭や政爭本位の男性的駈引を叙したので、其の結果はおのづから、武骨な單調なものとなつたが、殊に『太平記』をして非文學的、非情味的たらしめたものは、其の道德的、知識的なる實際の空氣であつた。『平家』時代が平和期から戰爭期に移る慘憺たる光景によつて極度の哀傷を感じ、而して『平家』が其の哀感を叙する事によつて、底深き落着きと同情素とを備へ得たのに反し、『太平記』時代は戰亂に飽いて平和を求め、鎌倉の政治に飽いて建て直されたる新政を求め、皇家も公卿も武家も、皆此の種の實際的理想に燃えて、懸命の努力を續けてゐた。かやうな時代に出で、かやうな時代の子の手に成つた『太平記』が實際本位となり、知識的、道義的となり、武骨になり、單調になつたのは、極めて自然の事である。而してかやうな方面に力瘤を入れた結果が、一種の理想宣傳となり、智謀奇計の説明となり、文章の表面粉飾に傾くやうになつたのは、また餘儀もなき事といはねばならぬ。

要するに、『太平記』の最もおもなる特色は、第一には、當時の國民が生死を賭して新しい理想に邁進した心持を書いた所にある。第二には智謀奇計と誇張とを本位とする戰爭の細かな描寫にある。第三には心を寫さずして事を寫さうとした所にある。言ひ換へれば道義的、知識的、事件本位、文章本位になつた所、これが『太平記』の長所にして同時に短所といふべきであらう。

第十八　七生まで唯だ同じ人間に

一

私は先きに『平家』の「入道逝去」に取り合はせて、『太平記』第一の敵役、足利尊氏逝去の一章を引いた。私は又代表的巨人に關する代表的大事件を選擇して、此の作の特色を手短に說明する爲め、眞先に南朝第一の忠臣にして、作者の最も尊敬と同情とを寄せた楠正成討死の一章を引いて見る。

楠判官正成、舍弟帶刀正季に向つて申しけるは、敵前後を遮つて、御方は陣を隔てたり。今は遁れぬ所と覺ゆるぞ。いざや先づ前なる敵を一散らし追ひ捲つて、後なる敵に戰はんと申しければ、正季然るべく覺え候と同じて、七百餘騎を前後に立てて、大勢の中へ懸け入りける。左馬頭（足利直義）の兵共、菊水の旗を見て、よき敵也と思ひければ、取籠めて之れを討たんとしけれども、正成正季、東より西へ破つて通り、北より南へ追ひ靡け、よき敵と見るをば馳せ竝べて、組んで落ちては首を

取り、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つて懸け散らす。正成と正季と、七度合ひて七度分かる。其の心偏に左馬頭に近づき、組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠が七百餘騎に懸け靡けられて、又須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乘られたりける馬、矢尻を蹄に踏み立てゝ、右の足を引きける間、楠が勢に追ひ攻められて、已に討たれ給ひぬと見えける所に、藥師寺十郎次郎唯だ一騎、蓮池の堤にて返し合はせて、馬より飛んでおり、二尺五寸の小長刀の石突を取り延べて、懸かる敵の馬の平頸、むながひの引廻、切つては刎ね倒しはね倒し、七八騎が程切つて落しける其の間に、直義は馬を乘り替へて、遙かに落ち延び給ひけり。

左馬頭楠に追立てられて引き退くを、將軍(尊氏)見給ひて、新手を入れ替へて、直義討たすなと下知せられければ、吉良、石堂、高、上杉の人々六千餘騎にて、湊河の東へ懸け出でて、跡を切らんとぞ取り卷きける。正成正季又取つて返して此の勢にかゝり、懸けては打違へて殺し、懸け入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで鬪ひけるに、其の勢次第々々に滅びて、後は僅かに七十三騎にぞ成りにける。此

萬治版　太平記大全

の勢にても打破つて落ちば落つべかりけるを、楠京を出でしより、世の中の事今は是れ迄と思ふ所存ありければ、一足も引かず戰つて、機已に疲れければ、湊河の北に當たつて、在家の一村ありける中へ走り入つて、腹を切らん爲めに、鎧を脫いで其の身を見るに、斬疵十一箇所迄ぞ負ひたりける。此の外七十二人の者共も、皆五箇所三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行に竝居て、念佛十返計り同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。

正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて、抑〻最期の一念によつて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願ひなると問ひければ、正季から〳〵と打笑ひて、七生まで唯だ同じ人間に生まれて、朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、我れも斯樣に思ふ也。いざさらば同じく生を替へて、此の本懷を達せんと契つて、兄弟共に刺し違へて、同じ枕に伏しにけり。……抑〻元弘以來、忝くも此の君に憑まれまゐらせて、忠を致し功に誇る者幾千萬ぞや。然れども此の亂又出て來て後、仁を知らぬ者は、朝恩を

捨てゝ敵に屬し、勇なき者は時の變を辨ぜずして道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は未だ無かりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣横まに威を振ふべき、其の前表の驗なれ。

二

いかにも張り切つた力の文章である。吾々は之れを讀んで、先づ文章の氣魄に打たれる。吾々は此の勢強き文章に導かれて、先づ楠が七百餘騎と共に左馬頭直義が五十萬騎に駈け向ふであらう。七度も合ひつ分かれつして、重圍を切り開き切り開き、敵將を目がけて懸け進むであらう。三時、十六度の戰も其の甲斐なく、七十三騎に討ち減らされて、在家の客殿に居竝んで無念の腹を切るであらう。而して義憤の兄弟が、「七生人間」の誓を言ひ交はして刺し違へる光景を幻影に描きつゝ、此の三德兼備の勇將の戰死による聖代の御行末を豫想して長大息するであらう。『太平記』の文章は、實に息もつがせぬ文章である。實狀實景を目のあたりに見せて手に汗を握らせる文章である。一種の强い魂を吹

き込んで士氣を鍛へ成す文章である。凡そ是等の點に於いて、『太平記』は古今の國文學中の最上位を占むべきものであるが、惜しいかな、そこに微妙な心の潤ひの味がない。『平家』の持つてゐる樣な、細み、微けみ、寂寥味、柔軟味、曲折味、沈潜味、浸透味がない。戰を寫すに於いて然り。死を寫すに於いて然り。景を寫すに於いて亦然り。戀を寫すに於いて亦々然りである。

讀者は『平家』が齋藤別當實盛の悲痛な討死を寫して後に、

　朽ちもせぬ空しき名のみ留め置きて、骸は越路の末の塵と、なることそ哀れなれ。

といふ、寂しい諷諧の評語を下した事を記憶されるであらう。また清盛入道が悶死を寫しては、

　さしも日本一州に、名を揚げ威を振ひし人なれども、身は一時の煙となつて、都の空へ立ち上り、骸は暫し徘徊ひて、濱の眞砂に戯れつゝ、空しき土とぞなり給ふ。

といひ、幼帝の御入水を寫し奉つては、

　悲しきかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし、痛ましき哉分段の荒き波、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、長き栖と定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれども、未だ十歳の内にして、底の水屑と成らせおはします。十善帝位の御果報、申すもなか〳〵愚かなり。

と云ひつゝ、命終の刻下に於いてあらゆる高さ大きさを失つた巨人貴人が、大天地の前にひれ伏し、嚴かなる因果の理法の裡に吸ひ込まれるやうな、尊い寂しさを見せた甚深味の評語を下した事を記憶されるであらう。而して是等の微妙な着眼筆致が『平家物語』に對して、いかに床しい奥深い味はひを與へたかを記憶されるであらう。此の〳〵味はひが『太平記』に無いのである。無いではないが、極めて少ないのである。『太平記』は張肘で人生に向つた。而して奥行の淺い、平面的、知識的なる語句と、向鼻の強い誇張の修辭と、而して屢〻は句の過ぎた古典の駢麗句とを以て、之れを飾らうとした。私は『太平記』の爲めに、實に之れを惜しまざるを得ぬ。

三

とにかく『太平記』の命は、壯麗なる文を構へて、偉大なる魂を吹き込むところにあるが、之れに伴ふ一つの弊はくつろぐ事のない緊張にあつた。『太平記』は肘を張り眼を瞋らして目的物を睨んだ。而して油斷のない智巧によつて之れを現はさうとした。七度合ひ七度分かれて敵の大將を刺さんとし、七生まで人間に生れて朝敵を滅ぼさうとした楠公兄弟の心は、やがて『太平記』の作者の人生觀で、同時にその創作觀であつたであらう。兵部卿宮護良親王は還俗して鎌倉を滅ぼされた。世が一たび鎮ま

つて後も、猶ほ楯を作がせ、鏃を砥がせて、合戰の用意を續け、剃髮染衣を促す勅諚に對しても、尊氏一人を除かぬ限りは、兵をも解かじ三衣をも着けじと言はれた。鎌倉の土牢で、淵邊伊賀の刃に罹らせられても、長く御屑も冷えず、御目をも塞がれなかつたと云はれる。親王の御心は、やがて『太平記』の作者の創作觀であつたであらう。作者は後醍醐天皇の崩御を寫していふ。

南朝の年號延元三年八月九日より、吉野の主上御不豫の御事ありけるが、次第に重らせ給ふ。醫王善逝の誓約も、祈るに其の驗なく、耆婆扁鵲が靈藥も、施すに其の驗おはしまさず、玉體日々に消えて、晏駕の期遠からじと見え給ひければ、大塔の忠雲僧正、御枕に近づき奉りて、涙を抑へて申されけるは、神路山の花再び開くる春を待ち、石淸水の流れ遂に澄むべき時あらば、さりとも佛神三寶も捨て參らせらるゝ事は、よも候はじとこそ存じ候ひつるに、御脈已に替はらせ給ひて候由、典藥頭驚き申し候へば、今は偏に十善の天位を捨てゝ、三明の覺路に赴かせ給ふべき御事をのみ、思召し定められ候べし。扨も最後の一念に依つて、三界に生を引くと、經文に說かれて候へば、萬歲の後の御事、萬叡慮に懸かり候はん事をば、悉く仰せ

置かれ候て、後生善所の望みをのみ、叡心に懸けられ候べしと申されたりければ、主上苦しげなる御息を吐かせ給ひて、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、是れ如來の金言にして、平生朕が心にありし事なれば、秦の穆公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へし事、一つも朕が心に取らず。唯だ生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵を悉く亡ぼして、四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり。朕卽ち早世の後は、第七の宮を天子の位に卽け奉りて、賢士忠臣事を圖り、義貞義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくは、股肱の臣として天下を鎭むべし。これを思ふ故に、玉骨は縱ひ南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んぜば、君も繼體の君に非ず、臣も忠烈の臣にあらじと、委細に綸言を遺されて、左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ、右の御手には御劍を按じて、八月十六日の丑の刻に、遂に崩御成りにけり。悲しいかな、北辰位高くして百官星の如く列ると雖も、九泉の旅の路には供奉仕る臣一人もなし。奈何せん、南山の地僻にして萬卒雲の如くに集まると雖も、無常の敵の來るをば禦ぎ止むる兵更になし。唯だ中流に

船を覆して一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈消えて、五更の雨に向ふが如し。葬禮の御事、かねて遺敕ありしかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚くし御座を正しうして、吉野山の麓、藏王堂の艮（うしとら）なる林の奥に、圓丘を高く築（つ）いて、北向きに葬り奉る。

片御手に法華を、片御手に御劍を按じつゝ御執着の崩御は、實にすさまじき御終焉で、前なる護良親王の御最期に對し、楠兄弟の最期と相對して、誠に此の君にして此の御子あり、此の臣ありといふべきであるが、此の人々の心卽ち、『太平記』の作者の心で、更に適切にいふと、此の時代にして此の君も、此の親王も、此の忠臣も、此の作もあつたのであらう。私かに思ふに、文學としての『太平記』の命は、此の積極的活動性、たるみなき緊張性の具現した所にある、倒れてもやまざる執着力を現はす爲めに、層々累々の花やかな文を行つた所にある。但し、積極的活動やたるみなき緊張性の描寫は、如何に巧みでも、多くは一時の爽快を感ぜしめるだけで、深い長い同情を惹き難いものであり、消極的なる哀愁衰滅の描寫は、人の心を深く長く動かし易いものであるが、『太平記』が『平家』ほどに喜ばれぬ一つの原因は、此の一面にもあるのであらう。

序に、此の後醍醐天皇崩御につゞく「悲しいかな、北辰位高くして百官星の如く列ると雖も、九泉の

旅の路には供奉仕る臣一人もなし……」のあたりの文句は、その趣致に於いて、何となく、『平家』の先帝御入水や、入道逝去の條の「悲しきかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし」や、「身に替はり命に代はらんと忠を存ぜし、數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれども、是れは目にも見えず、力にもかゝはらぬ、無常の刹鬼をば、暫時も戰ひ返さず」といふあたりの趣に似通つて居る。又前に擧げた正成の戰死につゞく文句は、神田本には、

同じく腹をかき切つて、枕を合はせてふしたりける。惜しきかなや、元弘已來忝くも君にたのまれ奉つて、忠をいたし功に誇る者幾千萬ぞや。

となつてゐて、殊に著るしく、『平家』の「先帝御入水」や「入道逝去」につゞいた文句に似通つた所がある。恐らく『太平記』の作者は、『平家』や『盛衰記』のあのあたりを手本とし、又競爭者とも見て秋波をくれつゝ、其の意氣軒昂の筆を行つたものであらうが、著るしく似通つては居りながら、文句の花が勝つて情味の實の人に迫る所が少なく、知的に目が詰んで居ると同時に、情的に潤ひの少ない傾きのあるのは、どうしたものであらう。私は道義に、智略に、事實に、文彩に重きを見出だした、作者と世間と、時代とが、三者相依り相助けて此の顯現をなしたものであると考へる。

第十九　菊水の旗影

一

『太平記』の最もおもなる興味の一つで、作者と讀者と共に神往した題材は、謀計本位の戰爭記である。左に其の方面の一例として、楠正成が赤坂の軍の一節を引いて見る。

遙々と東國より上りたる大勢共、未だ近江國へも入らざる前に、笠置城已に落ちければ、無念の事に念うて、一人も京都へは入らず、或ひは伊賀伊勢の山を經、或ひは宇治醍醐の道を要つて、楠兵衛正成が楯籠つたる赤坂城へぞ向ひける。石川河原を打過ぎ、城の有様を見やれば、俄に拵へたりと覺えて、はか〴〵しく堀をもほらず、僅に塀一重塗つて、方一二町には過ぎじと覺えたる其の内に、櫓二三十が程搔き竝べたり。これを見る人毎に、あな哀れの敵の有様や、此の城我等が片手に載せて、投ぐるとも投げつべし。あはれせめて如何なる不思議にも、楠が一日こらへよ

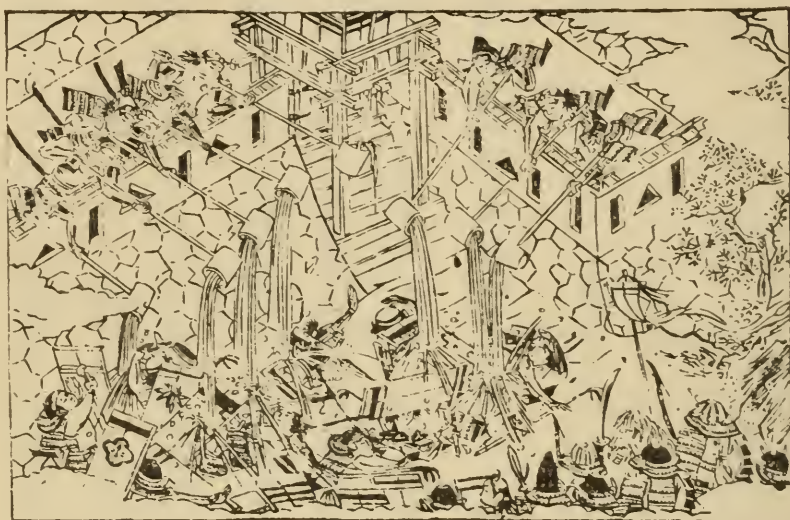
かし。分捕功名して恩賞に預らんと、思はぬ者こそ無かりけれ。されば寄手三十萬騎の勢共、打寄すると均しく、馬を蹈み放ちふみ放ち、堀の中に飛び入り、櫓の下に立ち竝んで、我れ前に打入らんとぞ爭ひける。正成は元來籌を帷幄の中に運らし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なりければ、究竟の射手を二百餘人城中に籠めて、舍弟の七郎と和田五郎正遠とに、三百餘騎を差副へて、よその山にぞ置きたりける。寄手はこれを思ひも寄らず、心を一片に取つて、唯だ一揉みに揉み落さんと、同時に皆四方の切岸の下に着いたりける所を、櫓の上、狹間の陰より指しつめ引きつめ、鏃を揃へて射ける間、時の程に手負死人千餘人に及べり。東國の勢共案に相違して、いや〳〵此の城の爲體、一日二日には落つまじかりけるぞ。暫らく陣々を取りて役所を構へ、手分をして合戰を致せとて、攻口を少し引き退き、馬の鞍を下し、物具を脫いで、皆帷幕の中にぞ休み居たりける。楠七郎、和田五郎、遙かの山より直下して、時刻よしと思ひければ、三百餘騎を二手に分け、東西の山の木陰より、菊水の旗二旒、松の嵐に吹き靡かせ、

閑に馬を歩ませ、煙嵐を捲いて押寄せたり。東國の勢これを見て、敵か味方かとためらひ怪しむ所に、三百餘騎の勢共、兩方より吶喊を咄と作つて、雲霞の如くにたなびいたる三十萬騎が中へ、魚鱗懸りに懸け入り、東西南北へ破つて通り、四方八面を切つて廻るに、寄手の大勢あきれて陣を成し兼ねたり。城中より三つの木戸を同時に颯と排いて、二百餘騎鋒を竝べて打つて出で、手さきを廻して散々に射る。寄手さしもの大勢なれども、僅かの敵に驚き騷いで、或ひは維げる馬に乘つて、あふれども進まず、或ひは弛せる弓に矢をはげて、射んとすれども射られず、物具一領に二三人取り附き、我がよ人のよと引き合ひける其の間に、主討たるれども從者は知らず、親討たるれども子は助けず、蜘の子を散らすが如く、石川河原へ引き退く。其の道五十町が間、馬物具を捨てたる事、足の踏みどころも無かりければ、東條一郡の者共は、俄に德附いてぞ見えたりける。さしもの東國勢、思ひの外に爲損じて、初度の合戰に負けければ、楠が武略侮りにくしとや思ひけん、吐田楢原邊に、各〻打寄せたれども、やがて又推し寄せんとは擬せず、此に暫らく控へて、畿內の案

内者を先に立て、後攻のなき様に、山を刈り廻し、家を焼き拂うて、心安く城を攻むべきなんど評定ありけるを、本間澁谷の者共の中に、親打たれ子討たれたる者多かりければ、命生きては何かせん、よしや我等が勢ばかりなりとも、馳せ向つて討死せんと憤りける間、諸人皆之れに勵まされて、我れも〳〵と馳せ向ひけり。

　彼の赤坂の城と申すは、東一方こそ山田の畔重々に高く、少し難所の様なれ、三方は皆平地に續きたるを、堀一重に塀一重塗つたれば、如何なる鬼神が籠りたりとも、何程の事が有るべきと、寄手皆これを侮り、又寄すると均しく、堀の中切岸の下まで攻め附いて、逆茂木を引きのけて打つて入らんとしけれとも、城中には音もせず。是れは如何様昨日の如く、手負多く射出だして漂ふ處へ、後攻の勢を出だして、揉み合はせんずるよと心得て、寄手十萬餘騎を分けて、後の山へ指向けて、殘る二十萬騎稻麻竹葦の如く、城を取り巻いてぞ攻めたりける。斯かりけれども城の中よりは、矢の一筋をも射出ださず、更に人ありとも見えざりければ。寄手いよいよ氣に乘つて、四方の塀に手を懸け、同時に上り越えんとしける處を、本より塀を

二重に塗つて、外の塀をば切つて落すやうに拵へたりければ、城の中より、四方の塀の釣繩を一度に切つて落したりける間、塀に取り附きたる寄手千餘人、壓に打たれたるやうにて、目ばかりはたらく所を、大木大石を投げ懸け投げ懸け打ちける間、寄手又今日の軍にも、七百餘人討たれけり。東國の勢共、兩日の合戰に手懲りをして、今は城を攻めんとする者一人もなし。唯だ其の近邊に陣を取つて、遠攻めにこそしたりけれ。

元祿版　繪入太平記

四五日が程は斯様にてありけるが餘りに暗然として守り居たるも言ひ甲斐なし。方四町にだに足らぬ平城に、敵四五百人籠りたるを、東八箇國の勢共が攻め兼ねて、遠攻めしたる事の淺猿さよなんど、後までも人に笑はれん事こそ口惜しけれ。前々は早りのまゝ楯をも衝かず、攻具足をも支度せで攻むればこそ、そゞろに人は損じつれ。今度は質を替へて攻むべしとて、面々に持楯をはがせ、其の面にいため皮を當てゝ、輙く打たれぬ様に拵へて、かづきつれてぞ

攻めたりける。切岸の高さ堀の深さ幾程もなければ、走り懸かつて塀に着かん事は、最安く覺えけれども、これもまた釣塀にてやあらんと危みて、左右なく塀には着かず、皆堀の中におり漬つて、熊手を懸けて塀を引きける間、既に引き破られぬべう見えける處に、城の中より、柄の一二丈長き杓に、熱湯の沸き返りたるを酌んで懸けたりける間、甲の天邊綿嚙のはづれより、熱湯身に通つて燒け爛れければ、寄手こらへかねて、楯も熊手も打捨てゝ、ばつと引きける見苦しさ、矢庭に死ぬるまでこそ無けれども、或ひは手足を燒かれて立ちもあがらず、或ひは五體を損じて病み臥する者、二三百八に及べり。寄手質を替へて攻むれば、城中工を替へて防ぎける間、今は兎も角もすべき樣なくして、唯だ食攻めにすべしとぞ議せられける。

實に威勢よくすら〳〵と書いて居る。楠が關東勢の裏を掻いては、意表に出で、機先を制しつゝ、敵を惱ましたやうに、作者は讀者の心をつかんで、意表に出でつゝ、其の先その先と巧みに興味を繋いで居る。面白い、實に面白い。が、唯だ惜しいのは、描寫に身に沁むやうなこツくりした味の少ないことである。腕力本位、計略本位、花やかな文章本位で、彽徊して耽味させる所の少ない事である。

終はりを急ぐので委しく說明する餘裕はないが、此の戰と多少事情の似通つて居る『平家』の戰、例へば富士川、燧ヶ城、一の谷、福隆寺繩手等の合戰記と比較すれば、思ひ半ばに過ぎるであらう。要するに『太平記』には、事を寫し、事の表面を飾らうとした傾きがある。興味に釣られて、張子式に膨れあがつた心情を、そのまゝ誇張するといふ傾きがある。例へば「笠置の軍」の中に、一人の大力なる律僧の奮鬪振を寫して、

本性房といふ大力の律僧のありけるが、褊衫の袖を結んで引き違へ、尋常の人の百人しても動かし難き大磐石を、輕々と脇に挾み、鞠の勢ひに引懸け／＼、二三十續け打ちにぞ投げたりける。數萬の寄手、楯の板を微塵に打碎かるゝのみにあらず、少しも此の石に當たる者、尻居に打居ゑられければ、東西の坂に人頽れを築いて、人馬いやが上に落ち重り、さしも深き谷二つ、死人にてこそ埋めたりけれ。

といへるが如きは、此の作者が人生事實の眞といふ事に思ひを致さぬ、氣輕な表面的誇張の癖を著しく見せたものである。また妻鹿孫三郎の勇力を寫して、

唯だ一騎西朱雀を指して引きけるを、印具駿河守の勢五十餘騎にて追懸けたり、其

の中に年の程二十ばかりなる若武者、たゞ一騎馳せ寄せて、引いて歸りける妻鹿孫三郎に組まんと近づいて、鎧の袖に取り着きける所を、孫三郎これを物ともせず、長き肘を差し延べて、鎧の總角を摑んで中に提げ、馬の上三町ばかりぞ行きたりける。此の武者然るべき者にてやありけん、あれ討たすなとて、五十餘騎の兵、跡に附いて追ひけるを、孫三郎尻目にはつたと睨んで、敵も敵によるぞ。一騎なればとて、我れに近づいてあやまちすな。ほしからば是れ取らせん。請取れと云つて、左の手に提げたる鎧武者を、右の手に渡して、えいと抛げたりければ、跡なる馬武者六騎が上を投げ越して、深田の泥の中へ、見えぬ程こそ打ちこうだれ。

といへるが如きは、格別の誇張ではないが、其の描寫が情味の伴はぬ、事件本位の興味中心になつた事を語るものであらう。吾々は之れに似通つた『平家』なる齋藤別當實盛や、薩摩守忠度や、能登守敎經等の戰ひ振や、人手玉の力業の描寫と比べて見て、特にその感を深うするのである。時代がさうである。人の心がさうである。一代の興味に投ずる作者の筆が、さうなつたのに不思議はないが、吾々が『太平記』について、言ふまいと思へど惜しき第一はこれである。

第二十　太平記に於ける情味の筆

一

『太平記』は戰爭本位、謀計本位、道義本位、知識本位のものではあるけれども、折々は趣味を主として、景色の美や人情の哀れを寫さうとした所もある。景色に人情を絡んだものでは、例へば名高い俊基朝臣の東下りの道行の如きが、その最もよい例であらう。

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅宿となれば物憂きに、恩愛の契り淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる。憂きをば留めぬ相坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏み鳴らす、勢多の長橋打渡り、行

き交ふ人に近江路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。番場醒ケ井柏原、不破の關屋は荒れ果てて、猶ほ漏るものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる。熱田の八劒伏し拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰れか哀れと夕暮の、晩鐘鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

七五の連鎖を何處までも繫いで行くところは、『平治』や『平家』の準道行文に比して大分發達はして居るが、同時にわざとらしく、文字に使はれたところがあつて、景色も浮かばず、また人の情を誘ふこんもりしたところがない。

専ら人情を現はしたものには、新田義貞が勾當内侍に對する戀物語の如きがある。

中にも、彼の北臺勾當内侍の局の悲みを傳へ聞くこそあはれなれ。此の女房は頭大

夫行房の女にて、金屋の内に粧を閉ぢ、鷄障の下に媚を深くして、二八の春の頃より內侍に召されて、君王の傍らに侍り、羅綺にだも堪へざる貌は、春の風一片の花を吹き殘すかと疑はる。紅粉を事とせる顏は、秋の雲半江の月を吐き出だすに似たり。されば椒房の三十六宮、五雲の漸くに遶る事をいたみ、禁漏の二十五聲、一夜の正さに長き事を恨む。去んぬる建武の始め、天下また亂れんとせし時、新田左中將常に召されて、內裏の御警護にぞ侍はれける。或る夜月冷じく風秋なるに、この勾當の內侍、半ば簾を捲きて琴を彈じ給ひけり。中將その怨聲に心引かれて、覺えず禁庭の月に立吟ひ、あやなく心そゞろにあこがれてければ、唐垣の傍に立ち紛れて窺ひけるを、內侍見る人ありと物わびしげにて、琴をば引かずなんぬ。夜痛く深けて、有明の月の隈なくさし入りたるに、たぐひまでやはつらからぬと打ち詠め、しをれ伏したる氣色の、折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなん玉篠の、あられよりなほあだなれば、中將行方も知らぬ道にまよひぬる心地して、歸る方もさだかならず、淑景舍の傍らにやすらひかねて立ちあかす。朝より夙に歸りても、幽かなり

し面影の、なほこゝもとにある心迷ひに、世の態人の言ひかはす事も心の外なれば、いつとなく、おきもせず寝もせで夜を明かし日を暮らして、若ししるべする海人だにあらば、忘れ草の生ふといふ浦のあたりにも、尋ね行きなましと、そゞろに思ひ沈み給ふ。あまりにせん方なきまゝに、媒すべき人を尋ね出だして、そよとばかりを知らすべき、風のたよりの下荻の、穂に出づるまではなくともとて、

わが袖の涙に宿る影とだに

知らで雲井の月やすむらん。

と詠みて遣はされたりければ、君の聞召されん事も憚りありとて、よに哀れげなる氣色に見えながら、手にだに取らずと、使歸りて語りければ、中將いとゞ思ひしをれていふべき方なく、有るを憑みの命とも覺えずなりぬべきを、何人か奏しけん、君等閑ならず聞召して、夷心のわく方なさに、思ひそめけるも理なりと、哀れなる事に思召されければ、御遊の御次に左中將を召され、御酒たばせ給ひけるに、勾當の内侍をば、此の盃に附けてとぞ仰せ出だされける。左中將限りなく忝しと悅びて、

翌の夜やかて牛車さわやかに仕立てゝ、かくと案内せさせたるに、内侍もはや此の年月の志に、さそふ水あらばと思ひけるにや、さのみ深け過ぎぬ程に、車のきしる音して、中門に轅を指し廻せば、侍兒一人二人、妻戸をさしかくして驚破きあへり。中將は此の幾年を戀ひ忍んで、相逢ふ今の心の中、優曇花の春待ち得たる心地して、珊瑚の樹の上に陽臺の夢長くさめ、連理の枝の頭に驪山の花自ら濃かなり。

情事の描寫では、作中第一ともいふべき所であるが、まことに美しく面白く書きつゞけてある。殊に漢文では『文選』や『朗詠集』などから、和文では『源氏物語』や『伊勢』や『土佐』などから、美しい文句を借りて來て厚化粧式に仕立てゝはあるが、文句が内容から遊離して、情のこもつた落ちついた姿が、しみ〲と讀む者の魂に迫つて來ないのは、やはり筋を本位とし文飾を第一義とした結果であらう。又この邊りには旬の過ぎた古典の美辭麗句が、なまなか眞情の流露を妨げた趣がある。

『太平記』が人情を寫した文の中で最もすぐれて居るのは、やはり小楠公が亡き父の首に泣く條などであらう。あの涙の光景を、流布本にはかう書いてある。

其の後尊氏卿楠が首を召されて、朝家私日久しく相馴れし舊好の程も不便なり、跡

の妻子共、今一度空しき貌をも、さこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送られける情の程こそ有難けれ。楠が後室、子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、樣樣申し置きし事ども多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限りの別かれなりとは、豫ねてより思ひまうけたる事なれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じて、替はり果てたる首を見るに、悲みの心胸に滿ちて、歎きの涙せきあへず。今年十一歳に成りける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有樣、母が歎きのせん方もなげなる樣を見て、流るゝ涙を袖に押へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、則ち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を、右の手に拔き持ちて、袴の腰を押しさげて、自害をせんとぞ仕居たりける。母急ぎ走り寄つて、正行が小腕に取り附いて、涙を流して申しけるは、栴檀は二葉より芳しといへり。汝をさなくとも父が子ならば、これ程の理に迷ふべしや。子心にもよく〳〵事の樣を思うて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めし事は、全く跡を弔はれん爲めにあ

らず、腹を切れとて殘し置きしにもあらず。我れ縱令運命盡きて、戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座有りと承らば、死に殘りたらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起こし、御敵を滅ぼして、君を御代にも立て進らせよと言ひ置きし處なり。其の遺言具に聞きて、我れにも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひ果て、君の御用に合ひまゐらせん事、有るべしとも覺えずと、泣く泣く諫め留めて、拔きたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。其の後よりは正行、父の遺言母の教訓、心に染み肝に銘じつゝ、或る時は童部共を打倒し、首を取る眞似をして、是れは朝敵の首を取るなりといひ、或る時は竹馬に鞭を當てゝ、是れは將軍を追懸け奉るなんどいひて、はかなき手ずさみに至るまでも、唯だ此の事をのみ業とせる、心の中こそ恐ろしけれ。

是れは前々の文とは違つて、やゝこしい和漢の古典の引用もなく、勿體ぶつた文飾もないが、素直な文句の運びの中に、實況が具現し眞情が流露して、いかにもよく出來てゐる。私は此の邊が『太平

記』に於ける第一の名文であらうかと思つて居る。おのづからにして道義的、知識的、宣傳的なる作者の趣意にも合ひ、同時に文學的、情味的の一面をも備へ得た最上位の文章だと思つてゐる。(私は此の章の花形たる後室や正行の夫たり父たる楠公正成について、「判官今度兵庫へ立ちし時」、「正行を留め置きしかば」、「君を御代にも立てまゐらせよと言ひ置きし處なり」と、敬語なしの呼び捨てにしながら、尊氏についてのみ「楠が首を召されて」、「遺跡に送られける」、「將軍を追懸け奉る」など言はせた、足利偏尊の筆致を快く思はない。また『太平記』の作者が諸人物に對する敬語使用の態度に比べて、『平家』の作者の敬語の使ひ振を、ざすがにえらいと思つてゐる者である。之れについては、本書の中にも引用した俊寛や木曾義仲に對する敬語の加へ方について一考していたゞきたい。)が、是れは恐らく『太平記』の原作者が取附の初筆に達した境地ではあるまい。明治の中頃に見出だされた「神田本」といふ異本には、此處を左の如く書いて居る。

其の後尊氏卿正成が首を取りよせて、朝家に久しく相馴れし舊好も不便なり、妻子共今一度空しき貌をも見度うこそ思ふらめとて、楠が遺跡へぞ送り遣はさるゝ情の程こそ有難けれ。(中略)正行は今年十一歳に成りけるが、空しき首に取り附いて、泣き

悲しむ事限りなし。やゝあつて落つる涙を押へながら傍らへ行きけるを、若黨怪しと思ひて、跡に付いて見れば、父が兵庫へ向ふとて、神南の宿よりかへし留めし時、形見にせよとて取らせたりし、菊水作りの刀を抜いて、腹を切らんとしけるを、若黨走り寄つて取り留め、此の由を急いで告げたりければ、母は涙を押へて申しけるは、栴檀は二葉より(芽てる園)香ばしといへり。汝少くとも正成が子ならば、是れほどの理に迷ふべきか。少な心にも、能く〱事のやうを思ふべし。父が兵庫へ向はれし時、道より汝をかへし留むる事、只今腹切れとて殘し置きけるか。正成たとひ打死すとも、正行は殘り留まつて、一族若黨を扶持し立てゝ、今一度義兵を擧げ、朝敵を亡ぼして、君の忠功にも備へ、父の遺恨をも散ぜよとて留め置きし身ぞかし。其の庭訓を具さに聞いて、わらはにも語りし者の、いつの程に忘れけるにや……。

流布本に於ける母の追跡發見が、此の方では若黨の事になつてゐる類で、此の異本が一體に趣向が稚く、文章の拙い所を見ると、此の異本が原形—少なくとも比較的古い方の一つ—であつたのであらう。而して今の流布本の『太平記』は、このやうに拙かつたのを、同じ作者が加筆推敲したのか、或ひ

は他の優れた手腕の文章家が添削し潤色したのであらう。而して、この後出の詞華言葉に富んだ、謂はゆる流布本が原形の正本と視られて、此の神田本が一種の異本と視られるやうになつたのであらう。私は此の異本が文章が拙いながら、素樸な中に『平家』に似通つた味はひのあるのを見て、殊に床しく思つて居るのである。

第二十一　おさらば

拙い講義を長々とつゞけましたが、いよ〳〵これで「おさらば」に致します。私の本來の希望は、『太平記』に次ぎ、室町戰國の合戰記から、江戸時代の軍記を經て、維新、西南、日清、日露の戰爭記、例へば『肉彈』、『從征日記』、『此一戰』、『村に還りて』等にも及ぼしたかつたので、まだ御話しすべき事、お話したいと思つた事の三が一にも達せぬ中に、お名殘になつたのは、殘念ですけれども、限りある範圍の仕事で、據ろありません。

私はまづ、我が國文學史上に於ける「軍記物語」、卽ち文學軍記の何たるかを御話致しました。最もおもなる軍記物語が何かといふ事を御話致しました。其の軍記物語の種子が如何にして蒔かれ、如何にして培はれ、それが如何に變遷し發達して、完成の域に達したかをお話致しました。私はまた軍記

の內容と形式とが相竝んで發達し、武人が社會の從位を占めた時は、軍記も時の文學の中に從位を占め、武人が天下の第一位を占めるに及んで、軍記も始めて時の文學の中に第一位を占めた事、そして其の時がまさしく軍記物語發達の頂點に達した時であつた事をお話致しました。私は又最も發達した軍記の複雜なる內容を概觀して、其の大要を例說し、それが武人生活と戰爭との描寫に力點を置きながら、同時に公卿道、戀愛道、藝術道等の種々相をも寫した事、殊に無常悲哀の人生觀によつて統一せしめた事が、其の大を成し、深きを成し、高きを成した事をお話致しました。

取りすべていふと、私は我が「軍記物語」について、「何物？」、「何故？」、「如何に？」の大要を說明しました。殊に『平家物語』をば軍記の中心にして、同時に發達の頂點に達したものと認め、其の意義、趣味、價値の說明に最大の努力を拂ひました。但し『太平記』については、折角解釋批評の筆を執りながら、言ふところ粗略に、批判が消極的であつた事は、此の大作に對して甚だ氣の毒に思ふところであります。『太平記』の文學的及び、文學史的意義について、私は嘗て、舊著『新國文學史』に於いて、次ぎのやうに言ひました。

> 『太平記』は後醍醐天皇の卽位に筆を起こして、建武中興及び南北朝爭亂の顚末を寫したものである。もと『平家物語』や『源平盛衰記』あたりを模範として、之れにやゝこしき修辭の厚化粧を施し

たものであらう。花々しい戰爭や、大義名分に關する調子の高い記事に滿ちて、人の血を湧かすところがあり、また後世に偉大なる影響を及ぼしたものでもあるけれども、其の文學上の價値は、到底『平家物語』などに比較し得べきものではない。『平家』や『盛衰記』には、王朝思想と鎌倉思想との絡み合ひ、卽ち公卿生活と武人生活、感情本位生活と義理本位生活との交渉を寫した所に言ふべからざる味はひがあつたが、『太平記』は、概して云へば鎌倉式の一點張り、言ひかへれば武人生活、義理生活に偏した一本調子のものとなつた。『平家』に於いては、驕る平家の威勢といひ、西海の沒落、幼帝の御入水といひ、昇り、降り、共に目の醒める樣に際立つて居るけれども、『太平記』に於いては、建武の中興も、新田、楠の武勳も、足利の成功も、兩朝の和睦も、悉く微溫的の好い加減な程度に止まつて、深切なる同情を喚び起こすべき所がない。『平家』に於いては記事に一種の趣味があつて、戰爭にも人情味藝術味が絡んでゐたが、『太平記』に於いては、記事はすく〳〵として油氣がなく、戰爭は專ら張良孔明的なる謀計の、筋の變化や、荒つぽい腕力の挑み合ひを寫すやうになつて、事件本位、輪廓本位、修飾本位となつて來た。『平家』に於いては、事が單純にして摑まへ易く、事件の進みが急劇に而も漸層をなして、最後の大悲劇を現じたが、『太平記』に於いては、事件が複雜で、無中心で、同じ樣な小事件が、廣い場面に撒布され、而も

其の小事件がのろ〱だら〱と開展して、最後に龍頭蛇尾の妥協的調和を現じて居る。故に『太平記』は、稀有の大事件を寫した點と、武勇義理一點張りの時代を描いた點と、後代に於ける國民の實際活動に偉大なる影響を及ぼした點とを除けば、新趣味を發揮した點に於いても、文體を完成した點に於いても、人を寫し事を叙する點に於いても、到底鎌倉の初期に現はれた『平家』その他の軍記と比較し得べきものではないのである。

これは二十餘年前の愚考でありますが、私は今日に於いても、大體に於いて之れを變更すべき必要を見出ださないので、之れを以て『太平記』に對する約要の批評としたいと思ひます。

私はまた、『平家』以前に出た枝葉の小さい軍記についても、もう少し委しく書きたいのでありました。例へば『陸奥話記』なる

武則遙拜二皇城一、誓二天地一言。臣既發二子第一應二將軍命一。志在レ立レ節、不レ顧レ殺レ身。若不二苟死一、必不二空生一。八幡三所照二臣中丹一。若惜二身命一不レ致二死力一者、必中二神鏑一先死矣。合軍攘レ臂一時激怒。今日有レ鳩翔二軍上一。將軍以下悉拜レ之。則赴二松山道以南、磐井郡中山大風澤一。翌日到二同郡萩馬場一。去二小松柵一五町有餘也。件柵者、是宗任叔父僧良照柵也。依三日次不レ宜幷及二晩景一、無二攻擊心一。而武貞頼貞等、先爲レ見二地勢一近到之間、歩兵放レ火燒二柵外宿廬一。於レ是城內奮呼、矢石

亂發。官軍合應、爭求二先登一。將軍命二武則一曰、明日之議俄乖、當時之戰已發。但兵待二機發一、不二必撰二日時一。故宋武帝不レ避二往亡一而功。好見二兵機一、可レ隨二早晚一矣。武則曰、官軍之怒猶如二水火一、其鋒不レ可レ當。用レ兵之機不レ過二此時一。則以二騎兵一圍二要害一、以二歩兵一攻二城柵一。件柵東南帶二深流之碧潭一、西北負二壁立之青巖一。歩騎共泥。然而兵士深江是則、大伴員季等、引二率敢死者二十餘人一、以レ劒鑿レ岸、枝レ鋒登レ巖、斬二壞柵下一、亂二入城內一、合レ力攻撃。城中擾亂、賊衆潰敗。

を取つて、之れを『今昔物語』卷二十五の

武則遙かに王城を拜して誓を立てゝ云はく、我れ既に子弟伴類を發して將軍の命に隨ふ、死なむ事を顧みず。願はくは八幡三所、我が丹誠を照らし給へ。我れ更に命を惜まずと。若干の軍此の言を聞いて、皆一時に勵心を發す。其の時に鳩軍の上に翔る。守以下悉く此を禮す。卽ち松山の道に趣いて、磐井の郡中山の大風澤に宿る。次の日其の郡の萩の馬場に至る。宗任が叔父良照、小松の楯を去ること五町餘り也。日竝宜しからず、竝に日晩れたるに依つて、責むることなし。武則が子共、彼の方の軍の勢を見んが爲めに近く至る間、歩兵等楯の外の宿屋を燒く。其の時に城の內騷ぎ呼んで、石を以て此れを打つ。爰に守武則に云はく、合戰明日と思ふと云へども、自然ら事亂れにたり。日を撰むべからずと。武則亦然也と云ふ。而るに深江の是則、大伴の員秀と

云ふ者、猛き兵二十餘人を具して、釼を以て岸を掘り、鉾を突いて巖に登つて、栖の下を斬り壞つて、城の内に亂れ入つて、釼を合はせて互に打ち合ひぬ。城の内亂れて人皆迷ふ。

に比較すると、二者の間に『將門記』對『今昔物語』と同じ關係のあつたことが明らかに知られます。思ふに漢文の和化、俗化、而して和化俗化したる漢文の讀下し式假名交り化、これが鎌倉の軍記文學が發生開展の爲めに通過した最も大きな關門の一つであつたので、多くの資料が之れを證據立てゝ居ります。私はかやうな方面の消息をも、更に委しく説明したいと思つたのでありましたが、大模様式な具體的説明を本位とする當座の目的の爲め、最も主要にして最も有力なる材料として、唯だ『將門記』と『今昔物語』とを擧げるに止めたのでありました。

私はまた『保元』、『平治』、『平家』、『盛衰記』、『太平記』、此の五大軍記以外及び以後の軍記、準軍記についても、一應の説明を試みたいと思ひました。例へば『曾我物語』、『義經記』、『承久軍物語』、『梅松論』、『吉野拾遺』の類から、降つては『應永記』、『應仁記』、『鎌倉大草紙』、『柴田退治記』等、『正續群書類從』の合戰部を賑はして居る百數十卷の小篇を經、『信長記』、『太閤記』、『甲越軍記』、『眞田三代記』等より、明治以後の『肉彈』、『此一戰』、『從征日記』、『村に還りて』等に至るまで、是等についても、愚見を發表したいつもりでありましたが、今は何事も心に任せません。唯だ念の爲めに

勝手な遠目大摑みの一口評を試みると、『太平記』以後明治以前の軍記は、槪ね『太平記』の弊を承けて、或るものは、地方々々に於ける一部の小競合を寫した、意氣の揚がらぬ斷片記錄となりました。或るものは、他の記錄の片隅に挿入されて、辛うじて餘喘を保つものとなりました。或るものは、賑やかに、面白く、出意表的にと、工夫して構成されたる奇謀勇戰の連續となりました。之れに對して、明治以後の戰爭描寫は、新なる文學意識の上に立つて、新らしき樣式を試み、新らしき生命を摑み得たかの觀がありますけれども、此の複雜な時代、戰爭否定の假裝平和時代の戰爭記錄に、戰爭が選まれたる男兒が一期の花を咲かす機會と信ぜられた『平家』時代の第一義的なる力と光とは、もう見出だされません。大雜把な批評ながら、私は部分的、介在的、奇構的、第二義的、此の四つの標語を以て、『太平記』以後の軍記、準軍記のおもなる特色を暗示することが出來るかと思ひます。

《軍記物語研究　をはり》

後講

平家物語の新研究

『平家物語』の新研究

一

『平家物語』は、成長した文學で、生れたまゝの文學ではない。變化した文學で、定形のある文學ではない。世に成長した文學、變化した文學は幾らもある、けれども『平家物語』のやうに成長し變化したのは少ないであらう。一說によれば、『平家』はもと三卷に書かれたもので、それが後に補足して六卷にされ、十二卷にされ、十三卷にされ、二十卷にされ、二十四卷にされ、三十六卷にされ、四十八卷にされたものだといふ。しかも啻に卷數や、見出や、題材の數量に於いて、變化し成長したばかりでなく、內容の性質までが夥しい變化を受けて、積極が消極にされ、單純が複雜にされ、背景が轉換され、趣味が更新され、地名、人名、神名までが思ひ切つて變へられたのが、數へきれぬ程多くある。『平家』の異本といふもので、今日迄に知られて居るのが、七十幾種からあるといふが、吾々は其の凡てに通じて、全く同じ文句の三行四行と續いたのを見ることが出來ぬであらう。私は初め冒頭

なる、

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。奢れる者久しからず、唯だ春の夜の夢の如し。猛き人も終には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。

といふ八句だけは、あらゆる異本に通じて同一であらうと思つて居たが、それすら「奢れる者」を「奢れる者も」、或ひは「奢れる人」とし、「猛き人」を「猛き者」としたもの、「唯だ」「偏に」の副詞を除き去つたものなどがあつて、全く同一とはいひ難いのであつた。

『平家物語』の文章は、或る人々からは、首尾に通じて立派な名文のやうに思はれて居るが、實は不純雜駁な磨きの足らぬ文章である。テニヲハが喰ひ違つて、照應の出來て居ない文句がある。前後の聯絡せぬ借用の挿み文句がある。實景を現前させる力の無い、月並な、抽象的、誇張的の文字がある。古語、新語、雅語、俗語、外國語、内國語、儀式語、通用語等、足並の揃はぬ言葉の隣接的に雜然と並べられてゐるのがある。また全體の仕組としては、年代順に目ぼしい出來事を並べて行つたといふだけ、其の本筋に似寄つた和漢の故事を、冗漫に並べたといふだけで、精選された材料を無駄なしに纏めた渾融無縫の妙味がない。で、一口に『平家』を稱して大叙事詩などといふ人があるものの、かういふ方面からは、とても『イリアッド』や、『オデッセー』や、『失樂園』などと並べらるべきものではな

いのである。

作者もわからず、冊數もきまらず、文章にも三行四行と續いて同じ所が無いといふ胡亂な作物、而も不純な雜駁な作物が、どうして七百年といふ長い間、我が國民の間に、飽かず愛誦されて來たのであらう。世々の學者文人に歎美され摸倣されて來たのであらう。其の文學としての多くの缺點を認める者の心をまでも引きつけて、無限の愛着を感じさせるのであらう。私は『平家』を讀み始めて、もう三十年からになる。特に英文平家物語の原材とすべき現代語の縮譯を試みるために、二年餘り（大正六七年の頃）特に此の作に親しんでからは、此の作の缺點を知ることが愈〻深くなつて來たが、之れと共に、之れを愛する念も亦愈〻深くなつて來るのを覺えた。何故であるか。此の作の如何なる點が、それ程に私の心を惹くのであるか。此の半抒情の小論文は、此の疑問に對する私の答である。

二

私の『平家物語』に愛着を感ずる第一は、徹底した悲哀感の現はれて居る點である。作の內容の隅々隈々にまで、無常の空氣の浸透して居る事である。歡喜成功の絕頂に於いて、衰滅の哀情の含まれて

居る事を、力強く底深く暗示した趣である。榮枯盛衰の早替はりする幾多の事實を前置にし下積にして、最後に日本全土を舞臺とした平家一族の滅亡を、大きく歌ひをさめた調子である。而して其の凡てに通じて、甘い、淋しい、美しい、人を醉はす味はひの現はれて居る事である。

『平家物語』が先づ吾等の心を淋しい興奮に誘ひ入れるのは、佛家の謂はゆる序説分なる「祇園精舍」の八句である。

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。奢れる者久しからず、唯だ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

『梁塵祕抄』や朗詠や宴曲あたりの駢麗式を襲蹈したものであらうが、=『梁塵祕抄』の法文歌に、「迦葉尊者の石のむろ、祇園精舍の鐘の聲、醍醐の山には佛法僧、鷄足山には法の聲。」といふのがある。『平家』の第一句は、恐らく是等の句に系統を引いて居るのであらう。= 祕抄の歌や朗詠宴曲などが、形式的抽象的で、內容が空虛なのとは違つて、是れには平家三十年の盛衰を含蓄して、靜かに十二卷の重疊した波瀾を喚び起こす豐かな味はひがある。此の深き悲哀に裏打された、花やかな序曲に導かれ、異國の趙高、王莽、朱异、祿山、本朝の將門、純友、義親、信賴を前驅として、新らしい舞臺に堂々と現はれ出でたのが、空前の奢れる者、猛き人、心も詞も及ばれぬ榮華を極めた、六波羅の入道

前太政大臣平朝臣清盛公である。彼れは忠盛の子として、はかなき中納言家に出入するのを名譽とする程の身分であつたが、保元の亂に、まづ其の大きな姿を認められ、つゞいて平治の亂に、競爭者の源氏を倒してからは、トン／＼拍子に出世して、やがて太政大臣從一位に至り、牛車輦車の宣旨を蒙つて、乘りながら宮中に出入するやうになつた。我が身の榮華ばかりでなく、一門も共に繁昌して、平族の公卿十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領衞府等六十餘人、知行の領地は三十餘箇國に跨つて、其の八人の女は、それ／″＼に、或ひは后となり、或ひは攝政、大臣、其の他の大官の內室となつた。彼れは勢に乘じて攝政基房を凌轢し、法皇を幽閉し、比叡の山法師を取りひしぎ、南都の大盧遮那佛を燒いた。かくして平家の榮華はその絕頂に達して、帝闕をも仙洞をも凌ぎ、「謀叛」といふ語が、いつの間にか「平家に叛く」といふ意味になり、剩へ皇室が平家を謀らせらるゝ企にまで適用されるやうになつた。

恐ろしい榮華である。平安朝四百年にわたる藤原氏の榮華を煎じつめても、斯うまではと疑はれる程の榮華であるが、しかも此の榮華の眞中に、衰滅哀愁の影が遠慮なく其の姿を見せ始めた。榮枯の激變は、第一に其の暗示の影を、白拍子妓王の上に見せた。妓王は二十一歲の美人である。彼女は入道相國の寵を一身に集めて、天下羨望の的となつた。而して此の恩寵が長へに續く事と思つて居ると、

其處に加賀生まれの佛といふ十六歳の白拍子が現はれて、入道に見參を乞うた。入道は怒つて追つ立てたが、やがて妓王の執成によつて、呼び返して一たび見ると、妓王の寵は忽ちにして佛に移つた。佛は其のまゝ西八條に引き留められて、妓王は直ちに御殿を追はれた。程經て再び召出だされたが、それは歌舞して佛を慰める爲めであつた。而してやがて都の住居を構はれ、命までが危うされ、遂に母と妹と共に、様(さま)をかへ世を捨てゝ、嵯峨の奥の山里に入つた。はかなき女性、しかも一遊女の身に起こつた小さい悲劇ではある。けれども、是れがやがて、院の御所に於いて、平家が木曾に見かへられ、木曾が義經に見かへられた運命と、何處が違はう。清盛が榮華幸運に醉うて無意識に仕散らかした遊戲三昧の中に、西八條の邸內の宴席の隅に起こつた一挿話の中に、平家の運命の縮圖が早くもあり〱と畫かれて居るのは、面白いではないか。而して前曲として斯様な小さな挿話を積み累ね積み重ねて、大厦倒壞の大悲曲を奏する此の物語の趣は、實に味はひても味ひ盡くせないではないか。

白拍子妓王に於いて、我が家の運命を暗示された清盛は、攝政基房の遭遇した、謂はゆる「殿下乘合(てんがののりあひ)」の悲喜劇に於いて、再び我が家の運命を暗示された。入道の孫、十三歳の資盛が、或る日鷹狩の歸途に、攝政基房の供揃を駈け破らうとして、圖らず恥辱を與へられた。入道は大きに怒つて亂暴な田舍侍を驅り集め、基房を參內の道に要して、今日を晴れと裝束した前驅隨身共を追つかけ追ひつめ、

散々に淩轢して、一々其の髻を切つた。殊に藤(とう)藏人大夫隆敎の髻を切る時には、「之れを汝の髻と思ふな、主の髻と思へ。」と言ひ含めて切り離し、基房の車の内へ弓の弭を突き入れて、簾をかなぐり落すなど、散々に恥かしめて六波羅に引き上げた。入道は大きに悦んで、「神妙！」と云つて褒めたといふ。作者は基房の哀れな樣子を寫して、

束帶の御袖にて、御淚を抑へさせ給ひつゝ、還御の儀式の淺ましさ、申すもなか〳〵おろかなり。大織冠淡海公の御事は、あげて申すに及ばず、忠仁公昭宣公より以來(このかた)、攝政關白の、かゝる御目に逢はせ給ふ事、未だ承り及ばず。

と云つて居る。供の者が十三歲の平家の子供の無禮を懲らしたのが種となつて、攝政關白が斯樣な凌辱に逢ふことでは、誠に鎌足、不比等、基經以來幾百年の藤原氏の積威も、すつかり地に落ちたといふべきであるが、是れは單に攝家藤原氏の事ではない。壇の浦以後の宗盛其の他が、是れよりも更に甚だしい凌辱を加へられて居るではないか。

　もとは法皇の殊寵を負ひ、驕奢をほしいまゝにして、世を世とも思はず、近きあたりの者からは、物も高く言はぬ程に怖れられ、剩へ平家を滅ぼさうとまで謀つたが、謀が現はれると、備前の兒島に流され、やがて吉備の中山有木(ありぎ)の別所に移されて、先づ毒をすゝめられ、その後二丈ばかりの崖の下

に菱を植ゑ、そこに突き落されて無殘な最期を遂げた新大納言成親卿の運命は、どうであつたか。もとは法勝寺の執行として、八十餘個所の庄務を司り、棟門平門の内に四五百人の所從眷屬に取圍まれて居たのが、一朝鬼界が島に流されて、腐れ魚に露命を繫ぎ、松の根方の枯葉の上に、骨皮の死屍を横たへた俊寛僧都の運命は、どうであつたか。奈良以降、傳敎以來の長き尊き歴史を有し、夥しい僧兵を擁して、王者にまで憚られたのが、堂塔を燒かれ、座主を殺されて、見る影もなく衰へた南都北嶺の運命は、どうであつたか。

平家の三十年が藤原氏四百年の盛衰を高調に縮寫して見せたやうに、平家三十年の運命を、僅か一年の間に、更に高調に縮寫して見せたのは、木曾義仲である。信濃を出で越後を靡けてから、燧、倶利伽羅、篠原と、疾風枯葉の勢に平家を追ひ捲つて、間もなく京都を占領した旭將軍が、忽ち宇治勢多に敗れて、粟津の深田に冷たい戰死を遂げたのは、まさしく平家の運命を縮寫したのではないか。一の谷、八島、壇の浦と、息もつがせず平家を追ひ撃ち攻め滅ぼした九郎義經が、一たび金洗澤に鎌倉入を拒まれてから、暫らく虎の尾を蹈む落人の身となつて、遂に奥州高館の露と消えたのは、平家滅亡の附錄として「壇の浦」と「大原御幸」「六代斬られ」との間の繫ぎとなるべきものではないか。

平家の一門が俄に榮え俄に枯れた目ざましい盛衰、而して榮枯に通じて暫しも華やかな趣味を捨て

なかつた美しい生活は、それだけでも立派な一篇の哀詩を成すべきものであらう。けれども此の大哀詩を成す主なる要素が、それと同じ性質の美しい小さい哀詩で、而して其等が基礎となつて、其の上に更に美しい、更に大きな哀詩を建立させた所に、更に深い味はひがあるやうに思はれる。國文學者の中には、或ひは『平家』は、清盛の榮華を中心とした前半と、平家の沒落を中心とした後半とに分けて見るべきもので、其處に『平家』の作者の非凡なる技倆が見られるといふ人もある。或ひは『平家』は、清盛を中心とした隆盛期と、義仲を中心とした流離期と、義經を中心とした滅亡期との三部に分けて見るべきもので、その中心人物の轉換する間を、寸分の隙もなく連絡せしめた所が、驚嘆に値するといふ人もある。けれども『平家』はもと、清盛の生立から壇の浦迄、委しく云へば忠盛の昇殿から「六代の被斬」迄を、ポツ〳〵と年代順に並べたといふだけのもので、其の間には隨分穴のあいた所、襤褸の下つた所、木に竹を接いだ所がある。『平家』が、或ひは雜駁な史料の結集と見られ、或ひは歴史たるには文學過ぎ、文學たるには歴史過ぎると云はれるのは此の爲めで、八坂本其の他の異本に見える「間」或は「あひ」と稱する所屬不明の部分などが、よく此の關係＝雜駁な材料を介在させた爲めに、詩となるべき折角の題材が、裂目なしの發展を妨げられて、渾然たる統一味を缺く樣になつた關係＝を説明して居るものである。それ故に、結構、布置、連絡、中心思想の開展などいふ點から見れば、

『平家』は頗る未熟粗笨なもので、寧ろその素人くさい無邪氣な書き方に、純樸な、無匠氣な、思無邪な味はひの現はれた貴さを賞玩すべきものであらう。斯様に『平家』には、折角の面白い物語が殺風景な機械的、事務的の叙述の挿入の爲めに、風致を壞された場合がいくらもある。けれども考へ様によつては、面白い物づくめの寄せ集めは、いかに巧みに配合されても、人工の見え透く厭味があり、それよりは見聞の儘を年代順に排列して、叙任の次第、年中行事、事務應答の書簡などを、サラ〳〵と並べて行く中に、折々、妓王妓女、有王島下り、倶利伽羅落し、扇の的、弓流しといふが如き、詩趣に富んだ物語に出會すといふ方が、平凡な野を越え里を過ぎては、たま〳〵山水の奇勝を見出だし、味噌汁澤庵の常食の間に、時々太牢醍醐の美味を賞するといふが如き自然味があつて、却つて讀者の心に落ちついた親和の感じを起こさせるであらう。もし又其の間に、一通りの記事はあつさりと書き流して、目ぼしい事件に逢着する毎に、力瘤を入れて入念に描寫するといふが如き印象的の工夫が加はれば、其の興味は更に一段と高まつて來るであらう。『平家』の筆致は此の筆致で、『平家』の興味は此の興味であると、私は思つて居るが、此の素樸で、自然で、無邪氣で、而も其の間に只事を疎寫し、詩趣のある事件を精叙するといふ工夫があり、其の上に稀有の時代に動かされた作者の同情が、美しく榮え美しく亡びた平家一門の榮枯物語を活かして、悲哀無常の感じを力強く暗示したといふ、

これが『平家物語』の吾等に與へる第一の面白味であると、私は思ふ。

三

茲に添へて言ひたいのは、清盛の女德子卽ち建禮門院の御出家御往生を寫した、五章から成る最後の「灌頂の卷」に就いてである。『平家物語』の中には、此の灌頂の卷を一團として、最後に加へて、別の一卷を立てたものと、此の卷の各章をば、前卷の中の適當なる所々に收めて、別に一卷を立てぬもののとの二種がある。此の卷の成立に就いて、從來二つの說があつた。一つは、灌頂の卷は本來結尾の一卷として書かれたので、當初から離れて一團を成してゐたといふのである。他の一つは、此の卷の各章は本來年月の順序により、それ〴〵前卷の中に收められてゐたのであつたが、此の女院の御出家に關する一團の記事が、琵琶の祕曲として重んぜられた所から、特に切り離して珍重されるやうになり、それが段々と補足される中に、おのづから獨立の一卷を成すやうになつて、遂に十二卷の外に獨立して、最後の一卷と見られるやうになつたといふのである。思ふに『平家』の原作者は、筆を忠盛の昇殿に起こして「六代の被斬」に收めたので、「灌頂の卷」に含まるゝ部分は、初めは無論それ〴〵「六

代被斬」の前の然るべき場所に置かれたのであらう。是れは今の所動かぬ事であらうと思はれる。

また「灌頂の巻」といふ名稱の意義についても、從來二つの説があつた。一つは「結緣灌頂說」とも云ふべきもので、此の巻が「女院の御出家」、「六道の沙汰」、「御往生」等の殊勝微妙なる物語により、讀者に無常を悟らせ、佛土を欣求させて、佛緣を結ばしめる力があるところから、灌頂と名づけたといふのである。一つは「授職灌頂說」ともいふべきもので、灌頂の名は無常を悟らせ佛緣を結ばしめるといふ宗教上の意味から來たのではない、唯だ此の女院に關した數章が、琵琶の祕曲になつて居るので、これが彈ければ琵琶の修業を完了して師家になれるといふ所から、職を授ける祕曲の巻といふ意味で名づけられたといふのである。委しい比較論は煩はしいからやめるが、思ふに最初は必ず授職灌頂の意味で、此の祕曲視された數章が、斯道卒業の試金石とされたのであらう。

以上は「灌頂の巻」の成立と語義とに關する大體の說明であるが、但し是れは在來の說を批判して、最初本來の意義を明らかにしたといふだけで、今後「灌頂」の意義を如何樣に取るべきか、「灌頂の巻」を如何なる形式に於いて保存すべきかといふ事は、自ら別の問題である。これら今後の問題については、私は「灌頂の巻」の意味をば、あくまでも結緣灌頂の意味に取るとにしたい。而して「灌頂の巻」をば、結尾獨立の別巻として、十二巻の後に据ゑたいと思つて居る。其の理由はかうである。

まづ「灌頂の巻」の位置から云へば、最初は無論、前巻の其處此處に散在してゐたので、獨立の別卷を成してゐたのではなかつたのであらう。けれども已に別卷を成して見ると、其處に一種の落着が出來、威嚴といふものが加はつて來る。殊にそれが、既成の巻々の其處此處から拔き取つて來たといふだけのものでなく、補足修正して、美しい連絡統一もあり、最終の卷としての重みもあるやうに改められ、また長い歲月を經て、多くの異本に襲用され、無數の人々に讀まれて來て見ると、書物の形の上にも、讀者の心の上にも、動かし難き一種の有機的の位置が定まつて來るのは自然の事である。思ふに斯樣な有機的の固定した位置が出來、一種の威嚴品位が出來たものを、漫りに復舊して、引き拔いたもとの穴に嵌めるといふのは、誠に氣の利かぬ事であらう。殊に已に別卷として出來上がつた跡について考へると、此の作の劈頭に「祇園精舍」のあれだけ重々しい、味はひの深い八句が据わつて居るのに對して、最後の「六代被斬」は、餘りに纖細くして結尾の振はない嫌ひがあるではないか。而して「六代被斬」の代はりに、此の「灌頂の巻」を最後に置けば、首尾相應じて、いかにも重々しく、味はひが深く落ちついて來るではないか。同じく後人のさかしらでも、延慶本の『平家物語』が、「右大將賴朝果報目出事」の一章を最後に据ゑた類ひは、餘りと云へば言語道斷の沙汰であるが、是れは位置轉換の加筆とは云ひながら、或る意味に於いては、原作にも優つた趣味を發揮したものである。

原作とは違つた追加だからとて、輕々しく動かすべきものではあるまい。

「灌頂の卷」は一種の祕曲で、平家琵琶卒業の試金石とされたものであるが、『平家』には尙ほ此の外に「小祕事」「大祕事」といふものがあつた。小祕事といふは「祇園精舍」、「延喜聖代」の二つで、大祕事といふは「宗論」、「劍の卷」、「鏡の卷」の三つである。此の中、「祇園精舍」だけは、甚深の意味を藏して劈頭に控へて居り、殊に意義、趣味、品位、文脈、あらゆる點から見て、拔差を許さぬからであらう。祕事とされながら、流布の讀み本のいづれにも揭げられて居るが、他の四つは音曲上の祕傳物として、すつかり本文から除き去られて居る。けれどもそれは音曲上だけの事で、『平家』の本筋から見れば、枝葉の添へ物で、決して重要なる意義のあるものではない。「延喜聖代」は賴朝の擧兵に因んで、醍醐帝の治世の難有さを書き入れたものである。「宗論」は維盛の高野詣に次いで、弘法大師が宗論に勝つた事を書き入れたものである。「劍の卷」、「鏡の卷」は、壇浦の合戰の後、內侍所の都入に因んで、三種の神器の中の神劍神鏡の功德を書き入れたものである。此の中で劍の卷は、引き離し敷衍して『太平記』にも載せられる事となつた。要するに、是等は別々に引き離して考へれば、重大な意義のあるものでもあらうが、『平家』の本筋から見ると、有つて益なく、無くして損のないものである。同じく祕事とは云はれながら、灌頂の卷が、其の價値に於いて、是等の四つの祕事と比較にならぬ事

は、これで明らかにわかるであらう。

次ぎに「灌頂の巻」の意味について考へると、最初は無論授職灌頂の意味で、卒業考試用の數章を集めたのであらうが、それが巧みに纏められて、歳月を經る間に、いつしか結緣の意味をも生じ、殊に「祇園精舍」の冒頭と照應し、十二卷に亙る榮枯の消息をも總括して、無常を敎へ往生を勸める微妙な文字に滿ちて居る所から、後には結緣の意味の方が重く視られるやうになつたのであらう。殊に此の卷の最後の一節に、

かくて女院は、空しう年月を送らせ給ふ程に、例ならぬ心地出來(いでき)させたまひて、打臥させたまひしが、日頃より思召し設けたる御事なれば、佛の御手(みて)に懸けられたりける、五色の絲をひかへつつ、南無西方極樂世界の敎主、彌陀如來、本願過ち給はずは、必ず引攝(いんぜふ)し給へと、御念佛ありしかば、……西に紫雲たなびき、異香室(いきやうしつ)に滿ちて、音樂空に聞こゆ。限りある御事なれば、建久二年二月中旬に、一期遂に終はらせ給ひけり。

といふ様な文句のあるのを見れば、此の一卷が結緣灌頂の意味に取られるのに、何の不思議もない。已に名實共に結緣の稱に相應はしき部分の出來た後であり、久しく此の意味に解釋されて來た後でもあり、また語り物の音樂として聞かれるよりは、寧ろ文學として廣く見らるゝ今日でもある。私は此

の巻に對して結縁の意味に重きをおくのに、少しの無理もないと考へる。

　無常悲哀の提唱に始まつた『平家』である。榮枯の目ざましく急轉した幾多の事實の連珠の上に、大厦倒壞の大哀音を歌つた『平家』である。其の結尾に於いて、生きながら六道の輪廻を見られた太政入道の女、安徳の母后が出家得道の大往生を寫した一卷によつて、淨縁を結ばしめる、此のやうな相應はしい、味はひの深い結構がないではあるまいか。

　『平家』の中には、一寸した言ひ廻はしの中に、何とも云はれぬ哀音を傳へて居る所がある。例へば齋藤別當實盛が篠原の合戰で討死した所に、

　昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻し、今の齋藤別當實盛は、其の名を北國の巷に揚ぐとかや。朽ちもせぬ空しき名のみ留めおきて、骸は越路の末の塵となるこそ哀れなれ。

と書いてある。普通ならば「功名を竹帛に垂れ」などと、勇ましい事をいふ所であらうが、「名が朽ちれば結句あきらめもつくであらうに、なまなか朽ちもせぬ名のみを殘して、大事の體を邊土場末の塵芥にして了ふとは、哀れな事だ！」とは、何といふ正直な、そして無慚な言ひ方であらう。

　『平家』には「哀れなれ」、「涙をはら〳〵と流いて」等の悲しい言葉が、無數に繰返されて居る。「哀れ也と云はずして哀れさを知らせるのが吾等の祕事だ。」と云つた、老近松の流儀には反して居るが、

是れも『平家』の作者の正直に無常に泣いた心持が、其のまゝ屢〻文字の上に現はれたのであらう。私は『平家』の「涙をはら〳〵と流いて」や、「哀れなれ」、「無慚なれ」が、必ずしも老近松の言外暗示の味はひに劣らないと思ふ者で、而して斯樣な點からも、悲哀無常の空氣が、此の作にこんもりと現はれて居るのを悅ぶ者である。

四

私が『平家物語』に對して第二に愛着を感ずるのは、時代の姿を美しく現はして居る點である。私は源平期の日本に三つの大きな時代相があつて、それが『保元』『平治』『平家』等の謂はゆる軍記物語に、面白く寫し出されて居ると考へて居る。三つの時代相の第一は、武力本位の時代となつて、新興の武人が自家の武力を自覺して來た事である。第二は、武力によつて天下を得た武人が、前代王朝の文明に魅入られて公卿文明の摸倣に滅びた回顧の悲劇である。第三は、戰爭があらゆる人事中の主位を占めるやうになつて來た事である。

保元平治の前後から世の中が武力本位に變はつて來た消息は、『平家』よりも『保元』『平治』の物語が、

よく説明して居る。平安朝のなかば以來、源平の武人等は段々に實力を備へて來た、けれども容易にそれを自覺しなかつた。彼等は柔弱無力なる藤原氏をば、選まれたる階級の雲上人として、昔ながらに尊敬してゐた。立派な實力のある自分等をば、昇殿の叶はぬのが當然の地下人として、公卿に侍るのが本領の「侍」として、甘んじて犬馬の役目を勤めてゐた。諺に隣の花が赤いといふ。彼等は自分の腰に活殺自在の大刀を横たへながら、公卿の手先に弄ぶ笏檜扇を羨んでゐたのである。諺に家の飯には心があるといふ。彼等は束帯衣冠の役にも立たる虛飾に見とれて、護身の要具の大切な甲冑を卑んで居たのである。滿仲がさうであつた。賴光、賴信、賴義、義家、爲義が、皆さうであつた。義朝にも賴政にも大分其の氣味があつた。かくして彼等は鎧袖一觸、容易に公卿殿上人を倒すべき武力を備へながら、久しく公卿殿上人の頤使に甘んじて居たので、保元前後に於ける武人對公卿の關係は、譬へば眠つた獅子が背上に雛人形を乘せて居たのにも比すべきものであつた。

やがて保元の亂が恐ろしい獅子の眠りを覺まし、同時に背上なる雛人形の眠りを覺ました。戰亂は新なる時代の新なる試驗器である。此の新なる試驗器に逢つて、人間の位附がどれ程に變はつて來たかは、傲岸なる左府賴長が、崇德上皇の御前に、無位無官の八郎爲朝を延いて謀を問うたのを見てもわかる。二十歳にも足らぬ八郎爲朝が、院の御前、左大臣の前をも憚らずして、傍若無人に廣言を吐

き散らしたのを見てもわかる。『保元物語』は記して居る。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つきれたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鈚打ちたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎黨に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破る事、吳子孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に聞こゆる爲朝見んとて擧りたまふ。

劍が笏を壓し、甲冑が束帶を壓し、武人が公卿を壓した樣子が、手に取るやうではないか。爲朝も初めは、御所は畏き所、大臣納言は尊い人々、而して昇殿は難有い御沙汰と思つてゐたであらう。而して多少は恐懼して神妙に首を垂れて居たであらうが、首を揚げると、賴長を始め、あらゆる人々が賴もしげに自分を仰いで居るではないか。而して畏くも上皇までが、御簾を隔てゝ其の中に居らせられるではないか。爲朝は意外の光景に愕然すると共に、もう天下は我が物だと感じたであらう。そして當時の新人たる武人等は、爲朝を通ほして一齊に其の眠れる眼を見開き、垂れたる首を揚げたであ

らう。實力に覺めた武人は、もう昨日の武人ではない、而して機會は機會を呼んで、打ちつゞく戰亂は、源平の武人を、九地の下より九天の上に引き上げた。

一方に於いて、落伍者の公卿殿上人が新時代の試驗器にかけて篩ひ落さるゝ慘憺さは、どうであつたか。

官軍雲霞の如く攻め來り候上、猛火既に御所に掩ひ候。今は叶はせ給ふべからず。急ぎ何方へも御開き候べしと申せば、左府は前後に迷ひて、只だ汝今度の命助けよとばかりぞ宣ひける。左大臣殿の御馬の尻には、四位少將乘りて抱き奉りけり。東の門より御出あつて、北白河を指して落ちさせ給ふ處に、何處よりか射たりけん、流矢一筋來つて、左大臣殿の御首の骨に立つ。成隆之れを拔いて捨てたりけれども、血の走る事、水彈を以て水を彈くに異ならず。（保元物語）

束帶に牙笏の揚々としてゐた人達が、前後に迷うて、命乞ひをして、馬に助け乘せられて、流矢にあたつて死ぬる。是れが賴長の跡を追うて繰返された多くの公卿殿上人の運命であつた。

平治の信賴も同じ運命に弄ばれた。

鯢波に驚きて、只今まで由々しく見えられつる信賴卿、顏色變はりて草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝戰ひて下りかねたり。[illegible]人なみ〳〵に馬に乘らんと引寄せさせたれども、肥りせめ

たる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心にも似も似ず、はやり切つたる逸物なれば、つと出でんつと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、かくやと覺ゆるばかりにて、乘りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、疾く召し候へとて押し上げたり。餘りにや押したりけん、弓手の方へ乘りこして、伏樣にどうと落つ。急ぎ引き起こして見れば、顏に砂ひしとつき、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝此の體を見て、日來は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したりなとて、日華門を打出でて郁芳門へ向はれければ、信賴も鼻血押し拭ひ、とかくして馬にかき乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に逢ふべしとも見えざりけり。(平治物語)

信賴は鵜の眞似をした烏で、吾等は彼れに於いて、新時代に目ざめて俄かに附燒刃の時世粧をした者の失敗を見ることが出來る。義朝は新舊の兩思想に二股をかけた武人で、吾等は彼れに於いて、舊思想に未練を殘した武人の迷夢が、すつかり覺めたのを見ることが出來る。蓋し新人と舊人との調和合體は容易に出來る事ではなかつた。それは保元に於ける賴長と爲朝との關係、平治に於ける信賴と義朝との關係が、よく證據立てゝ居るところである。『承久記』に、合戰がいよ〳〵京方の敗北と極つた時、京方の武將四人が、後鳥羽院に拜謁した時の樣子を、かう書いて居る。

十五日卯の刻四辻殿に參りて、秀康、胤義、盛綱、重忠こそ、最後の御供仕り候はんとて參りて候へと申しければ、一院(後鳥羽院)いかになるべき身とも思召さぬ所へ、四人參りたれば、いよいよ騷がせ給ひて、我れは武士向はば、手を合はせて、命ばかりをば乞はんと思召せども、汝等參りこもりて、防ぎ戰ふならば、なか〱惡かりなん。いづ方へも落ち行き候へ。さしもの奉公空しくなしつるこそ不便なれども、今は力及ばず。御所の近隣にも在るべからずと仰せ出だされければ、各〻の心の中いふもおろかなり。山田の次郎ばりこそ、されば何せんに參りけん、叶はぬもの故、一族も引きつるこそ口惜しけれとて、大音聲をあげて門をたゝき、日本第一の不覺人を知らずして浮沈みつる事の口惜しさよと、罵つて通るぞ甲斐もなき。

これは後年の事であるが、畏き王者との合體結托すら不可能なる事が、此の通りである。まして全く新らしい思想に立つ武人が、公卿殿上人と合體して何が出來よう。清盛が全く藤原氏を壓服して新政を布き、賴朝が公卿の一團を京都の別天地に祭り込んで、將軍政治を創めたのも、誠に餘儀なき事である。

五

武人の夢は覺めた。而して彼等の行くべき道は爲朝、義平、義朝等の先驅者によつて暗示された。溝が成り、水が到つて、もう船を待つばかりである。船が現はれた、大船が現はれた。平清盛がそれである。

『平家』の前半は、淸盛といふ巨人の、向うに前なき意志の勝利を歌つたものとも見られるが、同時に舊思想に對する新思想の壓迫、公卿に對する武人の挑戰とも見ることが出來る。武力主義の發揮は、早くも忠盛對公卿の「殿上闇討」の章に現はれた。而して容儀格式に誇る多數の公卿殿上人が、眇なる新米武人の木刀の銀箔に威かされた笑止の失敗と、「伊勢瓶子」の歌によつて女々しい仕返しをした陰險な態度とは、彼等がもはや實力に於いて武人の敵でない事を說明すると共に、彼等の男らしからぬ反抗が執念深く續けらるべき事を暗示してゐると云つてよい。

淸盛の代になつて始めて現はれた武力主義の發揮は、「殿下乘合」に於ける攝政基房凌礫の事件である。道德的にいへば、曲は無論淸盛にあつたであらう。けれども、薄暗がりを幸に、十三歲の弱者に加へた凌辱を、白日の下に堂々と仕返して、藤原氏の棟梁攝政松殿を取りひしいだ所は、また一種の痛快事と云つてよい。

淸盛が正面から押して行く武力主義の壓迫は、あらゆる方面に反抗を喚び起こした。やがて成親、

俊寛が起つた。後白河法皇が起たせられた。山、奈良が起つた。是等はいづれも舊思想の味方で、正面から力押しに進んで成功し得ぬ事を、裏手の權道によつて成就しようとしたものであるが、清盛は片端から之れを壓伏した。院に對し奉つては、内府重盛が理づめの諫言もあつて、さすがに手を弛めたが、宗法を笠に着る山や奈良に對しては、武道の威力を勇猛に發揮して、遂に伽藍堂塔をも、大佛をも、燒き拂ふ事を敢てした。

清盛が武力を發揮するについて最も始末に困つたのは、外にあらずして内にあつたであらう。攝關や、成親や、法皇や、山や、奈良よりも、寧ろ我が子の内府重盛であつたであらう。重盛は言行一致の賢者で、愛子で、而して上下敵味方の人望家である。其の赤心から出る理の詰んだ陰性、消極性の諫言は、どれ程陽性積極性の清盛の心を苦しめたであらう。彼れが火の樣な實行意志は、此の苦手の諫言に逢ふ毎に、理と情と根とに負けて、常に其の鋒を挫かれた。其の中に、幸か不幸か、此の苦手の壓迫が取り除かれた。清盛の情は最愛を喪つた悲みに泣きながらも、其の武人的の實行意志は猛然として再び活動を始めたが、最後に現はれた敵は、舊思想の流れを汲む無力優柔の公卿ではなくして、同じ武人の競爭者、武人の本領を自覺する點に於いて、彼れよりも更に強く、更に高く、更に純なる源頼朝であつた。

平家も源氏もひとしく新時代の子である。けれども平家の有つてゐた武人の魂は、大分軟弱な公卿道の感化を蒙つた。加之平家には淸盛を除いて武人の自覺に活きようとする者が幾らもない。源氏の有する武士魂は純にして强かつた。而して源氏の殆んど悉くが、鐵の如き自覺に立つて復讐の心に燃えて居る。平家はもはや源氏の敵ではない。

此の賴朝と雌雄を決しようといふ間際になつて、俄に入道淸盛が死んだ。奈良を燒いた佛罰だと云はれる、前代未聞の火の病に罹つて、而して

當家は保元平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも一天の君の御外戚として、丞相の位に至り、榮花已に子孫に殘す。今生の望みは、一事も思ひおく事なし。唯だ思ひおく事とては、兵衞佐賴朝が、首を見ざりつる事こそ、何よりも又本意なけれ。吾れ如何にも成りなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つべからず。急ぎ討手を下し、賴朝が首を刎ねて、我が墓の前に懸くべし。それぞ今生後生の孝養にて、あらんずるぞ。

といふ、いろ〳〵の意味に於いて、謂はゆる罪の深い遺言を殘して。

淸盛の憤死は平家盛衰の分水嶺となつて、是れより、平家は秋の夕日の釣瓶落しに沈み衰へた。淸盛に於いて我が國未曾有の「歡びの曲」を奏でた平家が、轉じて我が國未曾有の「哀の曲」を奏でねばな

らぬ運命とはなつたのである。

六

人事は多くは天である。源平の盛衰も其の一つで、一面から見れば、源氏も平家も、不測の運命に操られて、豫期せざる勝を勝ち、敗を敗けたのであらう。けれども成敗の跡について考へると、平家の衰へたにはいろ〳〵の原因がある。重盛といふ大黒柱を失つたのも其の一つであらう。皇室の信任を失つたのも其の一つであらう。利福權勢を一門で獨占したのも其の一つであらう。惡政によつて民心を失つたのも其の一つであらう。けれどもこゝにそれらのいづれにもまして重大な原因、殊に文學的に見て非常に面白く、これが爲めに『平家物語』の主なる美が成立つたとも思はれる重大な原因がある。外ではない、平家の一門が平安王朝の文明に見惚れ、武人の本領を忘れて、公卿の生活を摸倣した事である。

平家は淸盛に於いて天下を掌握した。而して一門の間で、朝廷の主なる顯職を占め、日本六十餘州の半ば以上を領し、女を后妃に容れ、畏くも外戚にまでなつて、宮闕にも仙洞にも優る榮華を極める

やうになつた。思ふ事は爲せる、爲せば必ず遂げられる。斯様な境遇にあつて誰れか武を練り兵を談ずる事を好まう。誰れか甲冑を着け劍戟をひらめかす生活を愛さう。治に居て亂を忘れずなどいふのは、苦い經驗に懲りた者か、前途に野心のある者か、若しくは超人間的な賢者かがする仕方なしの準備である。喉元過ぐれば熱さを忘れて、美味に向ひ、美的生活に赴く、これが人情ではないか。

平家の境遇はまさしく斯うであつた。而して平家の人達は、概して正直で單純で表裏の無い人達である。彼等は、泰平の世、敵の無い世界、極端に我儘の利く時代、平族でなければ人でないとまで云はれた時代に處して、氣の利かぬ武人生活に愛想をつかしたであらう。而して何がな之れに代はるべきものを求めて、すぐに前代の風流閑雅な公卿生活に目を留めたであらう。かくして彼等は腰に佩いた人斬庖刀を抛ち、身を蔽ふ窮屈な甲冑を脱ぎ捨て、相率ゐて、束帶、衣冠、詩歌、管絃の風流生活に赴いた。而してやがて新生活を手に入れて、烏帽子のため方、衣紋の畫き方に六波羅様をあみ出して、流行の魁をなすやうになり、詩歌管絃の藝術的風流道に於いても、藤原氏の名匠等と相伍して讓らぬやうになつた。彼等の公卿化、風流化、平安朝化は、『平家物語』の中に面白く寫されてゐる。治承四年の九月、賴朝の討手に向つた大將軍及び副將軍の維盛忠度を寫してはいふ。

大將軍小松權亮少將維盛は、生年二十三、容儀帶佩繪に畫くとも、筆も及び難し。重代の着背長

唐皮といふ鎧をば、唐櫃に入れて舁かせらる。路中には、赤地の錦の直垂に、萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乘り給へり。副將軍薩摩守忠度は、紺地の錦の直垂に、黑糸縅の鎧着て、黑き馬の太う逞しきに、沃懸地の鞍を置いて乘り給へり。馬鞍鎧兜弓箭太刀刀に至る迄、光輝く程に出立たれたれば、珍らしかりし見物なり。中にも副將軍忠度は、或る宮腹の女房の許へ通はれけるが、或る夜坐したりけるに、此の女房の局に、やんごとなき女房客人來て、小夜も漸う深け行くまで歸り給はず。忠度軒端に彳んで、扇を荒く使はれければ、彼の女房野もせに集く蟲の音よと、優に口ずさみ給へば、扇をやがて使ひやみてぞ歸られける。其の後坐したる夜、いつぞや何とて扇をば、使ひ止みしぞやと問はれければ、いさ姦しなど、聞こえ侍りし程に、さてこそ扇をば、使ひ止みては候ひしかとぞ申されける。其の後此の女房、薩摩守の許へ、小袖を一重遣はすとて、千里の名殘の惜しさに、一首の歌を書き添へて、おくられける。

東路の草葉をわけん袖よりも、たゝぬ袂の露ぞこぼるゝ。

薩摩守の返事に、

別路を何か歎かん越えて行く、關も昔の跡と思へば。（卷第五）

三萬餘騎を率ゐながら、富士川の水禽の羽音に驚いて、矢一つだに射ずして逃げ歸つた二人の將軍

の描寫であるが、之れを見ても、公卿の文明の摸倣が、どれ程彼等を文弱にしたかがわかる。同じ維盛が後に熊野に參詣した折に、都で彼れを見知つたといふ者の物語つた話に、

あの殿の未だ四位の少將なりし安元の春の頃、院の御所法住寺殿にて五十の御賀のありしに、父小松殿は、內大臣の左大將にて御座す。叔父宗盛卿は、大納言の右大將にて、階下に着座せられき。其の外三位中將知盛、頭中將重衡以下、一門の公卿殿上人、今日を晴れと時めき、垣代に立ち給ひし中より、此の三位中將殿、櫻の花を挿頭いて、青海波を舞うて、出でられたりしかば、露に媚びたる花の御姿、風に飜る舞の袖、地を照らし天も曜くばかりなり。女院より關白殿を御使にて、御衣をかけられしかば、父の大臣座を立ち、これを賜はつて、右の肩にかけ、院を拜し奉りたまふ。面目類ひ少なうぞ見えし。傍の殿上人も、いか許り羨ましうや思はれけん。內裏の女房達の中には、深山木の中の楊梅とこそ覺ゆれなんど、いはれ給ひし人ぞかし。(卷第十)

とある。維盛の優美な振舞が、どれほど時の人にめでられたか、父の重盛までがどれほど是れを面目と考へたか、內裏の女房達がどれほど之れに見惚れたか。平家の公達が翩翻として得意に宮中を立ちならした樣子が、手に取るやうではないか。

重衡が生捕となつて鎌倉に送られ、千手の前にもてなされて、琵琶朗詠の一夜を送つた翌くる朝、

頼朝と齋院次官親義とが、かういふ物語をしてゐる。

佐殿宣ひけるは、平家の人々は、此の二三箇年は、軍合戰の營みの外は、又他事あるまじきとこそ思ひしに、さても三位中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさみ、終夜立ち聞きつるに、優にやさしき人にて御座しけりと宣へば、親義申しけるは、誰れも昨夜承りたく候ひしかども、折節相勞る事の候て承らず候。此の後は常に立聞き候べし。平家は代々歌人才人達にて渡らせ給ひ候。先年あの人々を、花に喩へて候ひしには、此の三位中將殿をば、牡丹の花に喩へて候ひしかとぞ申しける。三位中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさみ、兵衞佐殿後迄も有難き事にぞ宣ひける。(卷第十)

重衡が風流道の堂奥に入つた事、平家の公達が殆んど悉く歌舞音曲の達人であつた事。而してそれが味方にも敵にも愛で羨まれた事がわかる。頼朝が生捕られ人の旅中のすさびを立聞までして、生涯の思出に愛で囃しながら、堅く武人の本領を持して、其の風流を倣ひもせず、倣はせもしなかつたのは、彼れが武人的政治家として、特に偉い所であらう。

壽永三年十月三日の日に、新帝の御禊の行幸があつて、九郎判官義經が先陣の供奉を承つた。『平家』の作者は其の樣子を寫して、かう云つて居る。

去々年先帝の御禊の行幸には、平家の内大臣宗盛公(内辨を)勤めらる。節下の幄屋について、前

に龍旗立てゝ、居給ひたりし氣色、冠際、袖のかゝり、表袴の裾までも、殊に勝れて見え給へり。其の外三位中將知盛、頭中將重衡以下、近衞の司、御綱に候はれしには、又立ち雙ぶ方も無かりしぞかし。今日は九郎大夫判官義經、先陣に供奉す。是れは木曾などには似ず、以ての外に京馴れたりしかども、平家の中の撰屑よりも猶ほ劣れり。（卷第十）

殿上の交はりをさへ嫌はれた者の子孫が、十年前後の念入な修業によつて、いかに生粹の公卿に成りすましたか、而してそれに比べて、東夷の源氏の最優者が、どれほど見劣りがしたかは、之れによつて窺はれる。而して風流道の練達、公卿化の程度に於いて、源氏の最優者が平家の中の撰屑にも劣つたやうに、武道の練達、軍事の駈引に於いて、平家の最優者が源氏の撰屑にも劣るらしくなつて來た事は、齋藤別當實盛が蒲原の野陣で維盛に答へた所を見ても想像される。

大將軍權亮少將維盛、東國の案內者とて、長井の齋藤別當實盛を召して、汝程の强弓精兵、八箇國には如何程あるぞと問ひ給へば、齋藤別當あざ笑つて、左候へば、君は實盛を大箭と思召され候にこそ。僅か十三束をこそ仕り候へ。實盛程射候ふ者は、八箇國には幾らも候。大箭と申す定の者の十五束に劣つて引くは候はず。弓の强さも健なる者の、五六人して張り候。加樣の精兵共が射候へば、鎧の二三領は容易う射徹し候。大名と申す定の者の、五百騎に劣つて持つは候はず。

馬に乘つて落つる道を知らず、惡所を馳すれど、馬を倒さず。軍は又親も討たれよ、子も討たれよ、死ぬれば乘り越え乘り越え戰ふ候。西國の軍と申すは、總べて其の儀候はず。親討たれぬれば引退き、佛事孝養し、忌明けて寄せ、子討たれぬれば、其の愁へ歎きとて、寄せ候はず。兵粮米盡きぬれば、春は田作り、秋刈り收めて寄せ、夏は暑しと厭ひ、冬は寒しと嫌ひ候。東國の軍と申すは、すべて其の儀候はず……これを聞く兵共、皆震ひ慄き合へりけり。(卷第五)

物語は正史でない。除外例はいづれにもあるであらう。けれども源平兩家の武人の間に、斯樣な相違を生じて來たのは、爭はれぬ事である。

かくして十餘年の歳月は、平家から武人の骨を拔いて、すッかり風流閑雅の大宮人を作り上げた。忠度の歌、經正の琵琶、重衡の朗詠、敦盛の笛、『平家』に擧ぐる所は、さまで多くはないが、是れは無論九牛の一毛で、彼等は相率ゐて其の亞流となつたのであらう。其處へ、親は子の、子は親の、屍骸を乘り越え躍り越えて戰ふといふ、謂はゆる「東夷北狄」が眞驀に寄せて來た。漁陽鼙鼓動レ地來、驚破霓裳羽衣曲。長恨歌の白氏の句は、まさしく木曾襲來を耳にした平家の心であつた。彼等はまづ敵の影を見ずして都を落ちた。都落の哀れさは言語に絶してゐた。「主上都落」、「維盛都落」、「聖主臨幸」、「忠度都落」、「經正都落」、「青山の沙汰」、「一門都落」、「福原落」。第七卷の後半を賑はした彼

等が都落の種々相は、いづれも人の袖を濕さしめるものであるが、同時に久しい間の修練に成つた彼等の美しい嗜みを、咄嗟の場合に現はして、我が人情史に一種の美觀を添へて居る。
木曾に追はれた平家は、程なく九郎義經に一の谷を追はれ、八島を奪はれて、やがて壇の浦の波の上に哀れな最期を遂げた。太政入道の妻二位尼が先達となり、入道の女建禮門院の生んだ安德天皇を抱き、三種の神器の二種を擁して。壽永四年三月の二十四日である。
何故の哀れな最期であらう。武人が公卿化した爲めである。もし「平家一門」といふ集合體に心といふものがあつたならば、言つたであらう。「我れは武人である。武人たる者が、何に迷うて公卿の眞似をばしたのであらう。滅びかけた前代の亡靈に乘憑られたばッかりに、あたら一門が此の海底の藻屑とはなるのだ！」と。平家は藤原氏に得たる所によつて亡びた。而して源氏は平家の失つた所を得て興つた。壇の浦に沈んだ平家の一門は、此の得喪關係の目醒めに、悵然として源氏の勃興を見送りつゝ、音もなく海底に沈んだのである。
「武人として興つた平家が公卿生活の摸倣に亡びた、回顧の悲劇の哀れな淋しい暗示的な味はひ」、私は此の無類な時代相の美しく現はれたのを、『平家物語』に於ける中心興味の最も重要なる一つと考へる。

七

新らしい時代相の第三は、あらゆる人事の中で、戰爭が主位を占めて來た事である。

保元を境として、日本の社會はすつかり其の外觀を改めた。中でも著しいのは、武人が社會の表舞臺に乘り出して來た事である。同時に戰爭が社會の視聽を集めて來た事である。武人の世は甲冑劍戟の世である。甲冑劍戟の最もよく用ゐられるのは戰爭である。武人の時代に戰爭の重んぜられるのは當然の事であらう。而して戰爭の重んぜられる世に軍記文學の榮えるのは同じく當然の事であらう。

我が從來の文學にも、戰爭を寫したものが全く無かつたではない。けれどもそれは、他と伍せしめ、或ひは他に屬せしめて簡單に記されただけで、戰爭のみを獨立させ、或ひは之れに主要なる地位を與へて委曲に描寫するといふ事は、未だ曾て無い事であつた。其のこれあるは鎌倉時代の軍記物語を以て初めとする。言ひ換へれば、戰爭は鎌倉の軍記に於いて始めて獨立した文學となつたので、而して軍記の中で面白く、最も優れたのは『平家物語』である。

軍記の軍物語には、武人描寫と戰爭描寫ともいふべき二つの部分がある。武人描寫は武人の裝束や

態度を寫したもので、概して靜的の部分である。戰爭描寫は實戰の經過を寫したもので、概して動的の部分である。武人の描寫の精しくなつた趣は、かうである。

足利が其の日の裝束には、朽葉の綾の直垂に、赤革縅の鎧着て、高角打つたる兜の緒を縮め、金作りの太刀を帶き、二十四指いたる切符の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、連錢蘆毛なる馬に、柏木にみゝづく打つたる、金覆輪の鞍置いてぞ乘つたりける。鐙踏張り立ち揚がり、大音聲を揚げて、昔朝敵將門を亡ぼして、勸賞蒙つて、名を後代に揚げたりし、俵藤太秀郷二十代の後胤、下野國の住人、足利太郎俊綱が子、又太郎忠綱、生年十七歳に罷成る。かやうに無官無位なる者の、宮に向ひ參らせて、弓を引き矢を放つ事は、天の恐れ少なからず候へども、但し弓も矢も、冥加の程も、平家の御上にこそ留まり候はめ。三位入道殿の御方に、我れと思はん人々は、寄合へや見參せんとて、平等院の門の中へ、攻め入り攻め入り戰ひけり、（卷第四）

『古事記』や、『日本紀』や、『萬葉集』や、『今昔物語』に見えた、武人や戰爭の描寫とは比較にならぬ、委しい活き〳〵したものとなつて來た。それが平安朝文學に於ける束帶衣冠や、五衣や、御遊などの、單調な生ぬるい描寫に饜いた時人に刮目させた趣が想像される。

戰爭描寫の趣はかうである。

薩摩守は聞こゆる熊野育ちの大力、究竟の早業にておはしければ、六彌太を摑うで、惡い奴が、御方ぞと云はゞいはせよかしとて、六彌太を捕つて引き寄せ、馬の上にて二刀、落ち付く所で一刀、三刀迄こそ突かれけれ。二刀は鎧の上なれば、透らず、一刀は內兜へ突き入れられたりけれども、薄手なれば死なざりけるを、取つて押へて首を搔かんとし給ふ所に、六彌太が童、後れ馳せに馳せ來て、急ぎ馬より飛んで下り、討刀を拔いて、薩摩守の右の肘を、臂の本よりふつと打ち落す。薩摩守今はかうとや思はれけん、暫し退け最後の十念唱へんとて、六彌太を摑うで、弓丈ばかりぞ投げ退けらる。其の後西に向ひ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と宣ひも果てねば、六彌太後ろより寄り、薩摩守の首を取る。好い首討ち奉つたりとは思へども、名をば誰れとも知らざりけるが、箙に結附けられたる文を取つて見ければ、「旅宿花」といふ題にて、歌をぞ一首詠まれたる。

行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵のあるじならまし。

忠度と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてげれ。（卷第九）

戰の經過を素直に、細かに、そして面白く活き〳〵と書いた趣、殊に『曾我物語』や『義經記』などに見るが如き、やゝこしいを粉飾を附けず、『太平記』に見るが如き、潤ひのない勝負の記事にならずし

て、しんみりとした情味を美しく湛へて居るところ、これが『平家』特得の味はひである。東國の荒夷の武に勇んだ趣と、風流で鍛へ上げた平家の武將の悠揚たる態度との對照も、此の作の特色を面白く說明して居るものである。

『平家』の戰爭描寫の面白味は、一面、戰の種々相を豐かに見せた所にある。殆んど日本全土にわたる戰である。山の戰がある、川の戰がある、海の戰がある。晝の戰、夜の戰、晴の戰、嵐の戰がある。遭遇戰がある、强襲戰がある。山攻め、寺攻め、橋合戰がある。殊に折々は、選まれたる武者の一騎討、負次勝負(なけつぎ)があつて、其の間に美しく勝ち美しく負けた幾多の插話があり、扇の的、錣引、弓流し、遠矢、いろ〳〵の風流がある。義經對平家の戰だけでも、一の谷から八島、壇の浦にかけて、時、所、人の上に、それ〴〵無數の變化があり、單に壇の浦に於ける平家末期の光景だけを見ても、兩家の武人が弓矢太刀薙刀で、尋常に勝敗生死する外に、幼帝を抱いて水に赴く二衣(ふたつぎぬ)の老尼があり、波の上に吉野龍田の景色を現ずる五衣(いつゝぎぬ)緋の袴があり、二領の鎧を重ね、錨をかづいて波に沈む大童があり、大手をひろげて、舟から舟に敵將を追ふ勇士があり、三十人力の勇者二人を小脇にかゝへて海に入る猛將がある。而して是等の光景は、勇ましさ、哀れさは其のまゝにして、春の霞のやうな美しい趣味の裡に罩(こ)められ、其の上に、無常必滅の寂しい調子に裏づけられて居る。これが平家の戰爭描寫に於け

る特別なる面白味の一つであらう。

又一方から見れば、『平家』の戰爭描寫の面白味は、唯だ新興武人の面目を委しく書き、實戰の經過を生き〳〵と寫したといふよりは、寧ろ落伍者の公卿殿上人と武人とを並べて、新舊時代思想の推移を寫した味はひ、及び、前者の風流韻事と後者の戰場馳驅の生活とを併せ寫した味はひにあるであらう。要するに戰爭描寫が委しく活き〳〵となつたといふ所に、『平家』特得の趣味のある事は爭はれぬことである。

武力本位、回顧の悲劇、戰爭主位、此の三つの時代相の面白く寫し出だされたこと、私が『平家』に特別なる愛着を感ずる第二の因由はこゝにある。

八

次ぎに私は『平家物語』の組織に就いて考へて見たいと思ふ。茲に組織といふのは、三卷、六卷、十二卷、二十卷といふが如き冊分けや、或ひは『平家』を「世盛り」と「落目」との前後二段に分け、若しくは清盛中心の全盛期と、義仲中心の流離期と、義經中心の衰滅期との三段に分けるといふが如き、結

構上の分け方をいふのではない。唯だ『平家』が年代順に目ぼしい事實をコロ〳〵並べにした、あの並べ方について、その由來を考へて見たいといふのである。あの折角の眞珠を藁切れで繋いだやうな、覺束ない氣の毒な繋ぎ方、あの不思議な文段組織法の我が文學史上に於ける地位を考へて見たいといふのである。

私は先きに『平家』は文學たるには歷史過ぎ、歷史たるには文學過ぎる作であると云つた。『平家』は見様によつては、空想仕立の編年史料集とも云はるべきものである。最初に祇園精舍の大趣意暗示の序說分を揭げて、最後に「灌頂の卷」を置いた所などを見ると、いかさま一貫の趣意によつて事件の自然に開展した跡を寫し、材料を精選して無駄も隙もなく磨き上げたもののやうにも見えるが、精しく調べると、隨分と無駄があり、隙間があつて、連絡がつかず、統一の成立たぬ所があるのみならず、乾燥な事務的の事實を並べ、枝葉の類話を數多く插んで、其の多きを誇つて居るらしい所があるのを見ると、連絡や統一を論ずるのが、そも〳〵野暮の至りで、作者は唯だ史料も多く擧げよう、故事も多く取り入れよう、其の中で琵琶に合はせるに相應はしい所は、念入りに面白く書き綴つて見よう位に、漫然と考へて筆を取つたものらしくも思はれる。殊に「六代被斬」が最後の章であつたとすると、大分尻窄(すぼ)まりの輕いたものになつて、「祇園精舍」も全篇を支配する威力を失ひ、十二卷に充ちた面白

い記事も、大分力抜けがするやうに見えて來る。漢文の方は暫らく問はぬとしても、已に二三百年前にあれほど纒まつた『竹取』があり、『落窪』、『源氏』、『狭衣』があつたのに、部分的にはあれだけに書く力のある『平家』の作者が、どうして、全體としては、あの様に統一味、渾融味、無縫一體味を缺いた雜然たる物を書いたのであらうか。

私は『平家』を愛しながらも、屢〻かういふ事を考へた。想ふにこれは深い仔細のある事で、國文學史發展の系統上、どうしてもあの様にならざるを得なかつたのであらうと思はれる。

すべて事物が發達するには、三段の順序を取るのが普通である。茲に物があれば、之れに反對する第二者が現はれる。而して第二者が現はれると、今度は必ず二者の調和が現じて來る。例へば、歐化説が出ると、之れに對して國粹保存論が起こる、續いて彼我の長短を相補ふ調和論が起こるといふやうなわけで、かうして事物が進歩したり退歩したりするのであるが、我が古代文學の推移も、まさしくさうであつた。紀記の昔は暫らく措く。平安朝の初めに盛んであつたのは漢文で、代表作として四角な漢字で史實をポツ／＼並べに書いた六國史（の中の五部）が出來たが、次ぎの時代には丸い假名で思ひ切つた想像を書いた、組織のある假名の物語、例へば『源氏物語』などが出來た。其の次ぎに假名で事實を書いた組織のある『大鏡』、『榮華』の出來るのは天命當然の約束といふべきであらう。次ぎに

丸い柔らかい假名と四角な堅い漢字と、昔風の雅言と今の俗語との合體した文章で、眞事虛事打交つた傳說珍話を斷片的に書き並べた『今昔物語』の出來るのは、更に天命當然の約束といふべきであらう。而して更に次ぎの時代になり、此の和漢古今いろ〳〵な言葉の打混つた文體に磨きをかけて、公卿時代、武家時代の過渡期に起こつた源平の盛衰を寫した軍記物の出來るのは、誠に初めから誂へたやうな文運の進み方と云はねばならぬ。

『平家物語』の文體は、斯樣な歷史變遷の段階を經て當然に出來たのであるが、尙ほ例のコロ〳〵並べに近い文段組織の由來について考へると、『今昔物語』一味の前代の文學が、和漢天竺の無連絡な傳說珍話を斷片的に書き並べた、其の系統を引いて居るので、唯だその題材が自然に連絡した源平盛衰の事柄であつたので、斷片式に近い敍述ながらも、とにかくあれだけの連絡統一が出來上つたのであらう。又その作者が『今昔』の作者に比べて、遙かに優れた技倆を有ち、內容に對しても遙かに深い同情を有つてゐたので、とにかくあれ程までに人を動かす一種の名文とはなつたのであらう。要するに『平家物語』は組織の上から見て、（少なくとも組織の上から見ては）完全なものではないが、それは文學史上かくの如き當然の約束から出來たのである。

序ながら、此の點から見た『平家』以後の國文學の發展を概觀すると、『平家』が長年月に亙つた多く

の事實を簡單に、ばら〳〵に並べ寫したのに對して、『義經記』、『曾我物語』等は、一部少數の事實を取つて委しく寫すといふ方に進んで來た。御伽草子、淨瑠璃等は、更に題材を狹く限つて委しく寫す方に進んで來た。而して近松門左衞門の世話物に至つては、更に〳〵其の方面に步を進めて、一町一村に起こつた一日二日の間の簡單な事實を捉へて、之れに深き人生の意義を寓する事になり、是に至つて始めて、アリストートル等のやかましい三一致の說にも合ひ、イプセン其の他の近代劇などにも比ぶべきものが出來るやうになつた。歷史に飛躍斷絕はない。『平家』は『今昔』と『義經記』淨瑠璃との間に出でて、當然に其の橋掛りの役目を勤めたのである。

私は組織結構の上から見て『平家』を、少しもえらい作とは思はぬ。『平家』のえらいのは組織以外の多くの點にあり、而してそれらは組織よりも遙かに尊い、價値のあるものである。

九

ロンドンの大英博物館に、西曆一五九二年（文祿元年）に、我が肥前の天草で出版された羅馬字綴の『平家物語』（Feiqe Monogatari）がある。而して不干ハビアン（Fucan Fabian. 禪宗より耶蘇敎に入つ

た日本人）の名で書いた其の書の序文の中に、次ぎのやうな文句がある。

然れば言葉を學びがてらに、日域の往事を弔ふべき書これ多しと雖も、就中叡山の住侶、文才に名高き玄恵法印の製作、平家物語に若くはあらじと思ひ、之れを選んで書寫せんと欲するに臨んで、又我が師宣ふは、今此の平家をば、書物の如くにせず、兩人相對して雜談をなすが如く、言葉の弖爾波をも書寫せよとなり。

西洋人が日本の往事を弔ふべき書物が數ある中で、『平家物語』が第一だと云つたのは、どういふ理由であらうか。思ふに其の理由の第一は、鎌倉以來長く我が國の標準道德となつた武士道が其の中に具體的に描かれてゐるからであらう。原始的武士道の消息、殊に古き公卿道と新らしき武人思想とが衝突し、交流し、調和して、新らしき道德武士道の生まれ出でた具體的の消息が、其の中に讀まれるからであらう。誠に源平時代は我が古代に於ける最も激烈なる思想回轉期で、保元より承久に至る迄の數十年間は、新道德產出の陣痛期ともいふべきものであつた。一方では藤原氏が政權を擅まにしてゐる。一方では皇室が其の政權の回收を謀らせられる。而して武人が其の間に立つて兩方からの引張凧になる。此の三方の關係があやに絡んで、三方凡てが、君臣、父子、兄弟、叔姪、睨み合ひ殺し合つて、血で血を洗ふ爭鬪をつゞける中に、いつしか濁つたものの湧きかへる醱酵作用がやんで、こゝ

に武士道といふ新道德が生まれ出でた。かやうな未曾有稀有の時代、國民が激しき試錬に逢つて、腹の底の善惡美醜兩面を赤裸々にさらけ出した時代、雜多の思想が亂れ合つて趨歸する所を知らなかつた時代は、外國人が日本人を知る材料として、また後世の日本人が昔の日本人を知り味はへる材料として、いかにもお誂ひの面白いものであらうが、同じ波瀾の中に浮沈して居た當時の人が、之れを寫すのは、(たとひ多少の年月が經つたにせよ)容易ならぬ事であつたであらう。殊に多感の詩人が同情の筆を揮ふに當たつては、行爲の善惡の判じ方、同情の向け方に嘸かし困つた事であらう。法皇が御正しいか淸盛が正しくないか、平家が善いか南都北嶺が惡いか、德大寺殿が賢いか成親俊寛が愚かであるか、木曾が惡いか賴朝が惡いか、義經が直きか梶原が曲れるか。是れは容易に判斷し得る事ではない。けれども何等かの判斷を下さなければ同情の寄せやうがなく、同情を寄せねば生命のある活きた描寫が出來ぬわけであるが、元來『平家』の作者は、如何なる思想に立脚して、如何なる人物の如何なる行爲に同情したのであらうか。

之れについて從來の國文學者は、多く、『平家』の作者は比叡奈良に同情して平家に反感を持つて居た、淸盛を憎んで重盛に同情した、義經に同情して木曾や梶原に反感を持つてゐた、强者を抑へて弱者を揚げたなど云つて居るが、私は必ずしもさうではなかつたやうに考へる。思ふに『平家』の作者は

一つの主義によつて人物行爲を是非する事をせず、或る先入の標準により人々のあらゆる行爲に好惡の情を寄せる事をせずして、寧ろ穩かな常識と、素直な心と、公平無私なる、同時に變化自在なる同情とを以て、あらゆる事實に對したのであらう。此の心持があつたればこそ、彼れは、佛法を重んぜぬ點から見て平家の叡山攻(やまぜめ)を譏りながら、同時に念佛救靈の本領を忘れ俗事に狂奔する點から見て、同じ山の僧徒を嘲つたのではないか。此の同じ心を以て、卑劣な野心を遂げようとしてもがき廻る成親を譏りながら、配流の哀れな境遇に同情しては一字一涙の筆を惜まなかつたのではないか。初めは僧侶の癖に不信心なる點から俊寛を責めながら、荒磯島に見捨てられ、有王に最後を見取られる哀れさに打たれては、我れ知らず萬斛の涙を灑いだのではないか。彼れは父を思ひ家を憂ふる至孝の心に同情して、小松内府が死を祈り醫藥を却けた行爲を稱しつゝ、同時に先見の明と後世を助からうとする殊勝な心掛とに同情して、家を見捨て國を見限つた宋朝金渡の寄附行爲をも稱してゐる。淨海の我儘に對しては、さすがに折々皮肉の厭味を言つて居るが、同時に其の男らしい積極的の仕事振を痛快とする氣味がないでもない。殊に木曾義仲などに對しては、兵を起こした時、北國で勝軍を續けた時、猫間中納言を嘲つた時、法皇の御所を燒討する時、宇治勢多に敗れて粟津に討死する時と、其の時々によつて、同情の寄せ方が猫の目の樣に變はつて居る。何の爲めであらう。私は『平家』の作者が狹

い勝手な獨斷的の標準を立てゝ對象に臨まずして、子供のやうな素直な心、公平無私な、而して善いと思へば直ぐに寄せられ、惡いと思へば猶豫なく離れ去る敏感な同情とを持つて、あらゆる對象に臨んだからであると思ふのである。

之れについて一つ面白いのは『平家』に於ける敬語の使ひ方である。『平家』に於ける敬語の使用は大分不規律なものであり、又異本によつてそれ〴〵に違つて居るので、一概にいふことは出來ぬが、概していふと、同じ人に對する作者の同情の去來に從つて、敬語が或ひは附けられ、或ひは除かれるといふ傾きがある。試みに流布本によつて、此の點から見た木曾義仲の例を引いて見よう。

其の頃信濃國に、木曾次郎義仲といふ源氏ありと聞こえけり。彼れは故帶刀先生義方が次男なり。……やう〳〵長大するまゝに、容儀帶佩人に勝れ、心も雙びなく剛なりけり。力の强さ、弓箭打物取つては、都て上古の、田村、利仁、餘五將軍、致頼、保昌、先祖頼光、義家朝臣といふとも、これにはいかでか勝るべきとぞ人申しける。常は乳母の仲三に具せられて、都へ上り平家の振舞有樣どもをも、能く〳〵見窺ひけり。木曾或る時、乳母兼遠を呼うで、そも〳〵兵衛佐頼朝は、東八箇國を討ち隨へて、東海道より攻め上り、平家を追ひ落さんとすなり。義仲も東山北陸兩道を隨へて、今一日も先に、平家を滅ぼして、たとへば日本國に、二人の將軍と仰がれんと、思ふ

は如何にと宣へば、兼遠大きに畏り悦うで、その料にこそ、君をば此の二十餘年まで、養育し奉つて候へ。かやうに仰せらるゝこそ、八幡殿の御末とも覺えさせましませとて、やがて謀叛を企つ。（卷第六）

初めは唯だ木曾義仲といふ一個の武人として平叙して來たので、敬語を用ゐずに「剛なりけり」「見窺ひけり」と、只事に書きなして來たが、隻手を振つて平家を滅ぼし將軍にならうといふ、殊勝な氣高い志に對しては、書く者自ら興奮し、文法上の格を破つて、「宣へば」とは云つたのであらう。

名高い「木曾願書」には、かう書いてある。

木曾殿宣ひけるは、平家は大勢で有んなれば、軍は定めて懸合の軍にてぞあらんずらん。懸合の軍といふは、勢の多少による事なれば、大勢かさに懸けて、取りこめられては叶ふべからず。……木曾殿國の案内者を召して、あれをば何くと申すぞ、如何なる神を崇め奉つたるぞと宣へば、あれこそ八幡にて渡らせ給ひ候へ、所もやがて八幡の御領で候と申す。木曾殿斜ならずに悦び、手書に具せられたりける、大夫房覺明を召して、義仲こそ何となう寄すると思ひたれば、幸に新八幡の御寶前に近づき奉つて、合戰を既に遂げんとすれ。さらんに取つては、且うは後代の爲め、且うは當時の祈禱の爲めに、願書を一筆書いて參らせうと思ふは如何にと宣へば、覺明此の儀尤

も然るべう候とて、馬より下りて書かんとす。覺明が其の日の爲體、褐の直垂に黑糸縅の鎧着て、黑漆の太刀を帯き、二十四差いたる黑緄の矢負ひ、塗籠籐の弓脇に挾み、冑をば脱いで高紐に懸け、箙の方立より小硯疊紙取り出だし、木曾殿の御前に畏つて願書を書く。あつぱれ文武二道の達者哉とぞ見えたりける。(卷第七)

五萬餘騎の大將軍で、而も平家の大軍と合戰を始めようといふ間際に、偶然氏神の鳥居を見出だして願書を書く所である。是非とも「木曾殿」でなければならず、「宣ふ」、「御前」でなければならぬ所であらう。

「猫間」は、義仲が院の御信任を失ひ、其の田舍振のむくつけき起居振舞が、公卿殿上人の物笑になつた折の記事である。

公卿も殿上人も笑壺に入らせ御座し、如何なれば兵衞佐(賴朝)は、かうこそゆゝしうおはせしか。當時都の守護して候はれける、木曾義仲は、似も似ず惡しかりけり。色白う眉目は好い男にてありけれども、立居の振舞の無骨さ、物言ひたる詞續きの頑なる事限りなし。……其の頃猫間中納言光高卿といふ人ありけり。木曾に宣ひ合はすべき事あつて、坐したりけるを、郎黨共猫間殿の入らせ給ひて候と言ひければ、木曾大きに笑うて、猫は人に對面するかとぞ言ひける。是れは猫

間中納言殿とて、公卿にて渡らせ給ひ候と言ひければ、さらばとて對面す。木曾猫間殿とは、え言はいで、猫殿の食時に、まればれわいたに、(稀々わしたるに)物よそへとぞ言ひける、中納言殿いかでか唯今さる御事のおはすべきと宣へども、木曾何をも新しき物をば、無鹽といふぞと心得て、無鹽の平茸爰にあり、疾う〳〵と急がす。根井小彌太配膳す。田舍合子の極めて大きに、凹かりけるに、飢堆うよそひ、御菜三種して、平茸の汁にてまゐらせたり。木曾が前にも同じ體にて、据ゑたりけり。木曾箸取つて食す。中納言は餘りに合子のいぶせさに、召さざりければ、木曾きたなうな思ひ給ひそ、それは義仲が精進合子で候ぞ、とう〳〵と進むる間、中納言殿召さでもさすが、惡かりなんとや思はれけん、箸取つて召す由して、さし置かれたりければ、木曾大きに笑つて、猫殿は小食にておはすよ。聞こゆる猫おろし、し給ひたり。搔い給へ搔い給へやとぞ責めたりける。(卷第八)

田舍樣の不作法が嘲笑の種となれば、天下を震撼した旭將軍も、すッかり扱き下されて、半個の敬語をも惠まれぬ事となつた。これは作者が滑稽味を添へる爲めに、可笑しげに書き下げたのでもあらうが、主なる原因は、やはり、作者の同情が木曾を離れて、文章も自然に輕視平叙の態度に變はつて來たのであらう。

さる程に木曾は法住寺合戰に打勝つて、法皇主上を押籠めまゐらせ、公卿殿上人四十九人の官職を停めて、其の後の方策を評議した。其の折の木曾は、かう書かれてゐる。

> 其の日又木曾左馬頭、家の子郎等召し集めて、評定す。抑、義仲一天の君に向ひ參らせて、軍には打勝ちぬ。主上にやならまし、法皇にやなるべき。法皇に成らうと思へども、法師に成らんも、をかしかるべし。主上に成らうと思へども、童にならんも然るべからず。よし〳〵さらば關白に成らうと言ひければ、手書に具せられたりける、大夫房覺明進み出でて、關白には大織冠の御末、執柄家の君達たちこそ成らせ給へ、殿は源氏にて渡らせ給へば、それこそ叶ひ候まじとぞ申しける。さらばとて院の御厩別當に押成つて、丹波國をぞ知行しける。院の御出家あれば法皇と申し、主上の未だ御元服なき程は、御童形にてまし〳〵けるを、知らざりけるこそうたてけれ。（巻第八）

院の御所を燒き、叡山の座主、三井寺の長吏を討つて後の木曾である。此の作者から呼び捨ての取扱を受けるのは、當然の事であらう。けれども此の同じ木曾が、一朝落人となつて、討死する哀れな幕になると、作者の同情は忽ちに恢復されて、「木曾殿」「宣ふ」の敬語が、繰返して惜氣もなく與へられる。

> 木曾は長坂を經て、丹波路へとも聞こゆ、龍華越に懸つて、又北國へとも聞こえけり。かゝりし

かども、今井が行方の覺束なさに、取つて返して勢多の方へぞ落ち行き給ふ。今井四郎兼平も、八百餘騎にて勢田を堅めたりけるが、五十騎ばかりに打ちなされ、旗をば卷かせて持たせつゝ、主人の行方の覺束なさに、都の方へ上る程に、大津の打出濱にて、木曾殿に行き逢ひ奉る。中一町ばかりより、互にそれと見知つて、主從駒を早めて寄り合うたり。木曾殿今井が手を把つて宣ひけるは、義仲六條河原にて、如何にも成るべかりしかども、汝が行方の覺束なさに、多くの敵に後ろを見せて、是れ迄遁れたるは如何にと宣へば、今井四郎御諚誠に忝く候。兼平も勢田にて討死仕るべう候ひしかども、御行方の覺束なさに、是れ迄遁れ參つて候と申しければ、木曾殿扨は契は未だ朽ちせざりけり。義仲が勢山林に馳せ散つて、此の邊にも控へたるらんぞ。汝が旗上げさせよと宣へば、卷いて持たせたる今井が旗差上げたり。これを見つけて、京より落つる勢ともなく、又勢田より參る者ともなく、馳せ集まつて程なく三百餘騎ばかりに成り給ひぬ。木曾殿斜ならずに悦うで、「此の勢にては最後の軍、一軍などかせざるべき。あれに時雨うて見ゆるは、誰が手やらん。」「甲斐の一條次郎殿の御手とこそ承つて候へ。」「勢如何程あるらん。」「六千餘騎と聞こえ候。」「扨は互によい敵同じう死ぬる共、大勢の中へ懸け入り、よい敵に逢うてこそ、討死をもせめ。」とて、眞先にぞ進み給ふ、木曾殿其の日の裝束には、赤地の錦の直垂に、唐綾縅

の鎧着て、いか物作りの太刀を帶き、鍬形打つたる兜の緒を縮め、・・・（卷第九）

落人の哀れな境遇である。殊には年來の郎黨にはからず邂逅ひ、三百騎の寡兵を以て、六千騎の大軍の中へ懸け入らうといふ武將の意氣地の、凜然と現はれた所である。「木曾」が「木曾殿」になり、「行き逢ひ奉る」、「進み給ふ」になるのに、何の不思議があらう。扨木曾の最期はどう寫されて居るか。

木曾殿は只だ一騎、粟津の松原へ駈け給ふ。頃は正月二十一日、入相ばかりの事なるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知らずして馬を颯と打ち入れたれば、馬の首も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども〳〵動かず、かゝりしかども今井が行方の覺束なさに、振仰のき給ふ所を、相摸國の住人、三浦の石田次郎爲久、追懸り能引いてひやうど放つ。木曾殿内甲を射させ、痛手なれば、甲の眞甲を馬の頭に押當てゝ俯し給ふ所を、石田が郎黨二人落ち合ひて、既に御首をば賜はりけり。（卷第九）

最後の敬語は、作者の素直な同情が最もよく現はれたものであらう。是れが『平家』の作者が、木曾義仲の境遇や行爲の變はるに從つて、態度を變へ、敬語を加除した趣の大體であるが、作者の敬語使用は概して、此の方針であつた樣に見える。本來、態度の一貫、敬語の一致は、文法家のやかましく敎へる所である。もし或る人に對して一たび敬語を使へば、首尾に通じて「し給ふ」、「のたまふ」、「あ

らせらる」と云はねばならぬ。最初に只言で呼び捨てにすれば、最後まで呼び捨てにせねばならぬ。これが文法上の通則であるが、非常特別の場合には、此の法格を破つて却つて成功することもある。例へば相手に對する心持が變つた場合には、態度も詞遣も自然に改まるべき筈で、英のシェークスピヤの如きは、よく此の心理を捉へて、今迄 you（貴方様）と呼びかけて居た人に、忽ち thou（手前）と呼びかへさせて、一段の效果を收めてゐる所が澤山ある。我が近松の如きも此の呼吸を會得して、今迄「乘せて給べなう」と、敬語で哀願させてゐたのが、もう乘せぬと極まつて癪に障つて來ると、忽ち調子を變へて、「乘せ居れ」と罵らせる類の工夫を施して居る。思ふに『平家』の作者も、斯樣な心理の機微を會得して、有意にか無意にか、とにかく斯樣な敬語の加除をも試みたのであらう。斯樣に『平家』の作者の同情が、依估贔屓なく案外廣く寄せられて居るのを見ると、『平家』の作者は、文章の術に於いてのみならず、人間描寫の心構に於いても、一種の非凡な天分を持つてゐた樣に思はれる。

然らば『平家』の作者が創作の心理はどうであつたか。私は考へる。彼れは第一に平家の榮枯の目ざましさに心打たれ、新思想醱酵期に競ひ起こつた慘劇に魄を駭かされて、何よりもまづ無常悲哀の世相を歌はうと志したであらう。初めは平家本位、榮枯本位、趣味本位の題材を精選して、無駄なしに書き整へようとしたが、段々書き進む中に、省く方よりは擧げ盡くす方に興味を感じて、事務的の事

實や枝葉の類話をも、賑やかに並べる樣になつたのであらう。或る時は武人が主從金鐵の契に感じて、弓取生活の描寫に力を入れたであらう。或る時は公卿殿上人の風雅な嗜みに感じ入つて、彼等が花月風流の生活に同情の筆を揮つたであらう。滿身の活動性に刺戟されて、無遠慮に横車を押す頑父にも、道を思ひ君父を憂へて死を祈る孝子にも、性情境遇の必然を思うて、同樣に同情したであらう。恐ろしい者の機嫌を取つて官位を進まうとする者にも、目の上の瘤を押しのけて取つて代はらうとする者にも、同樣に憫みを垂れたであらう。都を落つる者にも、都に留まる者にも、勇んで戰に赴く者にも、戰を避け家を捨てゝ、女にもつれ、山に入り、水に赴く者にも、臥薪嘗膽して仇を狙ふ者にも、綺麗にあきらめて墨染の衣を着る者にも、厚薄の差別はありながら、兎に角同情を寄せたであらう。よく〳〵の惡行に對しては、呪詛の詞を浴びせかけた場合があり、又時折は「うたてけれ」、「罪深うは聞こえし」などいふ輕い非難の言を加へた事もあるが、概しては同情の態度を以て萬事を溫かく書いて居るやうに見える。『平家』は成長した文學で、數人乃至數十人の手に掛かつたものであらうから、全體に通じて斯樣な論をするのは容易ならぬ事であるが、私は流布本を中心にして、大體斯樣に言ふ事が出來ると考へる。

十

『平家物語』の異本の比較、作者及び成立年代の考證等に關しては、已に山田孝雄博士の精密周到な研究がある。私は之れを繰返したくない。唯だ諸先輩の考證に、私の貧しい研究を取り添へて考へると、『平家』は最初、信濃前司行長の筆に成つたもので、それが葉室時長、吉田資經、源光行、憲耀法師、願教法印、菅原爲長、其の他いろ〳〵の人の手によつて次第に加筆されたのであらう。出來の年代は順德天皇の建保の初年（一八七三、平家滅亡後二十九年目、實朝の將軍就職より十一年目）頃から承久の初年に至るまでの八九年間に、最初の作が出來、それから後深草天皇の建長の初年に至る三十年ばかりの間に、おもなる異本が出來たのであらう。卷數は初め三冊に試みられ、次第に材料を追加して、六冊、十二冊、十三冊、二十冊、二十四冊、三十六冊にされ、遂に『盛衰記』の四十八冊にまでなつたのであらう。文章は無論、語り本として、扇拍子に合はせ、或ひは琵琶に合はせるやうに作られた物であらうが、琵琶に合はせて語る方の正本として用ゐられたのは、ホンの少數で、異本の大多數は、既存の作を其のまゝに見ゆるす雅量もなく、全く新に創作する自信もなき小文才、他人の作を

おとなしく見て居るには才が有り過ぎ、新たに作るには才の足らぬ添削屋によつて、讀む爲めの慰み本として、屋上屋と追加されたのであらう。

是等の事に就いては、今のところ何人も絕對的の斷言が出來ぬ事でもあり、一切說明を略するつもりであるが、『平家』出來の年代について、新に考へついた事の二三を添へると、第一は「先帝御入水」其の他に於ける「先帝」の稱である、下關あたりでは、安德天皇の御陵の祭禮を、今でも「先帝祭」と云つて居る位で、「先帝」の名は、或る方面では安德天皇の永久獨占に歸した樣になつて居るが、本來「先帝」の稱は、次ぎの御門の御代御一代の間にのみ用ゐらるべき語である。さすれば安德天皇を先帝と稱するのは、嚴密にいへば後鳥羽天皇の御代だけ、假りに院政本位に考へても、後鳥羽院が實權を握らせられた順德天皇の御代、承久の亂までに限らるべき筈で、是れが『平家』の原作が、遲くとも承久以前に出來た證據の一つになるであらうと思はれる。「先帝御入水」の章で、流布本に「主上」とある所を、八坂本には「先帝」「先帝」と繰返して書いて居るが、是れは原作に「先帝」とあつたのが、承久以後の讀者の耳にをかしく聞こえるので、「主上」と改めたのではなからうか。

第二は卷第十、重衡の「海道下」の中に、西行法師の「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさ夜の中山」の歌をふまへて、

佐夜の中山にかゝり給ふにも、また越ゆべしとも覺えねば、いとゞ哀れの數添ひて、袂ぞいたく
濡れまさる。

と書いてある事である。西行は之れを文治頃に詠んだので、それを數年前の壽永に於ける重衡が海道下りの記事に引くのは、一種の時代錯誤であるが、八坂本に此の佐夜の中山の一鎖が全く無いのを見ると、流布本の此の文は、或ひは西行のこの歌が人口に膾炙するやうになつてから追加されたのであらう。(或ひは反對に時代錯誤に氣がついて削つたのであるかも知れぬ。) 而して新古今集が元久二年(一八六五) に編纂された事を考へると、此の事が、薄弱ながら少なくとも流布本系統の『平家』が、建永(一八六六) 承元(一八六七) の後に出來た傍證の一つになるであらうと思はれる。

第三は安元の大火、治承の旋風(つじかぜ)、元暦の地震等を記した此の物語の文章が、同じ事實を寫した『方丈記』の文章と符節を合はせて居る事の與へる暗示である。『平家』と『方丈記』とに於ける是等の記事の局部的一致は、無論暗合ではあるまい。然らばいづれが本で、いづれが借用の繼綴(つぎはぎ)かといふに、『平家』を原文として『方丈記』を其の剽竊と見る藤岡博士一流の說もあるけれども、私は、文脈聯接の自然といふ點から見、又『方丈記』は、想と文とがよく調和して、きりッと纏まつて居るのに、『平家』の方には、餘處から引き拔いて來た文句を處々にちりばめたといふ氣味があり、又『平家』の異本が、

『方丈記』の違つた部分を、別々に引き拔いて來た痕跡のあるのを見て、たしかに『方丈記』が本で、『平家』が借用のつぎはぎをしたものだと信じて居る。かやうに『方丈記』が『平家』よりも前に出來たものとし、而してそれが長明の自記に從つて、順德天皇の建曆二年の三月頃に出來たものであるとすると、『平家』の成立（少なくとも『方丈記』と同じ文句を含んでゐる『平家』の成立）は、早くとも建保の元年以後に降らねばならぬであらう。私は之れを『平家』成立年代の最上限を劃すべき最も有力なる要件の一であると考へる。

『平家物語』の成立に關する最もおもなる說を並べて見ると、まづ後鳥羽院の御時に、信濃前司行長が書いたといふ『徒然草』の兼好法師の說や、備中國の讀書家小野本太が、卷五なる青侍の夢物語によつて、藤原將軍の時代に出來たと說いたといふ、菅茶山が『筆のすさみ』の說を始めとして、文覺が後鳥羽院を毬杖冠者と惡口した事を記した文學が、同じ帝の御代に行はれる筈がないといふ說、承久御謀叛の事まで書いてあるのを見れば、承久以後に出來たのであらうといふ說、叡山の住侶玄惠法印の作といふ天草本『平家物語』の序文の說、其の他行長、時長、憲耀、願敎、爲長、資經、光行、時忠、景清などいふ作文者に關係させて見る成立說等であるが、之れに愚案の先帝號の說、西行の歌の說、及び『方丈記』との比較說等を加へて考へて見ると、『平家』の成立年代は、極廣く見れば、後鳥羽天

皇の御代の建久の末年から後深草天皇の建長の初年にわたる約六十年の間にあつたであらう。もう少し年代を限れば、頼朝が死し、六代が斬られたといふ土御門天皇の正治元年の少し後から承久の亂の前後迄の二十數年間に出來たとも見られるであらう。更に狹く年代を限れば、『方丈記』が出來た後の建保の初年から承久の亂前後の約十年間に出來たとも見られるであらう。更に狹く限れば、藤原將軍の事の少しも暗示されてゐない異本の存在によつて、『平家』の最も古い一本は、建保から承久の亂前までの數年の內に出來たとも見られるであらう。かやうな理由によつて、私は『平家物語』の初めに出來たのは、建保の初年から承久までの間で、其の後、後深草天皇の建長までの間に、おもなる異本が出來たのであらうと考へるのである。

十一

最後に私は、『平家』の異本に於ける文章の違(ちが)ひ振(ぶり)について一言したいと思ふ。異本に於ける卷數の伸縮、見出や項目の加除、特別なる章段の拔差、他の書物から借りて來た文句の挿入等については、已に委しい研究も現はれて居るが、私の謂はゆる異本比較はさういふ類ひのものではない、唯だ或る

部分々々に於ける文章の違ひ方について、それが如何にして、如何なる心持で改められたかを推測し、而して是等の異本の異文は此のまゝに放つておくべきものか、或ひは何等かの整理を施すべきものかについて、愚考を述べて見たいと思ふのである。

清少納言は『枕の草子』の中に、「わろきものは」と題して、

物語こそ、惡しう書きなどすれば、いひ甲斐なく、作り人さへいとほしけれ。「なほす」「定本(ぢやうほん)のまゝ」など書きつけたる、いと口惜し。

といふ事を言つて居る。其の意味は、昔は書物の印刷出版などいふ事がめッたになく、多くは傳寫して讀んでゐたので、その書き寫す人が、原作者の文章に拙い所があると、寫し序(ついで)に添削して、そして其の添削した部分の肩に、細字で「直ス」などと書き入れ、これは自分の直したのだが、一筆の入れ加減で、大分引立つて來たらうなど云つて、誇る人もあるといふ事であらう。「定本ノマヽ」は、原作の文章が怪しかつたり拙かつたりした場合に、是れは自分の寫し誤りでも、加筆の結果でもない、原文の通りであるぞ、と云ふ事を、肩書の細字でことわるといふのであらう。實際かういふ物好の天狗文章家が多い爲めに、古文に澤山の異本といふものが出來て、後世の眞面目な研究家が少なからぬ迷惑を蒙つて居るのであるが、『平家』もやはり、かういふ文章家の手にかゝり、勝手に添削し拔差按排され

て、遂に三冊から四十八冊にまで引き伸ばされたのである。そして今では、どれが本で、どれが直しか、どれが加へたのか、どれが減らしたのかさへ、大方は解らぬやうになつたのである。云はゞ行長が原文を書いて、時長、資經、光長、憲耀、顯敎などいふ人達が大手を入れ、他の無數の小文章家が少しづつ無數に手を入れた、外傷無數の附箋だらけ、膏藥だらけのもの、そしてそれが木版、活字版として、事もなげに美しく裝はれたもの、是れが吾々の現に見る『平家物語』であると云つてもよいのであらう。

左に部分々々の文句の違ひ方に就いて、代表的の例を擧げて見たいと思ふが、其の前に、『平家』の文章が、必ずしも立派に整つた名文ではない、少なくとも『源氏物語』や、『枕の草子』や、韓柳歐蘇の作が名文と云はれると同じ意味で、名文と云はるべきものではないといふ事を證據立てる爲めに、試みに冒頭の一節を引いて見る。

遠く異朝を問(とぶ)らふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主先皇(せんくわう)の政にも從はず、樂みを極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者共なり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親(ぎしん)、平治の信頼(しんらい)、これらは奢れる事も猛き心も、皆取々なりしかども、間近くは、六波

羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しゝ人の有樣、傳へ承るこそ、心も詞も及ばれね。

文句を刈り省いて脈絡だけを現はすと、「支那を見ると、趙高等は樂みを極め民の憂へを知らなかつたので亡びた者である。日本を見ると、將門等は奢る事も、猛しい事も取々であつたが、目の前では淸盛公の有樣を聞くと、心も詞も及ばぬ。」といふ事になるが、これでは照應を缺いた辻褄の合はぬ文であらう。(こゝは文脈丈を整へれば、「異朝では、趙高王莽等が樂みを極め惡政を施したので遂に亡びた。本朝では、將門、純友等が奢を極め威權を振つたものの、皆亡びて果敢なき最期を遂げて居る。榮華を極めた例は和漢に多いけれども、淸盛に及ぶ者がない。哀れな最期を遂げた例も古今に多いが、平家ほどに急轉直下のめざましい衰滅振を見せたものはない。」と、かうあるべき所で、作者の心も多分さうであつたのであらう。)而してかういふ整はぬ文章は、いろ〳〵な異本の各部分に通じて、擧げつくされぬ程澤山あるが、引例はわざと之れだけに止める。

異本の異文について、まづ簡單な例から擧げて見よう。流布本卷第一、淸盛が十四五の禿童を京の町々に放つて、平家の惡口をいふ者を搜させたといふ事を、それ〳〵の異本に、かう書いてある。

入道相國の謀に、十四五六の童を、三百人すぐつて、髮を禿に切りまはし、赤き直垂を着せて、召使はれけるが、京中にみち〳〵て往反しけり。(流布本)

入道の謀にて、我が一門の上を譏り云ふ者を尋ね聞かんとて、十四五若しくは十七八ばかりなる童を、髮を首の廻りよりそぎつゝ、赤き帷子をきせ、黑き袴を着せて、二三百人ばかり召使はれければ、京中に充滿して往反しけり。（長門本）

入道の計らひにて、十四五若しくは十六七ばかりなる童部（わらんべ）の髮を頸の廻（まはり）に切りつゝ、三百人召使はれけり。（源平盛衰記）

これは察するに、流布本の「十四五六の童を三百人」といふのが原形で、それを長門本は、子供らしく見えさへすれば、實際の年齡には拘はる必要がなく、人數も必ずしも三百人と限るべき道理がない、といふ見地から、採用の年齡を廣くして、「十四五若しくは十七八」とし、人數をも曖昧に「二三百人」とはしたのであらう。而して『盛衰記』は、十八歲ではちと過ぎる、人數はやはり三百人と限る方がよいといふ見地から、折衷して、年を「十四五若しくは十六七」とし、人數をば「三百人」に引き戻したのであらう。或ひは最初の原形は更に簡單で、たゞ「十四五」或は「十五六」とあつたのを、「十四五六」としたものでもあらうか。處々に見える軍勢の數の桁ちがひや、最後の六代の斬られた年を、流布本に三十餘歲とし、長門本に三十六歲とし、八坂本に二十八歲とし、盛衰記には書きあらはさずして暗示したのも、同じやうな心構から出て來た差異であらうと思はれる。

『平家』の異本の文章の違ひ振は、凡そかういふ調子で、こんな事にまで目角を立てゝ、競つて入れ筆をしたのだから堪らない。清少納言が「直ス」の肩書を嫌つたのも、無理の無い事である。

新大納言成親が流されて備前の兒島に着いた所をば、三四種の異本それぐに、かう書いてある。

備前の兒島に漕ぎよせて、民の家の淺ましげなる柴の庵に入れ奉る。島の習ひ、後ろは山、前は海、磯の松風、波の音、いづれも哀れは盡きせず。(流布本卷第二)

鯛の浦といふ所の、淺ましげなる柴の庵に置き奉る。是れやこの賤が住むなる埴生の小屋もこれなるらん。島のならひ、後ろは山、前は磯なれば、岸うつ波の音、松吹く風、あはれいづれも盡きざりけり。(八坂本)

後は山、前は磯なれば、松にこたふる嵐の聲、岩にくだくる浪の音、浦に友よぶ濱千鳥、潮路にさわたるかもめ、たまたまさし入るものとては、都にて眺めし月の光ぞ、面がはりせずすみまさりける。(長門本)

民の家の怪しげなるに居ゑおき奉る。彼所は後ろは山、前は磯、岸うつ波は瀝々として音幽かに、松吹く風は蕭々として物さびし。さらぬだに旅のうき寢は悲しきに、汗に爭ふ淚の色、耳驚かす波の音、いとど哀れぞ増りける。(盛衰記)

流布本は西鶴に見るやうなポツ切れの斷叙式に、簡古な味を見せて居るが、恐らく是れが原形であつたのであらう。八坂本はそれをなだらかに續けて、のんびりと優美な味を見せて居るが、文品は一段下つて居る。長門本、盛衰記の作者は、前の二つを藥籠中に收めて、東關紀行式、馬琴式の對句がさね、或ひは半漢半和の駢麗式文體に天晴れの才藻を見せたつもりであるらしいが、文品は更に〳〵下つて居る。平家の作者の一人に數へられる源光行などの加筆が、跡を留めたのでもあらうか。

巻第三「有王島下り」の一節、有王が俊寛に導かれて俊寛の棲處(すみか)に行つた所を、流布本にはかう書いて居る。

僧都これにて何事をも言はばやとは思へども、いざ我家(わがや)へと宣へば、有王あの御有様にても、家をも持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸けまゐらせ、敎に隨つて行く程に、松の一村ある中(なか)に、より竹を柱とし、蘆を結(ゆ)ひ、桁梁に渡し、上にも下にも、松の葉をひしと取り懸けたれば、雨風たまるべうも見えず。

隨分曖昧な文章で、これでは此の光景の印象が讀者の心に浮かびやうがあるまい。二三を拾つても、「松の一むら」といふは、松林の事か、松の數本群り立つた所の事か、曖昧である。「竹を柱とし」は、意味は解るが、折角松林の中に居りながら、松の幹を利用せずに竹を柱とするのは變な事で、讀者に

不安を感じさせるであらう。「より竹」は、流れ寄つた竹のことか、縒れ〳〵のヘナクナした細い竹の事か、これも曖昧の嫌ひがある。「蘆を結ひ」も、長さを加へる爲めに續いだ事か、太さを加へる爲めに束ねた事か、不精確である。「上にも下にも松の葉をひしと取りかけたれば」とは、どういふ事であらう。屋根の表にも裏にも松の葉を附けたといふ事か。さすれば裏に附けるのは、不自然でむづかしい事であらう。或ひは「下にも」は地べたの床の事かとも思はれるが、地べたに松を敷いてはチク〳〵して肌に痛いわけである。かう考へると、是れは實景を思ひ浮かべやうのない、非寫實的、非印象的の文である。私は飜譯を試みて、かういふ難所に遭ふ毎に、數種の異本を參照して見たが、いづれかの異本に、必ず之れを修正して、自然的に、寫實式に、印象的に、道理の聞こえるやうに改めてあるのを見出だした。此の部分を「長門本」には斯う書いて居る。

見れば松の四五本ある下に、竹二本寄せかけて、上には草の枯葉、寄せ來たる藻屑を、ひしと取りかけたり。雲の通ひ路雨風もたまるべくもなし。下には物もしかず、砂を掘りくぼめて、よろづの木葉をかきおきたり。内に入りて臥し給ひたれば、足は外にさし出でたり。京のわらはの犬の家とて作りたるは猶ほまだし。目もあてられず無慚なりともおろかなり。

「松の四五本」とあれば、もう松林と紛れる氣遣がない。(「松の一村」は、本來松林の意味ではなく、

數本、十數本の群立を指して居るのであるが、やはり紛らはしい嫌ひがある。澁川玄耳氏は、其の『新譯平家物語』の中で、こゝをば「松林の中に竹を柱とし、蘆を桁にわたして、其の上に松葉を覆せてある。」と譯して居るが、かう譯してよければ誠に手輕な事である。）四五本の群立ならば必ず、斜めに伸びて居るであらう。從つてそれを利用して竹を寄せかけるのは、極めて自然の事である。雨防ぎの料として屋根の上に載せるには、針葉の細い短い松葉よりは、幅が廣く長く連つた草の枯葉や藻屑の方が適當であらう。下に敷くものも、松葉よりは「よろづの木の葉」の方が勝つて居るわけである。又足が外に出ると云へば、大きさの見當も、凡そつくであらう。斯うすれば、此の家の印象も大體浮かむわけで、察するに、長門本の作者は、流布本の、理が聞こえず、實景を思ひ浮かべ得ぬ書き方に不滿を感じて、斯樣な改作を試みたのであらうと思はれるが、斯樣な點から見ても、長門本や『盛衰記』が、「流布本の『平家』より後に出た事が明らかであると私は思ふ。

十二

前なる成親、俊寛が配所の記事を評した所でも、已にそれらに見える文章の相違が、流布本が先づ

出來て、長門本や『盛衰記』が之れに次いだ事を暗示してゐるらしいと云つたが、此の種の暗示を與へてゐる文章は、其の他にも少なからず見えてゐる。例へば巻第一、「殿下乘合」の冒頭の文句の如きがそれで、流布本にはかう書いてある。

さる程に嘉應元年七月十六日、一院（後白河上皇）御出家あり。御出家の後も、萬機の政を、知ろしめされければ、院内分くかたなし。院中に召使はれける、公卿殿上人、上下の北面に至る迄、官位俸祿皆身に餘るばかりなり。されども人の心の習ひにて、猶ほ飽き足らで、あつぱれ其の人の失せたらば、其の國はあきなん、其の人の亡びたらば、其の官にはなりなんなど、疎からぬどちは、寄り合ひ寄り合ひさゝやきけり。一院も内々仰せなりけるは、昔より代々の朝敵を、平げたる者多しと云へども、未だかやうの事はなし。貞盛秀卿が、將門を討ち、頼義が貞任宗任を滅ぼし、義家が武衡家衡を攻めたりしにも、勸賞行はれしこと、纔か受領には過ぎざりき。今清盛が、かく心のまゝに、振舞ふことこそ然るべからね。

一體に覺束ない文章であるが、殊に曖昧なのは點を打つたあたりで、假りに之れを前後に二分して見ると、まづ初めに「院内分くかたなし」といへば、「法皇の御所も、今上の御所も、全く御同様で、御勢力に少しの違ひもない、」といふのであるから、それならば、内方、即ち今上方も、院方と同様、官

位俸祿身に餘るべき筈で、特に「院中に召使はれたる公卿殿上人云々」とことわる必要が無いわけであらう。要するに、此處は院政時代に於ける院方の壓倒的勢力を寫したところで、「上皇が薙髮して法皇とならせられても、御勢力はもと通りで、お蔭で院方一同が依然として榮華に誇つてゐた。」と書けば、それで澤山なところであるが、そこへ「院内分く方なし」といふ、餘計な文句が入つた爲めに、無用の關係が生じて來て、意味が曖昧になつたのである。之れに對する異文で、最も要を得て居るのは八坂本で、同書に此處を左の如く改めて居るのは、多分此の點に氣がついたからであらう。

御出家の後も尙ほ萬機の御政を知ろし召されければ、院に侍らはれける公卿殿上人や、上下の北面に至るまで、官位俸祿身に餘りたり。

而して又之れを流布本と對照すれば、少なくとも此の部分だけについては、八坂本の後出を疑ひ得ぬであらうと思はれる。

次ぎに後の部分について見ると、「人の心の習ひにて、猶ほあき足らで、あつぱれ其の人の失せたらば、其の國はあきなん……」といふのは、其のまゝに釋くと、「隴を得て蜀を望むは一般の人情で、彼等は眼前の榮華に飽き足らずして、誰れにても死ねよかし、我れこそ其の後がまにすわらうと考へた。」といふことで、其の失せ滅ぶる者が、何氏の誰れたるかを問はぬ一般的叙述であるが、それでは

「一院も」の「も」は全く前後を繋ぐ連接の意義を失ひ、從つて、次ぎの法皇が清盛の我儘を憤らせらるゝ文句が、すつかり孤立して番離(つがひばな)れしたものとなるであらう。要するに此處は、院中の公卿達が、平家の一族が國をも官をも獨占して居るのを嫉み惡んで、哀れ平族の誰れかが死ねよかしと、待ち望んだといふ事、而して法皇も亦、同じやうに清盛が法外の我儘を御憤り遊ばされたといふ事である。

更に前半から引きつゞけると、

後白河院は、御出家遊ばされて後も、相變はらず政治の實權を握つて居らせられるので、お蔭で院の御所に仕へ奉る人々は、身に餘る官位俸祿を得てゐたが、唯だ忌々しい目障りは、平家一族の跳梁跋扈で、人情の自然、平族の不幸によつて自己の幸を贏ち得ようと望んだ。法皇も同じやうに云云

といふ意味になるのである。此處に目を着けたのは、長門本や『源平盛衰記』で、二書それぞ〵に左の如く書いて居る。

……官位俸祿身に餘る迄朝恩を蒙りたれども、人の心の習ひなれば、猶はあきたらず覺えて、此の入道の一類、國をも官をも多くふさげたる事を目ざましく思ひて、此の人亡びたらば其の國はあきなん、其の官はあきなんと、心中には思ひけり。法皇も内々思召されけるは、……（長門本）

官位俸祿身に餘る程朝恩を蒙りたれども、人の心の習ひなれば、猶ほあきたらず覺えて、平家の一類のみ、國をも官をも多く塞ぎたる事を、目ざましく思ひて、此の人の亡びたらば其はあきなん、彼の者が死したらば、此の官はあきなめと、心の中に思ひけり。疎からぬ輩は寄り合ひ寄り合ひ私語く折々もあり。一院も思召されけるは……（盛衰記）

文句の細部に多少の相違はあるが、大體は同一で、根本の着眼は、平家一族の專横振を著しく點出することによつて、院の御所に仕へる公卿殿上人の嫉視羨望と法皇の御憤との間の連絡をつけんとするにある。思ふに長門本、『盛衰記』の執筆者は前記流布本に於ける是等の不備缺陷を見て、之れを改作したものであらう。足らざるをば補ひ、嵌まらない語句をば妥當な語句に置き換へたのであらう。吾吾は之れを並べて見て、『盛衰記』等が先づ成つて、後に流布本が出來たとは、どうしても考へることが出來ぬ。また大體に於いて、長門本が先づ流布本に對して改作塡補を試み、『盛衰記』が長門本の改作に基いて、更に屋上屋のやゝこしき大増補を試みたものかのやうにも思はれる。獨斷に過ぎるかも知れず、また餘りにくだくだしい說明ではあるけれども、まだ斯樣の說をなした人が無いやうに思ふので、知りながら煩瑣を敢てしたのである。

十三

俊寛が鬼界が島に取り残さるゝ、謂はゆる「足摺」の條が、それ〴〵の異本に左の通り書いてある。

僧都せん方なさに、渚に上り倒れふし、稚き者の、乳母や母などを慕ふ様に、足摺をして、是れ乘せて行け、具して行けと宣ひて、喚き叫び給へども、漕ぎ行く船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。（流布本）

又空しき渚に泳ぎかへり、稚き者どもの母や乳母を慕ふやうに、是れ具して行けや、我れ乘せて行けやとて、をめき叫び給へども、漕ぎ行く舟の習ひにて、跡は白浪ばかりなり。（八坂本）

僧都猶ほも心のありけるにやあらん、とかくして波にもおぼれず、磯へ歸り上りて、渚にひれふして、舟を見送りて、幼き者の母や乳母にすてられて、跡を慕ふやうに足ずりをして、少將殿や判官入道殿やと、をめき叫びけるは、父よ母よと呼ぶにぞ似たりける。（長門本）

僧都は舷に取附きて、一町餘り出でたれども、滿鹽口に入りければ、流石に命や惜しかりけん、渚に歸りて倒れ臥し、足摺をして喚きけり。幼き子の母に慕ひて泣き悲むが如く也。（盛衰記）

思ふに、實母の手しほに掛けらるゝを常とする我々が、此の場合を寫すならば、第一に母、次ぎに乳母と次第すべき筈で、流布本に「乳母や母」と書いたのは、多分實母に育てられずして乳母に育てられるのを常とする當時の貴族思想が、不用意の間に現はれたのであらう。而して恐らく是れが原形であつたのであらう。また八坂本や長門本の作者は抽象的、月並的な儀禮の示す所に從ひ、順序を轉換して世間並に「母や乳母」と改めたので、而して『盛衰記』の作者は、二つを折衷し簡單化して、たゞ「母」としたのであらう。いづれにも理窟は附かうが、私はやはり、「乳母や母」の原形を存して、時代の特殊相を見せたいと思ふ者である。序ながら流布本が、大體に於いて簡單で、要を得て、藝術的なのを、多くの異本が寄つてたかつて世話好きの添加をした趣が、これでも察せられる。

卷第五の「物怪」の章に、『平家』の成立年代に關する考證の最も主要なる根據となつた、名高い「青侍の夢」の事が書いてある。而してそれが流布本には、かう書いてある。

又源中納言雅賴卿の許に、召使はれるける青侍が、見たりける夢も、怖ろしかりけり。譬へば大内の神祇官と覺しき所に、束帶正しき上﨟の、數多寄り合ひ給ひて、議定の樣なる事のありしに、末座なる上﨟の、平家の方人し給ふと覺しきを、其の中よりして追立てらる。遙かの座上に氣高げなる御宿老のまし〳〵けるが、此の日來平家の預り奉る節刀をば、召返いて伊豆國の流人、前

右兵衞佐賴朝に、賜うずるなりと仰せければ、其の傍に尙ほ御宿老のまし〳〵けるが、其の後は吾が孫にも賜び候へとぞ仰せける。靑侍夢の中に、或る老翁に次第に之れを問ひ奉る。末座なる上﨟の、平家の方人し給ふと覺しきは、嚴島の大明神、節刀を賴朝に賜うと仰せらるゝは、八幡大菩薩、其の後吾が孫にも賜べと仰せけるは、春日の大明神、かう申す翁は、武內の明神と答へ給ふといふ夢を見て、醒めて後人に之れを語る。

これについて、菅茶山が其の『筆のすさみ』の中に、

備中國長尾村小野直吉よく書を讀む。其の子本太も亦其の意をつぐ。其の說に、『平家物語』は作者定かならず、時代は鎌倉將軍藤氏の中に作れるなるべし。源中納言の靑侍の夢に、平家の方人し給へる嚴島明神を追ひ立てゝ、八幡大菩薩の、日頃平家へ預け置き給へる節刀を、賴朝に賜はんと仰せければ、其の後は吾が孫にもたび候へと、春日明神の仰せられしなどにても知るべし。藤原賴經關東下向なき前には、いかでか斯樣の事、書きも思ひもせん。もし親王將軍の時ならば、天照大神また取返したまふなどあるべし。

と書いてある、此の說が本となつて、『平家物語』が承久三年より建長四年に至る藤氏將軍時代の三十餘年間に出來たといふ事が、殆んど決定說とされて來た。けれども、必ずしもさうと斷定されまいと

思はれるのは、此の同じ話が、八坂本に左の通り書いてあるからである。

源中納言雅頼卿の許に候ひける青侍が見たりし夢こそ、何よりも不思議なれ、たとへば、大内の神祇官の邊を通るとおぼしきに、束帶し給ひたる上﨟の、いくらも並み居させ給ひて、議定なんどのありけるを、何事やらんと、立ち留まつて聞く程に、中にも座上におはします上﨟の、ゆゝしう氣高き御聲にて、此程平家に預けおきたる節計を召し還し、伊豆國の流人、前の右兵衞ノ權ノ佐賴朝に賜ばんとぞ仰せける。又末座におはします上﨟の、平家の方人し給ふとおぼしきを追立てらるゝと見申して、明けて後人に語る程に、此の事福原へ聞こえけり。

思ふに、此の八坂本の夢語は藤氏將軍の世となつた承久以前に出來たので、これが『平家』の原形であつたのであらう。而していよ〳〵藤氏將軍の世と成つて、それに春日明神の一段が附け加へられたのであらう。或ひは藤氏將軍の世に、平家、源氏、藤原氏の三段式なる夢語が出來、後に藤原氏の一段が削られて、自然化、簡單化されたものとも見られるが、文章の調子の、自然で簡古なところが、何となく八本坂の原形たる事を暗示して居るやうに見える。『盛衰記』には、頭にもう一段を添へて、義朝の預つて居る節刀を召し返して清盛に預けられた事まで書き、剰へ座上に命令者としての天照大神まで加へ奉つて、左の如く書いて居る。

大内の神祇官かと覺しき所に、衣冠正しき人のゆゝしく氣高きが、數多並居たりける。座上の人の、赤衣の官人を召して仰せけるは、下野守源義朝に預け置かるゝ御劍、いさゝか朝家に背く心ありしかば、召し返して清盛法師に預け給はられたれども、朝政を忽緒にし、天命を惱亂す。滅亡の期既に至れり、子孫相續く事難し、彼の御劍を召し返すなり。汝行きて劍を取つて、故義朝が子息、前右兵衞權佐賴朝に預け置くべしとありければ、官人仰せに從つて、赤衣に矢負うて、滋籐の弓脇に挾み、御前を罷り立ちけるが、程なく錦の袋に褁みたる太刀を持ち參りて、座上へ進上する處に、中座の程に在りける上﨟の、賴朝一期の後は、吾が子孫にもたび候へと申されけるに、紅の袴着たる女房の、世にも嚴しくおはしけるが、緣の際三尺ばかり虚空に立つて申されけるは、清盛入道深く吾れを憑みて、毎日不退の大般若經を轉讀し侍るに、御劍暫らく入道に預け置かせ給へと申す。座上の次二番目に居給ひたる上﨟、ゆゝしく叱り聲にて、入道いかに汝を憑むとても、朝威を背くに依つて議定既に畢んぬ。謀臣の方人奇怪也。そ頸突けと仰せければ、赤衣の官人つと寄つて、彼の女房を情もなく門外に突き出だす。穴恐ろしと思ひながら、夢の中にてそばなる人に問うて云はく、座上の人は誰れぞ。あれこそ天津國の御主伊勢天照大神よ。さて吾が子孫にたべと仰せらるゝは誰れぞ。天津兒屋根尊春日大明神よ。第二番目のそ頸突けと仰

せられつるは誰そ。鬼門の峯の守護神、日吉山王よ。赤衣の官人は誰そ。西坂本の赤山大明神よ。
紅の袴の女房は誰そ。安藝國の嚴島の明神よと答ふと見て覺めぬ。

四段がかりともいふべき、枝葉の多いものになつて居るが、是れは例の委しきを好む『盛衰記』の作者が、屋上屋の拙い追加をしたのであらう。

十四

今度は異本の作者の趣味が違ふに從つて、文句のいろ〳〵と變改された例を擧げて見たい。北國の戰で、木曾に捕へられ、一旦は助けられたが、其の後木曾を欺き、元の領地の備中に下つて、木曾に叛いた瀨尾太郎兼康が、軍に敗れ、二十歲になる子の宗康を見捨てゝ落ち延びたが、恩愛にひかされ、途中から引返して、宗康と共に討死した。其處を流布本には、かう書いてゐる。

瀨尾太郎我が馬をば、乘り損じたりければ、倉光が馬に打乘つて落ちて行く。嫡子の小太郎宗康は、年は二十に成りけれども、餘りに肥太つて一町とも得走らず。これを見捨てて、瀨尾は二十餘町ぞ延びたりける。瀨尾太郎、郎黨に言ひけるは、日來は千萬の敵に逢うて、軍するには四方

晴れて覺ゆるが、今日は小太郎宗康を捨てゝ行けばにやあらん、一向先が暗うて見えぬなり。今度の軍に命生きて、二度平家の御方へ參りたりとも、兼康は六十に餘つて、幾程生かうと思うて、唯だ一人ある子を捨てゝ、是迄遁れ參りたるらんなど、同隷共に言はれん事こそ口惜しけれといひければ、郎黨さ候へばこそ、唯だ御一所で如何にも成らせ給へと申しつるは、こゝ候ぞかし。返させ給へとて又取つて返す。案の如く、小太郎宗康は、足かん許りに腫れて臥せり居たる所へ、瀨尾太郎取つて返し、急ぎ馬より飛んで下り、小太郎が手を取つて、汝と一所で如何にも成らんと思ふ爲めに、是れ迄歸りたるは如何にと言ひければ、小太郎涙をはら／＼と流いて、たとひ此の身こそ無器量に候へば、爰にて自害を仕り候とも、我れ故御命をさへ、失ひ參らせん事、五逆罪にや候はんずらん。唯だ疾う／＼延びさせ給へと言ひけれども、思ひ切りてん上はとて、休み居たりける所に、又荒手の源氏五十騎許りで出で來たる。

簡單にいへば、瀨尾太郎が主家の慕はしさに子を見すてゝ落ちる。やがて子の愛に引かされて引返すと、小太郎は涙を流して悅んだが、自分ゆゑに父まで殺しては五逆罪が恐ろしいから、落ち延びて下さいといふ。到頭父子郎黨三人枕を並べて討死した。といふのであるが、八坂本は、他の部分は大抵同じであるが、最後の小太郎の挨拶を、かう書いて居る。

たとひ宗康こそ無器量の者にて、是れにて討死仕り候とも、などやひとまどなりとも延びさせ給ひ候はぬやらんと申したりければ、妹尾、汝と一緒にて討死せんと思ふなりとて、鎧武者が三人互に息つぎて居たりける所へ、今井五百餘騎にて押寄せたり。

思ふに是れは、八坂本の「私は討死するにしても、父上はどうして落ち延びては下さらぬ。」と云つたのが原形で、流布本の作者は、之れに五逆罪の一鎖を添へて、佛敎的の感傷味を加へたのであらう。長門本は簡單ながら、

小太郎起きあがりて、手を合はせて涙を流し、前には柴垣をさし、矢間をあけ、後ろには大木を當て、木曾を待ちかけたり。

と書いてあるが、是れは父の歸りを悅び、父の厚意を素直に受け入れて一所に討死するのを、自然の人情と思ひ、「起き上がりて、手を合はせて」の二句に、其の情をあらはさうとしたのであらう。最もやゝこしく芝居氣に富んだのは、やはり『盛衰記』である。

兼康は思ひ切り、小太郎を捨てゝ落ち行きけれども、恩愛の道の悲しさは、行けども行けども歩まれず。小太郎はまた父の兼康を呼びければ、兼康歸つて如何にと問ふ。させる要事は侍らず、愛を最後と存ずれば、今一度見奉らんとてと答へ、涙を流しければ、兼康も袖を絞りけり。一年(ひとゝせ)

新大納言成親、丹波少將成經に情なくあたり奉りたりしに、親子の中の悲しさは、今こそ思ひ知られけれ。敵近く攻め寄せければ、兼康又思ひ切り、深く山へ落ち入りけるが、眼に霧雨りて進まれず、郎等宗俊を呼びて、兼康は數千人の敵に向ひて戰ふにも、四方晴れて見ゆれども、小太郎を捨てゝ落ち行けば、涙にくれて道見えず。兼ねては相構へて屋島に參りて、今一度君をも見奉り、木曾に仕へし事をも申さばやと思ひつれども、今は恩愛の中の悲しければ、小太郎と一所にて討死せんと思ふはいかゞあるべきといふ。宗俊尤もさこそ侍るべけれ、弓矢の家に生れぬれば、人ごとに亡き跡までも名を惜しむ習ひなり。明日は人の申さん様は、兼康殿こそ、いつまで命を生きんとて、山中に子を捨て落ち行きぬるといはれん事も口惜しき御事なるべし。主を見奉らんと覺すも、子の末の代を思召す故なり。小太郎殿亡び給ひなんには、何事も何かはし給ふべき。たゞ返し合はせて、三人同心に一軍して、死出の山をも離れず御伴仕らんといひければ、兼康然るべしとて道より歸り、足病み居たる小太郎が許に行き、前には柴垣を掻き、後ろには大木を木楯にして敵を待つ。

子に父を呼ばせる。引返して何の用ぞと聞く。用事はないが、お顏が見たいといふ。大分芝居式の細工が利いて來たが、其の間にいつしか矛盾の滑稽が現はれ出して、敵が近く寄せたので、子を見捨

てゝ、急いで山に入つたものが、暫らくして又引返して來て、柴垣を搔いて、ゆつくりと敵を待つなどは、『盛衰記』の作者の趣味と手腕とを最もよく現はしたものである。

木曾義仲が猫間中納言の訪問を受け、中納言を猫扱ひにして晝飯を振舞ふ所を、流布本には、

　木曾猫間殿とは、得言はいで、猫殿の食時に、まればれわいたに、物よそへとぞ言ひける。

と書いてあるが、八坂本には

　猫殿のたまたまわいたに、飯よそはせよと宣へば……

とあり、覺一本の別本といふのには、

　猫殿の稀におはしたるに、物よそへぞ宣ひける。

とある。思ふに是れは流布本が原形で、田舎將軍の土くさい素振を、「まればれわいたに」の田舎言葉であらはしたのを、廣く通じさせよう、文章面を雅にしようとの心じらひから、八坂本は「たま／＼わいた」の折衷式に改め、覺一本は、つゞいて思ひ切つて、純雅言の「まれにおはしたる」にして了つたのであらう。

巻第七「實盛最期」の章の中で、實盛が手塚太郎の郎黨と組む所を、流布本には、

　齋藤別當、あつぱれ己れは、日本一の剛の者と、くんでうずよ、なうれとて、我が乘つたりける

鞍の前輪に押附けて、ちつとも動(はたら)かさず、首掻き切つて捨てゝげる。

とあるが、覺一本の別本には、

日本一の剛の者に、くんでうずなうとて……

とある。これには「軍上手」の意だとか、「組んで亡すよな、おのれ」で、「汝の如き者が、日本一の剛の者の自分と組んで討死するのは名譽だ。なゐ貴樣。」といふ意味だとかいふ、いろ〳〵の說があつたが、實は「なうれ」は「のか?」といふ意味の越前言葉の感投詞で、「推參にも日本一の自分と組まうといふのか」といふ意味だといふ事であるが、覺一本のは、此の方言味を少なくして通じ易くしたのであらう。長門本には全く別の言葉で、簡單に

實盛さしつたりとて、さしおよびで、手塚が郎等の押付の板をつかまへて……

とあり、『盛衰記』には、すつかり只言で、

おのれは手塚が郎等にや、餘すまじといふまゝに……

と書いて居る。又八坂本には此の郎黨の支へた一鎖が全く無く、實盛と手塚とたゞ一人々々の組打になつて居るが、これらの相違は思ふに、田舍武士の訛り詞の面倒さを厭つて、段々に雅言化し、標準語化し、只言化して、而して最後には到頭取り去つて了つたのであらう。或ひは八坂本に郎等との組

打の無いのが原形で、流布本は、越前の方言に通じた作家が、實盛の越前生まれといふ事實に附け込んで、地方色を利かせた興味ある一節を添へ、而して他の作家が、それを雅言化し、只言化したのであらう。

十五

男女關係の描寫には、異本の作者等が、殊にいろ〳〵と心を惱ましたらしく見える。三位中將重衡が鎌倉に護送され、狩野介宗茂の邸に囚はれてゐた時に、賴朝が或る夜千手の前を遣はして、旅の憂さを慰めさせた。終夜(よるすがら)琵琶朗詠の樂しみがあつて、翌朝千手の前が辭して歸る。そして賴朝へ報告の挨拶に行く。そこを流布本には、

さる程に夜も明けければ、狩野介暇申して罷り出づ。千手の前も歸りけり。其の朝(あした)兵衞佐殿は、持佛堂に法華經讀うでおはしける所へ、千手の前歸り參りたり。兵衞佐殿打笑み給ひて、扨も昨夜(ゆうべ)中人(ちうじん)をば、面白うもしつるもの哉と宣へば、齋院次官親義、御前に物書いて候ひけるが、何事にて候やらんと申しければ、佐殿宣ひけるは、平家の人々は、此の二三箇年は、軍合戰の營みの外は、又他事あるまじきとこそ思ひしに、さても三位中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさび、終夜(よるすがら)

立ち聞きつるに、優にやさしき人にて御座しけりと宣へば・・・

と書いてある。之れによると、千手は預り主の狩野介と共に、酒の御酌や音樂や談話によつてのみ、終夜重衡を慰めてゐたので、夜が明けたから歸つたといふ、全く淡泊な沙汰であるが、八坂本は多少の色彩をつけて、かう書いて居る。

三位の中將、あな思はずや、かゝる東の奥にも、優にやさしき女のあるにこそとて、名殘惜しげにぞ見られける。明けければ此の女房歸り參りたり。折節兵衛佐殿は、持佛堂に法華經讀みておはしけるが、千手が歸り參りたる由を聞き給ひて、わう頼朝は千手に、面白くも仲人をばしたりつるもの哉と宣へば、齋院次官親能、御前近う物書いて候ひけるが、筆さしおき、こは何事にて候やらんと申したりければ・・・

「名殘を惜む」などいふ所に、たゞならぬ氣色をほのかに見せたのであらう。尙ほ流布本の「扨も昨夜中人をば面白うもしつるもの哉」は、言葉が足らぬので明瞭せず、やゝもすれば、千手が重衡慰安の斡旋をうまくしたのを褒めた様にも思はれるが、八坂本はそこに氣がついて、「頼朝は千手に面白くも仲人をばしたりつるものかな」と補ひ改めたのであらう。但し其の意味はホンの洒落で、「どうだ、頼朝がお前によい殿御を媒介してやつたが、嬉しかつたらう。」と、淡泊にからかつた丈であつた

が、長門本の作者は、大分其處に風情を持たせて、

我れも夢見んとて、母屋の幕を引きおろされければ、武士共畏つて罷り出でぬ。中將は枕を西にそばだてらる。此の女御前にふしにけり。其の夜程なく明けければ、女起きて出づ。……かの千壽、兵衞佐のあした法華經を讀みておはしける所に來る。因幡前司廣元文書きて居られたり。兵衞佐うち笑ひて、千壽に中人をば面白くしたるもの哉。

と書いて、翌くれば四月一日、再び千壽を重衡の許へ遣はされたが、中將は、今度はともかくも物も云はれぬので、

千壽は思はずに(意外に)思ひて、物も仰せられ候はずと申しければ、佐打笑ひてぞおはしける。

と止めてある。

『盛衰記』に至つては、更に恐ろしく演劇化して、頼朝をば全く一種の洒落な通人に仕立て上げた。やゝあつて兵衞佐は千手に向ひて、扨も頼朝は媒こそしすまして覺ゆれと仰せられければ、女顏打赤めて、全く情を懸け給ふ事侍らずと申す。「年來只だ千手をば正直の者ぞと思ひたれば、眞實ならぬ時もありけるや。」「いかでか御前にて僞り申すべき。」「扨汝誓言してんや。」と宣へば、御赦し候はゞ安く候と申す。其の時佐殿顏のけしき惡ざまになりて、是れ迄は仰せらるまじけれ

ども、汝をやるは中將を慰めん爲めなり、中將いかでか汝に情を懸けざらん。さらば誓言仕れと仰す。女涙を流しつゝ、若し中將に召されながら、御前にて僞言申し侍らば、近くは荏柄、足柄、伊豆、箱根より始め奉り、日の下に住し給ふ諸〻の神の憎まれを蒙らんと申したる。

賴朝はやうやく信じて、今度は伊王の前といふ歲二十の美人をやつたが、中將はやはり情をかけぬので、大いに其の心に感じ入つたといふ事を、長々と書いて居る。恐ろしい發展と云はねばならぬ。

同じ重衡が生捕られて、まだ都に居た時分の事である。彼れは警護の武士に乞ひ、木工右馬允知時といふ者を介して、曾て懇ろにした內裏の女房を呼んだ。女房はやがて車に乘つて來た。其の會談の樣子を、流布本には、かう書いて居る。

土肥次郎情ある者にて、誠に女房などの御事は、何か苦しう候べき疾う〳〵とて容し奉る。中將斜ならず悅び、人に車借つて遣はされたりければ、女房取りあへず、急ぎ乘つてぞおはしける。緣に車やり寄せ、此の由かくと申したりければ、中將車寄迄出で向ひ、武士共の見參らせ候に、下りさせ給ふべからずとて、車の簾をうちかづき、手に手を取り組み、顏に顏を押し當てゝ、暫しは兎角の事をも宣はず、唯だ泣くより外の事ぞなき。……かくて小夜もやう〳〵更け行けば、守護の武士共、此の程は大路の狼籍もぞ候に、とう〳〵と申しければ、中將力及び給はず、やが

て返し給ふ。

警固の武士の目を憚り、男は車の外に居ながら、簾をかづいて、車中の女と深更まで話してゐたので、武士共が、此頃は都大路が物騒だからと云つて注意した。そこで泣く〳〵あかぬ別かれをしたといふのである。長門本は此の後の部分が、不自然で物足らぬのに氣がついたのであらう、武士共が

此頃は、夜更けぬれば大路の狼籍あんなるに、靜まらぬ先に疾う〳〵歸らせ給へ。

と注意した事に書き改めて居る。また『盛衰記』と八坂本とは、それ〳〵にかう書いて居る。

中將急ぎ立ち出でて、武士の見んも見苦しく侍るにとて、我が身は縁に立ちながら、車の簾うち纒ひ、手に手を取り組み、互の涙せきかね給へり。……更け行くまゝに夜もすがら御物語し給ひける。（盛衰記）

三位の中將、是れには武士共がいくらもありて、餘りに見苦しう候へば、車よりはな下りられ候ひそとて、門のほとりに車をたてゝ、遙かに夜更け人靜まつて後、三位の中將、車に出であひ、對面し給ひて、こし方行末の事共を、夜もすがら語りぞ明かさせ給ひける。（八坂本）

車寄まで出向いて、簾をかづいて夜更まで語らせたもの、我が身は縁側に立ちながら、車中の女と終夜語り明かさせたもの、門際に夜更まで待たせて、人が靜まつて後に曉まで語らせたもの、更けて

後に、大路が物騒だからと注意して別かれさせたもの、更けぬ中に、更けると物騒だからと云つて別かれさせたもの、これらの可否巧拙は別として、平家の異本の作者が斯樣な事の曲折に、どれ程關心して居たかといふ事がわかる。同時に斯樣ないろ〳〵の趣向文句が、彼れから是れへ、是れから彼れへと拔き差しさるゝ中に、いづれが『平家』の本體であるか、誰れにも解らないものになつたといふ消息が解るであらう。

那須與一が扇の的を狙ふ所を、流布本其の他、大抵の『平家』には、

與一目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明日光の權現、宇津宮那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の眞中射させてたばせ給へ、これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、此の矢はづさせ給ふなと、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそ成つたりけれ。與一鏑を取つて、番ひ、よつ引いてひやうと放つ。

と書き、或ひは唯だぼんやりと、「願はくは此の矢はづさせ給ふな。」と書いてあるが、『源平盛衰記』には、

扇の紙には日を出だしたれば恐れあり、蚊目の程をと志して兵と放つ。

と書いてある。察するに、中たるか中たらぬかさへ危ぶまれる場合には、成るべく廣い範圍を狙ふのが自然で、『盛衰記』のは、事の定まつた後に、贅澤な的選みをさせて、曲折を多くしたのであらう。かういふ事實に對する作者それぐ\の附味を比較するのも面白い研究であるが、此の一段を中井履軒の『通語』には、

時風暴船蕩搖。遂射斷扇轂。扇颺于空、三黐而墜。岸者鼓レ箙、船者扣レ舷、曷采不レ止。

と書いてあり、頼山陽の『日本外史』には、

宗高騎而獨出。兩軍注視。宗高一發斷扇轂。扇黐而墜。

と書いてある。履軒が「遂射斷扇轂」と書いたのは、的の定まらぬのに心迷ひして、目をふさいで祈念してゐたが、到頭射あてたといふ心持を利かしたのであらう。これは事實を可なり確實に言ひ表はしてゐる。しかし「三黐而墜」は、流布本の『平家』に、

春風に一揉み二揉み、もまれて、海へさつとぞ散つたりける。

とあるのによつて、一揉み二揉みを合はせて、「三黐」としたのでもあらうが、これは隨分いかゞはしい、不思議な飜譯といはねばならぬ。山陽が「一發斷扇轂」は、事實の最後の一部分だけ書いたと見れば言ひわけも立つであらう。またいかにも斷定的で威勢はよいが、初めから呑んでかゝつて、豫期通

りに的中したやうで、ちと誇張に過ぎ、眞實性を缺いて居るやうにも見える。

かやうにいろ／＼比較して見た結果、私は、一番細工の加はらぬ、生地のまゝらしい流布本が、最もすぐれて居ると思ふものである。

壇の浦の最後の合戰の日、海上に多くの海豚(長門本には鯨とある)が現はれたのを見て、宗盛が小博士晴信に占はせた、その折の報告を、流布本其の他多くの異本には、

此の海豚はみ歸り候はゞ、源氏亡び候ひなんず、はみ通り候はゞ、御方の御軍危う覺え候と、申しも果てぬに、平家の船の下を、直ぐに這うてぞ通りける。世の中は今はかうとぞ見えし。

といふ風に書いてあるが、八坂本には、吉凶の關係を逆まにして、

此の海鹿はみ通り候はゞ、源氏悉く亡び候ひなんず、又はみ歸らば、味方の御軍は危く見えさせ給ひて候と、申しも果てぬに、海鹿は平家の船の下よりも、悉くはみかへりけり。

と書いてある。是れは察するに、海豚がもし平家の船に逢つて泳ぎもどれば、平家にはまだ惡魚を恐れ退かせる威力があるので、勝利の兆であると見るか、或ひは、海豚が船底をくゞつて源氏に向ふのは、無心の動物までが平家に味方する瑞相で、勝軍の前表だと見るかの相違で、どちらかの一方が、他の一方を改めたのであらうが、かうなると、いづれを『平家』の本體、原容としてよいか、全く見當

がつかなくなる。

十六

異本比較の最後に、私は一例を引いて、『平家』のうぶな素直な筆致に、巧緻を極めた、謂はゆる名文の及ばぬ趣致のあることを證したいと思ふ。流布本の卷第九、一の谷の合戰が平家の負となつて、敗走した平家方が渚に船を爭ふ光景を、流布本にかう書いてある。

黑煙既に押懸けければ、平家の兵ども、若しや助かると、前なる海へぞ多く走り入りける。渚には助舟共いくらもありけれども、船一艘には鎧うたる者どもが、四五百人千人ばかり込み乘つたらうに、なじかは好かるべき、渚より三丁ばかり漕ぎ出でて、目前にて大船三艘沈みにけり。其の後は好き武者をば乘するとも、雜人原をば乘すべからずとて、太刀長刀にて打拂ひけり。かくする事とは知りながら、敵に逢うては死なずして、乘せじとする船に取り附きつかみ附き、或ひは臂打ち斬られ、或ひは肘打ち落されて、一の谷の汀に、朱になつてぞ列伏しける。

こゝを八坂本には、

大臣殿（おほいどの）、此のよしを見給ひて、然るべき人をば乗するとも、次様（つぎざま）の人をば、乗すべからずと、宣へば、承つて、然るべき人の、乗らんとしけるをば、手をさづけ、力を合はせて、引きのせけり。また次ざまの者の、乗らんとしけるをば、太刀長刀にて、舷をぞ薙がせける。角あるべしとは、知りながら、敵に逢うては、死なずして、乗せじとする船に、乗らんとて、或ひは腕（かひな）切り落され、或ひは指薙ぎ落され、其の身は朱に成つて、渚に倒れ伏し、をめき叫ぶこと、斜（なのめ）ならず。

と書き、長門本には極めてあつさりと、

取る物も取りあへず、海へのみぞ馳せ入りける。助船あまたありけれども、船に乗るは少なく、海に沈むは多かりけり。

と書いてあり、『盛衰記』には、

取る物も取り敢へず、濱の汀に逃げ出でつゝ、海の藻鹽に馳せ入つて、船に乗らんとぞ迷ひける。助船も多くありけれども、そも然るべき人々をこそ乗せけれ、次々の者共をば乗せざりければ、乗らん乗せじとする程に、多く海にぞ沈みける。

と書いてある。精しく書いたのも、あつさりと書いたのも、各〻それ〴〵の考があつて、或ひは委曲に描寫し、或ひは簡潔に括約したのであらう。同じく委曲に書いた中でも、流布本は好き武者を乗せ、

雜人原を乘せぬ事をば、先乘者の一致したる意見と見るのを自然とし、八坂本は大臣殿宗盛の御聲掛りとするのを面白いとしたのであらう。また流布本の作者は、臂を斬り腕を落すを自然と見、八坂本の作者は腕を斬り落し指を薙ぎ落すのを面白いと見たのであらう。四者それ〴〵の味はひはあるけれども、私は大體に於いて、流布本が最も優れて居り、而してこれが又原形か、若しくは原形に近いものであらうと考へる。

さて是等の異本の異文のうち、かりに流布本が最も優れて居るものとして、此の文章の立派な事を證明する爲めに引きたいと思ふのは、同じ事を寫した賴山陽が『日本外史』の文と、之れに類似した事實を寫した『春秋左氏傳』の戰記文の一節とである。『外史』には此處をかう書いて居る。

　宗盛等奉二乘輿一、航レ海而逃。衆攀レ舟爭レ乘。斷臂滿レ舟。遂奔二讃岐一。

『左氏傳』のは、名高い晉楚邲の戰の一節で、

　(楚軍)遂疾進レ師。車馳卒奔乘二晉軍一。桓子不レ知レ所レ爲、鼓二於軍中一曰、先濟者有レ賞。中軍下軍爭レ舟。舟中之指可レ掬也。

といふのであるが、一の谷の戰記の此の部分が、邲の戰のに似て居ることは、已に先賢の言つて居る所で、山陽は多分、左氏が「舟中之指可レ掬也」の一句から暗示を受け、更に誇張の筆を行つて、何の

記録にも全くない「斷臂滿レ舟」などいふ、放膽無類の句を作つたのであらう。

この三篇いづれも名高い文章ではあるが、吾等は比較の結果、最も拙いのは外史で、其の上は左傳、そして最も優れたのは『平家』であると思ふ。何故であるか。先づ『外史』の方から見ると、此の場合、舟は狹し、人は多し、しかも舟が已に乘手で一ぱいになつて居る處へ、新手が追かけて來ては乘り込まうとする所である。已に誇張にもせよ、一艘に四五百人、千人と乘り溢れて居り、しかも後から來る者を乘せまいと、太刀長刀で防いで居るからには、舷側に指尖を掛けるすら容易な事ではなからうに、況んや臂や腕をかける隙のあらう筈がない。已に舷に臂や腕を掛けられぬ以上は、斬られた臂や腕が船の中に落ちよう筈がなく、尙更斷たれた臂で船が一ぱいになる筈がないであらう。かう見ると、山陽の「斷臂滿舟」は、詞こそ壯快であるが、一種の繪そらごとで、想像の働かせそこねであることが解る。『左傳』の「舟中之指可掬也」も、『外史』よりは誇張が甚だしくないだけに、不自然味も少ないが、これも明らかに繪空事の空想である。それのみならず、「斷臂滿舟」といひ、「舟中之指可掬也」といひ、いづれも事後に見て驚くべき事で、當座目前に見て感じ得べきことではない。逃げ了せて後、人々が舟を出て後に、「いや、えらい腕ぢやないか！」、「血みどろの水の中に、指が𩖗へられて居るわ！」と云つて驚かるべき事で、敗走して舟を爭ふ當座に氣づき得る事ではないのである。かういふ

不自然な誇張、しかも事後の發見を先取りした描寫が、親切な描寫として、どれ程の價値があらう。是等に比べると『平家』の文は、有つた通りをそのまゝ書いて居るだけであるが、いかにも自然で、此の慘憺たる光景をまざ〳〵と見せて居る。流布本が、指と云はずして「臂」「肘」と云つたのもよい。伸びてすがる手を、および腰になつて斬る場合には、細かい指よりは臂や腕を斬る方が多かるべき筈だからである。斬られた臂や腕の行方を斷らずして、唯だ斬られた兵共が、眞朱な恥辱の身體を汀にさらして居る、と書いたのも面白い。斬られた臂や腕は、舟の中よりは寧ろ海中に落ちるであらうし、又海中に落ち入つた臂や腕の樣子よりは、臂や腕を斬られた兵どものみじめな樣子の方が、遙かに此の光景を活躍させるからである。其の上『平家』には、「敵に逢うては死なずして、乘せじとする船に取りつき摑み附き」といふ、武士道本位の皮肉な批評まで、輕く面白く利かしてある。要するに、平家の文は何の曲もなく有りのまゝに書き流して、而も技巧の曲を盡くしたる文よりも、多くの效果を收めたものである。空想を馳せず、誇張を用ゐずして、空想誇張を弄んだ作よりも、更に〳〵よく人生の眞を寫したものである。

簡單な說明ではあるが、『平家』の中には、處々に『左傳』や、『史記』や、『外史』や、『源氏』や、『枕』などをも凌ぐべき名文の、素知らぬ振をして潛んで居ることが、これではゞ察せられるであらう。

斯様な例を詳しく擧げれば澤山あるが、煩はしいから此の位に止める。さて『平家物語』といふものは、其の異本が是れほどに多く、而して單に其の巻册や、項目やに、多寡出入の差異があるばかりでなく、句位文質が違ひ、趣味風格が違ひ、積極消極の關係までが違つてゐて、而も其の上に一々の文字文句が、各異本に通じて三行四行と同一に續くのが全く無いといふ、不思議なものである。而して其の凡てが＝せめて其の中の一つなりとも＝首尾に通じて名文であるならば結構であるが、事實は之れに反して、各種の異本、いづれも精粗、純雜、美醜、巧拙の混淆であり、一方に振ひつくやうな名文があるかと思ふと、一方には興のさめるやうな粗末な分子が交つて居るといふ風のものである。これは『平家』其の物の爲めにも、日本の文學の爲めにも、讀者の鑑賞の爲めにも、極めたる不幸と云はねばならぬが、さて吾々は、今のまゝに缺點だらけで、本體のえ知れぬ『平家』を讀んで、長へに滿足すべきであらうか。

十七

思ふに、『平家物語』の本體は偉いものである。其のほろ穢(ぎたな)くお粗末に見えるのは、唯だ表面の部分

部分に、法格外れや、低級趣味の塵埃(ごみ)や糟粕(かす)が附いて居るからで、其の塵埃や糟粕を取り除けば、無疵の名作となるべきものである。尚ほ之れに加ふるに各種の異本の美所を以てすれば、更に立派な名作が出來るであらう。少なくとも各異本のいづれにも優つた佳作が出來るであらう。又思ふに、『平家』は元來偉い本體が、表現者の手腕が足らない爲めに、光るだけ光り得なかつたもので、その光り得なかつた所を光らせんが爲めに、前例のない多數の異本作者が、競ひ起(た)つて、束(たば)になつて努力したものである。而して其等の異本の異文が、然るべく取り合され縫ひ合はされて、始めて本體の要求するやうな外形が出來べきものであらう。

私は『平家物語』を愛する餘り、同時に今の『平家』の爲めに惜しむ餘り、時々こんな事を空想した。そしてそれについての「法三章」を考へて見た。ざつとこんなものである。

第一　一番優れたと見える本(恐らく流布本であらう)を基礎として、其の缺點をば、成るべく多くの異本によつて補ふ事。

第二　補足の材料は、必ず既存の諸本中よりのみ取るべき事。

第三　言語、文體、人生の見方等、あらゆる材料選擇の標準を、平家時代の特色におくべき事。

要は、無理な、不自然な、不穩當な、或ひは低級な要素を取り去り、道理の立つ、穩當な、上品な

要素を採り集めて、自然に無理なく繋ぎ合はせる事にしたい。訂正補足の材料は、嚴重に、既に出來て居る諸種の異本の中からのみ求めることにして、現代の吾々がさかしらの入筆や訂正は、一切差控へる事にしたい。あらゆる材料の選擇標準を時代の特色に置いて、時代の空氣が作の隅々にまで行きわたるやうにしたいといふのである。『平家』の異本は、數が多いとはいふものの、大抵は鎌倉時代の中か、遲くとも室町の初期までの間に出來たものであらうから、異本の中から材料を引き拔いて來て綴り合はせるといふ事が、今日から見て、さまで不調和を現する原因とはなるまいと思はれる。

此の事業はいろ〳〵な意味に於いて、頗る困難な、殊に手數のかゝる暇つぶしの事業である。其の上面倒な割に酬いられる事の少ない事業だとも思はれる。けれどもうまく行けば、鎌倉時代第一の文學を、世界の文學の王座に光り耀かす所以ともなるであらう。志のある御方の御骨折を願ひたいと思ふ所以である。

十八

『平家物語』は、簡單ながら非常に大きい題目で、半生を抛つにも足るべきいろ〳〵の方面を含んで

居る。音樂としての研究、史料としての研究、作の成立、作者、異本等に關する研究、言語文章等の發表形式に關する研究等、その他にもまだ澤山あるであらうが、私は唯だ、作の與へる主なる趣味、作の特色の歷史的由來、作者創作の心理、異本の文章の違ひ方、異本の整理統一に關する考案等に關して、簡單な說明を試みたに過ぎぬ。殊に嚴肅なる批判に始終すべき論文が、往々主觀的抒情に橫逸れしたのは、お恥かしい次第である。（大正九、九、五）

（平家物語の新硏究　をはり）

軍記物語硏究　終

昭和六年三月十二日印刷
昭和六年三月十五日發行

軍記物語研究

定價二圓八拾錢

著者　五十嵐力

東京府豊多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地
發行者　石野元藏

東京市牛込區榎町七番地
印刷者　竹内喜太郎

東京市牛込區早稻田
發行所　早稻田大學出版部
振替東京一一二三
名古屋二三四五

日清印刷株式會社印刷

五十嵐力　著作目錄

書名	年	發行所
文章講話	明治三十八年	早稲田大學出版部
新文章講話	明治四十二年	早稲田大學出版部
實習新作文	明治四十三年	早稲田大學出版部
新國文學史	明治四十五年	早稲田大學出版部
國定讀本文章の研究	明治四十五年	二松堂
趣味の傳說	大正二年	二松堂
作文三十三講	大正二年	早稲田大學出版部
半農生活	大正三年	弘學館
我が書翰	大正五年	至文堂
高等女子新作文	大正五年	大日本圖書會社
中等新作文	大正六年	至文堂
八重むぐら	大正六年	敬文堂
實業新作文	大正八年	修文館

書名	年	發行所
評釋國文史	大正八年	博文館
修辭學大要	大正十二年	斯文書院
平家物語の新研究	大正十二年	春秋社
甲鳥園隨筆	大正十三年	銀鈴社
國歌の胎生及び發達	大正十三年	早稻田大學出版部
甲鳥園書簡集	大正十三年	斯文書院
國語の愛護	昭和三年	早稻田大學出版部
野草集	昭和三年	雄文堂
我れ面白	昭和三年	雄文堂
遠近	昭和三年	雄文堂
水莖	昭和四年	雄文堂
雲來去	昭和四年	雄文堂
純正國語讀本	昭和四年	早稻田大學出版部
我が三大國民道	昭和四年	早稻田大學出版部
口碑珠玉	昭和五年	雄文堂
軍記物語研究	昭和六年	早稻田大學出版部